con-tract

桐識　陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｏｎ－ｔｒａｃｔ

【Ｎコード】
Ｎ８１２４Ｑ

【作者名】
桐識　陽

【あらすじ】
　第三次世界大戦を起こしてしまった世界。戦争の傷跡が残ってしまった日本の首都東京で、吸血鬼に喰われるためだけに完璧になるよう育てられた女子高校生と、国に見捨てられた区画で魔王がいたらこんな奴と恐れられる大剣と銃を操る青年との“契約”から始まる始る物語。
　全てを拒絶する漆黒の大剣と轟音を撃ち立て相手を貫く銃も用いて、常識外の闇が常識を蝕む世界を生きる青年と彼の下に集まってゆく仲間たちによるアウトファンタジー。

1、完璧淑女の日常（前書き）

この物語はかなりフィクションです。作中に登場する団体名・作品名・登場人物は別の世界のものであり、一切現実と関係ありません。

残酷描写等々もありますので苦手な方やそれらに性癖がある方は注意してください。

後、作者は中2病にかかってるくさいので、それらに抵抗のある方はお気を付けてください。

1、完璧淑女の日常

1、完璧淑女の日常

待ちに待った誕生日に、幸せに笑顔を浮かべていた少女は人生を奪われた。

大好きだった父と母が襲われている。

祝いの喜びを噛締める中に土足で踏み込んできた黒いローブとフードで顔を隠した黒い人たち。

目の前で抵抗しようと暴れ叫ぶ動きが段々と無くなっていく父と母。

それを涙を流し、部屋の隅で言葉を無く縮こまる六歳になったばかりの少女。

目の前に映るそれを見つめる存在感のない私。

まるでビデオの早送りのように劇的に流れる光景、映画のワンシーンでも鑑賞しているかのような、現実のことではないような光景がそこに、目の前で展開された。色にするならば白黒の、モノクロの情景。

少女は恐怖でその小さな体を細かに震わせ、あまりの恐怖で瞼を閉じることもできず目を見開いて、目の前の映像を目に焼き付けることしかできない。

声を無くした哀れな小さな少女に目もくれずに、父と母のみを襲う黒いローブを着た者たちは二人を“真っ白になるまで貪りつくし”た。

少ない恍惚に満ちた余韻を味わった後、次はお前だと言わんばかりに禍禍しい赤色の瞳たちの視線がゆっくりと少女を捉えた。緊張

と恐怖と黒い者たちの狂気に満ちたせせら笑いが少女を犯す。このまま少女は殺されると思っていたが

「静まれ」

静寂を打ち破るように低く人の心に染み込むかのような声がその場を支配する。声の主は黒い人たちと同じ格好をしているが何か、別次元の存在のように感じた。

両親を白くした黒い人たちは支配者に跪き、道を作る。そして、道の先にいる少女に向かって、ゆっくりと歩み寄ってくる。それはまさに死刑への道、違いがあるとするならば執行者がこちらに向かってくることだろう。

声すら出せない私に執行者が、死が少女に向かって語りかける。

「　　」

されども男の声は届ない。モノクロの情景がさらに白く、明るくなっていく。同時に目の前の景色が遠ざかる。それに伴い意識が覚醒するかのような倦怠感が体を駆け巡る。

この慣れることのない場面は何度も観ていた。このモノクロ色で彩られる展開を何度も、そう視ることしかできなかった、もう観ることしかできないのだ、何せコレは・・・

「夢」

声とともに覚醒した私を軟らかなベッドの温かい抱擁感と窓から差し込む適度な春の日差しが一度寝ることを強く推奨してくる。

「おはようございます。お嬢様」

ガチャリとドアを開ける音が慎ましく響く。残念ながら私は誘惑には負けられないようだ。

ベッドからゆっくりと起き上がりよくできた私付きのメイドの後を静かに追い、広い誰もいない部屋で朝食をとる。

これは現実だ。あの悪夢の続きではない、だが、ある意味では明確に続いている。

（あれは夢、そう夢。ただの・・）

「ただの思い出」

あの少女だった自分にはもう慣れが生じてしまった私の記憶、されど今でもそれは私を縛り、今も苦痛を思い出させる。

そして、いつまでも私を苦しめるのだろう。

静寂に満ちる部屋で朝食をとらされ、静寂を貫き通すメイドにされるがままに制服に着替えさせられる。

鏡越しの自分が私を見る。

日本人には珍しい艶のある亜麻色の地毛が腰まで流れ、体つきは柔らなバランスの取れたライン。身長は１６４ｃｍほど。顔は作られた芸術品のように繊細なバランスのとれた構成だが、温厚そうな笑顔が似合うだろうと断言できる温和な顔立ちをしている。自己の評価ではこれくらいだ。自分で自分を褒めることのできない人間なのだ、私は。

今は黙を義務にしているかのような運転手の運転する胴の長い高級車で学校へと送られていく。いつもの一日のはじまりだ。

車が駆動する音以外は聞こえない道が１０分ほどの続くため、私は目を閉じた。音と生活感がほとんどないのは先ほどまで生活していた屋敷があるのは人のあまり住まない首都郊外にあるためだ。道路はきちんと舗装されてはいるが風景は森林か田園風景で、本当に首都なのかと聞かれると自信を無くすだろう。

ほどなくして車の音以外の音が聞こえてきた。これが町に、現在“も”日本の首都である東京に出たという合図だ。

「ああっ！九重様（ここのえ）！！」

首都に入ってからまた十分ほどで到着した場所。ここが私の在学する高校なのだが・・・

「撫子（なでしこ）さん、おはようございます！」

“九重（ここのえ）　撫子（なでしこ）”。到着した車の外に集まる人たちが呼ぶ名、それが私の名前だ。まるでテレビに出ているタレントが目の前に降臨し

たかの様な目をした（主に女子）生徒たちが車の窓ガラスの向こうから私に注目してくる。慕われることは嬉しいが、キラキラとした尊敬以上の眼差しがコワイ。

一応、説明するが私は芸能人でもなんでもない、ただの一般人だとも言い切りないが。

車のドアを運転手が静かに開け、足から静かに車を降りる。

目の前に出来た人たち１０数名と素早く確認し、それに見合った声を感覚で範囲、ボリュームを決定しその場にいる全員にきちんと届くようにする。一人でも無視されたと思わせたら、嫌な噂や根も葉もないことも言われかねない。

「おはようございます。」

挨拶の後に笑顔も忘れない。ここも加減が必要となる。媚びすぎず、だが爽やかさを失わない程度に全員へと意思が向かうように心がける。諸外国では初対面の笑顔は逆効果となることが多いので注意がいる。

人が集まり混乱が起きるのは自分がその混乱の中心へ行きたい、成りたいという一種の願望の表れであり、それは自分を認識したい、してもらいたいことへと繋がっている。だがら、全員が認識を受けていると感じればそれなりに混乱は沈静化する。まあ、数にはよるが。

大きくならず、かつ恥らいある程度の歩幅で一歩を踏み出す。人の海が割れる、出来た道を規則的な歩みで渡る・・・海を割ることで道を作った伝説を持つモーセもこんな気持ちだったのだろうか？

いや、きっともっと爽快だったに違いない。

校門を超えた先は登校の喧騒であふれていた。昨日のこと、今日の授業について、宿題、友人関係、いろいろな話題で友達や多人数に和気藹藹（わきあいあい）としている。私だけが単独行動しているというわけではないが、そんな孤独感も感じてしまう。あれだけ人が集まっていたのは私を慕ってくれている訳ではないとは判っているのだが・・・

「おい、見ろよっ。撫子さん・・カワイイな～」

「どっちかってゆーと、綺麗じゃないか？」
その中のひと組の男子が私の話題になる。いつもどうりに声のする方へ顔を傾け会釈する。
「おお～。でも、あんなキレイじゃさ？　敵も多いんじゃね？　そこどうなん、女子代表？」
「あん？　急にふんじゃないわよ！？」
私も気になる会話だ。彼らの死角にはいることを心がけて、聞き耳を立てる。・・・罪悪感はきちんとあります。あっても良いというわけではないのだろうが・・・
「あったけどさ・・・あんな清楚かつ完璧なキャラ作ってたらなんかムカつくけどさ。そういうグループ連中の前で「ごめんなさい、でも私の行儀の悪さは養父に迷惑がかかるので許してください。」とか言われたら・・さすがにね。」
私は何度も頭を下げ、その剣幕さに困った顔をする女生徒たちのことを思い出した。
「そういえば、どっかの大企業の社長なんだっけオヤジさん？」
「大企業どころか超が付くわよ。ドレイクカンパニーって世界規模の大会社でしょうが」
世界に多くの傘下を従え、今や世界に無くてはならない大会社とまで呼ばれるドレイクカンパニー。
そのドレイクカンパニー社長、ドレイク・V・ノスフェラ。その娘であるが故の苦悩。義理の、という言葉は前に付くのだが……その意味は変わらない、自身のことではないにせよ、否応なく品性などは問われてしまうのだ。
喧騒から聞こえる私の話。文武両道で才色兼備、清楚で控えめ、他者への配慮を忘れない・・・。
でも私はそんな大層な女ではないのだ。
下駄箱はなく、土足で入れる校内へと入る。すると目の前に自分の姿をしたもう一人の私が現れる。
鏡だ。

茶色のブレザーと緑色のチェックのミニスカートという制服がよく似合っている。

私には唯一の自画自賛できることがあることを思い出した。自分の容姿は母と似ているのだ。かすかな記憶に残る母は優しい笑顔で、私を……。だが、私は同時に鏡に映る母のような姿をした自分のことは……

鏡に映る自分に向かって言葉を放つ。周囲に聞かれることはない、自分にのみ聞こえる声で。

「私はあなたが、キライ。」

人から“完璧淑女”と呼ばれる人間の姿は、自暴自棄とも取れる発言の後に視線をそらすと目の前にはいなくなった。

終焉を告げる鐘の音が響く。

最後の授業の終わる音が響き渡り、ホームルームが始まる。その後は人それぞれの場所へ歩きだす。部活に励まんと奮起する者もいればアルバイトがある者、それぞれのあるべき所へと向かってゆく。

私は・・・

「お迎えに上りました、お嬢様」

特に部活にも所属していないので帰宅する者の一人に数えられる。朝と同じ運転手が校門で待ち受け、車に迎え入れてくれる。普段どうりの言葉も聞きなれたが、今日の彼の言葉には続きがあった。

「今日は“晩餐会”でございます」

“晩餐会”という言葉に感情の水面が揺れ動くが、無理やり平らな感情で蓋をする。

「そう、今日でしたか」

なんでもないこと、と聞こえる声色で返す。私が乗車すると、すぐに車は発進した。

「今夜の会には各方面より名のある方々がいらっしゃいます。中国の方からは・・・」

今夜のお客の情報を運転しながら説明してくれているようだが、

耳には入れたが記憶の隅に留めようとはしなかった。それは意味のないことだからだ。

私は車の窓の外の風景に意識を向ける。

コンクリートジャングルの名の呼び名に恥じないビル群で作られた世界が広がる。夕日に照らされ赤色、それに負けじとポツリ、ポツリと光り輝きはじめた街の明かり、人が波のようにそれぞれのペースで歩み、身につける服がさまざまな色合いを作り上げ、街に人が生きて作り上げる命の灯火で飾りつけをしている。

だが、同時に注意深く見ると違和感が生じる。高層ビルと呼ばれる天を衝かんばかり高い建築物がなく、あるにはあるが工事中のシートで押さえつけられ、縮んでいる。

それ以外でもあちこちに焼け跡のように傷が風景を汚している。工事現場の数も多い。このような傷跡や景色は珍しくもなく世界各地に出来上がっているのだろう。それは戦争が起きて出来上がった傷である。

第三次世界大戦と呼ばれる世界規模の戦いを人類は起こしたのだ。日本は第九条の精神を貫き、軍隊と戦争への協力・派遣をすることはなかった。だが、所属する陣営の敵国に理由を作られ問答無用に攻撃され、自国防衛のため自衛隊が十分に奮闘したがやはり傷跡はできてしまった。

日本全土に戦争の傷跡が刻まれたが、その中でも首都である東京は大打撃を受けた。２３区の台東区を中心とする東側は復興の目処が立たないと判断され放棄・隔離された。当然、修繕費や被害総額は計り知れず、これまで復興支援をしていた国は逆に受ける立場へと変わったのだ。

そんな戦争が終わったのは私が生まれたすぐ後らしい。復興の開始も早くに行われたのだが、日本人が平和を取り戻したと実感できたのはつい最近だったように思える。そんな風景を、明日へ向かい歩きだした人々が前を向き生きている姿は素晴らしく、愛おしくもあり……

「……と以上の方々です。旦那さまよりお嬢様はご出席せよ、とのご命令が出ておりますので」

「わかりました。」

……なんとも羨ましい。

幻想的光景が目の前にある。

人それぞれの想う情景はあるだろうが、私は目の前に広がる光景はその最たるモノのように感じた。

人里離れた暗闇が広がる土地に、豪奢な屋敷がそれを作り出す。白色をベースに作られた貴族が住まう宮殿を模して作られた外装と内装、外にまで響くオーケストラが作り出す芸術的な音色、その中を世俗ばなれした華やかドレスとスーツを着た者たちが闊歩する。貴族の世界にでも迷い込んだ、と錯覚させる目の前の光景が私の前にあった。人はこれをパーティーと呼ぶ。

蒼いドレスに身を包み、濃すぎない程度の化粧で身を締めた私は幻想空間へと進んで迷い込む。何人かがこちらに気が付き、挨拶をしてくると会釈しながら進む。すると目の前に一人の人物が見えてくる。

上等な背広をその身に着こなした４０前後の年の男性、顔を彫が深い芸術的な造形で作り上げている。色あせた灰色の端正に調った髪と口髭。年相応にしわが生まれているが、彼の翠玉を想わせる緑の瞳は覇気に満ち、体全体からも威厳が伝わってくる。王者の風格を持つ男だ。

男の名はドレイク・Ｖ・ノスフェラ。世界規模での大企業の社長、なにより私の養父。

「撫子、よく来たな」

低く人の心に染み込むかのような声。完璧な日本語で紡がれた言葉、そこにはあるのは当たり前の感情のみだ。傍から見ればできた親子にも見えるが、親愛の感情は微塵も含まれてはいないことに気

が付くことができるのは、果たして何人いるだろうか。
「はい、御養父(おとう)さま」
私はもちろん愛想を込めた返事と笑顔で話す。周りにはどう思われているのだろう？　最高の親子？　理想的な父と娘？
そんな関係ではない。私はただの……

パーティーの順調に滞りなく進む。
会話に勤しむ者、社交を結ぶため奔走する者、流れる音楽に乗せダンスを踊る者たち。私は会場の壁際でそれらを眺めていた。
それぞれの行いに身を投じる客たちであったがやはり終わりは来る。
時計の短針が9時を指した。華やかパーティーは終わりに近くなるが、不自然なことに誰一人として帰る気配はない。
当たり前だ。ここにいる全員は“晩餐会”を目的にしてきたのだ。本当はパーティーなどに意味も興味もないのではないだろうか、実際。
「皆さん、今日のパーティーは楽しんでいただけましたか？」
養父、ドレイクの声が会場となった屋内に響き渡る。人の視線を集めるその姿はまさにカリスマ。
「ですが、今夜の会はここで閉じさせていただきます」
ドレイクを観る客たちの雰囲気が変わる。いや、実際目の色が変わる。
「続きまして“晩餐会”を始めさせていただきます」
歓喜の声ひとつない晩餐会のはじまりと同時に華やかな明かりに包まれていた空間は真っ暗となる。
それと補足するが、実際に目の色が変わったといったが比喩などではない。
「今夜のメイン・ディッシュとなります」
真っ暗な空間のはずなのに“赤い色”が無数に爛爛(らんらん)とそこに存在が

あることを主張しているという意味である。そんな赤の支配する異様な空間に白い上等な布をかぶされたモノが台座に乗せられ運ばれてくる。数は5台で50人ほどいた招待客の数には少々足りない。その布をゆっくりと給仕が取り去る。そこに乗せられているのは・・・

「私自ら厳選した逸材です」

女性だった。少女といってもいい年齢から30代ほどの女性たちが台に乗せられ運ばれてきた。

異常な光景だった。運ばれてきた猿ぐつわをかまされ、四肢を縛られ仰向けに寝かされた女性たち。それを囲む赤い目を輝かせた人々。その悪夢のような光景に前者達は恐怖に涙をためて震え、後者達は飢えたようによだれを垂らしている。

「なので“おいしくいただけること”を保障します。」

まるで時間制のバイキングが始まること告げるかのような簡単な合図が切られ、狂気が弾けた。

誰が最初のスタートラインを切ったか見分けはつかない。薄暗い闇の中では判別など出来なかった。招かれた客たちがドレイクの言葉を合図に女性(ごちそう)たちへと群がり、牙を突き立てる。

闇の中から響く音の中で女性の悲鳴が上がる、猿ぐつわが外れたのだろう。悲鳴に色どりを加えるように部屋に唯一光の差し込む天井の窓から月明りが意図的に差し込まれる。

光に照らされた空間に浮かび上がるのは牙を突き立てられ”血を吸われ真っ白に干からびて行く女性たちの姿と、歓喜と狂気の表情を浮かびあがらせながら顔を血で赤色に染める“吸血鬼”達の姿。

今夜、呼ばれた客はすべて人ではない。“吸血鬼”と呼ばれてきた古の化物、物語の中の存在。それが私の目の前に実際に存在し、伝承どうりに人の血液を貪り啜る。

私はそれらを目にしながら感情もない仮面の表情でその場にいるのみ。そんな私の視界に一人の視線がぶつかる。

ごちそうと呼ばれた一人、私と同じくらいの年齢ぐらいの少女。

彼女が動かぬ体の代わりに目で助けを求める。
だが、私は彼女に応えることはできない。
「撫子、どんな気分なのだ？　同族が目の前で無抵抗にも喰われる気分というのは？」
いつからいたのか、彼ら吸血鬼たちのまとめ役にして長と呼ばれる存在、養父――ドレイク・Ｖ・ノスフェラは人間を遥かに上回る身体能力でまるで瞬間移動でもしたかのように隣に立っていた。
「私は・・・」
目で救いを求めていた少女の方へと視線を戻す。だが、彼女はいない。瞳で助け求めていた少女は消えていた。灰になったのだ。吸血鬼に血をすべて吸い取られると灰となり、塵となって消えてしまう。私の父と母がそうであったように……
晩餐を終えた人ならざる者たちが満たされたように狂気から、夢から覚めたように普通の人間を模した姿へと帰ってくる。狂っている世界、狂気を正常とする生き物たち、だけど本当に狂っているのは
「私はお養父様のために完璧な人間となるべく作られた“人形”です。」
「悲愴感や憐れみの感情は不要な感情の一つ」
「それに彼女たちも、お客様方に食されたのなら」
「幸せでしたでしょう？」
何の迷いもなく笑顔で言い切る、私。
そんな私を、満足げに見る養父。
全てが狂っている世界。その中でも、本当に狂っていて最低なのは……私だ。

普段どうりの一日が終わる。
できた“人ならざる”メイドが部屋の明かりを消すと早々、朝に夢を見せたベットに潜り込む。
６歳だった私は目の前で吸血鬼に両親を殺された。同じく殺されそうになった私は当時でも吸血鬼たちの王として君臨していたドレ

イクの、とある“趣味”により彼の養女（にんぎょう）となった。
定期的に行われる饗宴に耐えるため自分の感情を捨ねばならなかった。悲しむ心も罪悪感や未来もなにもかも捨てさせられ完璧な人形になっているはずなのに……
潜り込んだベットに水滴が落ちる。布団で覆い隠した瞳から水分が溢れてくる、涙だけは捨てられていなかった。
涙を流すなんてことを、目の前で助けを求めていた少女を見捨てた醜悪極まりない女が起こしていい現象ではない。だが、溢れてきてしまう。
嗚咽をもらさぬように歯を食いしばり泣き続ける。だから私は自分がキライ。死んでしまった少女たちよりも消えるべき人間はココにいる！！
「早く終わってしまえばいいのに……私の人生なんて」
小さな小さな自分へ向けたにしては淡白な声色で放つ呪いの言葉。いつもの一日の終わり方。いつもの日常が終わる。これが１０年ほど続いているいつもの日常（悪夢）。

二話へ続く

1、完璧淑女の日常（後書き）

始めて投稿するので・・・いえ、まず完成させます。

１０月２２日、細部を修正しました。

2、路地裏の出会い

2、路地裏の出会い

「九重さん！！放課後、街に遊びに行かない！？」

ギョッとする。あれから二日が経過していた。いつものように学校へと通い、勉強に励む。そのサイクルに戻っていた、何事もなかったかのように。

だが、今日は違うようだ。ホームルームが終わり帰ろうか、図書館で勉強しようか迷っていたときにそれは起こった。突如としていつも元気ではきはきとしたポニーテールのクラスメートの女の子が話しかけて、いや突進してきたのだ。

「ほへぇ？」

「ですから・・ええぇ！遊びに行かない！？九重さん？」

あまりの唐突さからマヌケな返事をしてしまった。でも？

「どうしてなんです？」

「い、いや・・・ほら九重さん、最近元気ないからって・・」

彼女の視線は背中の方へと向かう。視線を追ってみると数人のクラスメートがこちらを心配そうに見つめている。なるほど、気を遣わせてしまったようだ。

「御気遣い、ありがとうございます。でも・・」

「う、ううん。こっちも急で悪かったよ。じゃあ・・」

彼女に事の報告を受けたクラスメートたちは残念そうな声を上げる。普段、私には誰も寄ってこない。少し前までは歩み寄ろうとしてくれる人たちは多くいたが、私の事情に巻き込んではいけないと考え、距離をとってしまったための結果だ。

もちろん彼女のような配慮は嬉しい。だが、気遣いの心を向けられるほどに胸が痛む。私はそんな大層な人間ではないのだ。人から

優しさなど受け取っていい人間ではない、決して。
私は暗い感情を取り払うために図書館で勉強することにした。

「お嬢様、お迎えに上りました」
いつもの運転手。いつもの高級車。その中に入り、あの屋敷へと帰る。いつもと違うのは勉強をしすぎて帰りの時間が遅れたことだ。
季節は日が昇っている時間が長いためいまだ明るいが、後二時間もすれば日は落ちてしまうだろう。
「お嬢様、急な報告がございます」
「なんですか？」
今日は珍しいことが多い。こんなことは今までなかった。この運転手は今日の予定は朝には報告するはずだったのが。
「今夜は旦那様が祝いの席を入れたいとのことでして、用意に時間がかかるためにお嬢様には時間をつぶしていただきたいとのことです」
「そう・・ですか？・・・」
本当に珍しい。吸血鬼たちが集まるのは“晩餐会”であり、開催日はまちまちだが開催する一か月前には必ず知らせるのが養父のはずだ。なにか良いことが起きたから、という安易な考え方をする人、いや吸血鬼ではないのだが・・・。
だが、少し安堵しているのも事実を運転手が私の反応を探るためであることも否定できない。私の感情が見えないよう緊張を高め、普段どうりに了解したという意味で短い返事を返す。
が、どうしようか？私に趣味らしい趣味はない。行きたいところなどもない。すると、ふとしたことに先ほどの元気なクラスメートの言葉が脳裏に甦った。
（遊びに行かないか？そんなこと言ってくれる人なんていつ以来だろう。確かにそう言ってくれる人、友達はいた。そう“いた”。
意識したわけではないが車の窓から世界を見る。すると視界の先にあの少女たちが

“彼女たちが、私を誘ってくれた彼女がいかにもガラの悪そうな男に手を掴まれていた。”

「止めて！！！」

彼に大声を出したのは初めてだったろう。同時に初めての我がままを忠実に実行してくれた。若干スピードが出ていたためにけたたましいブレーキ音をかき鳴らす車からドアを開け、スルりと脱出する。

周囲の目にも、無理やりな下車から来るバランスの崩れを無理やり振り払い。人目を気にも留めずに現場へと走る。すると野次馬もなく人々は見て見ぬフリだった路地裏の入口で騒ぐ人たちがいた。

「放せ！この野郎！！！」

「あぁん！？せっかく遊んでやろうって声かけたのに、その態度はなんだ！あぁ！？」

予想どうりな展開だった。私が到着すると案の定に“下手なナンパ３人組と被害者の女子高生５人”の図が出来上がっていた。唯一の予想外である私が現れたことにクラスメートたちは目を丸くする。

「こっ、九重さん！？なんで？」

「何の騒ぎですか！？皆さん、こちらに」

幸いなことに腕を掴まれ拘束されているのは元気なクラスメートのみ。手招きをした私に所に救いがあるかのように残りの４人が寄ってくる。後は任せて交番へ、と小さく告げると全員で逃げ出した。たぶん援軍を連れて彼女たちが帰還してくれはしないことも予想しての行動をすると、案の定に彼らの矛先はこちらに向いた。

「あっ！！　なにしてくれんの！？」

「クッソっ。ヨッちんがキレっから～」

「俺のせいじゃねぇだろ！？それに・・・これはこれは・・」

下卑た笑いを作る染めているであろう金色の短髪不良その１、ヨッちんさんが私を舐めまわすように視る。怖気がよだつ値踏みの視

線に半歩下がってしまう。
「・・・すっげ～カワイイんですけど！」
「「・・・確かに」」
同調する・・・え～と、不良さんその2、3さん達。褒められたのに、何故か素直に喜べないのは彼らの表情が下心を透けて見えるようなニヤケ顔のためだろうか。
「にげて！九重さん！と、言うよりどうして！？」
「え？」
今我思う。アレ、どうしてだろう！？よく考えたらピンチなのでは！？ここにきてのパニックと判り切った事実が脳内を駆け巡る。私はケンカなんかもちろんできないのでは！？なぜ疑問形なのだろうか！！？それよりケンカを前提に考えてはいけないのでは！！！？
それに最悪の状況が展開していることにも今さら気が付いた。
私たちの立っているのは路地裏と呼ばれる暗い場所。一応私の背後は人が溢れる繁華街だが、道行く人は我関せずの見て見ぬふりだ。本当に気が付いていない事も考慮に入れるべきだ。
逃げることはできない。こんな私を誘ってくれた優しいクラスメートが捕まっているのだ。逃げるなんて・・・。彼女を今捕まえているのは彼らの中でも一番奥に陣取っている不良さん、その2さんだ。とてもじゃないが手が届かない。そうでなくてもじりじりとその1さんが近寄ってくる。
どうする？どうしたら！

行間視点変更1

俺は豚まんが食いたかった。
春が終わって間もないが、旬が過ぎた豚まんを急に食いたくなった。
請け負った仕事を終えて帰路途中ではあったが、住み家に帰るルートにコンビニは数多ある。が豚まんを取り扱っているのは今やひ

とつだけらしい。肉まんはある?だと、ふざけるな俺が欲しいのは豚まんだ!

なにはともあれ少し時間をかけ、帰路から少し外れたが・・・まあ、豚まんは手に入れた。早く食いたいが、俺は立ち食いは好まないので家に帰って内包された肉汁を味わうことに決めた。

ちょうど近くに住み家がある“区域”に入れる場所へと続く裏路地があることをふと思い出し。いつもの順路を外れたが、迷うことなく見つけることができた。

が、男3人と女2人が何か騒いでいる。盛るなら春にでもすればいいものを・・・

道を変えたいが今から変えるのは面倒だし、何より豚まんが硬くなることは何としても回避しなければならない。

そう判断し、無視を決め込むことを決めて、騒ぎの横を通り過ぎることにする。

ちょうど茶色っぽい髪の女を丸刈りの金髪頭の男が手を嫌らしくワキワキさせながら捕まえようとしていた。なんとも古い表現を使おうが、今は豚まんだとその場を横切ろうとした。

だが、思いがけぬミスが起は唐突に起きた。俺と交差するように女へ向かっていった男の大腿部に袋が、じゃらじゃらと邪魔そうなポケットからはみ出した装飾品が袋に引っかかったのだ。

意識が豚まんという誘惑に気を取られたことから始まった負の連鎖の行きつく先は、靴の下。

苦労して手に入れた豚まんは、男の靴裏の洗礼を受け母なる大地へと帰還した。

視点帰還

べちゅっ・・

何かがはみ出る音。路地裏に響き渡るのは柔らかなモノがつぶれる音と広がるおいしそうな匂い。

「うっわ！なんだよコレ！！」
ちょうど事態を無視して通り過ぎようとした黒いコートの男の人の持ち物が落ちていた。過去形なのは不良さん、その一通称ヨッちんが踏みつぶしたためだ。袋からはみ出た白い何かが踏みつぶした靴に付着しいるが路地裏の汚れを受ける。
「汚ったな！ちょっ～とっ、コレどうしてくれんだ！テメェっ！」
いわゆる逆ギレしたヨッちんがコートの男の胸倉を掴む。
「どうしてくれんだ、だぁ？」
黒いコートの声が路地に木霊する。男特有の低い声、そこに含まれる感情は語尾に異様に表れてはいたがトランス状態のヨッちんは気が付いていない、そこには殺気があることを。
「そうだよ！早く金を置いてかねぇぇえええがぁああ！！」
決して文字化けでも打ち間違いではない。彼の悲痛の叫びだ。人間、本当に痛い時は痛いと単語で言えないものようだ。
ヨッちんさんの足が地面に届いていない。コートの男が彼の顔面を鷲掴み、そのまま持ち上げているためだ。苦痛の原因は顔面を握り潰さんとする指の力なのだろう。
二人は同じくらいの身長だった。たぶん、１７７、８？ぐらい。それを指の力で固定した顔面を起点に、腕を天に向けるように伸ばす。まるで天に捧げる供物のように。だが、この状況を見てその姿を天使と表現する者はいまい。これはまさしく天に反逆する悪魔の姿だ。
「このクソが、よくも俺様の豚まんを・・・。お前の命と俺の豚まんの価値の違いがわからねぇだぁ・・・脳味噌が壊死しかけてんのかぁ！？」
「ギャアアアアアアアア！！」
低く深淵から響いてくるような怨念と怒りの声色のコートの人。もがき苦しみながら断裂魔の悲鳴を上げるヨッちんさんだったが、力は一向に揺らがずむしろ強まっているらしく、四肢をジタバタさせ脱出を試みているようだが、うまくいかない。

だが、悲鳴はすぐに止まった。硬い何かが砕ける破砕音とともに。
この路地裏は幅6メートルぐらいと狭い。壁と壁が対面する空間なのだが、コートの男は立っていた位置からつま先を外に開いた左足を側面に向かって開き、腰の回転を加え、右手で鷲掴む頭を壁に叩き付けた・・・否、“めり込ませた”。
壁に顔面を突っ込んだ不思議かつ気味の悪いオブジェの完成。何処か道に生える草を連想させるが、根元となっている人間だ。なにより草はビクビクと痙攣しない。
その一瞬で世界は静寂で満たされた。
一拍の間、そして静寂は
「「ヨッちぃいいいいいいいっぃん!!!」」
破られた。
そこで気が付く・・・クラスメイトの拘束の手が緩んでいる!というより驚きのあまり放している!
「こっちへ!早く!!!」
私は不良さんが驚きのあまりクラスメートの手を離したことを見逃さずに鋭く叫ぶ。それを察した彼女は逃走し、私に誘導されるまま路地裏から脱出しそのまま姿が見えなくなる。よかった。
勇ましく何かに挑みかかる声を聴覚が捉え、振り返る。そこにはコートの男に拳を大ぶりに振りかぶる不良さん2の姿。
大きなモーションで右こぶしを振り上げ、仲間を殺した、いや、たぶん生きてる人のためにコートの男男に一撃を与えようとする。
“こういう攻撃をするよ”と言っているも等しく、威嚇的な意味も含まれぬ単純な右ストレートにコートの男は対面し合う形から左肩を前に体を相手に向かって縦にする動作で放たれた拳を体を反ることで避け、通りすぎるように流れる不良2の後頭部を左手で掴み、そのまま前へと向かう彼のベクトルを利用、かつ自分の体重をフルに乗せた力が彼の後頭部を強引に地面へと誘う。さらにそれは顔面を地面へと下降させる直線軌道を描き地面へと到着。
・・・また、彼も地面にめり込む。

残った不良さん3は顔を青ざめ、恐怖に彩られることを恐れるかのように慌ただしく折りたたみ式のナイフを取り出す。
武器という自分を有利にし、感情を安定させる効果を多大に与える存在を手にした安心が不良さん3の運命は決定された。
不良さんの安心した隙をダメだしとばかりに人間が体感速度の常識を見直すようなスピードで道の真ん中に構えもなく突っ立つ彼の左横に到着すると同時に、まるで手品でも見たかのようにまたも放心する彼の側頭部に素人の自分が感嘆してしまう見事なシフトウェイトが加わった押し込むような掌底を打ち込む。打撃と言うより砲撃を受けたように壁に激突し、彼もまた頭が埋め込まれる。
人を力でコンクリートにいとも容易く人をめり込ます力に驚き声を無くした。大切な疑問も忘れて・・
彼の力は異常だ、だがこの場を冷静な判断で見る自分もまた異常だと心のどこかで思っていると背中越しに首だけこちらに男性特有の低いが、若い人だと判る声がかけられる。
「おい、お前」
「は、はい」
話しかけられて困ったことは初めてだ。
「お前、臭うな」
初対面でここまで言われるのは初めてだ。
「鉄錆のような、いや・・」
彼と私の距離は１０メートル前後。私の背の方から日差しが入り路地裏に多少の明るさを与えている。同時に対する彼が良く見える。彼は右腕を気だるげに右肩に伸ばすと何もない虚空を掴む。
「血だな、コレは」
問われ、回答されても反応できなかった。何もなかった彼の背中から彼の背丈にも匹敵しそうな“黒い板”が抜かれたからだ。あんなもの彼は持っていなかったはずなのに。
ゆっくりと接近してくる彼の右腕にぶら下がる板。否、板ではない。

「いや、もっと癖のある」
彼との距離、残り6メートル。
日本人の平均ぐらいのウェストを凌駕する大きさであるから勘違いしたのだ。
「獣臭さ」
それには人が両手で持てるように円錐形の棒、柄と呼ばれるもの。
それにはシンプルながらも板の横幅と同じくらいの鍔が付けられ先端は三角に尖り、真っ黒な色をした板の周りには鋭い刃が存在する。
人を切るため存在した過去の産物。現代戦でもお目にかかることはほぼない存在。
「まあ、何でもいい」
それを右手に持って、歩み・・いや止まっていた。距離は2メートル弱。
「人じゃないだ、気合いがあれば大丈夫だろ?」
彼は私に方へと向かってモーションが見えない速度で先端を突き出される。その後体を捻るようにして抜かれると同時に赤色の水が飛び出した。水の正体はすぐに理解する。
血だ。
噴き出した鮮血が服を赤色に染め上げる。血の射出口を作り出した正体、もう本体が良く見えるほどの至近距離だ、見間違うはずはない。俄かに信じられない、これは・・
剣。規格外に大きなバスタードソード。

死。

出血する血はおびただしいほどの量。私の茶色のブレザーが黒を含んだ赤色のデコレーションを受けて半分が血色に染められている。
頭に連想されたのは“死”だ。あれほど自分が死ねば、などと抜かしておきながら震えが止まらない。死への恐怖というものはとても拭えぬものではないのか。

だが、こんなにも血が出てしまっては・・・だが、思う。ん？私はどこを刺されたのだろう？

手さぐりで出血元を探すが私に穴などない。自慢できるほど大きくもない、だが平均的な胸も健在だ。傷は一つもない？

と不思議に頭を捻ると、答えが後ろから寄りかかってきた。

「きゃあっ！！」

あまりの重さに押しつぶされかけたため慌てて体を竦める。すると重さの正体が地面へと倒れてくる物体。その正体は・・・

「運転手さん？」

それは私の乗る車を運転していた人が剣で作られた風穴から血を噴出させながらうつ伏せに倒れていた。

「知り合いか？」

大剣を肩に背負いつつ尋ねてくるコートの男が割と自然に話しかけてくる。私はまるで白昼夢でも見ているような感覚だったためか気のない返事をする。

「他人の俺が言うべきじゃないが、友達は選んだほうがいいぞ」

本当に大きなお世話を焼く男は、倒れた運転手の頭を力強くブーツで踏みつける。

「あんたは人間なんだろ？魔族（こんなの）と付き合うとロクなことないしな」

「それに・・・オイ、いつまで寝てやがる」

男はさらに再度死体を踏みつけ始めた。力強く、迷いない踏みつけは死者への冒涜とかを語る人が見れば卒倒するだろうこと間違いないだろう。それを私はさすがに見ていられずに抗議する。

「あ、あの。さすがにひどいと思います！死んでしまっている・・・」

「あぁん？死んでねぇよ、ホラ」

言葉の後に間髪入れずに運転手の死体を蹴り飛ばすコートの人。

蹴り飛ばしたことに驚いたが、さらに驚くべきことに

致死量の血液が流れたはずの運転手が飛び跳ねるように起き上

がった。
「ほらな?」
まるでウソがほんとのことだったと自慢するような声が横からするが私には届かない。目線と聴覚はすべて奇跡の復活を遂げた運転手に向かってしまっている。確かにあの狂った家に傅く者が純粋な人間ではないと思ってはいたが・・
「まさか、運転手さんも・・・吸血鬼!?」
私の驚きの声をスタートの合図をするかのように突進してくる運転手。否、それはもう私の知る運転手ではなかった。まるで脱ぐように人の皮を脱ぎ去り、人間というより全身の肉がむき出しになった昆虫のような外見の異形と化した存在へと変化、いや脱皮した。
あまりのおぞましさに後ろに下がり、コートの男の背に隠れる立ち位置になる。
さすがに貴重稀なる人間脱皮を目撃した私を置き去りに運転手だったものはまるでバッタの様に跳躍し、壁に張り付き、虫が発するキチキチという音で威嚇してくる。
「ハッ!何だよ?あれが吸血鬼だぁ?・・・オイオイ、アンタ頭大丈夫か?」
「今、人の挙げ足とってる場合ですか!!」
もう若干、やけっぱちに返事を返してしまう私。この人はなんなんだろうか。このマイペースな男に段々腹が立ってきた・・たしかにアレを吸血鬼と呼ぶには難があるけれどっ!笑わなくたって、いいじゃない!
混乱と怒りから私はこのやり場のない怒りを運転手だったものに向けるように指差し
「あなたもあなたですっ!!もっとエレガントなデザインにはなれないんですかっ!」
「・・・注文の多い逆ギレだな、おっと・・・何処だ?」
彼の言葉が鋭い変化を帯びたことで私も気が付いた、壁に張り付いていた運転手だった存在がいない。

キチキチ

いや、居る。あの背筋に震えが走るような音がまだ聞こえる。この薄暗く、闇が点在する空間に息を潜めているのだ。

隠れる場所などこの路地裏では限られてくるはず。少なくも日が差し込む上からか、それとも横から、定石で後ろからか、または・・・

と順に目を巡らせる私は遂に捉えた。異形の形となった運転手は・・・

ギョロリと黒目のない大きな瞳でこちらを見上げていた!!正解は下、ワタシの眼下。

「っ!!!」

そのおぞましさに声にならない悲鳴を・・・ではない!私を恐怖に陥れたのは私の顔スレスレをコートの男の剣先が通過したためだ。なにより恐ろしいのは肩に担いでいた剣を大きく引き抜くような動作で、つまり全くこちらを振り向かずに行われたことだからだ。

男の剣は運転手だった存在を傷つけた証明のように、この狭い空間に血臭がさらに濃くなったと実感できるようになった。

「なぜだっ!?なぜ俺の場所がわかったっ!?」

機械音の合成音のような声がする。その純粋な驚愕に彩られた痛々しい声が狭い路地に反響する。だが、彼に同意する。どうして彼は死角の位置にいた存在に気が付くことができたのだろうか?

「ハッ!当たり前だろうが、初めに言ったじゃねえか。臭いって、臭ったんだよムシ野朗」

やった、私のことじゃなかったんだ・・・ではない!そうならば彼の嗅覚は犬並みかそれ以上ということになるのではないだろうか。

私と同様に驚愕したためか、さらに警戒を強めようとしていた運転手に向かって、人並み外れた能力を見せ付けたコートの男は左半身に構えると何も持たない左手を手招き、挑発する。

「どうした、どうしたっ!?折角、恥ずかしげもなく女の前で裸体になって本気モードって奴なんだろ?ほぉら、昆虫パワーでも見

せてくれよ。ククク、それともそれが限界なのかいバッタ君？」

嘲る様に、踏みにじるかのようなその挑発。その嫌味に満ち溢れたフレーズを聞けば誰もが確実に“こいつが悪役”と断定するだろう言葉の羅列と陰険な笑い声に耐えられなかったのだろう、いや耐えられるのならば相当の忍耐力が必須。だが彼はそれを持ち合わせてはいなかった。

「調子に乗るなよっ！！人間風情がァァッ！！！」

運転手は手だった部分を鋭く尖らせ凶器に変え、こちらに向かって真直ぐ突貫してくる。尖った凶器は見た目から鋼並みの硬度と剣にも負けない鋭さを秘めていることが判る。これを喰らえばただでは済まない。しかも、その速度は常人の私には捉えきれないほどの速度、一瞬にして両者の間隔が無くなったように見えた。

だが、彼には見えていたのだろう。距離を一瞬で縮めた速度と同等な速度で大剣を水平に構えて、一喝。

「ハッ！！単純っ！」

「くたばれぇぇいっ！小僧っ！！」

押し切るような横一閃と突進してくる突き。

振られた剣と運転手の凶器と互いの罵声が衝突する。

拮抗は一瞬、あったかどうかすらわからない。運転手の体は黒い剣の質量をまともに受け“粉砕”され、向かってきた方向へと吹き飛んでゆく。剣でが与える攻撃表現ではないが、事実、原型を留めていないほどでこれが最も相応しいとすぐに感じた。

相手の速度からくる力を諸共せずに引き裂き、砕いた黒い大剣は振り切られた先にあったコンクリートに抉りこみ止まっていた。その刀身には傷一つない、あるのは相対した敵の血がこびり付くのみ。

私は声にならない驚愕に息を詰まらせていた。人間が、人外の存在を倒したことに。

今まで雲に隠れていた日差しが隙間から差込む。

壁に潜り込んでいた大剣を引き抜き、肩に柄を支点に担ぐ彼に光が降り注ぐ。

彼はこちらをゆっくりと振り向く。今までの薄暗さがなくなり、彼の姿がよく見える。

少し癖のある黒髪、二枚目と豪語しても誰もがうなずく顔立ちだが目つきの鋭さと皮肉気に歪められた口の形でそれも半減している。体は太いというよりも細めで、あんな巨大な大剣を持っているとはにわかに信じられない。なにより目を奪われるのがルビーのような紅い瞳。

「こんなもんか？」

やや困り顔で彼は尋ねる。光を受ける彼に目を奪われていた私は我に帰って苦笑するしかなかった。

誰かに何かを問われて困ったのはコレが二度目だ。だけど、どこか心は晴れていた。

三話に続く

2、路地裏の出会い（後書き）

やっと、主人公が登場させられました。初心者とはいえ思えます、難しいな小説。

3、魔王がいたらこんな奴

3、魔王がいたらこんな奴

「いぃやあああああああっ！！！」

突然の悲鳴に我に帰り、声の方へと向き直る。

発生源は腰を抜かしたのか座り込む、少し太めの・・いえ、恰幅の良いご婦人。

彼女の不幸は多分、チラリとこちらの裏路地を見てしまったことだろう。ちょうど日差しが少し差し込み、薄暗い路地裏の光景が段々に明瞭になってきていた。

壁と地面に頭をめり込ませた醜悪な人間オブジェと謎の生物の無残な屍骸、それから発生した血糊が赤い色彩を作り、臓物らしき何かブヨブヨした物が転がっている。絵として写生すればタイトルは「狂気」または、「醜悪」になるのは必須。

そんな昼下がりのご婦人の悲鳴に釣られ、数人が路地裏の入り口に集まり始める。

同じ路地裏にいる私の下には太陽の光は届いていないため未だに彼らの視界には入ってはいないが、このまま突っ立っていれば見物人に見つかるのも時間の問題だ。特にこの隣にいる剣を背負う人はいろんな意味でどうす・・・る？　と若干の心配を持ちつつ、彼へと目を向けたが

いない。

首と目を振り回してようやく見つけた彼は、

振り向くと彼はスタスタと路地裏の奥へと突き進んでいるではないか！。もう奥に広がる濃い暗闇に吸い込まれ今にも見えなくなりそうだ。

（誰がこんなことを・・）

（気味悪いわっ・・）

（・・この生き物はなんだっ！）

背後ではギャラリーの声。先ほども言ったが、今は雲で太陽が隠れたため薄暗さを取り戻しているが、このまま私が見つかれば・・・！

刹那に脳野に展開される今後の予定。掛かる容疑、スキャンダル、逮捕そして・・・！！？なにより巻き込まれたようなものだが、配下を殺害されたという事実を養父が知れば自分の顔に泥をかけた存在を許すことはないだろう。彼は今、命の危機に陥っているのだ。

もとより退路は集まった人々によって塞がれている。もう迷わず彼の後を追いかける。

（せめて命の危険があることを伝えなければっ！！）

彼はもう相当奥へと進んだらしく、未だに追いつけない。息を切らして走る私はあることに気が付く。

（この路地の壁・・・進むにつれて年代が古くなって、損傷が激しくなってくる）

木の年輪ほどではないが、ある一定の間隔をあけて両脇に立ち並ぶ家々が数メートル続く。そこは暗い空間だった。太陽が差し込んでも暗いのではないかと思わせるほどの暗い通路。そこに雲と言う干渉物から解き放たれた太陽光が鮮明に当たりの風景を映し出す。人の姿はまるでない。

ハッと気が付く、地図で言えばこの先は・・・

考えながら走る内に彼の背中が見えた！　彼は立ち入り禁止と大きく書かれたドアに手をかけていた。

「っは、っは！あ、あのー！待って、待ってくださいっ！！」

だが、彼は待ってくれずにドアの向こうのある光の中へと消えて行ってしまった。

どうする？　と考えようとしたが、実際、考えている暇はない。

立ち入り禁止に目もくれずにドアを開く。

暗闇の路地裏からの脱出と同時に襲ってきた、強い光に目が眩む。

強烈な明順応を振り払い、目を開けるとドアの先、そこは・・・・

第三次世界大戦が勃発した日というのは正確には定められていない。それは緩やかな戦火の拡大が原因だった。はじまりは小さな独裁国家の内戦からという学者もいれば、世界規模での戦争が始まった日付けだと言う評論家、はたまた禁忌とされた核兵器使用が決定された日こそがという見方と諸説(しょせつ)が存在する。

とにかく大規模かつ、ゆったりとした長期間の戦争だったためか、幾年モノ歳月で得た教訓かはさておき、人類はそれなりに戦争被害への対処法というものを数多、編み出していた。

その一つでもあるシェルターの普及と防衛技術の進歩により人類の個体数が激減することはなかったが都市を中心とした建築物はどうしようもなく破壊され、被害が大きかった。敵兵や兵器が隠蔽されている可能性が考慮されたためだ。そのせいで一面焼け野原と化した都市も多い聞く。日本はそれほどまでにはならなかったが、先にも話した有り様を呈したために、財政上の観点から都市を切り離して放棄地区とした。それは後に、この首都東京にある無法地帯を作り出してしまう。

放棄された部分は日本の本土の一つではない、と当時の政権を預かる責任者たちに言わしめるほど酷い有り様だったらしく、化学兵器の汚染などから人が住めない地と太鼓判を強く押されていた。がほどなくして、その地に根城を築く者たちが現れ始めた。

彼らは日本人のみならず他国からの移民者、はたまた国外で罪を犯した者まで、ありとあらゆる訳あり人間たち。移り住み始めた彼らはフリーダム精神で悪行を重ねはじめ、お隣となった日本にも害を及ぼし始めた。

これには諸外国からの圧力と罵声を大いに受けたが、借金大国日本はどうすることもできなかった。

平和をかき乱された国民からも政府を叩かれ、責任を負わされた大臣がストレスと奥さんの浮気から“やってられるか、実家に帰る”と発狂、辞職願いを出し政治家人生に自ら幕を閉じたぐらいだ。

とにかくそんな経緯から日本とする部分と二階建ての建物ほどのプレートで周囲を隔離された元日本の構図が公式の地図に出来上がったのだ。

その地区に名前はなかった。だが、ある時から皮肉めいた名前で呼ばれるようになった。

かつて神により燃やされた地、多くの人々が心乱れた所とされた場所、神に見捨てられた者たちの巣窟。

人は言う、そこには死体が石ころのように転がっていると。

人は聞く、そこは一日中、銃声が鳴り響いていると。

人は語る、あそこは常識が呆れかえり、どこかに去ってしまった場所だと。

いつしか、人は隔離区“ソドム”と呼んだ。

此処は本当に日本なのだろうか？

荒廃した世界が目の前に広がり、自分の踏んでいる地が本当に日本かどうか信じられなくなる。

視界１８０。のすべてが広く見えるほど建物が低く、それらすべての外壁は無事なものはなく亀裂が走っているのが当たり前、悪い場合は真っ当な形をしていない。地面はコンクリートがあるにはあるが平らなモノはなく、陥没していたりと凹凸（おうとつ）が激しい。なにより砂の埃や土、汚れなどでまるで荒野を連想させた。

太陽光を遮る高い建築物は無く、先ほどの路地裏を馬鹿にしているぐらい、太陽光が降り注いで来ている。

しかし、全体的に暗い印象が強く、活気がないというよりも空気が重い、ひたすらに重く暗い。

人の姿もあるが少なく、それら全員がコートやフードで顔や姿をひた隠し、目線や顔を下げて互いの目を合わせないようにしていた。

隔離区“ソドム”

私は話には聞いていたが、ここに足を踏み入れるのは初めて。だが、入った瞬間に胸を駆け巡ったのは不思議と安心感だった。私も

人の目というものを恐れているからだろうか。
（酷い場所とは聞いていたけれど・・・）
実際、荒野みたいな場所だがそこまで危険極まりない場所とは思えなかった。
やはり人の噂とは大きくなって世間に反響するらしい。
そんなことを考えている場合ではないと我に返り、視線で目標を探す。
彼はいとも簡単に視界に捉えられた。ほとんどの人が下を向いて歩いているが、例外のように胸を張って歩く黒いコートの男が一人。
そこまで距離も離れてなかったため、小走りで駆け寄るとすぐに背に追いつく。
このままでは危険なのだ、と伝えるべくと思ったが重要なことに気が付く。
（ど、どう話せばいいのだろうか・・・）
入学したてのホヤホヤ学生が一度は抱える問題。どう知らない人と仲良くなるかの前に、どう話せばよいのかの疑問。別に仲良くなりたいわけではないが、最初は大事である。
（こんにちは、あなたは危険なのです！・・・新手の胡散臭い宗教の勧誘みたい・・・）
（ごきげんよう、あなた今の状況判っていまして？・・・ってなんで上から目線なの！？　私っ！）
数多の声をかける作戦を脳内会議で模索しようとするも、男子とそんなにしゃべったことがない経験不足に気が付いてしまった撫子嬢はさらに窮地に追い込まれてしまう。赤面しながら混乱と葛藤とモジモジと体をすり合わせた果てに編み出した言葉は・・・！！！
「あ、あのぉ・・・」
とても弱弱しかった。
そして、声が小さい！　もう一度！！
「あにょっ！」
ミスった！！

「あの！あぉおうッ！？」

気合いの入れ過ぎでつんのめり、転んだっ！・・・ダ、ダメダメだ。ダメ人間だ。なんなのだろうか、私の完璧設定は今どこに・・・

「・・・いつまで付いてくる気なんだ、女」

嘆息混じりの呆れた声が上から届く。別に彼が上から目線なのではない、私が地面に手を突いてうな垂れているためだ。

私の葛藤はなんだったのだろうか。いや、私の努力が功をそうしたのだ、きっと。・・・スイマセン、ヤメテください、そんな可哀想な人を見るような目でミナイデ。

転んだ際についた服の埃を叩きながら冷静になろうとする。実際、このままでは本当に命の危険があるのだ。私のではない、彼の命だ。意を決し、説明する。

「実は」

「おんやぁぁ～！？　旦那ぁ～？そのベッピンさんはどちら様ですぅ～？」

私の説明を阻んだおちゃらけた口調のボイスがした背後をゆっくりと振り返る。人生ではじめて自分の言葉を遮られる不快感知り、無意識にその人物を睨んだ。

そこにいたのは、目深にかぶった野球帽とスーツを着た青年、あまりに深く帽子をかぶっているため顔が良く見えない中肉中背の男が一人。

「お取り込み中ぅかな？だったら中で話そうよぉ？今日は少し暑ぁっついからねー」

男は私たちの立つ場所の右真横の建物の扉を開く。

キィという錆びた音を立てたその建物は二階建ての事務所のような外見をしている。しかし、周りの建物と比べるとひび割れもなく、比較的綺麗な白塗りの外壁、中を見るための窓ガラスは正面にはないため一切内部が見えない使用になっている。

私が入るかどうか迷っていると、隣の彼はすぐに中へと入る。と声が聞こえる、防音の機能は無いらしい。

「おおっ！冷えたジュース発見ぇん！　・・ん、旦那・・あのどうして銃を向けてくるんだぁい？あ、あのね、人間は穴が空いたら血が抜けて死んじゃうんだよ！？わかってるの旦」

「判ってる。判ってるから・・風穴開けさせろぉぉぉぉっ！！何、人の家を我が物顔で使ってやがんだぁぁっ！！！」

「ヒィィィギャァァァッ！！！？」

悲鳴と怒号と何度も唸る銃声が外まで聞こえてくる。私は本当にココに入らなければならないのだろうか？

涙を目にいっぱい貯めてフルフルと震える私は一人立ち尽くし思う、初めてあの家に帰りたくなった。

「フー、あと少しで通気性が良くなる所だったゼイ」

すごい、死んでない。帽子の人はソファに座り、汗をハンカチで拭っていた。

悲鳴と銃声が鳴り止んだので、意を決して建物へと足を踏み入れる。そこは・・・

（うっ！？）

汚い。とにかく汚い。部屋の広さは正方形のように均等がとれていてるためか窮屈さもなくちょうどいい広さなのだが、床にはホコリが歩くたびに白い粒子のように霧散するほど溜まっている。

玄関となる側には窓はなく電気も点いていないため光は部屋の両脇に備え付けられた窓から入り込む。十分な日差しがあるため明るさもあるのだが、ガラスの黄ばみで日差しがイエローに輝くためにいい気分ではない。

部屋の家具の数も少ない。中央に来客用であろうボロボロに成り過ぎて綿が飛び出したソファーが一つ置かれ、部屋の一番奥に大きなとても古い木製の机とイスが置かれている。ドアは今入ってきた玄関と左奥にあるモノのみ。それ以外はない。飾り気の欠片もない。いや、ホコリが敷かれる床に新たなワンポイントとして弾痕と大量の薬莢で色どりがなされているが・・・。

そんな部屋に先ほど私を導いた帽子の男がソファーで大きく足を広げてダルそうに座っている。本来この空間では異物な人が一番この部屋に絵になるように居座っている。自分の家でもないのに・・・

「だ、大丈夫です？」

「ん？えぇ～、大丈夫っすよ。慣れてますし」

どうすれば銃弾を浴びせかけられることに慣れることができるのだろうか？

「それよりも座りません？汚いですけど」

「いえ・・・うぅ、それでは」

意を決して座った。それほど汚いのだ。・・・でも以外に座り心地は良い。

「チッ！やっぱり全部避けていやがった」

忌々しい感情がにじみ出ている声が奥のドアを開ける音と共に響く。そこから本来の家主が現れた・・・全裸でぇぇぇぇぇッ！？。

「服っ！服着てくださいっ！」

下腹部付近を見てしまったダイレクトに！！私は抗議の声を上げながら手で赤面する顔を抑えているというのに、当の本人は全く気にしていない！恥ずかしがってる私がバカみたいである。

「仕方ないだろ？服はこっちにあるんだ。それに臭いとイヤなんだ」

「それでもモザイクぐらいつけて出てきてくださいっ！」

「・・・無茶言うなよ」

今日は何なのだろう。不良さんと対峙し、運転手は化物、腰にぶら下がった懐中電灯・・・。もはや混乱の極みの撫子ちゃん。さすがに驚きの連続すぎて疲れてきた。なのにも関わらず全裸男はニヤケ顔で突っかかってくる。

「それにお父さんで、男の体なんて慣れてるだろ？」

「私のお父さんとはもう死に別かれてます」

なかば投げやりに嫌な切り返しに彼は顔を少し歪めると、黙って服を着衣し始める。いい気味だ。

「おやぁ？そうでしたぁ？」
何を思ったかソファーでだらけながら笑って見ていた帽子の男が突然話しに入ってくる。
「なにか？」
「いえ、なにもぉ」
「いや、アンタはなにか知ってるんだろ？」
着替え終わった男は確信があるのか帽子の男に断定的に訪ねてくる。
服は下は青いジーンズ、上は白のワイシャツでボタンを上の二つを開けている。今はこの部屋の主らしく奥のデスクに腰かけてグリップに龍のロゴが刻まれた銃の整備をしている。
「ええ、それよりも」
「あ？なんだよ？」
「自己紹介、しぃましょうか」
無理のある脱線。だが、こちらとしては願ってもなかった。私は常日頃から吸血鬼（バケモノたち）を見てきたが“化物を殺せる人間”を見たことがない。
「まず、アッシからぁ。名はハジと申します」
「ハジさん？」
「偽名だろ？本名教えてやれよ。まあ、俺も知らないんだが」
「旦那、名はその存在を表すもんです。そこには真も偽もないはず」
「・・・ハイハイ判ったよ。まぁ、言い易いからいいんだけどな」
いいのか？　とにかくハジさんはいい人に見える。笑顔にとても嘘を感じもするが悪意はないようだ。
「仕事で情報を売り買していましてねぇ～。この頃は趣味でやってる雑貨屋のほうが繁盛してるんですがね」
「情報？」
「仕事の紹介とかもあるんだがな。こいつのはさらにエグイ。暗殺関係や株式のインサイダーまで、それこそよろずに、だ」

目をむいて驚く私。この人の良さそうな人がそんな犯罪を取り扱う、死の商人とは・・！

名を“端（はじ）”とする男は照れるように頭をかきながら笑顔。

「イヤ～ッ！照れちゃうな～！」

褒めてないのだが・・・私、人を見る目がないのかな？　どう思う？

「まあ、アッシのことはこれくらいでぇ・・・で、こちらの旦那が」

そう、この人。この人は一体？

「“魔王がいたらこんな奴”です」

本人を差し置いて男を紹介するハジさん。

？？？

「魔王？」

するとハジさん、ソファーからの助力なしの見事な後ろへのバク宙。それと同時に彼の座っていた場所に衝撃が落下してきた。

壮絶な轟音と風圧に私は驚きでホコリが口に入るのも忘れて、口を半開き。風圧で積りに積もった埃が視界を阻む。それも徐々に晴れて行くと何かを振り下ろしている姿勢の魔王がいたらの人が見えた。手には何もないと思いきや次の瞬間、彼の手のあたりの空間が歪む。すると、なにも見えなかった空間に突如、あの黒い大剣が現れた。

「・・・人に大層なニックネームくれるじゃねぇか」

不機嫌の極みだ、　と言いたげな声と怒りの表情。対照的にハジさんは笑顔。

「いやいや、ご謙遜を・・・。それに旦那、“インビシブルバック”壊しちゃって、もうっ。その大剣“イザナミ”もツッコミの道具にするこたぁないでしょうに」

「もうこの袋は限界に近かった。ちょうどいいさ」

魔王な人は忌々しげに舌打ちすると黒い大剣“イザナミ”を机に立てかけ、元の定位置である机のイスに戻り、銃の整備を再開し

だす。
二人の会話と展開についていけずに、一人孤立状態の私にハジさん説明が始まる。。
「インビシブルバックというのはですねぇ、大きなギターケースぐらいの大きさの袋にチョこっと細工をして、入れモノと袋自体を見えなくする便利なモノなんです。高いんですよ、ホント」
「・・・いえ、そっちよりも・・・」
チラッ、と奥で黙々と銃弾をカートリッジに詰める人を見る。あの人は一体なんなのだろう？
「“魔王がいたらこんな奴”ですか？」
今一瞬、犯罪の匂いがするバックの説明があったが、気にしないことにした。いつも非日常的な生活のおかげなのか神経が図太くなっているのかもしれない。
「・・・進だ」
すると予想外の方向から答えが出た。銃を布で拭きながら本人が口を開く。男性特有の低い声だが、まだ若さを感じる低さの声で。
「俺の名前は進・カーネル」
「え～と、魔王とかいうのは・・・」
「それは勝手に付けられたあだ名だ。こっちも迷惑してる」
「・・・カーネルさん？外国の方なんですか？」
若干、白人のような白い肌をしている気がするが顔立ちなどは日本人よりだったので疑問を感じた。それを感じたのか苦笑しながら回答をすぐにくれた。
「さぁな、俺は孤児なんでね。苗字も孤児院の園長の苗字をもらってるからそれを使ってるだけだ。たぶんハーフなんだろうがな」
「す、すいません。進さん」
「敬語はいらねえよ。呼び捨ててくれて構わない。あと、礼儀なんて気にしなくていい」
大きな戦争があったためか、孤児の数が激増したと聞いてはいた。それを知らずとも失礼なことを聞いたのだから謝るのが当然なのだ

が、それを気使ってくれるとは予想外。
もしかしたら、いい人なのかも？
「それよりも、俺はあんたのことの方が余程気になる」
「えぇっ！」
真剣なまなざしと紳士な響きが入り混じった急な切り返しに戸惑う。同級生や上・下級生の男子から幾度かお付き合いの告白をされたことはあるが、こんな唐突なのは初めてだった。
顔が赤くなり、胸が激しく鼓動を放つ。距離もいつの間にか縮まり、息と息がぶつかるぐらいまでになっていた。調った顔立ちが眼前に迫り、彼の紅い目に私が写り込む。私はたまらず赤くなった顔を伏せる。
「・・プッ、ククク」
誰かの笑いを噴き出す音。
「・・・旦那、性格悪いですぜ」
「んん～？　俺はただ素性が気になるって意味で言っただけだぜ～」
ハッとなって視線を戻すと、進は顔をニヤニヤさせてこちら見下している。確信犯だ・・・やっぱりこの人、性格歪んでる！
からかわれた経験が少ない私は苛立ち気味に説明しようと決意した。
「私は」
「彼女は九重　撫子さん。都内にある学校に通う高校2年生。世界中に多くの傘下を従え、今や世界に無くてはならない大会社ドレイクカンパニー社長、ドレイク・Ｖ・ノスフェラの養子として引き取られ多忙な生活を送っているお嬢様。
二日前も彼主催のパーティーに青のドレスを着こなし参加。これはどうでもよくて・・・あっ！スリーサイズは」
「ストーーープッ！やめて、やめてくださいっ！！」
私は赤面して乙女の秘密漏えいを防ぐため涙目で叫ぶ。なんなのだ、どうしてこの人は私の言葉に割り込むのか。それよりなんでこ

こまで初対面の相手の情報を持っているのだろうか!?スリーサイズ!?それになぜ、あの日のパーティのことを・・・!?

「ドレイク?あのでかい会社の社長令嬢様からなんで吸血鬼の匂いがする?」

「!?」

「アレ?、旦那ァしらない?」

やはり、ハジさんは知っているのだろう。ここは私が説明しようとしたとき、空気が変わった。

空気が変わる。部屋全体というよりは世界が。私にも感じるくらいの殺気で満たされる。

「これは・・・」

進の顔つきが変わる。彼も感じたのだろう。立ち上がり険しい表情になり、事態を把握しようとする。

「こんなにも、早く・・・」

一人だけ事態が理解できる私だったが、実はもう一人事態を理解するものがいた。

「ドレイクからの刺客でしょうねぇ〜」

「あ?」

ハジさんはケラケラと笑いながら説明する。この人はどこまで知っているのだろか?私はこの人の得体のしれない何かに恐怖する。

「さっき旦那が殺した魔族がいたでしょ?あれはドレイクに従う下級魔族ですよ」

「なんだと?そこまで義理人情に厚いやつなのかドレイクは?」

「いえ、目的には旦那を消すことも入ってはいるでしょうが、一番は」

一拍置いて、こちらも見つめるハジさん。まるで敵にとどめを刺すが如く人差し指をこちらに向け、彼の瞳がこちらを射抜く。

「九重さん、あなたを迎えに来たんですよ。きっとね」

「・・・・」

判り切っていたことだ。養父は私の行動を逐一、制限し、観察していた。

友人は作らせず、他者との関わりも最小限に。言葉使いから、礼儀作法はすべてたたき込まれた。身だしなみも含めすべてを彼に管理されてきた。すべては彼のある目的のために。

完璧な存在を作り出すために。

それらを守られなければ、破ってしまった場合いつも大きな罰があった。私にも、他者にも。

「・・・逃げてください」

「あん？」

「逃げてくださいっ！進さんっ！このままじゃ、あなたが殺されてしまう！」

「養父は自分に泥をかける存在を決して許しません。たとえ、自分にかからずとも！」

「あの時、止められれば良かったんです。私が全部悪いんです・・・あの時だって！！」

昔、あの牢獄のような生活に耐えられなかった時があった。それは初めてできた友達にしてしまったこと。彼女は私と友達になりたいと言ってくれた。私はバレなければと喜んで友達になった。そして・・・

言ってはならない真実を、彼女に話してしまった。

彼女は殺された。養父に。彼女の家族も一緒に。何の罪もない人たちが。

養父は彼女らの首だけを私の部屋に置いていった。血まみれ彼が言った言葉を今でも思い出す。

『私のいいつけを守らなかったのだ、これはお前が殺したようなものだ』

その言葉と彼女たちの首を残して養父は去った。それから五日間、部屋に監禁された。首は私の部屋に飾られどれも苦悶の表情を残しており、私を責めているようだった。

無音の部屋の腐敗を始める三つの首が語りかけてくるようだった。

お前のせいで

あんたなんていたから

私たちは何もしていないのに！

あんたなんかと友達になんてならなければっ！！！

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

あの後、私はより従順になり一切かれには逆らわないようになった。彼の想い同りの存在になること。それだけが私の存在意義になった。そうしなければ周りのみんなが殺される。私のせいで、こんな人形のせいで！！みんな、みんな私の周りからいなくなる。辛い、苦しい、怖い・・・

「ごめんなさい、ごめんなさい、私が悪いんんっ！！？」

過去の罪悪感で恐怖に囚われ、狂ったように謝罪する私を止めたのは進だった。片手で鼻と口を器用にふさがれ二酸化酸素と酸素が交換できなくなる。

「んん！んんんん！んんんっ！！？」

苦しい、辛い、別の意味で怖い。果たしてこの人は手を離してくれるのだろうか！？と思っていたが、案外、早く解放された。

「ウザったいんだよ、お前。なに一人でスパークしてやがる」

「ゴホっ！ゲェホ！」

「何をして、何があったかなんてしらねぇよ。だけどな」

恋い焦がれた酸素を取り入れ歓喜する肺の急激な活動で苦しみ、床に四つん這いになる私は彼を見上げる。涙目でかすれて見えていたが確かに力強く笑みを浮かべ、意思に溢れる紅の瞳がこちらを見下ろす。

「そんだけ謝ったんだ。許してくれなくたって、怨むことは飽き

てくれてんだろ」
救いになっていない言葉。だけど、とても楽になった。どうしてだろう？この人の言葉はどこか冷たく、でもどこか力をくれた。
「おやぁ？出陣で？」
「ああ」
銃を素早く、組み立て直し、調子を確かめ、マガジンを銃にスライドさせる。
「どこの誰(アホ)かは知らないが・・・俺に確かな殺意をぶつけてきたんだ」
「死ぬ覚悟ぐらいできてだろうよ」
彼の顔に張り付いた皮肉の笑顔にどこか狂気を纏わせ、黒いコートに袖を通し、黒い大剣を肩に背負い、銃を懐に収め、颯爽(さっそう)とドアの外へと出て行ってしまった。
私は目を見開き、急激な血流の再開に顔を赤らめさせ、そのまま彼を送ってしまった。彼を止めるつもりで追いかけてきたのに。
そんな私の肩をハジさんが優しく叩く。
「大丈夫ですよぉ」
「で、でも相手は」
「そんなに心配なら、その目で見ればいい」
「魔王がいたらこんな奴の実力を」
空が紅(くれない)に染まり、先人が想った世界の終焉の形を作り出す。
「まあ、夕方ってだけなんだが」
私を同じことを思っていたのか、少し呆れ顔の進がつぶやく。
「だけど、蝙蝠(こうもり)が飛ぶには早いよな？」
上を楽しげに見上げる彼にならうように空を見上げると、本当に蝙蝠がいた。
呆れてしまうのはその大きさ。人ほどある蝙蝠がいるなど常識的に考えて受け入れられるだろうか？　それが空を飛び、しかも普通の蝙蝠のように飛び回るのではなく空中で滞空し、こちらを見下

ろしていくる。普通ならその光景に人は恐れ、逃げ惑うのだろう。だが、あの人は違うらしい。

「おいっ！蝙蝠！なに人のこと見下(みくだ)してんだっ！！！降りてこいっ！！」

一応、私とハジさんは離れた路地の入口を盾代わりに覗き込み、見守ることにした。

「本当に大丈夫でしょうか？」

「まあ、見物しましょ♪」

解説のハジさんは私の後ろにいるが、隠れはせず壁に寄り掛かっている。

「ったく、せめて人の言葉が判ればな」

（人間よ）

すると突然声が“頭”から響く。響くたびに頭がキーンと痛む。進も同じようで頭をかいている。たぶん蝙蝠特有の超音波を使っているのか？それとも人外の力か？。だとしても知能は人並みかそれ以上。

（お嬢様を迎えに参った・・・渡せ）

やはり、あれは養父からの使いのようだ。私を迎えに？ならば彼のことを助けられるかも

「なんだ？仲間が殺(や)られた仕返しかと勘違いしたよ。ほら、お探しの愛しのお嬢様はあそこだよ」

（なんだと？）

親指を立て、後で隠れる私たちの方へを見向きもせずに、居場所を示した。

私の願いは一瞬で儚く塵となる。頭を抱える私に視線が降り注いだ気がした。

（貴様が同士を殺した？）

「ああ、そうさ。同じになりたくなけりゃ、とっとと帰ってドレイクに伝えな」

（ドレイクさまのことまで・・・）

状況が悪化するどころか、炎上を始めている!?誰かあの人止めてくださいっ！

（貴様、生かしてはおけぬ！）

「じゃあ、言葉なんぞ初めから使ってんじゃねぇ!!テメェが喋るたび、頭が痛いんだよ、干物にすんぞっ!!!」

（肉風情が!!）

啖呵と共に戦闘開始。相手の数は数えて15体。こちらは一人。

一匹目が空から翼をはためかせ、足につく鈎爪でこちらを捉えようと強襲してくる。

そのスピードはミサイルのような速さで、常人で反応することができる速さではない！

「進さんっ!!」

私は彼の惨劇を見ていることができず、叫びと共に目を伏せる。

また、また失ってしまった。また、私は・・・！

「なんだよ?また泣くのか?」

失われたと思っていた声が呆れた声色で耳に届く。ハッ、と声の方へ目を向けると

蝙蝠の胴体を貫いた大剣を掲げる、進の姿が映った。

「後、呼び捨てでいいって言わな」

「進さん、後!後っ！」

だから・・・とマイペースな彼の後方から今度は吸血にも使のであろう歯を剥きだしに襲い掛かってくる2体の姿が。

進は振り返りざまに剣を振り切ると串刺しにされた一体目が弾丸のようにすっぽ抜ける。向かってきた一体に激突するかに見えたが、蝙蝠は華麗に回避する。

蝙蝠は声帯から発する超音波で障害物を回避する。蝙蝠に物を投げつけても当たらない。だが、しかし

彼らは見失った、標的の姿を。彼らは一撃離脱の精神に乗っとり、地面スレスレから空へと舞い戻り、空から標的を探そうとするが見つからない。それもそのはず。

後ろで見守る私にははっきりと見えた。飛んだのだ。彼らの頭上へ。

「おい？どこ見てる？」

今、声と共に背中に、背中に飛び乗った。

二体目を大剣で串刺しにした。では二体目は？

天が落とす稲妻のような銃声が一発鳴り響く。剣を突き刺したまま、横から放たれた銃撃は隣の蝙蝠の頭へと届き、脳の一部のようなものをばら撒いて三体目が錐もみしながら落ちてゆく。

進の行動は、蝙蝠の反射速度を上回っていた。

新たに飛来してきた四匹目は、未だ串刺しにしている二体目に乗っかる進を、仲間もろとも殺そうと超音波を放つ。それを受けた蝙蝠がバラバラに弾けた。驚愕すべき威力であるが“蝙蝠”だけである。三匹目は戸惑う、どこだ？と・・・答えは、

さらに真上だ。壊れる前の二体目蝙蝠を足場として目で捉えられないほどのスピードで跳躍し、三体目の頭上にいた。私が目で捉えることが出来たのは真上に現れた瞬間のみだ。そのまま唐竹割の要領で自由落下の速度と相手を斬り殺そうとする指向性を持った刃が振り下ろされた。

異物に体内へと潜り込まれた三体目は擦り切れた金属のような叫びを上げ、足掻(あが)く。だが、進の大剣は相当の硬度を持つであろう蝙蝠を易々と暴力的に切り砕いた。

剣による攻撃表現に相応しくないとは思うが、砕くという表現がふさわしいと実感できるほど蝙蝠は原型を留めていなかった。

蝙蝠は衝突前に真っ二つに縦に両断され、進と共に地面に戻ってきた。

私は１６メートルほどで上空で行われている人と人外との戦闘に勝手に開き、一人つぶやく。

「人間って悪魔に勝てるの？」

「勝てますよ？何言ってんですぅ？」

悪魔を人間が倒したという実績に本気で驚く。

それに彼は異常だ。その戦闘能力など差し引いたとしても身体能力は人間を遥かに超えているのではないだろうか。

「一つ、間違いを指摘します。別にあの動きは今の時代、それほど凄いほどでもないのですよ」

え？　とつぶやく私は目を彼の方へと向けることができない。目を逸らすことができない、戦闘は終わっていないからだ。残り１１体。

もう彼らには先ほどまでの余裕はないのだろう、進に対しては全力で行くべきと判断したようで、今度はすべての大蝙蝠が彼に肉薄しようと襲い掛かる。それに対して進は進んで挑みかかる。十を超える空飛ぶ化物に挑みかかるその姿はまさに勇者さながらなのだが、顔に張り付くものは狂気じみた笑顔。悪役じみた蹂躙者（じゅうりんしゃ）だ。

「考えてみてくださいよ？人間より力ある彼らがいるのになぜ、人は蹂躙されてないんです？」

進が勢いをそのまま飛ぶ。それはまさに弾丸のような速度で黒い線を引き連れ、化物の背へ乗り移り、同時に引き金が引かれる。さきほどと同じ手は喰らわないと告げるかのように犠牲になった同類と人間めがけて殺人音波が放たれる。進でも流石に音の速度を回避するすべがないのか防御の姿勢のように剣を盾のように体の前に引き寄せる。

進は私と大蝙蝠たちの想像を絶した。そのまま虚空を剣の刃ではなく、刀身の腹で空気をかき乱す様に円を描き振りぬく。すると周囲のモノたちを拒絶するかのように空気が外へ広がり、暴風が蝙蝠たちの体を激しく打つ。

生み出された暴風が大蝙蝠たちが発した超音波すらかき消し、その突風を受けて大蝙蝠たちは四方へ吹き飛ばされる。

「それは人に戦う術があったからです。でも生半可なモノでは彼らには勝てないのも確かです」

吹き飛んだ一体は建物へ激突するが、さらに飛来してきた長い黒い棒に縫いとめられる。飛来物の正体は黒い大剣。彼はまだ滑空状

態だったが懐のホルスターから銃を、ハンドガンを引き抜くと空からたたたき落とされた哀れな飛行生物へ引き金を引く。放たれた弾丸は面白いぐらい大蝙蝠たちの頭へ的確に潜り込み、彼らを絶命させた。

「現代兵器は有効です。でもそれがない大昔は大変だった。でも生き残ってこれた」

目は進のことを捉えつつ、キチンとハジの言葉にも耳を傾ける意識はあった。彼の言う通りだ、彼らが何百年も前からいたならとっくの昔に人類は彼らによって支配されていてもおかしくない。彼らの圧倒的な力に人は抗うことができたのだ。私は吸血鬼という存在に押さえつけられ、恐怖してきたために、そんな簡単なことにも気が付かなかった。いや、あえて気が付かないようにしていたのか・・・

「まあ、あの人は特別ですけどね。普通、一人で魔族とは戦いませんよ」

元は十五、今はたったの5体。あの数での劣勢をものともせず、未だに無傷のこの男は一体なにものだろうか？人は悪魔、いや魔族に勝てるといっても、ここまで立ち回れるのか？

「ハジさん、あの人一体なんなんですか・・・」

「詳しいことは存じません。あの人はソドムに来たのは一年くらい前でしたから」

進は息も上がらず、大蝙蝠たちと戦っている。だけども彼らとの戦闘に飽きたと言うような溜息を一つ上げる。それも首を左右に回旋させるアクションを同時に。声はないのだが体で発した言葉があった。秘められた意味は、確かな落胆と嘲り。

それに激怒するかのように猛スピードで進に突撃する大蝙蝠たちは彼に向って大地を砕くほどの音波の攻撃を発射すると、すぐに空中へ舞い戻る。その見事なヒット・アンド・ウェイ攻撃についに人間を破壊したと彼らの間に安堵が広がってしまった、彼らの周りに有った緊張の糸が切れていた。

「彼は敵に容赦がない、迷いなく敵を切り裂き、銃は無慈悲に命を奪う」

彼らの希望を打ち破るが如く、粉塵な中から黒い影が飛翔し、彼らの元まで１５メートル弱を飛ぶ彼らに肉薄する。黒い影の紅い瞳が彼らを捉える。

「黒い髪に、紅い瞳の男は笑いながら、銃弾の雨を雲ごと吹き飛ばし、嘲笑を上げて敵を屠る」

呆然とした彼ら、大蝙蝠たちの背中を飛び乗ると間髪いれずに銃弾を叩き込み、それを四回繰り返すが蝙蝠たちは諦めたかのように受け入れてしまった。

それは進のスピードが異常なこともあるが、彼らはもしかしたら本当に諦めたのかもしれない、生きることを。最後の一体、初めに喋っていた司令塔であろう蝙蝠には剣を突き刺し、苦悶の声を上げる敵に邪悪な笑みを浮かべる進。

「その邪悪の化身と相対した者たちは語ります、魔王がいたらあんな奴だろうと」

轟音が轟く。空に飛びまわるはずの蝙蝠が、地を這う人間に地面に引きずり込まれた音。乾燥した地面は土煙を噴き上げて、血にまみれた地に被さる。

「まっ！あだ名広めたの、僕なんだけどっ！内緒ねっ！」

最後のは聞かなかったことにしたい。

「・・・聞こえてるぞ」

何か炸裂する音とともに、あうっ！と隣で声した。悲鳴の方向を、私は絶対見たくない。

煙幕が消える。そこに地獄が展開され、そこに勝利者が剣を敵に突き立て、不敵に笑っている。ハジの話を聞く限りあまりに突拍子ない話だったが、これを見れば納得する。

化物の血の海の上で、敗戦者の上に靴裏を乗せ、勝利に頬歪める姿は確かに魔王。

だが、その姿に恐怖を感じない・・・なぜだろう？

「終わったな、それにしても今日はただ働きが多いな・・・」
「もしよかったら、いくらかお支払いしましょうか?」
私は彼の疲れ、困ったような顔に肩の力を抜けた。この人、どこかズレてる気がする。今の彼は魔王などではない、ただの疲れきった青年だった。
進は私の申し出にかすかにほほ笑む。
「それはいいな、じゃあ、契約成立だな」
「サインとかは・・・」
私たちはどこかで安心しきっていた。だから、

「いや、そんなものは必要ない。死んでもらえるかな、人間」

唐突に現れた第三者に気が付かなかったのか。
進の真後ろに現れた男はゴミを払うかのように左手の甲で打ち払う。それは進の右側頭部に直撃、防ぐことすらできず、左に吹き飛ばされて進行方向の民家に激突する。あまりの威力ゆえか民家は倒壊し、進は崩壊に巻き込まれた。
「し、進さん!!」
「撫子」
ビクっと体が硬直する。進が吹き飛ばされた所へと駆け出そうとする私は一声で停止する。心臓すら止まった錯覚に襲われる。
見違いようもないあれは養父、ドレイク・V・ノスフェラ。来たのだ、彼が直接。私を捕まえるために。
低音で紡がれる声はたしかに優しさを含んでいる。だが、違う。ガチガチと歯が恐怖で振動し、体全体に震えが走る私を優しく迎えに来た父親の像。だが、そこに笑顔はない。吊りあげられた口と、怒りに満ちる目が語る、私から逃げ切れると思っていたのかと。
「今日はパーティーだと、言ったはずだ」
「か、彼はただっ!な、なにも知らずに・・・助けてくれ、たっ!・・だけでっ!!」

「ああ、そして死んだ。お前のせいで」
「！！！！」
言葉のナイフが私に真実を告げてくる。
殺したのは、撫子。お前だ。
そうだ。私が、私を助けたりしなければ・・・。判っていたはずだ、撫子。いや、どこかで私は救いを求めたのだ。それがどんなに許されないことか理解しながら。
「だが、仕置きはいい。もう開演の時間なのだ。急ぐぞ」
いつのまに居たのだろうか、高級なセダンが私の横に停車していた。運転手がドアを開ける、魔窟への扉を。
私はそこに操り人形のように吸い込まれる。養父は私の隣にすでに乗車していた。いやそんなことはどうでもいい。私はまた逃げようとしたのだというその事実が私を苛む。
車が発進する。遠くなるあの場所を振り返ることはできない。その資格はないのだから。

そのまま車が向かったのは、二日前の狂乱の会場。
私はされるがままに紅いドレスを着せ変えられる。ドレスは血のように紅いロングドレス。いつも着用する清楚感とは間逆で、どこか異様で、誘うような淫靡さを纏っていた。
鏡に映るそれは瞳は光を失い、どこか人形にも見えた。これは私のはずなのに
「撫子、準備はできたようだな」
横でほほ笑むドレイク。今日の彼は何かが違う。いつもの自分なら絶対に気が付いていただろう、それにも私は気が付くことはない。この養父が笑った姿を見ることは多いが、本当に笑ったのはこれがはじめてだったことにも。
「お前を“飼い”始めてから17年。思えば長かった」
彼に引きずらる様に手を引かれ、強引に会場へと連れられる。
「この間に生じた苦労、屈辱、そして空腹感は耐え難かった。だ

が、それも終わりだ」
　前回と同じホールに辿り着く。ドアが閉められていて中は見えない。その秘密を養父が暴くように扉をあける。扉の奥はいつものように客が集まっていた。が、雰囲気が違う。静か過ぎる。
　そのままホールの中央へ。世界の中心に立つ私と養父。まるで劇の主役だ。
「皆様、お待たせいたしました。ついにこの日を迎えました」
　主役は養父だ。だが、ヒロインが足りない。
「私の手により育て上げた娘、撫子を“喰らう”日が！」
　静寂が一気に歓喜へと変わる会場。事態を把握できない私。だが状況を頭が段々に理解してゆく。
　理解し、歓喜した。
　やっと、やっとだ。この日のために生きてきた。やっと終わるのだ、やっと。
「何を笑っているのだ？撫子」
　養父が最高に面白い珍獣を見つけたかのような笑顔で私の顔を覗き込み、聞いてくる。
　この場に学校や社会での自分を知るものがいたとしたら、口を三日月のような形にし、目を爛爛と見開き涙する私を見て、悪魔に取り憑かれたとでも思うだろう。
　だが、私は正常だ。心から望んでいる。血を一滴残らず吸われ尽くし殺されることを。溢れてくるのは歓喜のみだと言わんばかりに口を開き、自暴自棄に言い放つ。
「私はこの日のために生きてきた人形です。この日を迎えたことを喜ぶことになんの疑問がありましょうか」
　やっと終わるのだ。やっと死ねる。

４へ続く

3、魔王がいたらこんな奴（後書き）

誰か、空中戦闘の見本になるような小説をおしえてくださーーーい！

4、化物たちの舞踏会

4、化物たちの舞踏会

ふざけやがって。

夜の森は野獣の宝庫だが、この森にどんな猛獣が住み着いていようが今夜は恐怖で出てこないだろう。

今夜は雲ひとつない月明りがさす夜だが、この森はそれすら寄せ付けぬ宵の色。

人の目が利かない闇の中を紅(あか)い光が疾走する。

それは爛爛と輝く二つの瞳、瞳の保持者は先ほど聞かされたふざけた話が頭の中で再生される。

（ドレイクは数百年生きた古い吸血鬼でしてね。彼はその長い年月の果てで、ある趣向を考えたようなんですよ。ん～、もしかしたら暇だったのかなぁ？）

森を駆け抜けること数分、考えの最中を邪魔するように赤い目をした黒服の男たちが待ち構えていた。人数もそれなりの量を拵えてきたようで赤い光がちらほら見える。

瞳たちはこの暗闇の中で俺を完全に捉え、口元には余裕の笑みすら浮かべている始末だ。多少、夜遊びができるだけでこの体たらくを見せた連中にはキツイお灸が必要らしい。

俺はお灸など常備していないので、変わりといっては難だが剣と銃を引き抜く。

（彼らにとって人の血というのはごちそうですが、味は千差万別らしくてね。おいしい者に出会うことはとても珍しく、難しい）

甲高い鉄がぶつかり会う音と獣の咆哮の如き銃音が森に木霊し、支配する。

（ならば作ればいい、と考えたようなんです。芳醇(ほうじゅん)で、爽やかな

口に広がる芸術を。だが、人工物（クローン技術）モノは味気ない、やはり天然ものが一番イイ。なにより甘美な味わいがする血を持つものはいつの時代も完璧と呼ばれた魅力ある人間たちだったことが多かった。）

黒い陰影が駆け抜けるたびに襲い掛かる赤い目の光は暗闇でその光を消してゆき、静寂であった森は唸る轟音と破砕音と悲鳴が鳴り響く。

いくらか時が過ぎた時には再び静寂の戻った森に赤い光は無くなっていた。いや、二つだけ紅い光が残っているだろが・・・

（作り上げるというならば若くなくてはならない。ただし、無垢であり、なお且（か）つその者に自分に歯向わないように人格形成を促（うなが）し、従順になるよう恐怖を理解できる年齢で、かつ女性。ならばどこからか将来性のある人間の子供をさらい、完璧な人間へと成長させ、大人と子供の性質を併せ持つ１０代後半になるくらいまでに理想の存在への育成をする、いや飼育する）

殺戮が行われた森を抜けると唐突にまばゆい光で包まれる屋敷が姿を現す。

（そんな趣味の悪いターゲットに選ばれたのが九重　撫子さん。当時６歳だった彼女は両親を無残に目の前で殺された挙句に連れ去られ、そのままドレイクの見立てどおりの娘になっている。）

目ざわりなほどに光り輝くその屋敷の扉はなにか結界のようなモノが貼ってあって通行禁止になっている。癪（しゃく）だが、アイツの推奨した登場の仕方しかないようだ。

（そんな彼女が今夜のパーティーでついに養父さまの認められ、食べられてしまうと情報が入ったんですよ。ああ、１０年以上を恐怖と孤独で耐え続けた女の子が、すべての希望を根こそぎ奪い取られ、ただ、ただ喰われる）

劇的な登場のパーティーは嫌いじゃないだろうと、乗ってやることにする。

（キーッ！そんな理不尽、許せない！　と立ち上がるものは誰ひとりいない。なにせ、彼は政財界のビックネーム。彼を倒せば人間

の世界にも裏の世界にも大変な影響が起こる。だから誰も手を出せない。なによりそんな遊びをしているなら人間に害は少ないて済みますし～。あ～あ、すべてあの吸血鬼の想いのまま・・）

四方形の建物の屋根にはなぜガラス張りの天井が多いのだろうか？　真上から丸見えだぞ？だが好都合だ。

（そんなの、許せないと思いません？　美少女は世界の宝ですよ？）

終始一貫してふざけた口調だった情報屋の情報どうりのようだ。あの髭オヤジが高笑いして、なぜかあの女は狂ったような笑みを浮かべている。

（そんなのぶっ壊してやんよとか、思いません？）

「ああ、ぶっ壊してやるよ。胸くそ悪いからな」

俺は強化ガラスを蹴り破り、重力に身を任せて会場に登場した。着地までの間に、俺は会場の主役になっていたようだ。着地と同時に3人の黒服、警備員が人外の力を持って取り押さえんと正面から飛びかかってくる。

俺はすかさずに右肩から飛び出している剣の柄を掴み、右肩から左真横に抜刀、いや抜剣。

黒い軌跡に沿う形で急激な方向転換を強いられた人ならざる警備員たちがただの肉塊になりながら吹っ飛ぶ。肉片と血飛沫は近くで棒立ちしていた客らに降り掛かるが彼らは微妙だにしない。未だに事態が整理できていないみたいだな。

あまりの高速で締めくくられた前座のせいか静寂が会場を包み込んでいた。おっと、これはイケナイ。楽しい舞台で需要なのは盛り上がりを誘発するユーモラスと小粋な冗句、これは必須だ。

「会場の皆々様ぁぁッ！　お待たせいたしました」

ふざけた口調で開幕の宣言の途中に、俺は薄気味わるい笑顔を張り付けながら驚いている撫子を見つけた。

予想どうり死ねると判って喜んでいやがったな、あの女。まあ、あいつは次いでだ。

「これより始まるは終幕の宴。人数限定！　種族限定！！世にも薄気味悪い解体ショー」

「今夜は殺戮舞踏会（吸血鬼狩り）だ。まあ、後悔しながら最後を楽しんでくれ」

開幕宣言に俺は静寂を打ち破る銃弾を目の前の客の男にぶち込む。男が無残にも殺害され、やっと生まれた混乱は電波し、会場は大盛り上がりを魅せた。さあ、逃げろ逃げろっ。怖い魔王が首を刈るぞｗｗｗ

自らが逃れんがために、倒れた者すら踏みつけ、我先に脱出しようとする客たちが統一性皆無の縦横無尽に行き交う会場で、俺は目標を直視する。

その会場で唯一、俺を真っすぐ睨む男を。

あの不意打ちくらわせてくれたクソ吸血鬼、テメェだけは許さねぇ。お前が見下してる“人間の”恐ろしさを判らせた後で、後悔させてやる。

と、思っていたが、その前に俺に挑戦してくる空気の読めない奴らがいるようだ。吸血鬼なんて強力な化物に簡単になってしまったために、自分が“強い”と、他人より優れていると勘違いしてしまった哀れな半端モノたちが地を蹴って襲い掛かってきた。

視点回帰

――――どうして。

黒いすべてを拒絶するかのような横一線が閃（ひらめ）く。無謀なタキシードの上客が原型を留めることなく上半身を粉々にされた。

――――どうして。

その黒い線に触れた者たちは体が体であることを否定されるかの如く、二つに分断される。

――――どうして。

その後も彼に立ちはだかる者どもは数多くいたが、彼を止めるこ

とすらできず無残な姿に変えられる。ある者は斬断され、あるものは体に風穴が開通し、ひどい物は肉片となってしまう。

――――生きていてくれた。それだけでよかった。よかったのに。

それはまるで嵐、彼を阻む全てを粉砕する凶刃だ。拒絶の旋風は未だ衰えず、苛烈に放たれる凶弾は強風の煽りを受けたが如く吸血鬼たちの肉体に突き刺さり、時に苦痛を、時に死を与える。

その危険を認識したほとんどの客たちは逃げ惑い、外に逃げ出す。さすがに身体能力が高い吸血鬼のためか会場から早く人気は失せる。

全員で襲いかかればいい、と考えた者も中にはいただろうが、いかに夜の支配者、吸血鬼といえど全員が戦闘に特化している訳ではない。技能がなければただの一般人なのだ。なにより吸血鬼を一刀の元にいとも容易く殺害する常識外の人間の放つ殺気が凄まじいことも決め手の一つだったのだろう。

――――そのまま逃げてくれればよかったのに！どうして？なぜ？

今まで客を逃がしていた警備を任されていた黒服の吸血鬼たちがようやく進へと向かう。

さきほどまでの手心のないもの達ではない、正真正銘の戦闘に特化した者たち、ドレイクの親衛隊だ。手に握られているのは警棒のみ。だが彼らの並々ならぬ力で振るわれるそれは人体を軽く肉片に変えるはず。その数４。

彼らは進にそれぞれ別の方向からオリンピック選手もびっくりのスピードで襲い掛かる。

進は彼らに銃弾を放つようなことはせず、あえて大剣――――イザナミを肩に担ぎ、堂々と仁王立ちで迎え撃つ。唇は皮肉に歪められている。

彼らは連携を持って襲撃をかけるために散開、一人目の巨漢が進に真っすぐに突進の勢いのまま打棒を打ち付けた。大剣よりもリーチが短く、切り返しのスピードも上。だというのに進はその速度に合わせて大剣でそれを防ぐが凄まじい勢いだったためか進も両手を

持ち手に使い、若干仰け反る。だが、それはフェイント。進の両手がふさがると同時に左右真横と真後ろに残りの三人が現れ打棒を振り上げた。進は一人目の競り合いの最中で動くことができない。三方向からの攻撃を防ぐ術はない。

はずだったのだろう。だが、三つの攻撃は空を打った。

目標であった進はそれまで競り合っていた一人目の巨漢をそれまでの競り合いが嘘であったかのように一瞬で前方へ吹き飛ばし彼の位置に身を置く。武器が空を撃った驚きに身を固めてしまった他三人の隙を振り向きざまの勢いを乗せた鋭い横一閃が放たれる。あまりに鋭さだったためか上半身と下半身が断たれることなく、その場で崩れ落ちた。

会場は再び静けさを取り戻す。会場は赤い色がメインになった装飾がなされていたが、現在はさらに赤黒い血で拭き点けられ、肉片が飛び散る地獄絵図状態だ。

今まで数十人がひしめいていた会場で立っている生物はたった3体。私と進と、私の横で手を叩くこの人だけ。乾いた拍手が広い空間に木霊する。

「ふむ、なかなかに面白い前座だった」

やる気のない間延びした拍手を鳴らす養父――ドレイクだけだ。

「それは良かったよ。オ・ト・ウ・サ・ン」

「人にしてはなかなかやる。騎士団の人間か？それとも何処かの魔術結社（マジック・キャスバル）の手の者かな？」

「生憎と孤独を愛する一匹オオカミでね。それに団体行動は好きじゃない。仲間意識にやられて性根が腐りそうになるんでね」

まるで友人同士のように気さくに話す二人だが、違う。二人とも目が笑ってない。養父に至っては目が血走っている。怒りをこらえているようだ。進は不思議と楽しそうなのだが、戦闘が門外漢の私にすら感じる殺意を全身から放出している。

この二人の間に割って入るものはいない、というか関わることを拒絶したいと感じるはずだ。だが、私には言わねばならないことが

あった。
「どうして・・・です・・か」
「あぁ？聞こえないぞ」
「どうしてですかっ！！」
「どうして、来たんですか！？生きてくれていたのは嬉しいっ！どうして逃げなかったんですか！！」
私はなぜか涙を流して叫ぶ。答えをどこかでわかりながら、でも叫ぶ。なにより私は！
「助けてくれなくていいんですよ・・・！死にたいんですっ！これでやっと終われるんです。こんな最低の、皆を騙して生きてる女が生きてちゃ・・いけないんですよ」
「あ？」
「私のせいで死んでしまった人がいるんです。私のせいで・・お父さんと・・・おかあさんも・・。私、もう辛いんです！もう、生きていたく・・なんて・・ない・・・」
涙がボロボロと零れる。私が選ばれた理由と動機は養父から聞かされていた。完璧を求める理由も。最初は反発できただろう、だができなかった。生きたい、死にたくないと願っていたためだろう。
そのせいでどれだけの関係のない人たちが犠牲になった。私が始めに拒んで・・・いや、私がいなければどれだけの人が助かったのだろう。
そう思うようになってから私は死を望むようになった。それだけを目標に、喰われるその日を夢見て生きるようになった。
うつむく私は視線を感じる。この粘つく感覚は養父だ。養父は私を見て笑っている、そんな感じがした。
「残念だったな、少年。撫子はこう言っているぞ、助けなんていらない、と。損をしたようだな」
「本来なら撫子には純粋に心の奥底から私のために命を差し出すくらいにはなってほしかったのだが・・・まあ、十分だ。この娘は人間ではよくできた存在になってくれた。これなら甘美な味わいに

なってくれている」
養父は私の顎を上げ、顔を吟味するかの様に顔を接近させる。彼の紅の瞳が私のすべてを見透かすかのようで視線を背ける。が私の心は筒抜けていた。
「彼を助けてほしければ判るな、撫子」
彼の求めるのは純真な心、私に完全な屈服を、本心から身を捧げろ、と。
それだけではない、進にも謝罪を求めるはずだ。彼は折れてくれるだろうか？と視線を彼に向け――――
「・・・うまいな、この肉・・」
小さな丸い形のテーブルに腰かけ、骨付き肉に夢中になっていた男がいた。
「進ィィィッィィィィィィィィィィィィィィィィンっ！！！！！！！！！！！」
私は生まれて初めて怒りを爆発させる。感情が爆発した感覚を理解した。もうこのまま世界の中心をぶっ壊してもいい！もう壊れろ！生まれてはじめて理不尽な怒りから大声を上げた。憤激と激怒が悲愴感を吹き飛ばし、血管が引き千切られる感覚と目が吊りあがるのがリンクする。
「なんだ、ほしいのか？」
「違ぁぁぁぁぁぁぁぅぅう！！」
なぜか目から涙が出てきた。ドレイクに至っては呆れた表情となにか不思議な生物を発見したような目になっている。
「泣くなよ・・・、やるから。あっ、もう無い」
なんだその可哀想な泣きじゃくる子供に疲れ果てた父親みたいな表情はっ！！！しかもお肉ないっ！何よりこれまでの会話がぶち壊された！　しかも、あの山もりに積み上げられていた肉を全部！？
「ゲップっ。まあ、お前らの話しがあまりにつまらなく、どうで

もよかったんでな」
「聞いてください！私は」
「お前、まだ金払ってねぇだろうが」
「はい？」
お金？
「お前は俺と契約しただろう？」
「け、契約なんて」
したか？したっけ？しましたか？
疑問が疑問を呼ぶ。私なんだか混乱してきた。そこに入る横やり。
「ならばその金額を払えばいいのかね？」
養父はもう疲れ初めているのかもしれない。言葉に段々やる気が欠けてきている。頭痛すらあるのか、人差し指でこめかみを押さえている。
だが、このまま行けば進は助かる可能性も・・・
「それは無理だ」
可能性を破壊する天才なんですか、あなたは。
「契約内容は、ドレイク、あんたの殺害だ」
人差し指で狙いを定めて目標を指定する進。
「まさかこれから殺す相手から金はもらえねぇよ」
クツクツ、と笑う進。何が楽しいのだろうか、あなたは自分から死刑台に飛び込んだというのに。
養父の顔が怒りの表情に変わる。ここまで人間に、下等生物と見下してきた存在にコケにされたことはないのだろう。
「それに女。だいぶ勘違いしているようだから言っておくが」
「俺はお前を助けにきたんじゃない」
進は腰かけていたテーブルから立ちあがる。
「俺に不意打ちかけたクソ野郎に“人の恐ろしさ”を教えに来たんだよ。残業代も出ないのにも関わらずだ」
最後の一言を閉じるが如く、俊速でコートから銃を引き抜き、ドレイクに向って引き金を引く。

刹那で相手に届き、体に無理やり異物が吸い込ませる兵器が轟音を掻き立てた。

だが、放たれた銃弾はドレイクの肉体に届かない。銃弾は彼が顔を覆うようにかざす手の指と指の間で撃たれた銃弾三発を挟み、加わっていた螺旋回転を一瞬でかき消す。

高速で射出された弾丸指先で止める存在。吸血鬼とはどこまで常識はずれなのだろう。

「私を殺しにきた、ということか。愚か――」

愚かな、と発言するはずの彼の頭上に落ちてくる影がそれをさせない。顔を手で覆い、見えなかった彼とは違い、私の位置からは一連の流れが目視できた。

進が銃を使用した瞬間、空いている左手で“それ”を掴み、ドレイクの頭上へと投げつけたのだ。

“それ”の正体はテーブル。投げつけられたテーブルは放物線を描いて目標へと迫った。

でも、やはりゴミを払うが如く振られた腕により粉砕された。つまらなそうなドレイクの目が見えた。曲芸の終わりか、はたまた・・・。だが、次の芸が突如、出現する！

粉々にされたテーブル（木製）の影から黒い柱が突出。

黒い柱がドレイクの胸を貫く。黒い柱――大剣イザナミがその存在を主張する。

進は見事なまでにドレイクの懐に潜り込み、剣の中ほどまで深く貫いていた。

「愚かはどっちだ？易い手に引っかかりやがって」

進は銃弾が防がれることなど判っていた。実際の目的は顔面狙い視界を若干奪い、計算されたタイミングで放ったテーブルでさらに行動に制限、さきほどの吸血鬼たちを凌駕するトップスピードで駆け抜け、剣を突き立てるため。

大剣が生えた場所はやや中央より左胸部、心臓の位置だ。人間でも吸血鬼でも心臓は損傷すれば死に直結する重要器官。脳と心臓は

吸血鬼といえど例外では――――

「で、終わりと思うかね？　やはり愚かなのかね？」

ない――――はずなのに。ドレイクの浮かべる表情はない、無表情だ。だが、決して瀕死の者がする顔ではない。

ドレイクは腕を乱暴に払う。それを顔面に受けた進は右真横へ、それこそ弾丸のように吹き飛び壁に激突する。

振り切る過程が見えないほどの払いに込められた力を表すようにコンクリート性の分厚い壁は粉砕され、粉塵が撒きこる。

ドレイクはその粉塵へ向かって胸に刺さったままだった剣を引き抜くと、左手で逆手で剣を握り込みそのまま、振りかぶり、のち投擲。投擲された剣は風圧で煙幕を払いのけ標的が出現、的である進へと襲いかかる。

間一髪、首を左に捻った進は剣をギリギリ回避するも、掠めた肩から血液が噴き出す。顔をしかめる進からは焦りはないが、失敗した自責の念を感じる苦笑が入り混じっている。

「ハッ、言い返せないな、吸血鬼なんて化物に常識を望んだことが間違ってたよ」

「なら愚かさを噛締めならが死ぬがいい」

ドレイクは進の命を奪うためにゆっくりと歩き出す。絶対的な力と恐怖を纏った貫禄を引き連れて。

「やだね、最後ぐらいは自分の好みのロケーションが・・いいんでねェ！！」

歩みを阻むには些か押しの弱い銃弾が放たれる。弾丸を素手で止める動体視力を持つ吸血鬼に銃など。と思われたが、狙いが違った。

目標は天井、そこにぶら下がるシャンデリア。

付け根と補助具を破壊され、無駄に豪奢で巨大なシャンデリアは重力に引かれ地面へと激突する。その質量と落下の衝撃で起こった破壊は地面を砕くのみならず視界を奪う煙幕を発生させる。

「キャアッ！！」

私は地面の振動と粉塵をまともに受け、立っていられなくなるだけでなく、浮遊感が襲いかかる。私は地面に吸い込まれ――ずに、そのままあろうことか会場となっていたホールから飛び出し、長い廊下へと出てしまった!?そんな馬鹿なっ！

答えは簡単。吹き飛ばされたわけではなく、進が私を左脇に丸太みたいに抱え込み、廊下を激走しだしたためだ。

「おいっ！尻(けつ)っ！」

「尻ってなんですかっ！　せめて名前で！　名前で呼んでくださいっ！」

現在の姿勢は荷物みたいに抱えられているために頭は後方の位置にあるため進からは私の顔が見えない。だから視線的に私の尻・・・いえ臀部(でんぶ)に向かう形なのは理解するが、人から尻と呼ばれたくはない。それに私・・女の子・・なのに・・。

そんな私の心の叫びを察することなく、速度を落とさずに息切れもせずに私へ質問してくる。

「心臓って普通、左胸に収まってるもんだよなっ？」

「え？　はい。心臓は左右の肺の間“縦隔”に収まって、確かに左に。真ん中よりやや左気味が正確ですけど、人によっては・・・」

確かに中央よりやや左にあるというのが常識、例外も実際に奇形や構築の違う者は確認されているが、それは人間の話。吸血鬼は根本的に何か特別なのかもしれない。

「右にある？」

「いや、たぶん違うな。そんな次元の話じゃないな」

聞いておいて自己解決ですか・・・

「あいつを剣で突いた時、全く手ごたえがなかった。肉をえぐった感触すら無く、まるで空気を切ったような・・・」

ただの肉の塊では動物というものは構造学的に動かない。そこに神経、臓器、なにより栄養と酸素、血液などがすべてが関わってこそ生物というのは動くのだ。特に血液を体に巡らせる役割の心臓は

古くから魂の代名詞とされるほどの特に重要な中腔器官だ。
「それにな、剣を引き抜いた後にあいつが血を見たことあったか？俺の剣は少し特殊だが、血が全く付いてないってのはオカシイだろ？」
確かに進の大剣はその幅だけでなく厚みも相当ある。そんなものが貫いた時点で血を見れるはずだ。血管を傷つけなかった？いや、無理だ。大動脈に当たらりこそせずとも細血管と毛細血管などが体中を巡っているのだ。
私は考え沈黙していたが、おもむろに進が口を開く。
「吸血鬼ってのはある意味“呪い”らしい」
「呪い？」
「殺されることも、死ぬことも許されない。この世と血に束縛の呪いを受けて誕生し、永劫報われることがない存在」
進はまるで誰かの言葉をそのまま言っているような口調で説明する。言葉に悲しみと、遠いなにかを求めるような声で。
「強すぎる吸血鬼は、魂ともいえる血、それ自体に呪いを刻まれるらしい。しかも、そういった奴らは体の構造根底から違う。たとえば」
「心臓がない？」
「いや、それはない。奴らにとって血を循環し、送り出すという意味で象徴的な存在、魂だ。それが無いってことはありえない。だからこそ、そこが破壊されれば吸血鬼は死ぬ。その呪いを吸血行為中に血液中に送り込まれただけの倦族なんかは肉体構造なんて変わらないから脳を破壊されるか、首をかっ飛ばせば、絶命はする。だが、元から吸血鬼の奴は呪いの中枢である心臓を破壊しないと死なない」
この人と知り合って間もないが、こんなによく喋る人ではない気がする。もしかしたら動揺しているのかもしれない。この説明も自分自身の知識の確認のために行っているふしがある。
だが、同時に気が付く。ここまで異様な知識を多く持っているの

だろうか？

「・・・どうしてそんなに詳しいんですか？」

「・・・昔、吸血鬼と戦ったことがあってな。その時、聞いた。ま、ボロ負けしたがな」

進の表情は見えない。その声は喜びも悔しさは感じられない。あるのは深い悲しみ。でも、それは一瞬で消えたが、その雰囲気に私は何も聞けなくなってしまった。

その表情に見惚れたのかもしれない。

「だから、判る。アイツは雑魚だ」

「雑魚って――」

絶句しかけた。あれだけの存在を雑魚とは・・・。

言いかけた言葉は私の視界が捉えた“点”を捉えて止まった。点は段々大きくなる。いや、違う。あれはっ！？

「進！っ前！」

「あん？　お前的に前？俺的に前？　どっちだ？」

「私から貴方の前は見えません！！」

泣きたくなるようなツッコミを入れている間も“点”は・・・いや“柱”は猛スピードで接近してきている。

進も後方を確認したようで舌打ちし、顔を若干引き攣らせる。進は速度を維持したまま右横にずれると、長く太い棒が真横を通り抜けていった。

私たちに数本の点が迫っていた。たぶん屋敷の装飾品である柱だろう。ドレイクはそれを投げ付けているのだ。

次々と放たれる支柱を逃れるべく、速度を上げて走り出す。その間にも、多くの大理石の柱が投擲され、各所に突き刺さる。

縦横無尽に駆け走り、柱を避ける進だったが徐々に疲れが見え始める。柱の猛攻は収まらず、なによりこの廊下は長いためだろう。

「おい、どんだけ長いんだ！この廊下っ！」

この屋敷は東京ドームも入り切りそうな広大な敷地の中に建てられているこの来客用のホールは巨大な内部構造になっている。大抵、

この場所はパーティや晩餐会だけに使われていた。地下室までであるという話を養父とお客の会話を聞いたことがある。
だが、永遠に続くというわけでなく、もちろん終わりは来た。
柱を避けること数回、やっと広い空間、玄関とは反対にある広いロビーに出た。
「・・・ここでいいか」
「戦うんですか？」
ここを戦場と決めた進に私は震えながら尋ねる。あんな化物と戦うなんて・・・
「言ったろうが、俺はあいつを殺りにきたんだ」
何度も決意を聞いてくる私に若干、怒り気味に返事を返してくる。でも引けない。
「・・・勝つ方法、あるんですか？」
「あ？」
「あんな強い化物に！勝つ方法があるんですかっ！　弱点の心臓もどこにあるかわからない！どこから来るかわからない瞬間移動もできるのに！？」
「はぁ？瞬間移動だぁ？」
「明確には瞬間移動では、ないのだがね」
私と進以外の声が急に現れる。声の発生地点は――――進の真後ろ。
進は身を屈める姿勢をとると、彼の頭があった位置に手が現れる。進がそうしなければ彼の頭から手が潜り込んでいただろう。
低く屈んだ姿勢から左回りに旋回し、斬撃を繰り出す。剣線はドレイクの胸元を横一文字に裂いた。現に体が二つに分断されている。が一秒ほどで切られた部分が繋がり、元どうりになる。衣服にすら傷が付いていない。
「くそっ！」
「空間転移、というものだよ。まあ、そこまで違いはないのだがね」

次の瞬間、ドレイクの周囲の空間がぼやけると彼の姿を見失う。忽然と姿を消したその様はまさに空間転移。彼は次の瞬間、いや、それ以前にもそこに転移していたのだろう。ドレイクは私の目の前にいた。

「っ！！」

「声すら無くす事はないだろう、撫子。お前はこれを何度も見てきただろう」

ドレイクは口元を釣り上げ、宣告する。

「お前は私から逃げられないのだ。それを判っていながら、あんな小僧に助けを求めるとは」

首をヤレヤレとでも言いたげに振るドレイクに振りかかる罵声が一つ。

「どんな小僧だっ！　クソジジイっ！」

罵声とともに死を誘う黒い剣線が高速の速度で生まれる。頭頂から股間まで縦に切り裂かれたドレイクはパックリと二つに裂ける。

しかし、血を噴き出すどころか、体の中身をさえ見せず、ビデオの巻き戻しのように再生してしまう。　再生したドレイクはすぐさま背後にいるふてぶてしい小僧に裏拳で返答。

カウンターで打ち込まれた鋭く、重い裏拳を避けることができないと判断したのか剣の腹で防御する進。が、打ち付けられた力は凄まじく広いはずのエントランスを横断するかのように弾き飛ばされ反対側の壁に叩きつけられる。

衝撃に内臓をやられたか、無様に血を吐く進。それと対比するように優雅に余裕を持って振り返るドレイク。

だが、両者とも表情は怒りと嫌悪に満ちている。戦意はどちらもみなぎっている。

「まるで力量差を測れない、下品な小僧のことだよ」

「ハっ！　小娘一人いじめて悦に浸ってる自分を棚に上げるなよ、オトウサマッ！！」

こちらも負けじと口から溢れ出る血を腕で拭いながら口を減らす

ことはない。
大剣を再び握りしめ、語尾を引き連れて部屋中央にたたずむドレイクの下へ駆けだす。
進はすごいスピードで弧を描くようにドレイクの左側から剣を水平に構えて肉薄する、狙いは目に見えて判る、足だ。
足を薙ぐ斬撃はかわされることは無く、受け入れられた。だが、例に漏れずに切り裂かれることなく蛇口から出る水を切ったかの様に剣は左に素通りし、水が流れ続けるが如くドレイクの足はすぐさま繋がり姿勢を崩すことすらできない。
だが、それは進にとって判り切った結果だったようだ。進は流れる体を無理やり戻し、右側股関節から左肩を斜めに切り裂くため剣を雑に振り切るが、結果は同じく通り過ぎて終わった。
その死に体へ向かってドレイクが右拳で殴りつける。
進は顔を無理やり反らし、ギリギリの所で交わす。
放たれた右ストレートからは衝撃波が生まれ、直線上にあった床が削り取られ、進の頬にまるでナイフに切られたかのように傷が走り、血を滴らせる。
それでも怯まぬ進は、素早くドレイクの腹部に向かって鋭い突きを返す。
それすら剣先を彼の左手掌で止められ届かない。逆に、再び右の拳が進の顔面を襲いかかり、寸前で首を傾けなければ死んでいただろう。劣勢は変わらない。
ドレイクの攻撃は烈火の様に放たれ続ける。専門家から見たら目茶苦茶な振りなのだろうが、そこに込められた力はいとも容易く頭蓋を粉砕する凶器の拳、それが残像を引き連れるほどの速度で繰り出される。
進はもう先ほどの余裕はなく焦りの表情で避けることに専念している。それもそのはず、腰や足を使わずにノーモーションからの攻撃なのだ。子供のケンカの様な乱雑な拳のはずなのに、そこに乗る力は一撃で自分の命を刈り取られてしまう威力を秘めている。

だが、一歩も引かずに回避し続けた進に苛立ちが募ったのか途端に大ぶりの渾身の右ブロー。進は左回りに腰を捻り、かわした。進はそのまま必死の形相で体に加わる左回りの力に逆らわず、回転切りに移行しする。ドレイクの右肩から左股間にかけて斜めにイザナミを走らせようとするが、ドレイクの方はヤレヤレとでも言いたげな溜息の後に

「いい加減にしてくれたまえよ」

肩口に触れようというところでドレイクに剣を人差し指と中指を使って挟んで、止められた。

進は驚いたように口を開き、私は目を見開き息を呑んだ。進の今の攻撃は私が見た彼の攻撃の中でも遅い方だったが、指先で止めてしまえるものではなかったからだ。

ここで改めて思う。吸血鬼の長、ドレイクは本物の化物だ。その吸血鬼の伝説に恥じない力と巨大な権力を手にするこんな存在に勝てるはずがないと・・・。

「チッ、クソがっ!!」

悪態をつき大剣を指先から離そうとする進だったが、そこに込められた力が相当のものらしく引きぬくことに手間取る。

なんとかして抜き、今度は先ほどより力を込めて先ほどの回転切りとは逆の軌跡を描かせ、左股間の外から右肩への斜めの斬り上げる。それは進は焦りの感情の表れのようだった。

「見苦しいな、熱くなって」

ドレイクは今度は防ごうとせず、左腕を振り子のように左に振り切り剣を叩いて押し返した。その勢いに負けて体のバランスを崩した進の顔面を掴みあげ、今まで戦っていた部屋の中央よりの場所から左壁際に走り、進の頭部を壁に練り込むように激突させる。

「言葉一つに感情的になり、自分の意見が通らねばダダをこね」

そのまま引きずるように壁際を沿うように歩き出す、壁に埋め込んだ頭部を掴んだまま。

「自分を見てもらえなければ、愚行で人を引きつけようとし」

歩くたびにくぐもった苦痛の声がして、私は瞼を閉じ顔を背けた。見てられなかった。

「そのくせ、苦痛と恐怖にとても脆弱だ」

部屋を半周し、私がヘタリ座る壁際に到着するドレイク。そのまま、今まで引き連れていた進は壁から抜き取り、まるで事切れたかのような彼を開放するが、進は地面に倒れ伏しピクリとも動かない。

「それでいて己より強い者、出しゃばる者に立ち向かおうとする」

私の目の前に立ち、その圧倒的威圧感を放つ吸血鬼がこちらを見下す。

「実に不愉快だ、貴様ら青二才を見ていると不快な気分を禁じえない」

「相手の力量を測れん、貴様のようなガキは特にな」

進はその視線を受けても動かない。まるで・・・

「ふん、死んだか」

恐怖に固まる私はその言葉でピクリと肩を震わせる。そこでようやく私の存在に気が付いたとでもいうようにドレイクがこちらに話しかけてくる。

「撫子、まるであの時の様だな」

「あの、時？・・」

「お前のせいで死ぬこととなった少女のことだよ。いや、そういえばお前はあの瞬間にはいなかったな。持ち運ばせようとも思ったのだが、面倒なので首だけ持って帰ってきた幼きメスのことだよ」

「っ！」

浮かんできたのは、屈託な笑みをした初めてできた友達。あの現実を受け入れられなかった辛い時代に私を本当に救ってくれた少女。

「あの少女もまた私に向かってきたのだよ」

「！！　そ、そんな」

「この私の歩みを止めた挙句、お前を助けてほしいと願いかけてきた」

私はそんなこと知らなかった。私の驚愕の表情が面白いのか顔に

笑みを作り語りかける。
「驚いたよ、私の正体には気が付いていなかったようだが、まさかお前が他人に気を許すとはな。私も調教が足りなかったと思い知らされたよ！ハッハッハッ！！」
彼女は私の事実を知り、危険を承知でドレイクへ立ち向かったということだ。私はあの娘にドレイクが吸血鬼ということも教えていた。その危険性を知らせる意味で話した。誰にも話さないという約束をつけて。
それなのに・・・私のために。そこまでしてくれていたのだ。あんな荒唐無稽（こうとうむけい）な話を信じ、それ以上に私のことを本当に想って戦ってくれていた。あの笑顔は本物だったことが素直にうれしく、諦めることには十分な幸福だった。
「・ろ・・ください・・」
「ん？なんだと？」
「殺して、ください」
今度はドレイクが顔を歪める番だった。それは私が涙を流しながらも救われたような笑顔だったからだろう。それは見方によっては心から身を捧げる者にも見える。
もう未練はない。これほど幸せなことなどない。私は本当の友達を手に入れていたのだから。
私の言葉に満足したのか、ドレイクもほくそ笑む。
「そうか・・・まあ、良いだろう。自分から身を差し出す、これも完璧に育ったというものだ」
私は笑みを残したまま目を閉じ立ち上がる。すべてを許したかのように。受け入れたかのように。
このまま私は死ぬのだろう。だが、もう大丈夫。怖くない、だって私は
「だって、私は幸せだったんだもんっ。って言いたげな顔だな、オイ」

瞼の外から怨念にも似た血の底から響くような声が聞こえた。
ハッとなって瞼を開くと、そこにいつの間にか立ちあがった進がいた。
進は顔を血だらけにして、今にも倒れそうなほどの出血をしながらも立っていた。
首に手を当て、肩が凝ったように首をガキガキ鳴らしている。少し頭を上向きにしているためか黒い髪が垂れ目を隠している。だが、彼の禍禍しいほどの紅い目は怒りに満ちていると確信する。それほど低い声が口から、私が殺されるのではないかと思わせるほどの殺意がホール全体に放たれているからだ。
「俺は映画を途中から見ても、大抵のあらすじは判る人間だからな、よ～く判ったよ」
進、やめて。と言いたかった。だが、彼の言葉は止められなかった。止めてしまえばきっと私は殺される。
「つまり、お前は最高の友達が自分のために頑張ってくれてうれしかった。だからもう、いい。幸せだ。ハッッピーーだ。これで迷わず逝ける」
進は鼻に溜まった血を鼻息で抜く。
「お前、つくずく最ッ高に最低な奴だな」
「どんな喜劇だよ。とんだ駄作だ。アレだね、これが映画でお茶の間だったら視聴者はリモコンをテレビ画面に投げつけて、B級のポルノ映画を上映しだすだろうよ。俺が主人公だったらそんなヒロイン、切り殺すね、きっと」
主人の怒りに呼応するかのように強く振り上げられ、漆黒の大剣が進の肩に掛けられる。
「なんだぁ？あの気味の悪いぃぃ爽やかな笑顔はァァ。もう殺して？ハッハ～。凄いね、イマドキの娘さんは自殺願望旺盛でおられるようダッハハハっ！！！」
見る人が見れば狂っていると思うだろう、だが違う。狂っている

ように見えるだけだ。本当は怒り狂っている。その彼の瞳がカッと見開かれる。

「オイ、小娘ェェ！！！！！ふざけてんのかっ！！なんとか言ってみろォォ！！！！！！！」

「わ、わたしは・・・」

「声がっ！小せえぇ！」

「わっ！私はもうイイんです！」

彼の怒りに釣られるように私はめいいっぱい声を張り上げる。心の檻を破るかのように、心中を吐露するように。

「もういいんです！私が生きてると周りに人が不幸になる！そんなのもう嫌っ！死ねば終わるのよ？こんな最低女死ねば！全部解決するのに・・・！」

「へぇ～、って、んなわけねぇだろうが！！」

「そこの変態はお前を殺したら次の誰かを探すだろうよ。なによりテメェが生きていようが、死んでいようがそいつは人を楽しそうに殺すだろうよ！　なに自分が大層な大義名分を背負った救世主みたいに誇ってやがる。テメぇが死んでもなんにも変わらねぇよッ！！」

そんなの、そんなの・・

「お前はただ」

血管をこめかみに浮かび上がらせた彼の怒声に引かれるように応えようとするが、介入者はそれも止めようとする。

「そろそろ、良いかね少年？いい加減に」

「黙ってろよ、変態フェチ男爵。さびしいからって会話に入ろうとするなよ、空気も読めねぇのか？」

ドレイクもここまでバカにされたことはなかったのか、顔を真っ赤にさせる。が空気を読んだのか彼に襲い掛かることもしない。

進はそんな彼に目もくれずに私だけを睨めつけてくる。

「おまえはただ自分が救われたいだけだろ」

否定できない、実際そうなのだ。でもそれはできない。

「だけど、無理だね。お前は」

「生きたいんだろ？」

心臓の鼓動が止まった気がした。

私がイキタイ？そんな

「そんなことっ！！ないっ！！」

「私は生きていたらいけないんですっ！！死ねば全部終われるって！そうよ、嫌なのよ！生きたくないんです！！」

否定する。そんなことはないのだと。盲目にそれを信じる。死が私を救い、世界も救う。

だが、目の前の魔王は私のすべてを殺そうと木の葉（ことのは）を告げてくる。その盲目に信じる心がなければ、私は現実を受け入れられなかった。それすらこの男は許さない。

「ならなんで、あの路地裏でテメェの友達（ダチ）を助けてた？　本当に死にたい奴が他人を気にするのか？」

「そ、そんなの・・」

当たり前だと否定はできた。でも、本当に死にたい人間は他人や世界のことなど気にはしない。だって彼らは死にたい“だけ”なのだからと頭が納得してしまう。

ダメだ、耳を塞げ、心を閉じろと頭で念じる。　生きる？　無理だ。死んでいった人たちを知っているのに、生きたいと望んでいた人を助けられなかった自分が、生きたいだって？　死んでいった者たちが許さないはずだ、なにより自分が自分を許せない。

「お前が俺の後を付いてきたのは、俺に危険を伝えに来たと言っていたな。だが、本当は違うんじゃないのか？」

頭を抱えて必死に耳を塞ぐ。だが、声は聞こえる、響いてくる。

自然と涙が溢れる。

「お前は俺に助けてほしかったんだろ」

「もう、ヤメテぇ！！」

言葉は涙と鼻水で汚れ悲痛な叫びになる。
「ジ、死な・・なギゃダメじゃないでずかぁ！わ、ワダチのせいでいっぱい、人が死(ジト)んでぇ！ぞんあ、女は生きてジ(ジ)ぁや！ダメぇなんで」
「そうだな」
短い完結的な言葉で涙は止まる。声も止まる。聴覚だけの存在になった気がした。それだけの意味がある言葉と声色。顔を上げることができない、表情を見るのが怖いと思った。
「お前は生きる価値なんてない。それ以前に、お前のせいで死んだ奴らがいるなら、そいつらはお前を決して許さないだろうな。私たちが死んだのに、なんでお前は生きてる！って具合にな」
この人が魔王と呼ばれる意味がよくわかった。この人は平気で人を傷つけられるのだ。
「そもそも、テメェが死ぬのも考えものだよなぁ！苦しみぬいて死ねって奴もいるだろうし」
止まった涙が再び流れる。なんだか悔しくて、唇をきつく噛締める。
進の言葉には嘲りがあった。私の人生全てを否定され、なにより犠牲になった人たちが汚されていく感覚がした。私の知っている人々がそんな汚い言葉を吐くことはないと心の何処かで思っていたのかもしれない。
想い出のすべて、出会った人々に人格が汚される感覚に、かつて失った感情が蘇ろうとしていた。
「そうして死ぬことで、それらすべてから逃げられると思ってんのかぁ！？あぁ！？おい！逃避娘ぇ！完璧なんだろ！？　泣きじゃくってねぇでとっとと、なんか言ってみろォォ！！」
「どうしろっていうんですかぁ！！！」
怒りにまかせて叫ぶ。生きていくために捨ててしまった怒りの感情を再び灯して。怒りに押し流されるように涙の膜が拭い取られる。
今度こそ彼の顔が見えた。彼は・・・

彼は優しくも力強い笑顔で私を見下ろしていた。彼は怒ってもいなければ、憐れんでも無かった。ただ・・

「判ってるんじゃないのか？　死んだ人間に対しての償い方なんぞ無いようなもんだってことも、自分で決めるしかないことも」

「・・うぅ」

目が潤む。

「生きる価値？　人間の価値なんぞ、周りの奴らが勝手に決めてくれる。だけど、生きるか死ぬかの選択は自分がしろ。こればっかりは甘ったれて誰かに選択してもらうなんて贅沢できねぇんだよ！」

「う、ううぅ」

鼻がムズムズする。

「欲望全肯してでも生きたいのが人間だ。もう後戻りなんぞできない悪女なんだろ？いまさら意地汚く生きても、なんも変わらないさ。喜びに笑って、苦痛と死には喚(わめ)いて嫌がるのが人間だ。それでいい」

また涙の水源が活性化する。まるでこの十年分が一気にこみ上げるように、抑圧されていた全てが決壊するように、感情が爆発するように。

「・・ぃ・・たぃ」

「クックック・・・おら、どした？聞こえないぞ？」

先ほどとは違い、まるで問いかけて意地悪するかのような声色。答えが判っているのだ、この男には。

この男は平気で人を傷つけられる。それはもしかしたら、その痛みが判っているからかもしれない。だからその傷の痛みとの付き合い方を知っているのだ。

「・・き・・たい」

「なんだ？また誰かに決めてもらいたいのか？テメェの人生だろうが！ハッキリしろ！」

許されないことが判っていた。いや、許されないと思わなければ、私はきっと壊れていた。死を開放への道筋と決めつけなければ、ま

たいつかあの罪を繰り返し、悲劇を生んでしまうのだ、と。決めつけで自分を縛ることで人を救えるのだと。

でもホントは違った。本当は自分が人と接して、自分のせいで死ぬことを防いで、そうして自分は人を救っていると偽善で身を固めて悦に入っていた。孤独を望んで人と接することを恐れて、心の殻に閉じこもり安心感に救われていたのだ。

そんな汚い自分を直視できなくて、今日が来ていた。そして、約束されていた死が迫っている。これを望んでいたのだ、そんな自分が嫌いだったから。決して他人のためではなかった。こんな汚れた自分が消えることがどうしようもない救いに見えたのだ。

だが、実際はどうしようもなく、目の前に迫る死に恐怖している自分がいた。恐怖を狂気で薄め、死を必死に肯定する自分しかいない。それが目の前の魔王はお見通しだったのだろう。

どうしても止められない。この言葉を言ってしまえば、もう後戻りはできない。意地汚く、傲慢な私はその衝動を止められない。目の前にいるそんな私の欲望を肯定する存在がいるから。どうしようもなく、

「生き・・・たいでずっ！生ぎたいィ！じにたくなんて・・・死にたくないっ！」

生きたい、死にたくないと口から溢れだす。それを止めようと手を当て塞ぐも、一向に止まる気配がない。涙にぬれる声は、声にならない。

言ってしまい欲が心に迸（ほとばし）る。もっと、いろんな世界が見たい。当たりまえの幸せに心から笑ってみたい。もっと人と接したい。友達を作りたい、そしてあの少女のように笑いたい！

私の言葉を聞いた二人の男の反応は対極的だった。一方は壮絶な笑みで勝ち誇り、もう一方は大口を開けて驚いている。笑顔の方、進は体をドレイクの方へ向き直すと半分の視線だけをこちらに向く。

「お～、よく言えました」
「・・・進さん・・」
ん？　とニヤニヤしながら片方の目で私を、もう半分の視線で相手を睨めつける進。
きっとこの人はこうなることを計算して言葉を選んでいたのだろう。今思えば、単純な手だ。わざとその者の感情を逆なですることで、本当の想いを掘り出したのだ。
怒りはネガティブな印象があるがもう一方の側面を持つ。それはまかせることで言いずらいことや、言ってはならないことまで簡単に口から吐き出させる効果。あえて言葉にするということで認識を強く持ち、自分の意思なのだと強く自分自身に刻みつける。
自分を見失って、自暴自棄に自殺を望んでいた馬鹿な娘だった自分では誘導させられたことに気が付くことはできなったのだろう。・・・でも
「後で一発、殴らせてください」
「それは契約外だ」
シレっと顔を背ける進。もう少し、優しく誘導してくれてもよかったのではないだろうか？
進は頷いて問いかけてくる。
「おい、お前の名前を教えろ」
よくよく思えば彼は私の名前を呼んだことがなかった。たぶんだが、人の命を見殺しにしてきたことから、死ぬことで、死を想うことで逃げようとしていた私を認めてくれていなかったのかもしれない。この人はそういった内面を見抜く力があるのかもしれない。
「撫子、九重　撫子です」
「じゃあ、撫子。お前の願いを、契約内容は？」
願うことが罪なのかもしれない。だけど、それを決めるのは私だ。きっと死んでいった人たちは許してくれないはずだ。だけども、これだけは譲れない。まだ死ねない。あんな男の趣味ごときで死んでたまるもんか。この命はそんなに安いものではない！私の親友が決

死に守ろうとしてくれた命だ!!

「私を助けてください。生きたい。私はまだ死ねません」

「ハッ、イイ感じの悪女になったじゃねーか!受諾したよ」

進は快活に口を皮肉を作り、その紅い目に大きな意思を燃やし、黒い大剣“イザナミ”の剣先を真っすぐ標的、ドレイクへと向ける。

「さあ、クソ吸血鬼。後悔させてやるから覚悟しろ」

第五話へ

5、終幕の舞踏会

5、終幕の舞踏会

「・・・よくもォォ」

地の底から這い上がる声の主、ドレイク・V・ノスフェラは見たこともないほど怒りの表情に変貌していた。その感情の矛先は私にではなく、もちろん、進に向けられている。

「キ・・サマァァ・・貴様ぁ、よくも私の完璧な芸術作品をォォ」

「はぁ？完璧だ？　コレのどこが完璧なんだよ？」

コレ呼ばわりされたが気にしないでおこう。

それと同時に今にして思う。

「欠点がないのはいるかもしれないが、それ自体が欠点っていう場合もあるって考えると、完璧なんて人という存在じゃあ無理だろうが。広辞苑でも引いてみろ」

その通りだ。欠点なく、優れていて良いこと。完全無欠。言うのは簡単だが、行うのは不可能に近い。なお且つそれを維持することも考えるとさらに難易度は上がる。完璧に近いは可能だが、その欠点がないこと自体が欠点であるとさえも考慮の内に含めればさらに無理である。

だから人は完璧という言葉を使う場合、より良い成果の中の安定した行動や自己において最も良い状態や行為を指して使う場合が多い。

「テメェが欲してやまない完璧ってのは、自分に背かず、従順な、それでいて自分好みの存在って意味なんだろ？」

実につまらなそうに回答を述べる進。いや、たぶん呆れているのだ。

自分に都合のよい存在で周りを固める者は社会でも見受けられる。

それは生きる上での処世術だ。だが、それは一歩間違えてしまうと、自分の好みに合わないものへの拒絶に繋がってしまう。それはとても傲慢な考え方で悲しいことで、なにより客観から見るとその者は恐ろしいほど矮小な存在に見える。

進はきっとドレイクの中にあるソレに気が付いていたのだ。強大な存在である吸血鬼を雑魚と断言した理由なのだろう。

事実、そういった人物ほど馬鹿にされることに慣れることはなく、ドレイクのように顔を真っ赤にして相手を睨みつける傾向がある。

彼とは対照的に、この状況が愉快で仕方がないと言わんばかりに笑顔だ。

こういう状況を楽しめる人物は大抵、他者の愚行を嘲笑い、快楽を感じるドSだ。

「ククク、良いな～！そのお顔。どうな気持ちだね？ご自慢のお人形がお前の手から離れる気分は？」

進の最後の方のドレイクのモノマネはなかなかに上手だった。

「貴様、貴様、貴様ァァァァァァァァ！！！」

怒りの許容量が振りきれ、ついにドレイクが動いた！十メートル程度とはいえ、その距離を瞬きの間で詰め、進の顔面に手刀が挿入される

“はずだったが、実際は逆に、ドレイクの顔面に拳がめり込んだ”

グボっ、というなにかが打ち込まれる音。そして、元いた場所よりはるか後方へと殴り飛ばされたドレイクが顔を抑えて唸る。

クロスカウンターで打ち込まれた一撃の威力を物語るかのように鼻から“血”が・・・血が？

剣で真っ二つに切り裂いた時にすら見受けられなかった物の噴出、これは何を意味するのか？

「キ、キザマ！？」

「発音が間違ってんぞ」

今度は進から打って出た。鼻からの出血を片手で抑えるドレイクには彼の言葉が真後ろから聞こえたことだろう。

進は私と、たぶんドレイクも目視できないほどのスピードで彼の背後に出現すると袈裟切りにイザナミを振り下ろす。

だが、進は判っているはずだ。ドレイクは剣で攻撃してもダメージを与えることはできない。ドレイクも余裕の表情、のはずだった。

ドレイクの表情が急激に変貌し、体を強引に捻る。

剣の動きは廊下を粉砕し、その行動を終えたが、なぜかそこに血が数滴、滴っている。あのどんな攻撃すら効果がないような純血の吸血鬼の血が。

だが、なぜだろう？

後ろからの攻撃は前もしている。あの時は縦割りにされてもドレイクは瞬時に元に戻ったのだ。そんな不死身の男が今回は傷を受けて膝立ちし、傷の痛みに震えている。なにか違いがあるのだろうが、私にはわからない。判っているのはあの二人だけだろう。

先ほどの回復ほどではないスピードだが、早くも傷が完全にふさがりかけているドレイクが凄まじい形相で背後で未だ佇む進を粉砕すべく裏拳を放つ。避けるというヴィジョンすら想像ができない一撃を進はどう回避すればいいのか、だが、彼の答えは単純だった。

進は向かってくる拳を掴みとり、握る拳を“握り潰した”。

バキバキ、と不快な感情を感じてしまう音が鳴り、ドレイクは苦悶の悲鳴を上げる。

だが、彼はその場から動じることはない。距離を取ろうともせず、眼前の敵を見据えている。

痛みがもうないのか？　それとも覇者の貫禄？　敵への威嚇？

否。

違う、進が掴んで離さず、ドレイクはその進の豹変ぶりに恐れ慄いているためだ。

「・・フッ、ククック」

ドレイクは何度も離させるために引きぬこうとするが、ビクともしない。空いている手や足で進を攻撃して脱出、という考え方はできないのだろうか？

いや、混乱しているのだと瞬時に理解（わか）る。なにせ、先ほどまで圧倒的な力の差があった相手に力負けしているという現実がドレイクを混乱に陥れている。それを物語るようにドレイクの顔は疑惑と困惑に満ちている。

「クハハッハハハァ！」

その表情が面白いのか狂喜して爆笑する進は手を掴んで離さないまま、右手に持つイザナミを左肩から首を刈り取るべく一気に半円を描くように振り切る。

先ほどまでの戦闘の斬撃とは比べ物にならない速度と力で振られたイザナミは空気を爆発させたかのような剣風を発生させる。

それほど近くにもいない私も風圧に押されて背中側の壁に押し付けられる。その暴風をその原因をまともにその身に受けたドレイクはこの比ではなく、剣の遠心力に引っ張られたためか左では無く真後ろに吹き飛ばされた。何度も何度もバウンドし、ついに止まる。

首の傷はもう再生を始め、傷が残らないだろうが、顔に驚愕が彫り込まれ、元に戻るのには時間がかかりそうだ。

「何を驚いてるんだ、おとうさま？」

「キ、貴様は一体何をしたのだ！！」

ドレイクはこう睨んでいるらしい、進が何らかの方法で己を強化、もしくはドレイク自身の弱体化をしたのだと。

「あれほどまでに力量差がありながら！！」

「あれほどだぁ？俺がいつ本気だなんて言ったよ」

さすがに嘘だ、虚勢だ、と私すら思ってしまう。それほどの怪我を、攻撃を受けていた進なのだ。無理がある。

なによりドバドバと音を立てていそうな頭からの出血量が“このままじゃ死んじゃう”と全力で主張している。

「ハッタリが下手すぎるな少年！！だったら、何故あれほどの攻

撃を受けていたのだ！」

そのとおりだ。だが、進の表情は変わらない。

「あれぐらいで悦に入るな、大人げない。あれぐらい状況を不利にしないと、そこの寝暗娘の本音を吐きださせて、奪うことなんて無理だったしな」

それに、と続ける。

「お前が俺を倒せるなんて思っていること自体が間違いだ。もうお前の芸なんてとっくに見破ってるんだよ」

空間転移とあの異質な怪我の治癒能力。

進はそれを芸といった。つまりなにかカラクリがあるのだ。だが、私にはわからない。たしか進はそんなことはあり得ないという反応をしていた気がする。

「お前はたかが数百年生きただけの吸血鬼だ。そんな“小物”が空間転移？高速再生？　無理に決まってんだろ。神祖クラスの“女王”なら空間転移余裕だろうが、次元の空間圧力をぶち破ってその高価そうな服が無事な訳ねぇだろうが」

女王という言葉は判らないが、言いたいことは判った。ＳＦ映画などでよくあるテレポート、瞬間移動とうサイキックな能力があるが、実際それが出来るかどうかと問われれば難しい。できるかどうかの問題ではなく“その物体にかかる負荷の問題”だ。

それは吸血鬼という常識外の存在ならまだしも、人間界で作られた衣服が無事というのはおかしい。空間を短めれればという考え方もあるが、そんな力が働けばいかに頑丈であろうと、このロビーが無事で済むはずがない。

「“女王”の名を使うとは・・・人間ごときが、まるで会ったかの様な言い方を」

「会ったことがあるから言ってんだろうが」

ドレイクが口を開けて本当に驚く。涎でも垂れそうな開き方、こんなに驚くドレイクを初めて見た。

それほどの存在なのだろうか“女王”というのは。

進が言っていたボロ負けした相手とはその人のことなのかもしれない。

「お前は空間を表面的に歪める程度の力しかないんだろう？　だが、それを空間に展開することで“知覚のズレ”を起こしていた、そうだろ？」

人の知覚、特に視覚というものは外界の情報をそのまま撮り込むと思われがちだが、実際そのほとんど脳内情報の補完でされているモノである。目の網膜が脳の視覚野に伝えるのは３％程度と言われている。

つまり人は自分が見ているモノを自分で理解し、こういうものだと認識している。外からの情報をそのまま見ている訳ではない。

その入力の３％は少ないように見えて大きい。歪められれば、もちろん外部からの修正の利かない、嘘か真か確かめる術のない入力される情報に誤作動を起こしてしまう。脳が困惑するためだ。

ズレは微細かもしれない。だが、それがさらに常識外の異質なものであればさらに知覚は歪む。それを受け入れ、理解することが刹那の間でも出来ないからだ。

そして、それは思考に間隔を開けてしまう。

「そのズレを起こしているモノが呪を多く含む吸血鬼の魔力だ。魔力は世界に自身の意思を出現させる効果がある。世界を改変することはないが、常識外のズレを引き起こすには十分だ。それに脳なんて代物に“呪い”の補正概念なんて入ってないからな」

空間転移と高速回復のように見えた正体は空間のズレ。急に現れたように見えたのは世界のズレでそこに行きついたその時の瞬間が知覚できなかったから、進が何度も切り裂いたのはズレで生まれた幻。

魔術的な蜃気楼。進はそれに気が付き、そのズレ分を計算して攻撃していたのだ。それがどれだけ難しい事なのか判る。判るのだが

「ならば、単なる運任せだった・・マグレで私に攻撃を当てたというのか！！ふざけるのもいい加減にしろっ！！！」

計算による攻撃とは良い言い方だが、それはココに来るから斬るという。言ってしまえば運の素養も入ってしまう。ズレの生み出す空間で進は顔という小さな的にクリーンヒットさせている。しかも狙ったかのように。タイミングは判るのかもしれないが、どういった攻撃がくるのか、どの経路からくるのかなどはわからないはずだ。それすら見えていたのなら進はもともと攻撃など受けていない。

「一つだけ、お前が世界を歪めても歪まないものがある」

傷だらけの進は空いている左手人差し指を立てる。

人はそれを一(ひとつ)と呼ぶことがある。

「それはお前の性質・・・性格だ」

「お前はプライドが高い、どんな愚弄も許さない、盾突く者はその強力な力でねじ伏せてきた。戦ってよ～く判った。戦い方によく出てた・・お前はそこまで強くない」

ドレイクはしつこいくらいの侮辱にイライラしている。その彼に進はそれだっ　と言わんばかりに人さし指をビシっと向ける。

人はそれを指摘のサインに使うことがある。

「そんな奴は大抵、侮辱や自分が評価されることに怒りを覚える。そのタイプの怒り方はいたって単純だ。しかも行動が直線的になる」

「それにお前の攻撃には2撃目という概念が少なかった。相手の退路を無くし、相手を追い込み、倒すかけ引きが全くなかった。これは大抵の敵が弱かったか、力だけで勝ち続けた奴の特徴的な戦い方だ」

ドレイクは目を見開く。何を言っているのか判らない反応ではなく、まるで嘘を見抜かれたような。言いあてられたかのような反応。

性格。それは特に人の行動事体に如実に表れてしまう。その人特有の性格の形を表現させようとするのだ。

それに抗うことも、それを巧妙に隠し生きることは可能だが、性格というものはそれを許そうとはしない。不測の事態や押さえつけていた精神力が疲労で、本質というものは噴出してしまう。

これらすべて見抜いた進は攻撃の予測地点をすべて計算していた。

怪我はすべて私のせいにされると心が痛むが説明はつく。だが・・・

「だから、どうしたと言うのだ。戦い方が分かった程度で頭に乗るなよ。私は死なないのだよ。いくら切り裂かれようと、銃弾を受けようと必ず甦る！　下等で脆弱な、私の血を与えられただけの下僕たちはともかく、純血の吸血鬼は心臓を破壊されなければ死にはしないのだよ！！　下等な人間が知らぬことだろうが、心臓は最も“呪という毒”で汚染された場所。生半可な人間の作り出す武器程度では貫けない事実に！！！」

“心臓は人の武器では貫けない”事実。それは初耳だった。

しかも状況はドレイクの言う通り、進が不利である事実は変わらない。そんな相手に戦いを続ければ、消耗戦になり、進は負ける。

ドレイクの勝ち誇る笑み。その笑顔を見ただけで悔しさが湧き上がってくる。

その戦いの予想図が見えてしまうからだ。

だけれど、進の表情は変わらない。いや、若干見えない。月明かりがさし込み、私のいる壁際からは間を開けて並行して睨みあう二人の姿があるのだが、月光が影を作るために進の表情を隠している。

影から覗く唯一の部分、口が開く。

「一つ確認だ」

？　とドレイクが眉根を寄せる。進の口調があまりにも平坦だったからだろう。

「お前が俺と初めて会った時に、なんで不意打ちした？プライドも人一倍高そうな吸血鬼さまがなぜだ？　堂々と目の前に現れて俺をきちんと潰せば、こんな面倒なことにならなかったはずだ」

進の口から言葉が紡がれる。あたりは虫の鳴き声すらはっきり聞こえるのではないかと思えるほどの静寂。

そこに響く声には色が徐徐に戻りつつあった。それは段々、陽気で無邪気で陰嫌なテンションを含み始める。

目はさらに見開き、目が血走る。血管が浮き上がり脈動を目視できる。わざと高らかに、演技的に相手を全力で侮蔑する進の言いた

いことが大体わかったからだろう。
同じ挑発には乗らない。進が再三、使っていた手だからだ。
「思い起こせば、お前は何度不意打ちした？　確かに不意打ちは実戦では基本だが、純血の吸血鬼ほどの力があれば人間なんて力で強引でもすぐに殺せるはずだ」
世界が重くなった。喧嘩の現場が出す雰囲気に似ている。
が、密度が違う。その圧迫感は緊張感になり、空間を満たす。一つ一つの行動がスロモーションに感じるほどの緊迫感。その一瞬すら数百秒流れたのではないかと錯覚を生む。
「俺と完璧未満失敗娘（ドジッコむすめ）の会話だって聞きたくなかったら、乱入して止めればよかったはずだ。いや、中断させたはずだ。お前の性格だったらそうしていたはずだ・・・だが、しなかった。なぜだ？」
答えは簡単だ、　と続ける。一拍が置かれ、空間を満たす緊張がピークになる。そのガスの様に充満したソレに火をつける瞬間が楽（たの）しみだったかのように、目の前の傲慢な男を怒らすのが最高だと言いたげに、進の口がゆっくりと三日月（みかづき）状になった。

「お前・・・俺が、怖いんだろ？」

空間が爆（は）ぜた。
爆発音にも似た破砕音を突発させ、遂に堪忍袋の緒が切れたドレイクの突貫により床が踏み砕かれた音とともに、拳を振り上げながら滑走する二人の距離を一拍でゼロにする。
振り上げられた右腕の筋肉が膨張し、スーツがその膨張に耐えきれず、千切れ飛ぶ。
その凶器と化した拳が振り落とされ、進の体が後ろに押し倒れ、その延長線上にあった床に入り込む。　その負荷の許容量を超えたためロビー・フロア全体の床に、亀裂と破壊による粉塵が巻き起こる。ドレイクはさらに進にもう一撃加えるために右手を抜かないまま、左手を打ちこもうとしたが、気が付く。

やっと気が付く。右手を“抜かないまま”？彼の手がめり込まれているのは床。進の体を貫通した感覚もない。ならば、奴はどこだ！

「ハハハッッ！　ココだよ、ワトソン君ゥゥゥゥんッ！！！」

奴は・・進は攻撃を受ける瞬間にわざと後に倒れ込み攻撃を避け、後転倒立の要領で・・・未だに信じられない光景だったが、そのまま上へ“天井”に跳躍？していた。

サーカス団どころか世界が仰天する倒立した人間が、高さ１０メートル以上ある天井への跳躍アクロバットを目撃した私は目が丸くなった。

ドレイクは進が天井で助走を付けるための音と、世界の名探偵の代名詞とも言える言葉で彼の現在地を把握したが、驚きのあまりか体を仰け反って上を見上げ、固まっている。

再度、爆発音。進の助走の起点となる役目を終えた天井が耐久力の限界を超えた破砕音。

進はミサイルの様に地面へと急降下、いつの間にかに体制を反転し、黒い大剣を地面に突き立てるように落下。

ドレイクの体を、貫く。

差し込まれた部分は下腹部やや左、専門的に左腸骨窩と呼ばれる範囲。

ドレイクは今日一番の驚愕を表す。

進は今日一番の大爆笑。

「ッハハハハハハハハハハァァァァ！！！ネタは上がってんだよォォォォォッ！！！オトウォサマァァァァァハハハッ！！！！」

その瞬間、私の脳裏に閃く。

なぜ、いかなるも攻撃をズラすことが出来るドレイクがなぜか防御していた場面があった。

――右肩から左股間にかけての斬撃。

――腹部への突き。

――左股間から右肩への斜めの斬り上げ。

相手に絶対的な力を見せつけてきた男の行動。防御といってもどれも相手に戦意を削ぐような止め方ではあったが、別に止めなくてもいいはずの男が、だ。

止めた攻撃と受けたように見せかけた攻撃。二つの大きな違いは余裕があるかないかなどではなく、重要な部位へ届くか、否かではないだろうか？

生き物は無意識の行動を取る本能を持つ。それは本能が失われつつあると言われる人間にあっても例外ではない。

捕食、性欲、そして“防衛本能”。

危険を察知すると、身構え、体を硬くする防衛本能は自身の弱い部分に対し、何らかの防御行動を取ろうとする。急に目の前に危険が迫ると目をつぶり眼球と恐怖からの精神的防御を行うように、“弱点を徹底的に守ろうとする”のだ。

普通、戦いに身を置く者は弱点を隠そうとする。そこが敗因なりうるからだ。だが、ドレイクは吸血鬼特有の絶対的な力でどんな敵も捻り潰してきた。そんな弱点を隠すような戦いを、生死のギリギリを奪いあい、勝利をもぎ取るために努力を必要としない戦いばかりだったのだろう。

だから、進はドレイクの守るべき聖域に剣を突き立てた。

「ツォォォツォツォォ」

声にならない苦痛の声を上げるドレイク。

彼は進を、いや人間を舐めていた。自身の弱点を知っていると知らなかった。

進が彼の弱点を知るべく、危険を変えりみずに心臓の位置を探していたことにも気が付くことはなかった。

自分が負けるという可能性すら考慮しなければいけない自分との戦いを、そのプライドの高さから見ようともしなかった。

生物的に上異種であるという傲慢さが生んだ隙に、進の一撃が容赦なくドレイクに突き入れられたのだ。

「ォォォォォォツォオォォオォッ！！！」

そして、大地は口を大きく開かれた。
床は遂に耐震強度を遥かに上回る衝撃を受け、分厚い層が衝撃点を中心に亀裂に沿うように瓦解(がかい)し、二人の男を奈落の底へ呑みこんでいった。
「進ッ！」
咄嗟(とっさ)的に、大穴に手を伸ばし、下を見下ろす。
もう目視はできない。穴はその深さも判らぬほどの暗黒を作っていた。
屋敷に地下があるとは聞いていたが、底が見えないことを考えれば相当深い・・ん？
ピシッ、ビシビシイシ！　みたいな音。
「ミャァ！」
私の視線は真下、足元。亀裂の口は未だに開き続けていた。亀裂は“私の足元”にも！！
そして、
「ミャャャアアアっ！」
猫っぽい声を上げながら浮遊感を感じることになった。
むろん、私は猫のような空中回転のような動きはできない。

視点変更３

なんだ貴様は！
「ソラ！オラ！如何(どお)ォした！！」
落下する私の体に突きささる大剣をさらに押しこんでくる、この凶悪に笑う小僧は一体何だ！
屋敷の地下は比較的大きな作りとなっている。ビル三階ほどの深さがあるはずだったからそれなりに落下時間があるだろう。
この不快な落下の感覚に上乗せされる疑問という名の重さが私の思考を深く混乱へと突き落とす。
私は優勢だったはずだ。私は純血の吸血鬼だ。負けるはずがない

！こんな下等な、我々の食材でしかない人間などに・・・人間？
「いい加減に！離れろォォォォッ！！」
私は怒りの咆哮と共に、腹に刺さった剣先を無理やり手で引き抜く。痛覚が鈍い吸血鬼でも腹に穴が空けば流石に苦痛を伴う。それを無視するだけの怒りが満ちていた私は、この憤りをぶつけるために空中で体を無理に捻り回転させ小僧の頭頂部に踵を落とす。
踵を頭部にねじ込まれ、小僧の体は下への力に従い急速に地面へと叩きつけられた。だが、粉塵をまき散らしながら墜落したその姿を見ても、いつもの勝利の確信を得られない。
遅れて私も地に足を着くと、同時に凄まじい痛みと自分の存在自体が無くなる感覚に襲われる。血反吐を吐き、地面に倒れかけるが吸血鬼の誇りでそれを防ぐ。
存在がブレた理由は吸血鬼の力の源であり、現世に魂を固定し続ける“呪い”の力が弱まっているためだ。つまり心臓にダメージを負ったためだと理解し、同時に表現できないほどの憤怒の感情が湧き上がる。
（屈辱だ。此処までの屈辱を受けたのは初めてだ！！　あの小僧は必ず殺してやる！！）
あたりを見回す。場所は地下。いつも周囲は薄暗い闇で満たされている場所だが、今は天井にも一階に床にも大きな穴が開けられたために月明りが差し込んでいる。そこはもう荒れ果て、上からは未だに瓦礫が落下してくる。
この地下は普段は私の寝室だった。同時に多くの選りすぐりの血が保管されていた聖域だった。そこを踏み荒らされた気分はあの小僧への憎悪に変換される。
どこだ！　どこにいる！　どこにいるのだ！
その怒りの眼差しは、突如に粉塵が吹き飛ぶ様を目撃し、同時に真っすぐ新幹線のような速度で突撃してくる小僧を捉えた。
（ぬぅお！）
先ほどの比ではない速度に身が固まり、防御の行動を取る。左か

ら向かってくる横からの斬撃に合わせ左腕でガードする。
だが、それは斬線すら残像と化す黒い閃光。
質量が倍加した物質をまともに受けて私は真横に吹き飛ばされる。
（グオオオォォォッ！！）
何度かのバウンド後になんとか体勢を持ち直したが、いつの間にか距離を詰められ兜割が頭に迫っていた。痛みを感じる間も与えてはくれない。
私はプライドもなにもかも捨て、強引に体を横にねじ込み寸前のところで大剣の線から外れる。
剣は地面に激突し、余波を生みだす。その隙を突くという考え方はできなかった。余波と言ったが、想像を絶する。
爆発だ。空気が爆発したかのような衝撃が体を叩き、弾き飛ばされて地面へと無様に転がることしかできない。
「カカカカカ」
狂気を大量に含んだ笑い声が響く。笑い声の主は銃をこちらに向けてくる。馬鹿め！銃など吸血鬼の皮膚には利かない。はじき返すことも可能だ。その間に傷を塞ぎ、貴様の喉笛を握り潰してやろう。
ダメージを受けた心臓部分の治癒が始まっている。心臓は治癒しないものとされているが、吸血鬼の心臓は呪いと血により傷は塞ぎ、元に戻る。
だが、多少の力の元弱と心臓以外の治癒の遅れを生じる。この弱体化隙を突こうという考えなのだろうが、もうそれは終わろうとしてる！
貴様が笑っていられるのも後、少しだ！
銃声は5。
その全てが塞がりかけていた小さな傷に、“心臓へと向う”経路に直接、叩き込まれた。
「グァァアアアア！！」
苦痛にのた打ち回る。確かに呪いで武器などでは歯が立たないと言ったが、心臓付近に打ち込まれればその衝撃に痛みぐらいは響く。

「どうだ？人間の力もなかなかやるだろう？」
苦痛の表情で顔をしかめる私に世の中でこんなに楽しいことはないとでも言いたげな声が届く。ゆっくりと近くなる声と迫る足音。
「人間の・・・力だと？」
「そうさ、相手を裂くため作り出した剣、遠く離れた相手を貫くための銃。それを高度に扱い、仇（あだな）す敵を倒すために表現する体。敵を追い込むために、弱点の解析や効率化を思考する頭を使って戦った。これぞ人の力だろ？」
「ふざけるな！」
私は飛び上がり、接近していた小僧の腹に蹴りを入れようとする。だが、蹴りはあの黒い剣の腹で受け止められた。小僧はまるで動じずない。
吸血鬼の全力を受け止めた黒い大剣はヒビ一つ入らない。すべてが異質なのだ。あの剣も、この小僧も。
蹴りの衝撃を使って後ろに跳躍して距離を取り、思いつく。
ならば、貴様が私を暴力で誇りを汚したように、私も貴様の真実で汚してやる。
「貴様が人間！？笑わせるなよ、小僧！！たかが人間が純血の吸血鬼の力に匹敵する力を、魔力の加護もなく行使できるものか！」
長い間、生きてきたのだ。幾度となく人間にこの命を狙われた。その中に魔力と呼ばれる特殊な力を得た人間たちもいた。
続に魔術師、聖騎士などと呼ばれる彼らは魔力で肉体を強化し、我ら魔族に果敢にも向かってきた。人の常識を超える術を持った彼らだったが、それは人間の範囲の肉体の強化だ、それ以上を望めば肉体は崩れ、自滅する。そのため、人間以上の肉体を持つ私に適うはずがなく、その痴れ者どもはリンゴを潰す程度にいとも容易く、私の手で潰せた。
それでも魔力で強化された人間からは魔力が溢れを感じることができた。
それなのにこの男からは魔力のかけらも感じない。それどころか

吸血鬼も凌駕するスピードに体が耐えられる時点でもはや、人とは呼べない。

「貴様は人間ではないな。貴様も私と同じ“魔族”か、人間とのハーフだ！」

人差し指を指摘するように、小僧に突きだす。

「時折いるらしいな。魔族の誇りを忘れ、人と交わりを持つ者たちが」

人間と魔族のハーフ。恐ろしき力を秘めた人間の紛(まが)いもの。人でも魔族でもないものとして双方から忌み嫌われる者たち。

「そんな貴様ら半端モノが人助けか！笑わせる。それで人に認められると思っているのか！？どんなことをしようと貴様のような汚らわしい存在を誰が受け入れるというのだ！？」

小僧の動きが止まる。どんな者でも精神的に脆い部分がある。そこを突けばいい、脆くなり、露わになった隙を。

「撫子もさぞや気味悪がり、嫌悪するだろう。貴様のような存在を。化物と侮辱し後ろ指を指すのだ！！」

目の前の小僧が剣と銃を無防備に垂れ下げ、顔が俯(うつむ)く！ココだ！！

全力の踏み込みで数メートルの距離を埋め、あの憎たらしい顔に拳を叩きこむ！

はずだった。

小僧との距離がゼロになりかけた瞬間、私の顎を何か硬いモノが押し上げる。

「バーン」

小僧が一言と同時に何かが発射され、下顎から頭頂部へと至り貫通した。硬いモノの正体は銃。俗に言うハンドガン。

一瞬、思考の中枢が破棄され思考が中断する。その間に小僧が私の胸倉を掴み、後方へ投げ飛ばされていたらしい。思考能力の回復には数秒を有したため、今の私の状況からの推察だが・・・

小僧の精神を揺さぶれたはずだった。だが、失敗した。そう確信が持てるのは小僧が何かを達成した者のする笑顔だったからだ。

「満足だ。これで全部かな」

「何を言っている!?」

「俺の目的だよ」

何を言っているのか判らない。私の顔は渋面になる。こいつは何を言っている?

「もともと撫子の依頼は次いでなんだよ。本来の目的はテメェへの復讐戦だ。俺はやられたらヤリ返す主義でね。不意打ち喰らわせてくれた、どこぞの吸血鬼様にやり返しに来たのさ」

恐ろしいほど子供で幼稚な理由。世界がその考え方が戦争や争いに繋がるとし、排斥しようとしている考える復讐論。

「しかも、そいつは世にも気味の悪い“趣味”をお持ちらしいと聞いてな。人間様を舐め切ってる吸血鬼にどれだけ人間が恐ろしい生き物かを判らせようと思ったんだよ」

人間の力、確かにあの時にそう言った。だから、こいつはこんな戦い方をしていたのか。ワザと人間と同じ強さで戦い、ワザと攻撃を受けて立ちあがり、撫子を後押しすることで、自らの意思で私の呪縛から解き放ち、生きる意思で人が立ちあがる生き物だと見せつけた。

「人間は奪う生き物だ。俺はお前からかなり奪い去ったぞ? お前に後、何が残ってる?」

長い間、待ち望んだ極上の人間の血を有する撫子は自らの意思で逃げ出した。

何が奪われた。奪われたモノ?

家を破壊され、下僕たちを殺され、待ち望んだ血を奪われ、そうして考え、自分の姿を見る。

そこにはボロ雑巾にも等しい服を着た傷だらけの、“下等な生物と蔑んでいた小僧の精神的な弱みを付け込み殺そう”とした誇りのかけらもない吸血鬼の姿がある。

（ッ、コイツ・・・私の誇りを！！！私が小僧の弱みに付け込むことを予想していただとォ！？）

大剣を右肩に担ぎ、左手を無造作にポケットに入れる小僧の紅い瞳が爛爛と輝く。

純血の吸血鬼と戦う力を有しながら、あえて遠回りして相手の誇りや自尊心を徹底的に駆逐した男の瞳に全てを見透かされているような、全てを塗り潰す様な紅色（くれないいろ）に恐怖を感じる。

「さあ、残ってるのは・・・お前の命だ」

不死の化物すら、恐怖させる男の宣告が剣先とともに向けられる。

視点回帰　3

「貴様ッァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

ビックリ。

気が付くと私は瓦礫に囲まれていた。落下したのは覚えている。落下中にせめて死ぬなら大好きなシーチキンのおにぎりが食べたかったと後悔したが、まだ私はコンビニに歩いて行けるのだと素直に喜ぶ。

意識が戻った私をとり囲むのは荒れ果てた瓦礫が散乱する空間。広い空間にビリビリした殺気が込められた怒声がぶつけられ、空間が軋む。

私の落下地点には柔らかなソファがあり助かったようだ。

大きな瓦礫を挟んで向こう側では何やら、進とドレイクが戦っているようで衝撃音と破砕音がしている。

私はそちらへと向かおうとしたが、瓦礫の一つにドレスが悔い込み外れない。力いっぱい引っ張るが外れない。

ん～！と力を込めるが外れなかったが急には固定感が無くなる。

「ご無事ですか？」

ごろ、と無様に後ろへ転がってしまう。無様だ、すごい恥ずかし

い。

「！！」

助けてくれたのはメイドさんだった。

私をいつも起こしに来てくれたメイドさん。彼女が私を苦しめていた引っかかりを解いてくれたのだが、この状況は不味いのではないだろうか？彼女も一応、ドレイクの下僕のはずだ。

「お嬢様？」

低く感情のこもらない声だが、いつまでも黙りこむ私に疑問を思ったのか顔を覗き込んでくる。

「いっ、だ、大丈夫です・・よ？」

デジャブが起こった。

いつもは会っていたはずなのに、顔を初めて見たような気がする。それ以上に、それがなぜなのか判らないが。彼女の仕草に懐かしさを感じる？

だが、喉まで答えが出かけるあたりで思考は止められる。近くの瓦礫が破壊され、破片が飛んできたからだ。

「イィア！？」

突然の不意打ちに、ギュッと目を瞑り、頭を抱えてうずくまる。

だが、来るべき衝撃は来なかった。それもそのはず、

「悲鳴に色気がねぇぞ！撫子ォ！」

いつの間にか余計なお世話を言いながらも、瓦礫の破片を黒い大剣、イザナミの剣身で防いでくれた進が私を守るように眼前にいた。

あの程度の落下でこの人が死ぬはずないと思っていたが、無事と判るとホッとする。よかった・・・無事だ・・・。

「下がってろ、オトウサマが本気モードだ」

進の睨む方向へ、目を向けるとドレイクらしき存在がいた。断言できないのは、体の筋肉が一回り大きくなっており、異様な存在感を放つ存在となっているからだ。

「ナデシコォ」

「！！？」

あの人の心に届くような低い声は失われ、くぐもった地の底から這い上がってくる様な声になり変わっている。

「いい加減、娘離れの時期だろ？オトウサマ。おい、撫子。後のツギハギ娘は大丈夫か？お前を守って倒れたんだぞ？」

後を振り向くと、メイドさんが確かに倒れていた。

飛んできた瓦礫から私も守ってくれたのは彼女の様だ。だけど、なぜ？なんで守ってくれたの？

「小僧！貴様は殺す・・・私が許さん。そして、ナデシコを喰らい全てを取り戻す！！」

「ハッ！偏愛ここに極まったな！・・・オイ、撫子。そこから逃げ・・れないみたいだな・・」

視線だけ振り向く進にも見えたのだろう。私の足が大きな瓦礫に挟まり身動きが取れない状態であることを。またか。

進も余裕の表情であるが、体の彼方此方（アチコチ）から血が滴り、服にも赤い染みが出来ている。心なしか立ち方に力が無いように感じる。

あらためて状況を確認する。

後方に守るべき存在、前方に倒すべき存在、中央に魔王。

頭の中がクリアになる。

「正念場です」

これが最後の競り合い。そう思えた。なぜ口から出たのか判らないが、その言葉に進が今度は体ごと振り返ってきた。

私はどんな表情なのだろう。彼は私を、私の目を視る。

それを視た彼は口を力強く吊り上がった。

「前には趣味の悪い純血の吸血鬼。後ろにはお荷物が二人。最悪のシュチュエーションだな、オイ」

「これぐらい何とかしてください。アナタは私を助けてくれるんでしょ？」

「そういう契約だからな。・・・そうだ、一つ言っておきたいことがあった」

「？　なんですか？」

「俺への依頼料は高いぞ」
「一生をかけても払いましょう」
追い詰められている男女の会話ではない。
余裕なんてない。相対するは、不死身の怪物と恐れられ、私を長い間恐怖で縛りつけてきた純血の吸血鬼。
今でも怖い。だが、それ以上に私というお荷物を持ちながらも、黒い巨大な大剣を再び右肩に担ぎ直し、その重さにも、相手から放たれる重圧にすら負けず、相手を力強く見据えるこの男の放つ覇気が私に冗談が言えるほどの安心感をくれている。それが私に前を見据える力をくれている。
「貴様が！貴様が私の撫子をっ！！私の完璧な、忠実な、心血を注いで育て上げた甘美な血を！！」
ドレイクは叫ぶ。欲望に囚われ、気高さを失った養父が目の前にいた。両親を殺し、１０年以上もの長い間、死の恐怖で私を縛りつけてきた男。だが、同時に私をここまで育ててくれた養父でもある。
「御養父様（おとうさま）。私は貴方に不自由なく育てられてきました。どんなに私を苦しめてきたとしても、その事実は変わりません。それには感謝しなければならないのかもしれない」
だけど、と繋げる。これは決別の言葉。そして、私の目の前で死んでいった、助けることができなかった人たちに呪われるかもしれない言葉。
「私は死にたくありません」
私は死にたくなかったのだ。本当に死にたい人間は他人の死など気にしない。目の前でどれだけ悲しいことがあっても別世界のことのように傍観できる。
今では素直に受け入れられる。
――死にたくなかったから両親が無残にも殺された時にドレイクの手を取り、少しでも生きたいと願った。
――目の前で吸血鬼たちに血を吸われ尽くされ死に絶えそうな同年代程の少女を助けることもできたかもしれなかった。だが、助

けた後すぐに自分が殺されるヴィジョンが頭に浮び、動けなかった。
――ひたすらドレイクの望む完璧な人間に成り、彼のご機嫌を取り、少しでも長く生きようとした。
今にも泣き崩れそうな自分を震わせ、養父を、両親の敵を、敵を見据える。
「死にたくなんかない」
出来るなら、あの時、両親と吸血鬼の間に割って入り、助けたかった。
出来るなら、あの時、助けを求めた同年代程の少女の手を取ってあげたかった。
出来るなら、あの時、私のためにドレイクの立ち向かってくれた友達、“花ちゃん”ともっと一緒に生きたかった。
「死んで欲しくなかった。助けたかった」
ドレイクはもう話を聞きたくないとでも言うように、体を突貫させるために力を溜め始める。
進は大きく一歩、右足を前へと踏み出し、肩に剣を背負い、中腰の姿勢になる。
両者とも一見、陸上競技のクラウチングスタートのように見える。
だが、二人の目的はいかに早く走れるかではない、いかに速く相手の命を奪い取るかを目的に、数十メートルの距離を走破する力を溜める。
死にたい、死にたいと嘘を言い続け、本当は誰より生にしがみつく意地汚い偽りの完璧淑女を巡って、異質な力を秘める二人の暴君が最後の一撃を相手に与えるべくスタートの合図を待つ。合図はきっと私の言葉。
嘘をつき続けた中途半端な私が下す、初めてのお別れの言葉を。
「だから、生きます。ありがとう。憎くて可哀想な私の養父」
スタートの合図が切られる。
二人の男が暴力的な咆哮。かけ引きなしの真っ向勝負。ドレイクは拳を、進はイザナミを振り上げる。　より早く相手の体に届かせ

た方が勝つ。
瞬間的に縮む二人の距離。一歩の踏み込みで数十メートルを踏破した化物たち。先に相手に狂器を届かせたのは・・・
進だ！だが――――
行き着いたのはドレイクの左掌（てのひら）。超高速の助走から放たれた上からの縦の斬撃を吸血鬼の長は手を前に出し、受け止めた。
大剣は前腕を縦に切り裂くが上腕に至る前に、失速。
ドレイクの弱点は左腸骨の内側であり、そこを狙うしかない進はこのかけ引きに圧倒的に不利だったのだ。ドレイクは心臓を破壊されない限り、死ぬことはない。どこかを犠牲にすることなど造作もないのだ。しかも左腕一本の犠牲で進に絶命の一撃を与えることができる。
その軌道を塞がれ、同時に動きを止められた進に、ドレイクは勝利の笑みを浮かべ、吸血鬼の全力で放つ右腕が進の顔面へと放つ。
私は見ることしかできないのか。いや、一つだけできる。これしかできないことを嘆く。しかし、この現実が無視された世界でただの人間にできることをするんだ！
進の一撃が止められた時に明確に見えた彼の敗北のシーン。でも、私は否定する。私は彼が負ける姿など信じない！見たくもない！！だって彼はっ！
「負けないでぇ！！進ィィィィィィンッ！！」
進にドレイクから放たれた右拳が急接近する。いまだ彼の大剣（イザナミ）はドレイクの腕に挟まっている。
剣を戻し体勢を立て直すことはできない。ならば彼にできることなどただ一つ！
「オオオァァァァァァァッ！！」
進が叫ぶ。敗北への悪あがき？否――――
勝利への渇望に吠える。
進は大剣を、そのまま“押し斬る”！
私の合図から、約三秒の間の壮絶な、爆風の余波を生みだすほど

の化物たちの戦いの決着が付く。
お互いの立ち位置が始め、変わっている。だが、状態は変わっている。
進は振りぬいた姿勢から地に膝を付く。敗北者の姿
ドレイクは立っている。勝利者の姿。
私の目から見ても勝者は明らかだ。なにせ・・
ドレイクは“左肩から足の付け根までバッサリと”真っ二つに断ち斬られている。吸血鬼最大の弱点、心臓とともに。
どさり、とドレイクは遂に地面へと倒れる。進はよろよろだが、立ち上がりこちらを振り向き、強気に言い放つ。
「ほら、勝ったぞ。余裕・・だったぞ」
息も絶え絶えなのに、憎らしい彼の言葉にほっとする。彼は負けたりしない、なにせ私の魔王だもの。

視点変更　4

本当はギリギリだった。
「進っ」
撫子の奴がやっと岩の拘束から抜け出して、こちらに向かって小走りで駆けてくる。
最後の一撃を相手が防ぐ予想はしていたが、自分の剣が先に届くと信じていた。はっきり言って信じていなければ、純血の吸血鬼になど立ち向かえない。
俺は確かにドレイクが雑魚だと言ったが、それは純血の吸血鬼では、という見立てだった。過去に一度、純血のと戦っているが、あれは運良く生き残ったにすぎない。自分はそれを知っている、だから戦えると鼓舞していただけだ。
そんなことを考えていたためか、急に力が抜けて座り込んだ。
「進っ！？」
撫子は急に座りこんだことに驚いたようだ。・・・別になんとも

ない。疲れただけだ。あんな化物となんか今後一切、戦わないことを願いたい。

そんな俺の心の溜息を聞こえていない撫子の小走りの音がさらに速くなる。

最後の一撃。あれに競り合いの末に打ち勝つことができたのは、認めたくはないがアイツの一言だ。あれがあったから、もうひと踏ん張りできた。

とは絶対アイツが調子に乗る気がするので伝えないことにする。

胡坐(あぐら)をかき、俯いていた俺は、ふと顔を上げる。撫子がちょうどドレイクの死骸を通り過ぎた辺りだった。

偶然だった。

偶然、死んだと“思い込んでいた”ドレイクの目に赤い光が戻ったのが見えた。

「チィッ！！」

即効で傷だらけで限界寸前の体に鞭打ち、立ち上がると同時に駆け出す。

撫子は俺の急速な対応に、呆然と棒立ちになっている！馬鹿が！狙いはお前だっ！！

撫子まで後、５メートル弱というところでドレイクが立ち上がり、撫子の背後に立っているが見えた。

もう、時間はない。

俺は撫子の腕を掴み前に引き出し、背後に周り、背中でかばう！

それと同時に首筋に鋭い痛みが走った。

視点変更　５

何が起きたのか、私には判らなかった。

急に進(しん)が立ち上がり、私を引っ張り倒した。

文句を言うべく、振り向く。そこには・・・

進の首筋に歯を突き立てるドレイクの姿があった。

「ガァッ！！」

進がドレイクを振りほどくべく、体を振り回し、裏拳を彼の顔面に叩きこみ離れる。だが、噛まれた事実が離れることはない。

「フヒャヒャヒャヒャ！」

かつての気高い面影が残っていない下卑（げび）た笑い声がした。声の主であるドレイクは体が真っ二つにされた状態で地面に這いつくばっていた。

「やってやったぞぉ！この下等種族がぁ！！調子に乗ってるからだよぉ！！」

文字だけではドレイクだと誰が判別できるだろう。言葉使いなどは彼のモノとは思えない。目の前にいる人物が同一人物なのか、１０年間一緒にいた私でも信じられない。

すると遂に進が膝をつく。急いで近づき進を見る。彼の顔は苦渋で覆い尽くされ、汗が滴り始めていた。私でも事態が逆転したのだと判る。なにせ吸血鬼に噛まれたものは・・・

「私の“呪い”もきちんと打ち込んでやったぞ、小僧！これで生えて貴様も私の忠実なしもべとなるのだ！！」

吸血鬼に噛まれた者は吸血鬼に。吸血鬼は自身の呪いを打ち込み、分け合うことで、その呪いの本元への絶対順守の忠誠を強引に行うことができる。

「本当は撫子の血を吸いつくし、体を復活させようとしたのだがな！結果が違うとはいえ面白いことになったなぁ、小僧？」

「心臓ぶった切られて、死なないとはな。相当、常識外だなオイ」

進は憎々しく反応する。そうだ、確実に心臓を切り裂いていたのに。

「私も驚いたよぉ。なにより心臓を切り裂いたはずの貴様の武器だ。心臓を切り裂くことができた以上に、それでもなお、壊れもせず、歯零れ一つしていないとは」

地面に置き去りにされた黒い大剣イザナミは傷一つない黒い刀身を誇るかのように存在していた。呪詛の塊である純血の吸血鬼の心

臓は普通の武器では貫けないとのことだった。が、それをこれは斬り裂いたのだ。普通の武器では無い。

それにあれだけ暴虐の限りを尽くした剣に傷が毛ほどもない事体おかしい。

「ハッ！コイツが欲しいのか？ヤらねーよ。こいつはあらゆる干渉を受け付けず、拒絶する性質がある剣らしい。もらいもんだから詳しいことは知らねぇよ」

苦しげに語る進。噛まれた首筋に手を当てる。彼も信じらないと言いたげに傷をさする。

「そうか、なるほど。だが、そんな魔剣であっても心臓を破壊することはできなかったようだな。心臓をこの世から消滅するほど破壊しなければ、吸血鬼は死にはしない！！断つことはできたが、消滅まではいかなかったようだな！あひゃひゃひゃぁ！！」

悔しい。ただ、ただ悔しい。あれだけ進が奮戦した戦いを愚弄された気がした。どんなに頑張っても、もともと進に勝ち目がなかったということだ。吸血鬼の呪詛。それをこの世から消し去る道具など持っているはずがない。

「呪いを斬ることはできるが、常に流れてくる水みたいに斬ってもなお、溢れ出てくる呪詛なんぞは斬っても意味はないって・・・ことか。勉強になったよ」

「勉強だと！？笑わせる。小僧、貴様はこれから私の下僕となり、魂の安息すらないと思え！！」

「じゃあ、十分、気を付けろ。テメェの喉笛いつでも狙ってや・・・る？」

諦めたかのように悟る進に変化があった。語尾の疑問形変化だけではなく、まるで信じられないモノを、いや、妙な変化を見る目にもなった。

私もその視線を追い、ある一点を目撃した。あれは何？

「ギャヒャヒャ、どうしてやろうか！？まずはその・・・。どうした、貴様ら何処を、何を見ていのだ？」

悦に入っていたために、私たちの呆然の視線にようやく気が付くドレイク。

よく人は感情の起伏が激しいとその間にできた傷に気が付かないことがある。それがアドレナリンの大量分泌のためか、それ以外のことに集中しているかなどの理由はさておき、それを人は目に入らないという。つまり、目に入れば気が付くのだ、その傷に。

ドレイクは目に入れた。視覚に自身の心臓が収まっていた場所が異質に膨張している光景を。

「な、なんだゃ！コレはァァッ！！」

目を剥いて変化を受けいれてしまったドレイク。

それに反応するように、次第にかつ急速に、部分肥大化は全身へ広がる。やがてそれは黒ずみ、毒々しい毛細血管を浮かび上がらせる。

見ているだけで吐き気がこみ上げた。口を塞ぎ、目をそらしたくてたまらなくなった。だが、目をそらすことを防ぐように、さらなる下品な変化を起こす。

「なぜだ！何で！なぜぇだ！！！貴様か、小僧ォォォォ！！」

ゴボゴボと口から大量の黒ずんだ液体を吐き散らしながら、ゆっくりと這いずり近づいてくるドレイクに、

私と進は後退(あとずさ)りする。進の方も訳が分からないと言った表情で、事態の把握に努めているようだ。

「貴様っ！！きさまっ！！！ギザ・・ぁマ・・・。・・・まさか・・・」

認めたくないが、私とドレイクは共通の答えに行き着いたのだろう。この異常の原因に。

原因は血だ。進の血だ。血液の凝集元の違いによる拒絶反応にあのような細胞異常はないだろう。そもそも血を吸う魔族である吸血鬼にそんな反応が一々起こらないはずだ。血の定義に関して人間を

超える者たちだからこそ、それはあり得ない。
「吸血鬼に拒絶反応などない・・・これは我々の血が、小僧の血に・・・“負けている”」
血にガソリンが混じれば大変な体調変化や下手したら病気になるように、不純物が入れば当然、なんらかの反応が見られる。しかし、吸血鬼はその優位性からそれを自身の強い呪いという力で己の色に染めあげて、己のモノにできる。
だが、その呪いよりも強い“何か”であれば話は別だ。それをドレイクは「負けている」と表現した。
「小僧、貴様は何だ!? 言え!お前は人間ではない!! ならば“何だ”!!!」
「知らないし、どうでもいい。俺は木の股から生まれたんだ」
人ではない。それについては今さらだというべきだが、血の化身ともいうべき吸血鬼すら犯す“血”を持つ存在などいるのだろうか？ 私の知識では回答までは至らない。至るとすれば、吸血鬼自身。
「!! そうか、そうだったのか!? 貴様は、そうか、“奴ら”の!!」
やはり答えを出したのはドレイクだった。狂気の形相で息を荒げて、行き着いた答え“奴ら”とは一体?
「どうでもいいと言った」
ドォン!! と一発の轟音が思考を遮り、ドレイクから口を奪う。
進が銃弾をドレイクの口目がけて打ち込んだために、ドレイクは舌と下顎を失った痛みで悶絶して転がり回っている。敵対の意思を示した私でも可哀想に思う。進、酷いです。
進は目が据わって、口を嫌悪で歪ませ平坦な口調で断言する。
「今さら、誰がテメェの言葉を信じるかよ。それが本当だとしても、他人に暴露されると負けた気がするからな。俺はネタバレが嫌いなんだ」
今度は肉体の限界を超えたかのように、ドレイクの体が先ほどの肥大化と打って変わり、徐徐に干からび、塵になってゆくその塵も

この世に居座ることを許されないかの様に消滅してゆく。
ドレイクは声を失い、遂に体を失ってゆく。だが、目だけは怨恨を残し、進を睨めつけている。まるで、祟り呪い殺すために、呪いをかけるように。
進はドレイクの元まで歩み寄り、倒れたままの彼のそばでしゃがみ込み、手を差し伸べる。
決死で戦いあった者同士を称え合う感動の場面、になりそうな光景だったろうに。進の左手に銃が握られていなかったら。
銃をドレイクの顔面にゼロ距離で突きつける進は悪意に満ち溢れた皮肉な笑顔で呪を吐く。
「勝手に自爆して死ぬなんぞ、許すか。じゃあな、俺を呪いながら死んでいけ」
待て!! と言うように目をカッと開いたドレイクに躊躇せず、マガジンに詰めた弾丸を全て叩き込む。
連続した轟音が成り止んだ空間にドレイク・V・ノスフェラという存在は消えていた。彼の体の塵すら残らず、無くなっていた。
私の人生を狂わせ、闇を支配していた純血の吸血鬼が、この時、消滅したのだ。
「後悔はできたかよ?ドレイク」
静寂が満ちる空間に、彼が倒したとは言い難い結果の表れのように、感情のこもらない進の声が響いた。

「お嬢様」
まだ、終わらないのか。と思って振り返った先には、さきほど私を助けてくれたメイドがいた。
「あなた・・・」
「ご安心してください、カーネルさま。旦那さまは・・いえ、ドレイクはその呪いと共に消滅しました。もう復活することは無いでしょう。これでもう、お嬢様は・・撫子ちゃんは自由よ。本当によかった」

「一体、貴女は・・・」
「友達になりたいの」
「！！」
友達になりたいの、　その言葉を言ってくれたのは人生で唯一、たった一人。
私が真実を話してしまったがために殺されてしまった友達、高橋　花。“花ちゃん”だけだ。
「は・・花ちゃん！？　でも花ちゃんは・・・」
「やっと、気が付いてくれた」
とろけそうな笑顔を見せる彼女の体は徐々に砂のようになり、崩れて行く。
突然の現象に言葉を無くす私の隣に進が歩み寄ってきた。彼は現象の正体がわかっているようで、重たく口を開く。
「体の各部が別人のモノだな。始めて見たときは信じられなかったが、複数の死者の体をツギハギにして、呪いで縛り上げた魂を入れて使役する死霊術の一つか。しかも入れられてる魂は一つじゃないな。ドレイクめ、趣味がどれだけ悪いんだ」
進は続ける、花ちゃんは消えゆく。私は聞くことと、視ることしかできない。
「たぶん使役者であるドレイクが死んだから、体と魂を繋いでいた力が消えたんだ。砂化はそのせいだな。長い間仕えていた血を分けた下僕たちも同じように、砂になっているんじゃないか？」
話に割って入る進にツギハギの少女は頷いて答える。体の三分の一ほどが砂化しており、声を出すことが出来ないようで頷くしかないようだ。
それでも花ちゃんはほほ笑んでいる。
体はどんどん砂になってゆく。私は急いで這いつくばって、その砂をなんとかしてかき集めようとするが、砂は風に乗ることもなく消滅をしてしまう。
花ちゃんはゆっくりと首を横に振る。もういいから、と。

「よくない！！よくないよォォ！　やっとっ！！やっとォォ！！」
泣きじゃくる私を手でなだめようとしてくれたが、花ちゃんの手はもう無くなってしまっている。
諦めたように肩を落とし、進の方へ頭を下げる。
「礼なんていらん。ただの仕返しだったからな。おまけみたいなもんだ」
なんでもっと早く気が付かなかった。顔は確かに花ちゃんのモノでは無かった、たぶん別人の顔なのだろう。それでも何故、判らなかったのか。さきほどは仕草で花ちゃんと判りかけていたのに。
遂に足と下半身の全てを失った花ちゃんは地面に落下しそうになり、慌てて私は彼女の体を抱き止める。その体はあまりに軽かった。
「ごめんなさいっ！　私があなたに話してしまったばっかりにっ！」
再び横に首をふる彼女の顔には恨みの感情などはなかったが、困った顔をさせてしまった。
進は私の頭をダメだしのように軽く手で叩く。
「お前は馬鹿か。お前の友達以外の魂はもう苦しみで絡み合い過ぎてただの呪いの塊になってる。そんな怨嗟の嵐の中を、お前を思って正気を保ち続けた奴に、お前は謝罪することしかできないのか？」
思えば、私は謝ってばかりだ。謝り癖が付いてしまっているのだろう。
進の言う通りだ。私は最高の友達に謝ることしかできないのか？死してなお、身守り続けてくれていた彼女にそれは酷だ。でも、なにを言えばいいのか。それすら判らない私は完璧など程遠いのだろう、完璧淑女など言われる人間ではないのだろう。
言葉は端から決まっている。
「ありがとう・・・ありがとう、花ちゃん。友達になってくれて・・ありがとう！」
語尾など涙で言いきれたかどうかわからない。言葉が伝わったか

どうかなどその人の表情で判る。
それは最高の笑顔。あの時に見たお日様みたいな眩(まぶ)しい表情。

月明りが私たちのいる場所を照らす。
そこにいるのは二人。
床とはもう言えなくなった瓦礫の上に倒れ込み、真上の月を見上げる男と。
わずかに残った砂を力いっぱい抱きしめ、泣き続ける女。
二人は、砂が無くなるまで月明りの下にいた。最後の一粒が世界から消え去るまで。

エピローグへ

5、終幕の舞踏会（後書き）

書き始めて、二か月・・・・俺、やることが遅いよ。
誰かの目にとまれることを祈ります。

6、契約から始る物語

6、契約から始る物語

びくびく。

あれから一週間。ドレイクを失ってもなお、やはり世界は動いている。

だから、私はここにいる。いつものように高校に。

いつもと違うのは私の通学方法が乗用車から徒歩に変わったこと、だけではなかった。

私の世界は変わった。確かに変わった。自由の代償にいろいろなモノを失った。失ったモノの一つが目の前にある。

いや、この空気を手に入れたとも言えるのではないか？

「あ、あれ九重さんじゃない？」

いつもの乗用車はなく、徒歩で現れた私を数人の学生に見つかり、どんよりとした空気が張り詰める。登校中の朝の爽やかさが、私の存在で一変。

「お可哀そうに・・・ドレイクさまを失って、お気を落としてると聞いていましたのに」

「資産のすべてを寄付したとも聞きました・・・」

「え？子会社に分配したんじゃないの？」

「九重さんが全部燃やしたとか・・・」

「男に貢いだって噂もあったよね！？」

「一文無しの貧乏少女になって、ソドムで働いてるとか聞いたんだけどマジ？」

噂話が伝染し、ありもしないデマへと性質変化してゆく。どんどん広がる噂にはもう善意はなく、今までおいしい想いをしていた女への悪意がふんだんに含まれた内容に変わって行く。だが、若干当たってるのが悔しい。

あの朝のチヤホヤ時間はもうない。あれはドレイクという存在に私という干渉物を経由して近づきたかっただけの人たちだったのだろう。それを失った私にそんな黄色い声はない。あるのはただ冷たい目線。いじめの空気を肌で感じ、いじめ問題の重大さを実感した。

多くのヒソヒソ話と疑惑の眼差しを浴びて、俯き加減に、どんより肩を落としてして教室へと向う。

（フン、これくらい。十年間を後ろ向き思考で生きた私が、これくらいで嘆くとお思いか！これくらい、これく・・らい）

辛い。泣きたくなる。もう泣いていいだろうか？

教室に付いてからもそんな状態は続き、ホームルームが始まるまで苦しい時間が続く。

（う、うう・・・わざわざ早くに“家”を出たのが間違いでしたっ！　早く来た分、さらに重たい時間が増えるだけじゃないですかっ！）

眠くもないのに、辛い現実から目をそらすために机に突っ伏すことを決意する。寝たふり作戦と題したこの計画を早々に開始を決意した。

「九重さん、あの・・・」

寝たふり作戦は開始前に打破された。馬鹿な、情報がリークされているのか！？　私、サトラレ？

そんな暴走している思考の私に、二人のクラスメイトが私の机の隣に現れ、話しかけてきていた。

遂に来たかと身構える。私はいじめなどに屈しない、と心に誓う。心を強く持つんだ撫子っ！重たい視線と疎外感でいじめに発展されることを考えていた時点で心の弱さだと感づかない時点でダメな気もするが、強く生きると花ちゃんに誓ったような、誓わなかったような・・・

と、前向きそうで全力で後ろ向きな思考な撫子ちゃんは、びくびくしながら学校に来ていたのだが、たぶん誰も知らないだろう。

「・・・なんですか？」

二人の顔も見ず、しれっ、とさり気なくクールに冷めた返事で対応する。苛められるのは舐められているからだと聞いたことがあるため、私はあえてクールに対応した。

だが、これで少しはいじめの空気は改善されると考えたのだが、後から思えば端から見たら私の対応の仕方はかなり嫌な奴なのでは？　さらに状況を悪くし、イジメられるのでは？

ビクッと二人が震えるのを視界の端に捉える。

逆効果だったか？　と不意にクラスメイトを目視すると、二人はあの時不良に絡まれていた内の二人、私を遊びに誘ってくれた元気なポニーテールの娘とカワイイ、ソバージュヘアのクラスメイトだった。

二人は震えていたり、怒ってもいなかった。ただ二人は頭を下げていた、とても深い謝罪の意思を込めているのか顔も見えない。

「「あの時はゴメンなさいっ！！」」

「・・・・ふへ？」

不意を突く形の唐突な謝罪の言葉に、一時思考が停止する私。なにかしたのだろうか私？

「あのナンパ男たちに掴まってた時・・」

ああ、あの時・・・。あの後に起きた出来事のスケールの大きさに、その前の記憶があいまいになっていた。簡潔に言うと忘れていた。それに私は何もしていない、謝られることを何一つしていないのだ。

予想外の行動に対して、免疫のない私はうろたえながら返答する。

「別にいいんですよ、私なにもしてないですし」

「そうじゃない！」

ポニーテールの方が大きく反応し私が驚いたため、彼女は少しばつが悪かったのか泣きそうな表情になる。

「私たちは・・・私は九重さんを・・見捨てて逃げた・・・だろ」

「見捨ててなんか・・」

「でも、あの後も助けにも行かなかったんだ。警察に言ってみた

けど、全然相手にされなくって・・・。そのあと何て、皆も自分のことじゃないみたいに・・・」

なんとなくわかった。彼女が悔やんでいるのは私を助けられなかったからではなく、助けに行かなかった自分自身なのだ。だから“けじめ”を欲しがってのだ。これぱかりは彼女のような性格では自分自身を許すことができない。いいだろう、与えてやろう。

「許しませんっ」

ちょっと拗ねた感じに言ってみる。顔もちょっとムくれて、顔をそらしてみた。

彼女たちの顔は青ざめ、クラスの空気も悪くなる。

「そ、そうだよね・・」

「そうです。いつも元気なあなたが“あんなことぐらい”で元気を無くして落ちこむなんて許しませんよ?」

「「!!」」

ちょっと二人ともびっくりしてる。私だって冗談ぐらい言えます。片目を閉じて、悪戯っぽくする私の顔を見て、二人はお互いの顔を見合って、苦笑い。

「九重さんでも意地悪言うんだね」

「撫子」

「「え?」」

「撫子って呼んでもらえませんか? それと・・・」

自分を縛る檻はもうない。抑圧する力もない。もう束縛はない。ドレイクという存在から生まれた自分を取り巻いていた感情を縛る鎖を引きちぎってみよう。

自分から歩み寄ろう。そして、いつか私が憧れたあの笑顔を自分もできるようになろう。

「私と友達になってくれませんか」

――撫子は知らない。もう自分がその笑顔をしていることを。

ゴツッ

そこはソドムの一角。各種の雑貨が乱雑に置いてある店。
あまりに乱雑に配列され、製造場所も日本のみならず、世界規模の範囲を網羅した品の数々が棚に放り込まれている店。一様、雑貨店の形式である。
オールジャンルな店の品と数多の閉店セールを行うことで客足も多いらしい。揺りかごから遺言書まであると店長も、まあ、私が豪語していた。
一番奥のござにその店の長、世間一般から“ハジ”という“偽名”で知られる情報屋の額(ひたい)に只今、ごつごつした黒い物体、世間で“銃”と呼ばれるモノが押し付けられている。
「え～。店では強盗は禁止ですよぉ～。旦那」
「黙れ、死ね」
ドォンと、マジで撃たれたら当たったら、マジで死ぬこととなる部分へのダイレクトな一撃を首を傾けることでギリギリ躱(かわ)す。
「普通、撃ちますぅ？」
「どうせ避けるだろ」
目を据わらせ、銃の硝煙を吹き消すこの人。魔王がいたらこんな奴こと、進・カーネル。
全く、冗談がお好きな人だ・・・次第に本格的に殺しに来ている気がする、そろそろ冗談はやめておこうかな？
「で、だ」
「はあ、うちの店はなんでも取り扱ますよ。なんにします？　そういえば最近、提携するっていう話が出てる企業同士の黒い話もあります。あ、旦那はプルトニウムとか入ります？」
「なんで、俺にあの女を助けさせた」
ござの前のレジカウンターにどかっと座り、横眼でこちらを目視する進の旦那。その目には殺意が少量と真面目に私の意図を探ろうとする意思が灯る。なるほどね。
「はて？」
「とぼけるな」

「どこからだとお思いで？」
「一番始めだ」
「始め？」
「撫子が不良と一悶着起こしてた路地裏からだ」
ほ～う・・すばらしい！！　グレイィト！
“お前から”受けた仕事の後に、なぜか“あの道を通ったほうがいい”という事になった。偶然という見方ももちろんできる。だけどな、なんで俺はあの道を“迷うことなく”見つけられた？　俺はあの道へと至る道を通ったことが一度もなかった。なのに、“迷うことなく”あの道だと理解できたんだ」
「え～。言いがかりっぽいよ、旦那～」
「あの後なんでタイミングよく俺たちの前に現れた？　なにより何で初対面だったはずのドレイクに使役されていた撫子の友達が俺の名前を知っていた？」
「ん～。まだ足りない」
「・・・もう一度言う、お前の目的はなんだ？」
訪れる沈黙。もとより客もいなかった店内からさらに生き物の気配が消える。
数秒の薄気味悪い静寂後、進の旦那は大きくため息を吐き、帰るために立ち上がろうとする。
「・・・もう、どうでもいいか」
「そうそう♪　気にしない、気にしない。あんまり怒ってるとハゲますぜえェッ！！」
立ち上がり、振り向きざまに引かれるトリガー。発射された弾丸の軌道に沿って、体を反らして回避ィィ！！　同時に語尾も上へ反り上がる。
後へ豪快に倒れた拍子に、背後に積んであった書物へ背面ダイブし、本の海に溺れる。
旦那はそのまま帰ろうとしたが、急に立ち止まる。
数秒後、乱雑に放置してあった商品カゴにあった白いカチューシ

ャを拾い上げ、ワンコインをこちらに放り投げ、そのまま出口へと向う。

再び、店内に静寂が戻る。

「ふ～。まったく、旦那ってば」

帽子の位置がズレてしまった。そこから覗く“翡翠（ヒスイ）”の瞳が薄暗い空間に灯る。

「成長も早い。さすが、“あの方”のご子息だ・・・」

「こんなに早く“契約（コントラクト）”をするとは予想外だった」

「期待してますよ、お二方（ふたかた）」

自然と口がほほ笑んでしまう。旦那が大きな勘違いをしている。ドレイクとの戦いの後の処理、ドレイクの会社への財産分配や世界的株価暴落を防いだり、死の真相の偽装（世界では飛行機事故に巻き込まれたことになっている）や、撫子さんのお友達が掛けられていた呪いを少しばかり薄めてあげたりした。

だけど、アッシは出会いに関してはなにも細工しちゃいない。旦那と撫子嬢が勝手に“偶然”出会って、旦那が“勝手に救った”んだ。

「ほらよ」

カポッと何かが私の髪に取りつけられた。

鏡を見ると、それは綺麗な白いカチューシャだった。

夢か何かだろうか？　別に誰かから何かもらうのが初めてなのではないが、それが進からもらったとなると信じられなかった。ホッペを自分で抓（つね）る

「気に入らないか？」

「い、いえっ。・・・嬉・・しいで」

自然と顔に熱がこもった。

「首輪が良かったんだがな、あの店じゃ犬用しかなかったんでな」

急激に自然に熱が冷めた。

シレッと最悪の事実を何か言った気もするが、全力で聞き流そう。

「アリガトウゴザイマス」

「感情がこもってないな返事だな。感謝しろよ。なにせ居候の身に、プレゼントまでしたんだからな」

嘘だ。逃げないように契約の証しにしようとしたに違いない。だが、痛いところを突かれて胸が痛い。それが判ってか、顔をニヤニヤさせる進。うっ、うう！！

現在位置は進の事務所、私は現在、ハジさんにもらったメイド服で床をゴシゴシ、とモップでふいている。進は新調したソファに寝そべり、新聞を読んでいる。ちなみに彼は白いワイシャツと黒いチノパンとサンダルというラフな格好をしている。

現在、私はドレイクとの戦い後、進の家に居候している。

なぜか？　それは簡単。進への依頼料返済のためだ。

進への依頼料は現在、無一文の私には払えない額だった。いや、普通のサラリーマンの１０年分の年収ほどの額なので、普通に無理だ。

そのため、私はこうして住み込みの雑用などやっている。

「しかし、おまえも馬鹿だな。あのままドレイクの資産をもらっとけば、俺への返済どころか大金持ちになれたのによ」

「それは、ダメです。あれは私のお金じゃないんですから・・・」

ドレイクの資産はすべて彼が経営していた会社の方が回収していった。会社の役員さんからは私にも莫大な金額が回る予定だと言われたのだが、私はそれを辞退し、それを全て彼の趣味等の犠牲になった者たちの家族等に寄付するようにお願いした。

だが、家族ごと消されていたことが多く、ドレイクの忠実な重鎮たちの謎の失踪（血を与えられた下僕が大半だったため、ドレイクの消滅とともに砂になって消えたらしい）のために特定が出来なかったらしい。そのため資金の一部を使い、墓地に名もない墓を造った。

そのため、私には一銭もめぐってこなかった。唯一の救いは、不憫に思った会社役員の方が経資金を使って、高校三年間の授業料を

一括で支払ってくれたことだ。
「ふん、お偉いことで」
「あなたへの支払いは、必ず私自身が支払いますから」
腰に手を当てて、胸を張って進へ宣言する。進は私の方を見もせずに適当に、ああ頑張れ、頑張れ・・・と言ってくれた、投げやりに。
「・・お前、言葉の最後の、値引きはしないって言ったことを聞き流したろ?文字が・・・ってどういうことだ」
「サ～!お掃除、お掃除!!」
実際は、進は料金支払いまでの衣食住は約束してくれている。事務所の雑用係で支払う方法を提示してくれたのも彼だ。ちまたでは、魔王だったら～なんて言われてるけど優しいところもある、と思おうとしたところでふと思った。
「進?」
「ん?なんだ。バケツなら家には一個しかないぞ」
「違いますよ。進は何なんですか?」
何なんですか?普通の人は何がなんだかわからないだろうが、進には伝わるだろう。
「俺が何と人間とのハーフだってんだろ?」
目も向けずに、返答してくれた。
進の血を取り入れたドレイクは純血の吸血鬼だ。それをいとも容易く犯し、消滅させた進の血。少しだけ・・・
「俺が怖いか?」
新聞から目を外し、こちらにその紅(あか)い真っすぐな色を向けてくる。
「いえ」
こちらも真っすぐ見つめ返す。そのまま不思議な沈黙が流れる。
「そうか」
進は再び、新聞に目を戻す。新聞に隠れた顔は見えないが、少しだけ声に温かみがあった気がした。
「俺がなんのハーフだとかはわからん。それについて俺はなんの

興味もない。ただ、生きてればいつかわかるときがくるんだろ・・・たぶん」

話はこれで終わりらしい。この件に関して、進は無関心らしい。私もそれでいいと思う。進が何かに悩むなんてらしくない。

そして、思う。無視してもよかった私の話を聞いてくれる進は、やっぱり優し・・

事務所の玄関ドア（つい先ほど私が頑張って綺麗にした）が乱暴に蹴り破られ、奥側に飛来し、進が読んでいた新聞を掠め奪い、そのまま壁に激突して止まる。

・・・い。と考えていた最中の出来事に思考が停止・・することはない。・・またか。

先ほどまでドアだった場所に複数の人影が現れる。ぞろぞろと。

「お～！進のガキがやっぱり女連れ込んでやがるぜ！！」

「噂話は本当だったのか！ｈｕ～」

「魔王も落ちたモノですね」

「ヒョオオオ！！」

彼らは見るからに人癖ありそうな筋肉ムキムキの不良さんみたいな人たち約２０人ほど。手にはそれぞれ銃やら剣やら武器を持っている。もうそれだけで要件は判る、殴り込みだ。

「今日であなたの命日になるのです」

「待て待て、アイツを殺るのは俺様ＦＵ」

「ヒョオオオウ」

「ゲハハハハ！お前らはどいてろ。あの時の恨みをアイツに返す時ギョァウッ」

最後に話ていた人の顔面に直径約１メートル半程度の長方形の物体ドアの角がめり込み、話を中断させ、そのまま彼の後ろにいた数人を巻き込んでドアだったモノごと後方へと消える。

一瞬の喧騒後の静寂に満る空間。

その強制的に暴力的に清められた場所の支配者は、新しく部屋の隅に私が作った武器置き場所から漆黒の大剣イザナミとハンドガン

を持って、ゆらりと彼らに歩み寄って行く。
「・・テメェら、よくも人の家のドアと読みかけの新聞をォォ。後悔させてもやらん、全身の骨、砕かれる覚悟できてんだろうなァ」
目を全開し、地の底から這い上がるようなドスの利いた怒りの声と共に彼らに憤怒の感情をぶつけることを宣言する進。
ドアは半壊され、読んでた新聞は読めないほどグチャグチャに引き裂かれた怒りが彼を暴力へと導く。
「「「上等だ、今日こそぶっ殺してやる!!」」」
「言ったなクソども!! 今度こそ冥土に送ってやるっ!!!」
一応、事務所の外でやるらしく、一斉に外へと飛び出す。後から銃撃音や金属音がするが、もう慣れた。
私がココにお世話になってから1週間。こんなことが7回ほどあった。1日1回だ。そりゃ慣れる。
再び掃除に取りかかろうとして、もう一人の私が現れた。
鏡だ。家に一つもないと進が言ったので、ハジさんに頼んで取り寄せてもらったものだ。人一人が写り込むほど大きな鏡。・・・高かった（これも借金上乗せである）。
そこには自慢の母と似ている容姿の少女がメイド服を着ている姿が写り込む。さきほど進がくれたカチューシャも一緒に写り込む。
この間まで私は私がキライだった。でも考え直そうかと思う。勇気を出して新しい友達を作った自分を、頑張って生きようと思っている自分を好きになってもいいじゃない。
鏡に映る自分の顔に顔を近づけ、上目遣いに質問する
「私はあなたが好き？」
鏡は答えない。当たり前だ、鏡は答えない。答えは写り込む存在が知っているのだから。
むずがゆくなって半笑いし、進がくれたカチューシャをいじる。なんだか嬉しい。私の茶色の髪に良く似合っているではないか。
そう思うと嬉しくなっていろんな角度からカチューシャを中心に

ポーズを取っていると、背後に人の気配と鏡に人の影。・・・ハッ！
羞恥に顔を赤く染め、半笑いしながらゆっくり後を振り返る。
振りかえるとそこには魔王がいた。ニヤニヤして、私を見ていた。
たぶん結構前から、一部始終を。
「なんだ、なかなか気に入ってるみたいじゃないか？」
進に優しいこところがあることは否定しない。だけど、やっぱり・・・。
「・・・いじわる」

一章　終

6、契約から始る物語（後書き）

第一章、終わりです。
まあ、まだ文体なんかもしっかりしていない作品ですが、暇なら見てやってください。
辛口な評価でもかまいませんのでください。出来れば、弱い点なども教えてくだされば光栄です。どんな辛い評価でも泣きません。
アレ、天井から雨が・・・

２０１１年　４月２２日　桐織　陽

1、最後にしたい晩餐

ｃｏｎｔｒａｃｔ　２－１　　金色（こんじき）の来訪者たちと宵に歩く教気の魔剣

1、最後にしたい晩餐

重たい。
ひたすらに重たい。
そんな闇がこの場所には溜まっていた。
まるで全てを沈み込め、呑みこまんとしているような闇が。
ここは均等な四角系の檻。四方をコンクリートで囲まれ、その中央に大きいテーブルが置かれた部屋。　ろうそくの火だけが灯り、空間をほのかな光で最低限の明るさを保っている。
その光がテーブルの上の無残な現状を、惨劇の数々を照らし続ける。
――今さっきまで、ただ生きることを望み駆け続けた、大きな命が無残にバラバラに切り刻まれ、はらわたをくり抜かれ、横たわっている。
――なんの罪もなく、無邪気に生きていた女の子が、残酷にほどよく丸焼きにされ、そのままテーブルに置かれている。
――新鮮さを保っていた肌を油まみれにされた挙句、こねくり回され、原型を留めることを許されることなく丸い器に放り込まれた、もはや何だったのかさえ判らないモノ。
その他、ありとあらゆる命たちが無残な姿に変えられ、まるで断裂魔の叫びがリアルタイムで流れているようである。
まさに狂気。
多くの命が散った。そう、彼らに罪はなかった。そんな彼らはなぜ殺されねばならなかったのか？

なぜ、たった二人のために殺されなければならなかったのか！？
その二人は現在、大きな縦長のテーブルの席に着き、沈黙している。
一人は奥の中央に鎮座する男、もう一人と向かい合う形で席に着いている女。
二人の間に2、3メートル程度の間隔が空いているが、それ以上の溝が二人の間に空いていると錯覚しそうなくらい気まずい沈黙が続いている。
その沈黙を打ち破らんとするように片方、女の方が重たく、ふるふると震えながらも口をあける。
「こんな・・・こんな、はずじゃ・・なかったんです・・」
とてもとても深い後悔の念を含んだ謝罪の言葉が口から途切れ途切れに洩れる。
今度は、男の方が口を開く。
シャリ。
だが、声はない。開いたのは声を出すためではないから。
男は、その無残な姿に変えられたモノたちを口に含み、噛みちぎる、そのために口を開いた。
サ、リ。
言葉は一切なく、非道にも咀嚼(そしゃく)を繰り返している。
シャリ、サリィ、シャリ。
言葉は一言もない。本当に一言もない。
シャリシャリ。
・・・何か言ってほしい。罵倒でも、嘲笑でもすればいい。
シャリシャリ・・・ごく。
どうして、なにも言わないんですか・・・もういい加減にして・・・。
「あー」
！？　ついに男が言葉を発して口を開いた。さあ、私を蔑み、怒りと侮辱の言葉で殴りつけるがいい！！

この惨劇の現場を作ったのは、事実・・・私なのだ!!
女は待っていた。別にイジメられて喜ぶ変態とかではないが、これればっかりははっきりさせてほしかった。
重かった。
ひたすら重かったのだ。
空気が。
かれこれ、15分25秒間・・・こんな感じであった。

「撫子(なでしこ)、そこの醤油、取ってくれ」

パッと明るくなる空間。
ついに空間に現代文明の光がもどった。これが日本の夜明けか!!
「壮大なスケールの妄想の最中、悪いが・・・ただ停電してただけだからな」
一言、言い終えた男、進(しん)・カーネルは再び“食事”に戻り、バリバリと無残に変化したモノたちを・・
「ちなみに、最初のは上から、マグロの生け作り、黒豚(メス)の丸焼き、最後のはポテトサラダの盛り合わせだ」
さらに付け加え、食事に戻る。
が、不自然に目だけは私を真っすぐ見つめている。
真っすぐ、死んだ魚みたいな目で私を・・・九重(ここのえ)・撫子(なでしこ)を見据えている。まるで責め立てるように・・・。
そして、沈黙に戻る。沈黙は続く、闇で隠れていた紅色の非難の目線が今度は直に見えるためにさらなるストレスが発生する。
もう無理だ。すべて私に非があるのだろうと、もう限界だ。もう、もうもうもう。
「牛か?」
プツっと、私の何かが切れた。
プニィィャャャャアアアア!!!　もう!イヤ!!
「もう、いい加減にしてください。非難したり!怒ればいいじ

ゃないですかッ！！？みんな、みんな私が悪いんですからぁぁぁぁ！！　ごめんなさい（哀）！！・・・ごめんざいぃ（泣）・・・ゴメンナサイッ（怒り）！」

「最後は逆ギレか？」

「う、うう」

私の感情任せの反撃の声は、とてつもない冷気にも似たテンションを纏った進に速攻で撃ち返される。

撃沈だ。もうなす術は無い。泣くしかない、泣くっきゃない！！目から涙を溢れ流しながら、変なテンションで平謝りする私にさらにめんどくさいオーラを全開にした進が溜息とともに問いかけてくる。

「で、これはなんなんだ？」

これ、とはきっと目の前の豪華な・・お値段も相当豪華な料理の数々のことだろう。

どれも高級料亭にでも出そうな代物である。そして、どれも高級料亭の料理人たちが使う食材で作られている。

私は咄嗟に目を反らす。脂汗が吹き出る。

「こ、これは・・・」

あれは一日前。

進との契約により、進の家（彼が言うには事務所）にお世話になってから一カ月ほどになるのだが、その間における食事はすべてデリバリーだった。

初めの頃はこれまで専属の料理人による食事がほとんどだったために、即席で送られてくるファーストフードへの物珍しさで私も疑問に思わなかった。

だが、さすがに一カ月過ぎてもピザやハンバーガー、チキンやラーメンの無限サイクルを続けることは苦痛であった。

なにより多量の脂質の影響で体重計の針がさらに多くの数値を刻（きざ）んだことがショックだった。

最近できた友達に、“撫子、太った？”と言われたのも酷いショックだった。

居候＋借金＋恩義＋契約で、進には頭が上がらないため強く出られないが、食事事情の改善を求めた。

求めた結果は“めんどくさい”の一言。

対する私が出した提案は“私が作りますから”。

その言葉に興味を示した進が後に言った一言が、全てを決した。

「確かに、お前に“わかった。期待してる、うまいの頼む”と言ったけどな・・・」

いつもポンコツ娘、完璧偽装娘（かんぺきぎそうむすめ）、鏡の前のナルシストとか、いろいろ変なあだ名で私を馬鹿にしていた進。

どこかで見返しやりたいと思っていた。

そんな彼の“期待している”の言葉は私の心を激しく奮い立たせるのに十分だった。

すぐさま、何でも屋を自称する男（ハジさん）に連絡、私の知る限りの“料理屋さん”を経緯し食材を調達してもらい。

私の知る限りの“おいしい”料理を作った。

その出来栄えは高級料亭の料理長すら驚愕するものであったはずだ。

これで私の評価が上がる。いつも借金とか、契約とかで強く出られない私を常識しらずなどと馬鹿にしていた男を見返す事が出来る。

これでも私は理由や経緯はどうあれ、上流階級のお嬢様のたしなみとして料理作法から調理法などは完全に叩き込まれているのだ。

そんな私の実力をあの男は知らないのだ！フハハッハ、目に物みせてくれるわ！とか・・・・

「とか思っていました・・スイマセン」

「そうだな、反省しろ」

彼は私に見せつける様に、横長の手帳・・・銀行の通帳を開く。

「おかげで、今月の生活費が尽きそうだ」

ぺら、ぺら、と六ケタの数値から、四ケタの数値へと一気に下降した銀行通帳をまるで我が罪の証明かのように私に見せつける進。

私の知っていた料理は、どれも最高級の料理であり、味は保証できる。当たり前だ。腕の自慢ではなく、食材は何をしてもうまくなるほど“お金”がかかっているのだから。というより、これでおいしくなかったらダメだろ的なお値段だった。

そんなお金をいっぱい使った料理の数々に確かに、進は驚いた。料理の出来栄えよりも、総合計の“請求書に”。

今まで上流階級暮らしが長かったお嬢様、撫子ちゃん。自分の普通の食事が、平凡を常に目指す庶民の食事とずれていた。というか、基本的な常識の定義がズレていることを今さら感じて打ちのめされていた。

「だって・・・今まで、これぐらい普通で・・・」

「お前は“普通”という言葉をもう一度、学習し直してこい」

言い訳すら一刀両断する進。今、彼の背後には黒いオーラが今の彼の激情を表すかのように噴出している。まさに魔王。う、うう、怒ってる!!

ついに追い出されるとか、震えながら覚悟した撫子ちゃん。のもつかの間、進は盛大な溜息とともにン何かを悟ったかのような表情になった。

「・・・まあ、お前に全部任せて、かつ、あのエセ情報屋を始末(殺)しておかなかった俺の責任でもあるしな・・・」

「ゆ、ゆるしてくれるんですかッ!?」

「許すか、ポンコツ。反省してろ」

ついに娘の一文字すら失い、称号“ポンコツ”を得た私は、きゅう〜と、さらに小さくなる。

「・・・しっかし、どうするか・・」

進は肘を突き、足を組んで考える人状態になっている。別に地獄

について考えている訳ではなく、今現在の資金でどう乗り切るかという命題について思案しているのだろう。

「う、売らないで！」

「・・・誰が売るか。冗談なんぞ言ってないで・・・早く全部、食えよ」

進、ドヤ顔。

「え！？」

私、驚愕。

なにせ、頑張り過ぎて１０人前くらいあるだろと言わんばかりの、山盛りフルコースが眼前に展開している。

「お前は自分の責任を全うすればいいんだよ。ほら、たっぷりあるぞ・・・お前が張り切って作ったんだ。責任もって残さず食えよ」

「そんな！これ全部なんて食べたら太・・」

「こいつらはお前が奪った命で出来てるんだ・・・食べ残すなんて真似・・しねーよな？」

進の紅い瞳が爛爛と輝き、私を射抜く。

その視線から逃れるべく、目線を反らす。

目を反らした先には、たくさんの料理たち。

丸焼きにされた豚やマグロの生けづくりたちが、死してなお、残留思念で私に語りかけてきているようであった。

訳　「「さあ、お食べ・・・がつがつ食って・・・ブクブク太ろう」」

「「い、イヤァァァァァァァァァァァァァッ！！！」」

撫子は、この夜、決意する。

食事は、人数ぶんしか作らず、バランスを考えて、食材たちに感謝しながら作ろう。

なんだかんだで、進は料理を食べてくれた。私の四分の一くらい。

私が食べ過ぎで、意識を失いかけている。ゲフ。
「仕方ない・・・仕事を入れるか」
朦朧とする意識の中で、進のそんなつぶやきが聞こえた。
私の目に映る進は、テーブルに頬杖をつき、彼のトレードマークでもある紅(あか)い瞳は遠くを見つめている。
彼の食事中の恰好は、いつものよれよれのワイシャツに青色のジーンズだった。髪はぼさぼさで調っておらず、雰囲気のあるディナーでの格好ではない。
対する私は、白いドレスに身を包み、さり気なく、薄く化粧もしていた。
私にそばにある鏡は私を写す。
日本人には珍しい、亜麻色の、いや茶色の地毛に、調った温和そうな顔立ちの美少女といって差し支えない女が、白いディーナードレスでドレスアップしているため童話にでてきそうな、純白のお姫様のように見える自分が写っている。
そんなお姫様は今、“魔王”のそばで安息の日々を送っている。
騒がしくも、でも生きている実感がある安息の日々を・・・
ああ、意識が落ちる・・・。
今日も、また進に変なところを見せてしまった。
意識が睡魔に吸われる瞬間、その寸前、ふと思う。
今日は別に特別な日ではなく、普通の日だ。
ただ、進に期待されたというだけの、普通の夕食のはずだ。
だから、思う。
(なのに私、どうしてオシャレなんてしたんだろ?)
睡魔に取り込まれる瞬間の甘酸っぱい感情を深く考える前に、撫子は瞳と意識を閉じた。

ここは再び西暦の年号において第三次世界大戦を起こしてしまった世界。

その中で、戦争の傷跡から生まれた日本の首都東京の隔離区“ソドム”で暮らし、魔王と呼ばれる青年“進（しん）・カーネル”。

彼への借金（依頼料）返済のため（今夜、増額した）彼に付き従う、今や完璧を大きく下回り、ポンコツ娘とグレードダウンした女子高校生“九重（ここのえ）　撫子（なでしこ）”。

ソドムの夜は今日も、銃弾の音と悲鳴が木霊する“普段”の日常。

彼らは今夜も少しの喧騒の後に床に就く。

これから起る、新たな血を見る喧騒の序章とは、夢にも思わずに・・・

1、最後にしたい晩餐（後書き）

二章を始めようと思ったのですが・・・章って、本で言う1巻、2巻的な意味なんでしょうか？　自分はそんな解釈で投稿したんですが・・・。

2、金色の来訪者たち

2、金色（こんじき）の来訪者たち

コツ、コツ、コツ。

深夜の帰り道だった。

友達と久々に遊んだ後の帰り道。はしゃぎ過ぎてしまったのか、いつもより帰宅が遅くなってしまった独身ＯＬの女性は人が見えない道を一人っきりで歩いていた。

コツ、コツ。

自分のヒールが地面を叩く音しか聞こない暗闇を、壊れているためか普段より薄暗いと感じる電灯が照らすだけの道。

繁華街を離れた人気の少ない住宅地に面したそこを、彼女が迷いなく選んだのはもっとも早く家に到着するという安易な思考が判断した結果だった。酒が頭を巡っていたこともあるだろう。

だから、だろうか。

コツ、コツ、コツ、カツ。

彼女がその道が人気が少ない理由を、忘れていたのは・・・

コツ、カツ、コツ、カツ。

足音が増える。自分とは違う、足の音が

確かに、後ろから聞こえてくる。

コツ、カツ、コツコツ。

彼女の足は衝動的に速度を上げる。

酔っていた思考をはっきりさせたのは、後ろの足音と横目に入った“不審者注意の看板とそこに供えられた多くの花束”。

コツコツ、カツカツカツ。

自分が速度を上げると、後ろの足音も早くなる。これは、そんな、嘘だ。

なぜ、自分が。自分は普通の生活を送ってきた普通の人間だ。そんな自分がテレビやドラマで見る殺人鬼や変質者になど追いかけられるはずがない！

コツコツコツコツ、カツカツカツカツ、カッ、カッ、カッカッ！！

追いかけてくる足音が狂気の笑い声に変わり始めたように思えた。だが、彼女はまだ追いつかれてはいない。

しかし、心は確実に追い詰められていた。

私は何もしてない。普通の日常を生きていただけだ。それなにの、どうしてこんな目に、どうして、それなのに、それなのに、それなのにそれなのにそれなのにそれ

度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も、体中を弄ぶように、まるで痛みを教え込むように執拗に切り裂き続ける。
オジサンは遂に原型をなくした彼女からナイフを抜き取ると、とても残念そうな笑みを浮かべた。
もう致死量の傷と出血量とショックで死んでいるはずの彼女の意識はなぜかあった。
先ほどまで生きることに執着していた彼女は、今や痛みで苦しみそれでも死ねないことから、痛みと恐怖からの解放を、死を望んでいた。
だが、痛みを痛みとも思えない痛みで頭の中がグチャグチャになり、次第に自分の温度が無くなっていく感覚に襲われた彼女は最後に見たものは、ナイフを片手に笑うオジサンの口の動き。
彼は言った。
「あ～あ」

「君も僕の愛が判らないのか!!・・・って」
「え～と、それは怖い話です？　それとも気持ちの悪いストーカーの話なんでしょうか？」
一方、こちらは雲すら逃げ出したような晴天が空に広がるお昼時の教室。
私、九重（ここのえ）　撫子（なでしこ）は昨日の豪華極まりない夕食のあまりで構成されたお弁当を食べながら、友達の本当にありそうな怖い話？を聞いている。
最近は、都市伝説といっただろうか。
「え～、なでしこちゃん。反応薄い！」
「ん～、ごめんね。そういう話になれてたりするんです」
（本物の吸血鬼とか、それを倒せるぐらいの魔王みたいな人とかで・・・。それに今の話怖かったですか？）
非現実を生きすぎたせいで、恐怖に疎（うと）くなった自分を嘆くような

やるせない目線を、この蒼く澄み切った空へと向けつつも友達の方へと意識は向いている。

え～、つまんない！　と口をすぼめて悔しがる、染めた茶色のソバージュヘアのおしとやかそうな女の子。

彼女の名前は星野（ほしの）　優子（ゆうこ）。先月、不良に強引なナンパをされていた同級生たちの中にいた一人だ。私が見てもどこかの良いところのお嬢様に見え、なお且つ、美少女といっても過言ではないが本人はいたって普通のご家庭の普通の女子高校生だ。

今は私の友達として、こうしてお昼時のみならず、こうして趣味の噂話や都市伝説の話をしてくれるような仲になっている。

一か月前のあの事件後に、勇気を振り絞って仲良くなることが出来た二人のうちの一人だ。

もう一人は・・・

「ふん、くだらないからだよ。そんな都市伝説」

私と対面するように目の前にいるポニーテールの女の子、名前は上地（かみじ）　智子（ともこ）。

「と、トモちゃん酷いよ！　都市伝説は人類があらゆる噂や謎を凝縮させた言わば、文化だよ」

「くだらないものは、下らないよ。優子はホント、そういうの好きだよな～。それに何も裏とか、真実とかないとつまんないもんだよ」

優子と対照的に、活発で、男勝りの度胸を持つ女の子だ。こちらはスポーツ万能の美少女でバスケットボール部に所属している。

ガタガタガタ

「と、智子ちゃん？」

もっと、多くの人と仲良くなりたいが、没落したとはいえ私は元お金持ちのお嬢様であり、昔のあだ名“完璧淑女”が後を引いているのか未だに大半のクラスメイトや学内の人はよそよそしい。

そんなアウェイ空気の学校生活で唯一、親しくしてくれる二人も始めは同じような態度だったが、今は本当に親しい友人になれたと

思う。
ガッガガガガタタタタタ。
「なに、どうしたの？　撫子」
優子ちゃんは“なでしこちゃん”、智子ちゃんは“撫子”と呼んでくれている。始めは“さん”とか“さま”とか接尾語が付いていたが、今は普通に会話できることがホントに嬉しい。
ガツツツウ、ガガガ！
私たちは現在、昼食をとっている。最近は一つの机にイスを持ち寄り、一緒に団を組みながら食べることが多くなった。
今日は私の机、昼の日差しが差し込む教室の後端に集まっている。
ガガガガガガガ
「あの、ね」
「何？もう私たちは友達なんだ。言いたいことは言い合おうよ」
「う、うーんとね」
ガガガガガ、タタタタタ！
今現在、私の机は局所的な地震に襲われている。震源地は目の前の智子。
彼女の足が小刻みに上下に高速運動し、いわゆる貧乏ゆすりにより私の机は超振動を受けている。
智子はアレなのだ・・そう、たぶん。まぁ、人間なのだ。苦手なものくらいある。
触れないで上げようと無視を決め込むことに決めた。触れない方が良い場合もあるはずだ。
「な、なんでもない」
「っぷ、ハハハハハ」
私の親切心とは正反対に、優子はもう耐えられないと噴き出してしまった。
「そう！これが見たかった！　やーい、トモちゃんの怖がり！！
てか、凄い反応でしょ、撫子ちゃん！　これを見せてあげたかったんだ～」

「ちっ、違う！　こ、これはじ、人体アブトロニックと言ってだな！」

再び、優子が笑いだし、智子がそれに怒りだす。それを見て、聞いてかクラスの中に笑い声が起きる。

明るい喧騒の中で、私は一人、幸せを感じる。

この時だけではない、あれから1カ月は毎日のように身震いするほど幸せだと感じていた。

私にとって学校を問わず、日常自体があの恐ろしい吸血鬼に常に何処からか監視されているかわからない緊張に縛られた世界であり、苦痛と絶望の日々だった。

教室に起る喧騒や笑い声は、私を嘲笑っているかのようだった。

民家から覗く温かい光が、家族を奪われた私の心を悔しさで焼いた。

私を完璧な淑女と呼んで、うらやましいと遠くから噂する声は、誰も私を理解してくれない現実を再度突きつけられているようで悲しくなった。

だが、今は違う。

教室に起る喧騒や笑い声には、私も混ざり、皆で楽しさを共有する感覚が嬉しい。

民家から覗く温かい光を見れば、魔王みたいな男が待つ家に帰りたくなる。

前の様な噂は無くなり、遠くからではなく、皆から声を掛けられるようになり、普通の級友同士の会話をするようになった。

「な、撫子!?　泣くほど笑うなー！」

「ほら！　なでしこちゃん。　私が言ったとおり、おもしろかったでしょ！」

二人はそのままドタバタと教室を走りまわり始めた。そんな彼女たちを見てみんなが笑ったり、呆れたりし始める。

そんな中で、私は座りながら俯き、笑ってしまう。

本当に、涙が零れ落ちるほど、笑ってしまった。

2

予算、1万5千円。

「撫子？　着いたよ」

天気、晴天。現在時刻、土曜のＰＭ１３時。

「なでしこちゃん？」

気温は五月の半ばの平均気温。ブレザーを着ていても丁度よい気温だ。

私は今、新たな世界に踏み出そうとしている。これは、人類には小さな一歩ではあるが、花も恥じらう女子高校生、九重　撫子には偉大な一歩であることは確かなのである。さあ、いざ行かん！新たな世界へ！

そして、一歩を踏み出

そうとしたが、　プシャーという音と共に目の前のドアがピシャッ、と閉まった。

「「待った！マッタ！待ったッ！！！　ストップッ、駅員さん！一人ィ！　もう一人、降ります！」」

ドアの外側で、優子と智子が駅員に電車のドアの再開閉のお願いを綺麗なユニゾンしながら大声でお願いしてくれた。

「何やってんの！？　撫子！！」

「だっ、だって・・」

二人のおかげで無事にホームに降り立つことが叶った。

「えェー。電車からの“駆け下り、下車”はご遠慮くださいィ」

次の場所へと移動する電車の車掌か、駅員さんの抗議気味のアナウンスが鳴り響く。周りの人たちが私を、私たちを見て笑う。・・・・前言を撤回したい。馬鹿にされて笑われる楽しさの共有はしたく

ない。

「撫子・・・ッホントに電車、初めてなんだね」

「てか、モノレールね。今の」

そうなのだ。今、さっきまで乗っていた電車、もといモノレールというものに私は初乗車だった。

今まで、どこかへ行く際は必ず、専用車で運ばれていた私には道路以外の一般交通機関にお世話になることはなかったのだ。

そんな私の無恥さを今日のお昼に知った二人は、土曜の昼からはオフということなので電車に初電車体験を兼て、三人で遊びに行こうと誘ってくれた。

そうして私は無事?目的地へと着いた。それまでの道のりは苦難の連続だった・・・

「自動で動くエスカレーターの前で乗るタイミングを計りかねて、後ろに渋滞を作るわ・・・」

「切符を買わずに、そのまま改札口を通ろうとするわ・・」

「「あげく、乗車の瞬間、転んで男性の股間へ顔面ダイブするわ」」

二人はこれまでの冒険の数々を、疲れ切った表情と口調で私に向ってため息をつく。

ショボン・・・すいません。

「まあ、着いたことだし、良いか。撫子、優子、行こう」

「おうおう!　いざ、凱旋の時だよ!　なでしこちゃん!　かなりおもしろっ・いや、不幸だったことは忘れて!　さぁ!」

二人とも・・!!　こんな良い友人を持てて、なんて私は幸せ・・・優子ちゃん、今私の不幸をおもしろいって言いかけませんでしたか?

ぎこちなく改札口を出てから、私たちを迎えたのは周りの喧騒と眩しいぐらいの太陽の光。

「ここが・・・羽田空港ですか?」

私は実際、空港と名前が付いているので殺伐とした風景を想像していた。だが、目の前には繁華街顔負けのお店などが立ち並び、人の往来が激しく、渋谷や新宿、池袋と見間違えるほどの活気を見せている。

第三次世界大戦で被害を受けたのは、なにも現在のソドムの位置だけではない。東京のみならず全国にも大小あれど被害は出ていた。交通各線、特に空港や港などの外交関係の施設は酷い有り様を呈していたらしい。

首都圏にほど近い羽田空港は滑走路から周囲の施設をも大破された。今私が乗っていた路線も、戦争前とその後では位置的な違いもあるらしい。

そんな状況から移転も考えられたが、当時の人々は死力と資力をつぎ込み、空港を復興。それどころか周囲の施設なども改装、改造が始まり、技術力も上がった現在では貨物や高速道路は地下へ消えた。戦後の復興で新たな都市機能の中心地にと声が上がるほどのさらなる一“都市”へと進化したのが、現在の羽田空港なのだ。

「さあ、まずは服を見にいこう」

「え〜、腹減ったよ」

「・・・お昼、食べたばかりだよ。トモちゃん・・」

私は心躍っていた。こんな形で、友達と出かけたことなどなかったのだ。

今日は良い日だ。きっと神様がくれた運が良い日に違いない。二人がこちらを振り返って、笑顔で手招きする。どこから回ろうかの計画を立てるようだ。

今日は楽しもう。そう思い、二人の元へと駆けだす。

そして、知った。一万五千円では繁華街という場所を全力で楽しむことはできないということ。なによりお金の尊さを、一着、数万の値札が付いた洋服と一つ七百円の豚まんで学んだ。・・値札、見とけばよかった・・・。

現在時刻、ＰＭ１５：００。
私たちは、空港前の道路に備え付けられたベンチに腰掛け、休んでいた。
周りには、斜め前に黒い高級そうな乗用車に背を持たれかけながら、缶コーヒーを飲む黒いスーツとサングラスで正装したオールバックの怖そうな男の人と、私たち以外は誰もいない。
優子によると古いターミナルらしく人が寄り付かない場所らしく休憩にはうってつけの場所らしい。
優子は、お気に入りのブランドの服やらアクセサリーを買いあされたために、とても満足した表情をしている。
智子は、前から食べてみたかった豚まんを食し、その他いろいろな食事ができて、お腹と心が満たされたために、幸福な表情をしている。
私は、二人について行き、自然と軽くなった財布の中身にもう帰りの電車賃しかないことを確認してしまい、二人に見られないように顔を背け、ひどい憂鬱な困った表情で溜息一つ。
「さぁ！次はどこ行く！」
「そうだな～」
（！！）
ビクッと肩震わせ、戦慄する。もう持ち合わせはほとんどない。
このまま行って、お金のないことが分かれば、きっと二人は私に気をつかっちゃうかも・・・
私がそんなことを思いながら、眉根をよせながら困り顔になってしまっていると・・・
「なーに、困った顔オンリーの百面相なんてやってやがる？」
ハッとなる。どこかで聞いたことがある声！？
声の発生地点は私の視界の斜め前にある高級そうな乗用車で缶コーヒーを飲んでいた怖そうな人が、とてつもなく聞き覚えがある声で、私を“また”馬鹿にしてきた。

優子と智子は、そんな一見堅気じゃない男の乱入についてこれずに放心したかのように困り果てている。

「・・・もしかして、進？」

「もしかしなくても、進・カーネルだよ」

サングラスを片手で取ると、見間違うことはできない進の紅色の瞳が爛爛とそこにあった。

私が進だと人目で判らなかったのは、彼の格好のせいだ。いつもはワイシャツ（いつも私がアイロンをかけてる）に、ジーンズ（この間、水洗い時に水が真っ赤に染り、私が絶叫した）。その上から黒いコート（コートを洗濯機に入れようとして、怒られた）を着るのが進の通常のスタイルなのだ。

今、目の前にいる人は黒い下ろし立てのように綺麗なスーツに身を包み、きっちりした清潔感が溢れている。いつもぼさぼさの、若干癖っ毛のため乱雑な髪の配列も、今や整髪料でオールバックにきっちり整えられている。

これを進だと見抜ける人間はいったいどれほどいることだろうか？

「なに目玉飛び出そうなくらい驚いてやがんだ。それよりも何やってんだ？　撫子」

「え、ええ～と」

言えない。遊んでましたなんて言えない。

昨日の大量出費を出した張本人が、遊んでました、なんて言え

「友達と遊んでんのか」

ニャワーーーー！！

進は連れの二人を見て、そう解釈したようだ。いや、まずここで見つかった時点でもう遅い。

「あ、あの、その・・」

「そんでもって金がないから存分には遊べない、ってとこか」

イニャーーーーー！！！

私の心の中の猫さんが絶叫。バレた、なにより見抜かれた。何で、見抜くの？見抜けるぉぉ！　あぁ、どうせこの後、残高が無いこと

も指摘されるん
「しかたないから、ほら、余分に持ってけ」
ダニャ・・・・にゃ？
スッと懐から現れた三枚の紙。それはこの国では合計三万円と呼ばれる高価な紙だった。
「にゃんで？　にゃんなにゃんですか？？」
「おい、ポンコツ。さらに壊れんじゃねぇよ」
「にゃ・・くれるんですか？」
そうして手渡されたお金の意味を考えた。考えた末の結論は
（い、いいんだ！　遊んでも良いんだ！）
「ま、夜遊びはほどほどにしろよ」
嬉しさのあまり、その場で飛び跳ねそうになり、顔が熱くなる。
そう言いながら元の位置へと戻ろうとする進。・・・お、お礼ぐらい言わなきゃ！
「進！・・あの」
「ん？　なんだ。俺は忙しいんだよ。これから“デート”らしいからな」

デートらしいからな？

ピシッィ、と心中に響き渡る軋轢音。
え？　デート？
「お～いぃ。旦那ぁ、そろそろ時間ですぜ・・。あらぁらぁ、撫子さん」
進のそばに有った高級国産自動車の中から見知った顔がひょこり現れた。
ソドムで、雑貨屋をやりつつも、主婦たちの噂ばなしから国家規模の情報を商品としてを売る男、ハジさんがひょこり現れる。
彼は進と同じような格好なのだが、あいかわらず野球帽のような帽子を深くかぶっている。

「あれ、これ修羅場？　いぃや～、おもしろそうなことになりやす？」

「馬鹿言ってんな、時間だ。そろそろご到着だろ？」

デート。

その言葉の意味を確かめるべく、私が一歩踏み出すと同時に空港へと通じる自動ドアが開き、一人だけが現れた。

ただ、それだけ。それだけのことで私は言葉を失い、息をすることを一瞬忘れた。

「あら？　お待たせしました？」

私だけではない。死角にいる友人二人の方からも感嘆の溜息を吐く音がする。視覚にいる進は表情を変えないが、ハジさんは口笛を吹いて“それ”を迎えた。

それは、それがあまりの美しかったから。

その女性が現れたから。

世に“美女”と呼ばれる人物たちは数多いれど、ここまでの存在は見たことがなかった。言うなれば“美術”、いや“芸術”だ。

人と言う存在の枠から外れたかの様なその存在は進たちが待つ車へと向い、歩んでいく。

白色のセーターと青いロングスカートというシンプルな服装の上からでも判ってしまう高名な美術家が造形したかのような調和のとれたモデルのような１６０センチ半ばほどの体のラインと大理石のごとき白い肌。

調われた顔立ちには緑玉石（エメラルド）のような二つの瞳が凛とした意思を秘めていそうな吊り目の穴に収まり、薄桃色の唇から紡ぎだされた声は聞くだけで万人が意識をそちらに向けてしまうだろうと確信できるソプラノ気味の美声。

「いえ、ジャストです」

「あら、その割には車に熱がこもってないようですわね？」

なにより彼女の美しさを体現するのが、彼女の頭髪。

空港に吹きすさぶ風を受け、舞い上がる彼女の腰を乗り越えるほ

どのウェーブのかかった美しい長髪。
その色は、珍しい輝く白金（プラチナ）。
その芸術は、進が甲斐甲斐しく開けた車の後部座席のドアから車内へとスルりと入り込み見えなくなる。
え？“甲斐甲斐しく”？
「私（わたくし）にその様な、気使いは結構ですわ。あなた方はやるべきことをやるだけで結構ですのよ」
「申し訳ありません。以後、無いようにします」
黙々と、“敬語”で反省の意思を伝えたのは、もちろん進。
あの進が“敬語”で誰かの命令を“聞いている”！！？
あの自尊心の塊、生意気な奴の代表格、魔王がいたらこんな奴とか言われるほどプライドが高い彼が！？
ドアを静かに閉じ、助手席へと向う進だったが、急に思いだしたかのようにこちらへと振り返る。
「ま、気を付けてな・・撫子、なんて顔してやがんだ？」
「？」
鏡がないのでよくわからないが、自分は今、相当変な顔をしているらしく。進が顔を歪めて、何か情けないようなものを見る目でこちらを見てくる。
「それとな・・・」
「？？」
だが、パッと進の顔が豹変する。いや、ゴッと言った方が正しいか・・・
「今、お前に渡した金はきちんと“借金”の方へ上乗せするからな」
「へっ！？」
口元を皮肉に歪ませ、目は半笑い。まさに悪魔の表情。幸せ気分の後に、苦痛を与えて楽しむ奴（魔王）の顔だった。
意識呆然とする私に対してそんな言葉を置いて、早々と車は進たちを乗せて彼方へと消えていった・・・

・・・プルプル
「な、なでしこちゃん・・？」
「え～、と。撫子・・」
・・・・プルプルと拳を握り、段々に体の各部へと怒りがみなぎってきた。
「しんの・・・進の・・」
遂に爆発。
「進の馬鹿！！　アホォ！！！　スカポンタン！！！」
「昨日は確かに私が悪かったですよ・・ですけどぉぉ・・・！！ですけどぉぉぉぉぉ」

「進のっっバカァァァァァァァァァァァッ！！！

それがどんなにくだらないと思える仕事でもだ。
「クライアント。では、何処へ向かいますか？」
俺は後の座席で足と腕を組みながら瞑想にふけっている依頼人に尋ねる。
今回の仕事はこのいかにもお金持ちのお嬢様風の女の観光案内役らしい。あの馬鹿のせいで、緊急で仕事を回してもらった仕事だとはいえ・・・いや、止めておこう。そんな感情も顔に出さないのも社会人の常識だ。そんな感情一つでもあれば、顔以外の言葉や仕草にも感情と言うものは出てくるもんだ。
「・・・・・」
帰ってきたのは沈黙だったとしても顔には出さない。
「・・・ぷっ」
隣の奴が笑いを堪(こら)えられなかったのか小さく吹き出してもだ。・・・依頼人も目を閉じてるから、一発殴っても大丈夫だろうか？　いや、やっぱ一発、鉛玉を打(ぶ)ち込もう。
「・・・ここから北に・・いえ、北東へ向かってくださいまし」
「？」
急な返事に、首を回して振り返る。そこに金持ちのお嬢様風の美女はいなかった。
そこに鎮座していたのは・・・
「私(わたくし)は以外にも、多忙(多忙)なのです。くだらないことをせずに、迅速な送迎をおねがいますわ」
そこに居るのは人の上に立ち、下に命令をすることに迷いない王者の・・いや、女王の風格をその身に秘めた存在だった。
強い意志を秘めた、美しいだけでない碧眼(エメラルド)が睨んでくる。
「了解しました。では、随時に行き先を申しつけてください」
「結構ですわ」
短く区切ると、再び目を閉じて瞑想を始める依頼人。・・・なるほど、ただの女ではなかったらしい。だぶん、俺の心の内も少量の殺気で見抜いていたな。

事前に聞いていた情報では撫子と同じ年齢だったはずだが、彼女から漂ってくる雰囲気はそこら辺にいる女性とは一線を画(か)くしている。

その上に立つ者の風格は、凛とした色香(フェロモン)のようでもあり、どっかのポンコツよりも女性として意識するが、それも性別を超え、下に付く者に余計な嫌味を感じさせない一般人とは違った指導者の資質、つまり言うところのカリスマ性にも繋がっているため、反感をまるで感じなかった。

なにより年齢に見合わない大人びた印象と人外じみた白金の美しさだけでも十分、人と一線を画しているだろうがな。

そして、俺の“一般人とは違った”紅い瞳は見逃さなかった。依頼人を中心に“何か”が、通常は不可視な何かが広がり始めていることを。

「どうですかぁ？　今回の仕事は」

横からとても楽しげに運転しているハジが訪ねてくる。

「・・・仕事は、仕事だ。きっちりやるさ」

やられた。こいつの単純な仕事を普通の単純と勘違いしてた。とてつもなく嫌な予感がする。

俺は確かに非現実的な奴らと戦えるが、別に戦闘狂でも、それを追い求めるメルヘンな思考も持ち合わせているわけでもない。

なにより一か月前にあんな化物と戦わされたのだ。面倒なことは勘弁願いたかった。

「あら、そういえば・・」

窓の外の青空に今の鬱(うつ)な気分を近況報告をしようと思っていると、車内の後ろから突然、思い出したかのように、ソプラノ気味の美声が邪魔してきた。

「自己紹介がまだでしたわね」

「いえ、事前に伺っています」

「私(わたくし)の流儀ですので」

生真面目(きまじめ)な奴だな。

後部座席の美しき貴女（きじょ）は誇るように大きな胸に手を当て、俺たちをしっかりと見つめて高々と自らの名前を明かす。
自分に本当に自信のある奴の仕草だ。どっかのポンコツに見習わせたいな、まったく。
「私はローザ。ローザ・E・レーリスと申します。以後、よろしくお願いしますわ」

視点回帰？

吾輩はクレープである。あの甘いヤツである。個人名はない、ただ人々は総称でチョコレートバナナクレープなどと呼ぶ。
吾輩は確かに食べられる存在であり、一瞬の存在であるのは覚悟の上であの厚い鉄板の上からやってききている。ただ一言いいだろうか。
今、吾輩を食べようとしているのは女性でしかも人で言うところ美少女という奴であろうことは間違いない。同時期に彼女と同様な美少女のお供たちも吾輩の同朋であるクレープたち（後輩）を買ってくれたことには感謝であり、嬉しい限りだ。
だが、言いたい。
せめて、そんな般若みたいな恐ろしい怒りの表情で、ストレス解消のために頭からかじられたくな
カブッ
“削（けず）れゆく”意識の中で、思う。
せめて、おいしそうに食べてほし・・かっ・・た。
残された後輩（クレープ）たちは嘆き、叫ぶ。
「「チョコレートバナナクレープせんぱーーーーーーーーーーーーーーーい！！！！！！！」」

そんな干渉不能な世界の悲劇があったなど露知らず、ガブガブガブ。

現在地は空港の新第一ターミナルの中。世界に誇れる空港に相応しく、日本食のみならず各国の特色ある料理をも提供することが出来るレストランやお土産などを取り扱う商店が立ち並ぶ巨大施設だ。

そんな世界から来訪する者、また外へと旅立つ者たちが行き交う国の顔とも言うべき御所（おんところ）でひと際目立つ存在がいた。

たぶん日本に初めて来た外来人はこう勘違いするかもしれない“日本の美少女は、まるで怨敵を見据えるようにクレープにかじり付く”と。

「おいしいな、クレープは。　借金で買ったクレープはとてもおいしいですね！！」

一人、呪うような詩を口ずさむは私、九重　撫子です。それが何か！！

「・・・とてもうまい物を喰っている様な表情じゃないな・・」

「借金って・・・な、なでしこちゃん・・」

ここに鏡が無いので自分ではどんな表情かもわからないが相当怖いらしい。今は知ったことではありません！！

（進のバカ、バカバカ、カバ！！　なんですか！何なんですか、アレは！！人を幸せ気分に浸しておいてからのあの地獄（変化）への突き飛ばし（球）は！！　それにデートっ！　デートぅて何ですかぁ！）

頭の中枢神経はすでにあのいじわる魔王のことでヒートアップ。

自分が完璧淑女なんて言われてたことも忘れて、怒り一色の染まりきり、ここにはいない怨敵へ苛烈な言葉を心の中でぶつける。

そんな中、少し離れるように私を挟んで空港内のベンチに座り、同じようなクレープを食べていた優子と智子がどうにかこの雰囲気

を変えようと話かけてくれていた。本当に二人は良い人、あの魔王みたいな奴とは大違いだ！！！

「けど、あの人ってアレだよね。あのとき助けてくれたコートの人だよね？」

「そういえば、そうだった様な・・お礼言っといた方がいいのかな、撫子？」

「お礼！？　要りませんよ、あんなのに！　二人は丑（うし）の刻に神社の裏手で、あの男の写真を張り付けたわら人形に釘を打ちつければいいんです！！！」

「「いや、恩人を呪い殺したくないよ」」

「呪いぐらいじゃ死にません！核弾頭を直接叩き込むくらいじゃなければどうにもなりませんよ、アレは！　とにかくいいんです！　たまにはあの人も社会に貢献した方がいいんです！　当然のことです、よ！」

私は最後まで取っておいたチョコレートバナナクレープの丸々一本分のバナナを口で引き抜き、豪快にへし折るように噛み千切る！　すると何故か、周囲の男性が急に内股気味になった、が！どうでもいい！

「ふ～ん。でも、良いの？　なでしこちゃん。　あの人、デートに行っちゃったよ？」

ピクッ。自然と何故か、私の体内時計が緊急停止。

「かなりの美人・・・いや、もう芸術の域だったね、あれ。彼氏も心変わりしちゃうんじゃ・・」

緊急解凍！

緊急事態発生（わーにん）！緊急事態発生（わーにん）！

入力された言葉（ワード）に脳が耐えきれません！！

「か、かかか」

「「？？？」」

「か、彼、かれ氏！！　ち、違います！あれはただ、ただ、ただ！　ただの家主といいまするか！　ただの・・あの・・・・・あの

！！　そう！そうそうそう！！！ただのご主人さまと言いますか！！　私、ただの肉奴隷！」

“何故か”自然発生した熱に浮かされた頭が出力した回答。すごい適切だと感じた答えを言ったつもりだったので、キリッと！　ガッツポーズする私。

握った手にクレープを持っていたことなど忘れており、手と真っ赤になった顔にクリームが散乱。ついでに通行人たちが今度は全員が内股になった。

「な、撫子！？落ち着けぇぇ！どんどん恐ろしい例えになっていってる！」

「落ち着いてっ、落ち着いて！　なでしこちゃん！」

「そ、そそ、それに。関係ないです！　進なんかデートでもして、あの美人さんとホテルでズンズンして童貞無くせばいいんです！！　あひゃひゃひゃ、そういえば私も処・・」

「撫子ォォォ！帰ってこい！！悪かった！　からかって悪かったから！！」

「なでしこちゃんっ！！　それ以上はタグに１８禁ってつけなくちゃいけなくなっちゃう！！」

頭がメルトダウンした私は一人パニック状態。もう自分が何を言っているのか判らない状態。さぁ！張り切っていこう！

「さぁ、二人とも立ち上がろうぞぉ！！今日は祝賀じゃ！！　食べて、食べて、ブクブク行くんじゃー！！」

「「もう誰かわからないよ！撫子！」」

バッと立ち上がると私の目の前の人々が道を開けた。もう私の我暴道走を止める者はいない！！フハハハっ　！いざ行かん！　まずはスパゲッティです！！と高らかに宣言。ズンズン歩き出したはずだったが、すぐに壁にぶつかった。

「にゃひんっ！！」

壁の硬さは尋常では無く、ぶつけた顔を抑えてうずくまった。

周囲の心の声が聞こえた気がした。

（（この娘・・ダメだ。なんとかできそうにない・・））

今の騒動を見ていて、止まっていた人々がそれぞれの人生に戻っていった。心の底から諦められた気がしたが・・・気のせいだろう。

・・・アレ、涙が出てきた。

すると、皆が見捨てた私に手が差し出された。

手の主はぶつかった壁。いや、人だ。

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ？」

流暢な英語で“大丈夫？”としっかりした男性の声が降ってきた。

同時に差し出された手を自然と握ってしまったのは、その声質と行動に一切の邪念が無かったからか？　それとも

「て、ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

彼の笑顔がすごい魅力的だったからか。

助け起こしてくれた人物を一言で代弁するなら“王子様”だった。

おとぎ話で出てくる邪を打ち砕き、世界を平和に導く、誰からも好かれる美男子。それが目の前にいた。

調った顔立ちに、サファイアを沸騰とさせる青玉の瞳と優しい赤と金が入り混じったストロベリーブロンドの綺麗に整えられた頭髪。

「ｙｏｕ　ａｒｅ　ｗｅｌｌｃｏｍｅ」

温厚そうな笑顔もそうだが、彼から“どこかで感じたことのある”優しい人のオーラの様なものを感じた。

私が立ち上がると、手を優しく放してくれるあたりが紳士だった。

普通の女性なら夢見心地になるだろうが、今の私は人にぶつかった挙句、助けられた醜態と急速に冷めてゆく頭に去来する今までの暴走の数々でさらなる混乱に陥ろうとしていたりしたのでそんな暇はなかった。

「　ａｈ・・・・・アノ・・」

そんな私を不審に思ったのか声をかけてくる王子様。これ以上の醜態はイケナイと出来るだけ冷静に居ようと自分に言い聞かせながら彼を見上げる。王子様の身長は外国人にしては小さく１８０センチに届くか届かないかぐらいだった。

彼の手には小さなメモが一枚。何かを思案するよう一拍の間の後、聞いてきた。

「キミ・・・ａｈ・・・セックス・・までボクとイってくれませンカ？」

「・・・へっ？」

一秒と二秒の間が永遠に感じるほどの静寂が空港内に形成された。まるで時間すら凍る永久凍土（コキュートス）が地上に顕現したかのような空白の時間が出来た。

「え？　いや、あの？　もう一度・・」

「ｙａ．．ボクとシ・・」

「このぉぉ、ド変態っ！！」

そんな時間停止を打ち破ったのは我が友、智子だった。

智子の拳が、変態？王子様の鳩尾（みぞおち）にアッパーカット気味に突きささった。

「グボォォ！！」

くらった相手は息が止められたような苦しみに悶絶すると言われるが、ホントだったらしい。王子様は不意の一撃に苦しむように地に伏した。しかし、鋭い攻撃だった。格闘技もやってたってホントだったんだね智子ちゃん。

すると空から一枚の紙切れがヒラヒラリ。これは確か今は智子のさらなる追撃を受けている王子様に持っていたメモ。内容を見してもらうと空港の見取り図が汚い絵と英文字で書き殴られていた。まぁ、頑張れば読める。何処かへの行き先のようだ。

「なでしこちゃん、大丈夫だった？」

後ろから、優子が心配そうに声をかけてくる。

「うん・・私は。ねぇ、優子ちゃん」

「どったの？」

「早く智子ちゃんを止めよう」

「？　うん？」

メモは汚すぎたが図には“６”と書いてあった。スペルは“ＳＩＸ”だが、誤字なのか汚いだけか定かでないが、スペルの“Ｉ”が“Ｅ”になっていた。

たぶん彼の言わんとしていた本当の訳はこうだ。

“僕を６番ゲートに一緒に連れて行ってくれませんか？”だ。

「どーゾ」

「「「・・・ありがとうございます」」」

事態の内容を説明し、智子は青ざめる様に強攻を止め、ボロボロになった王子様に三人一斉に謝った。彼は本当にすまなそうに苦笑すると、“自分にも非があった”となぜかジュースまでおごってくれた。

現在位置は人の出入りが少ない飛行機の歴史などが展示されているフロアに続く、人気が失せた六番ゲート付近のベンチに腰掛け、四人一緒に缶ジュースを飲んでいた。

「自己ショウカがまだでしたネ」

片言でぎこちない日本語を話すのは、世界に誇れるかもしれない激甘コーヒーを飲みながら話す王子様だった。

唐突に話し始めたのではなく、ここに至るまでも彼から積極的に話しかけてくれていた。私の目から見ても本当に彼は話し上手で聞き上手だった。現に初対面の優子や智子、もちろん私も彼への警戒を解いている。その話術の上手さに、なぜか私は彼に宗教で言うところの宣教師のイメージを重ねた。

「ボクの名前はアルバイン。アルバイン・セイク」

「アルバイン・・さん」

「敬称なんていらないヨ。皆から“アル”と呼ばれてル。君たちもそう呼んでくれたら嬉しいヨ」

しっとりとした頬笑み。気障（きざ）ったらしい感情がない笑みに私も含めて、三人で彼に見惚れた。

「アル・・さんは」
「なんだイ？」
彼は何も言わなかったが、それでも私は敬称を付けた。そうするだけの雰囲気と言いしがたい存在感を彼は纏っていた。普通の人とは違う何かが彼にはあったからだ。
「日本には何をしに来たんですか？」
「あぁ、ｆｒｉｅｎｄ・・いや、知人に“さがしもの”を頼まれタんダ」
「さがしもの？」
「ヤー。でも困ってルンダ。どうも地図にある行き先の名前が地図に書いてなくテネ」
「名前が、無い？」
なぜか、すごい嫌な予感がした。

視点変更２

そこは胸くそ悪いほど血臭に満ちていた。
「・・・遅かったようですわ」
ここは東京のとある路地裏。いつもは喧騒と離れた静寂に満ちていたであろうその場所は現在、人であふれかえっていた。三分割するなら二割が野次馬、もう一割が・・
「憲兵が来ていては、私たちが入るのは難しそうですわね」
憲兵・・古い言い方だ。依頼人・・ローザはそんな喧騒を車の中から覗いて嘆息つきながらぼやいた。「しかし、犯人もやりますなぁ？　東京にしては人気が少ない地区とはいえ、夕方に人ひとりを“惨殺”するなんぇ」
ハジの言う惨殺・・・なぜか車に備え付けられていた警察の無線をひろえる便利な機能のおかげで、事件のあらましは把握していた。

事件の第一発見者は通りがかりの通行人。通行人が犯行現場の路地から悲鳴を聞き付け、覗き込むとそこにはもう血だまりに沈んだ被害者男性が死亡していた。被害者には執拗に何度も鋭利な道具で切り刻まれた形跡があり、警察は被害者男性へ恨みをもつ者へと目星をつけている・・・そんなところだった。

血臭が離れた車内まで届くあたり相当なイカレタ犯行だったのか判るが、俺たちとそんな事件は興味はない。

因果関係があるとするなら、ローザの示した地点が“犯行現場”となった場所だったことだけだ。

「ない・・・“魔力”の形跡もない？　だとしたら一体誰が・・？　もしかして」

「独り言のところ悪いが、ココを離れるぞ」

先ほどから、警官の一人がチラチラこちらを見てきている。面倒事はゴメンだ。それにこの車には住所不定者が二人ほどいるしな・・。

えぇ、と心ここに有らずのローザからの返事を受けて、車を緩やかに発進させる。

「次の目的地は？」

「待ってくださいな・・・あぁ、もう！！　最悪っ・・・ジャミングされ始めた！！　私よりも“濃い”魔力ですって！？　一体どこの“術者”が！！」

「落ち着いてくれないか、クライアント？　あんたが冷静さを失うことにメリットなんてない」

魔力、ジャミング、術者・・・段々、こいつの正体が読めてきた。仕事柄、こんな奴らとは幾度か敵対や共闘したことがあった。

この世界には、科学的な論理に元づく力とは別の“力”を行使する者たちがいる。そいつらは昔から力を英知と称して、使役していた。だが、それは才能ある者の力だ。誰もが好き勝手使えるものではなかった。そして、誰もが使える“科学力”の広がりに比例して、彼らは姿を消していった。

それが、一般常識だ。
だが、英知と言うものは消えることはない。
ただ見えなくなっただけだ。
「・・・わかっていますわ。次は・・・さらに北かしら・・」
「北だ」
「あぁい、あいさぁ～」
車はそんなあいまいな回答に沿って動き出す。
まあ、いいさ。それよりも・・
「クライアント」
「何ですの？　私、これでも忙し」
「どっちに向かう」
車の進行方向を掲示する案内標識が行き先が二手に分かれることを教えてくる。
左に向かえば都心方面へ。
右に向かえば・・・。いや、訂正しよう。標識には左への表示しか出ていない。右への行き先は削り取られ、読むことができない。それもそのはず、その方面はもはや“日本ではない”のだ。
「決まってますわ。犯罪者の行く先は、温かい地。自分と似た性質の者たちが集う地。同質の者たちへと吸い寄せられるはずですもの」
右へと向えばそこは無法者の住み家。名前すら失った無法地区がある。
だが、その地には現在、皮肉めいた名前が付けられていた。
かつて神により燃やされた地、多くの人々が心乱れた所とされた場所、神に見捨てられた者たちの巣窟。
人は言う、そこには死体が石ころのように転がっていると。
人は聞く、そこは一日中、銃声が鳴り響いていると。
人は語る、あそこは常識が呆れかえり、どこかに去ってしまった場所だと。
いつしか、人は・・

視点混合

「隔離区“ソドム”へ向かってくださいな」
「隔離区“ソドム”という場所らしイ」
二人の金色の来訪者は知らずに同時刻に同じ地名を口にする。

（やっぱりか・・）
（やっぱりですか・・・）
契約した完璧だった女と魔王がいたらこんな男は同時刻に同じ溜息をついた。

・・・・・・・・次話へ

2、金色の来訪者たち（後書き）

冒頭の怖い話?を書いていて、思いました。怖い話を苦手な人が怖い話を書こうとすると失敗する。

仕事がきつい・・・ああ、大学時代から作るの始めてれば・・

3、ゴールデン・エンカウント

3、ゴールデン・エンカウント

お父さんとお母さん、ゴメンナサイ。私・・友達に嘘をつきました。

「ナデシコ？　気分でも悪いのかイ？」

隣で心配そうにこちらを覗きこんでくる王子様、もといアルバインさん。

「いいんです・・・ただ、自分の器の小ささに嘆いているだけです」

「何を言ってるンダ。ナデシコは“家に帰る次いで”とはいえ、僕をここまで連れてきてくれてる。そんな君が小さい人間のハズが無いじゃナイカ」

ハハハッと快活に笑う爽やかなアルバインを、私は直視できない!!

「それより“君の家の方向にある”とはいえ、そろそろ危険区域のはずだろう？　君は家に帰ったほうがイイヨ」

「え!?　えぇい～と・・・こっ、こっちが近道なんです・・・」

「フム、そうなのカイ？」

電車を降りて、数分後。こんな会話をしているうちに目的地へと至るドアが見えた。ドアには“危険区域につき、立ち入り禁止”の文字が見えるが慣れたものだ。そもそも私は・・・

「しかし、事前に聞いていたイタけれド、本当に囲むように封鎖されているんだネ。それほど“無法者（むほうもの）”たちがここいるってことカ

ナ」

無法者、という言葉がグサっと心の突き刺さった。

「ユウコもトモコも言ってたけど、隔離したとはいえ国の許可も取らずそんなところに住む人ナンテ、気がしれないネ？」

グサッ、メキュ、ググッと罪の意識が矢じりとなって突き刺さってからのえぐり込み！　胸の鼓動が止められない。

笑顔だ、ここは笑顔で笑い流さねばならない。

「ほ、ホントですよね～」

「ナ、ナデシコ！？　汗が凄いヨ！？」

源泉から溢れ出る汗が絶え間なく顔面を滑り落ちる。

三人とも、ゴメンナサイ。都内に住んでるって嘘です。私、ソドムに住んでます・・・

立ち入り禁止と書かれているにも関わらず、ドアを開くとそこは、日本ではない。

ソドム。

戦後、日本から再開発不能と太鼓判を押され、見放された地区。たしかに無法地帯には間違いなく、犯罪者や無法滞在者も多く、夜中は銃音が聞こえない日が無いような場所ではあるのだが・・

実際、私はここが嫌いではなかった。

「ラッシャ～イ、しんせんなマグロが入ってル。カッテケ！カテッケ！！」

「マグロ？　ってオイ！丸々一体かよ！！誰が買んだ！？　せめて部分ごとに切り分けろ！！」

ハリボテのような今にも壊れそうな露天で、どこかの海域で密猟してきたかもわからないクロマグロを頭に鉢巻き巻いた黒人の男性がたどたどしい日本語を使いながら魚屋で元気に働いていた。

そんな彼に流暢な日本語でツッこんだのはロシア系の白人男性だった。彼はすぐそばの薬局屋で働いていたはずだ。たしか“この町、以外にクロロホルムの需要がねぇんだよな～”という危険極まりな

いぼやきをしていたのを、ちょうどキッチン用洗剤を買いに来ていた私は聞いていたのを覚えている。
また別の一角では。
「ねぇ？　お兄さん。今日も遊んで行かない？」
とても淫靡（いんび）に男を誘う中国系の女。
「ふん！　公衆の面前であれほどの屈辱を味わったにも関わらず、まだ俺にせまるか？チャイニーズ」
全身のみならず脳細胞まで筋肉で出来ていると公言していそうな巨漢のアメリカ人の男性が不敵な笑みで誘い返す。
「・・・今度はそう上手いことアナタの良いようにされないわ。それに・・・私はあんなテクだけじゃ・・満足できないのよ」
「減らず口を・・・良いだろ！お前の作った、締りのないモンにしこたまぶちん込んでやるよ！！」
「ッフフフ。言ったわね・・今夜は寝かせやしないわ」
これから始る欲望のの嵐に色めき立つ大人たち。ギャラリーは増える、増える。
そんな人ごみの中、一人だけ殺伐とした空気を放ち始める。
「・・・ナデシコ。君は下がってテ・・」
「え？どうしたんです？」
そんな一部始終を見ていた私たち二人、特にアルバインはそんな彼らを怒りの形相で見つめていた。
「あの中国人女性が危ナイ。助けてくるカラ」
「え？どうして助けるんです？」
何が何だかわからないため、キョトンとする私をアルバインは信じられないというような顔をした。
「どうしてっテ！　君ハ・・」
「あ、始りますよ」
「クッ！」
急いで、振り返るももう遅い。火ぶたは切って落とされていた。
アルバインは深く腰を落とした姿勢から駆けようとする体勢になっ

た。

「これを見てもアンタは笑っていられるかしら！！」

「こ、こいつは！」

「「あ、あれは！！」」

中国人の女が叫び、群がる男どもに“それ”をあますところなく見せつけた。

“正方形”の小さく、薄い板のようなものを。

板には浅い溝が彫られ、溝は絵を描いていた。

絵は、我ら人間の偉大なる祖の形をしていた。

大人と言う社会の歯車になる前の、子供であった頃にお祭りなどで熱中したソレ。

「「で、伝説の“型”！　アウストラロピテクス！！！！」」

それは掌サイズの正方形の、砂糖と小麦粉などを使い作られた型に模様や動物の絵などの溝を彫りつけそこを抜き取り、形にする遊びが昔からあった。

まあ、続に型抜き、という遊びで使うものである。

そんな型を見た、周囲の男たちは熱狂し、挑戦を申し込まれた男は新たな強敵にほほ笑む。

ただし、アルバインだけは膝をガクッと抜かして転びそうになる。

「・・・こ、これは何ナンダ」

「型抜きですよ、知りませんか？」

崩れ落ちて、地面に伏せるアルバイン。そんなに感動したのだろうか？　まあ、たしかにアレは凄い。

「凄いです！　あんなに複雑な溝に穴をあけるなんて、いっぱい穴を突かなきゃいけませんよね！」

「・・・そうダネ」

顔を真っ赤にしてガクっと、うな垂れるアルバイン。どうしたんだろ？　やりたかったのかな？型抜き。

ちなみにチャイナ服の女性が、高名な型抜き職人。筋肉の白人さんが型抜きに人生をかけるために国を捨てた人である。二人とそれを取り巻く過去に型抜きに見せられていた大人たちの熱狂が最高潮にまで達し、熱い声援が生まれ始めた。

もうここにいたくない、と頬赤く染めながらつぶやくと歩き出したアルバインに並行して私も歩き出す。

なぜ、ここに二人でいるのか？

それはアルバインの探し物がある場所がソドムであることが発端だった。

私がソドムで住んでいることも原因の一つだ。しかしソドムは正式には国家に属さない住んでもならない違法地区である。そんなところに住んでいる人間であることが学校側に知られれば、私は退学になるかもしれない、と言うハジさんの計らいで現在で形式上、私は東京の高級マンションに住んでいることになっている。

それはいいが、はっきり言ってソドムは日本国民からは悪の代名詞のように見られている。そんなところに住んでいることが知られれば、私に対する風評などが悪くなるというのが本当のところらしい。

私も最初は賛成したが、今は違う。やっぱり嘘はいけない。嘘はいつかバレる。それに非常に胸が痛い。罪悪感に苛まれる。私は嘘をつき続けられない人間らしい。

現在、そんなダメすぎる自分に打ちひしがれる私とソドムが珍しいのかキョロキョロするアルバインは並走してゆったりとした速度で歩いていた。

日本では非常に目立つ容姿の私たちでも、ソドムではあまり目立たない。

それはソドムには外国人が非常に多いためとアルバインの服装だろう。

アルバインの王子様風の背格好で気にならなかったが、彼の服装は灰色の使い古したジャケットと白地のシャツと青のジーンズという自然と風景に溶け込んでしまう服装だったからだ。どちらかと言えば私の制服の方が目立ってしまうほどだ。

そんな二人の進む道は夕暮れに照らされている。商店街のように左右に商店のような出店が立ち並ぶ道で、笑顔や喧騒が多くみられた。初めて訪れた者は決してココが無法地帯だとは思えないような日常的な人の営みがここにはあった。

「・・・ココがソドムなのカイ？　聞いていた話とはまるで違うヨ」

アルバインの困惑した声色に、自然と私は眉根を寄せてしまう。それは一か月前に私も同じような疑問を進に投げつけていたからだ。たしかにこんな光景が続く道のどこが危険区域のちょうど真ん中だと思える者がいるだろうか？

「そうですね。確かに平和そうに見えますね」

私は困った笑顔で彼の疑問に答える。

今、私たちがいるのはソドムに中心地に位置する所であり、多くの商店や食品店が集中する“市”とよばれている区画である。ここはある理由からソドムではとても平和な地区であった。

「ソドムは国から切り離された法律が無い場所ですけど、ルールとか法則が無いわけじゃないんです」

この市と呼ばれる場所はその代表格とも言える。

なにせ四方を海で囲まれる島国の一角にあり、なお且つ海側には不法入国者を常に監視する海上自衛隊が、陸側は今は監視の目が薄いが一部では陸上自衛隊が監視を強化しているため、非常に“輸入”がしにくい。それこそ命をかけるリスクを伴う。

そんな物流が非常に取り難い場所であるソドムで唯一、何かしらの方法やルートを持つ商人たちの商品等が安易に手に入る所なのが市だ。市がなければソドムは餓死すると言われている所以でもある。

だからこそ、市では取引の仕方や金銭売買の問題については商人

はもちろん客にもマナーは求められる。法が無くともだ。それを市で商売をしている者たちのみならず、ソドムに生きる人々は理解している。

（安住の地が無い者たちだからこそ、自分がいることができる場所の大切さがわかるんだよ）

進が初めて私をここに連れてきてくれた時に言った一言。あの時は、やっと自分がいても良い場所ができた私には実感が薄かったが、今なら理解ができる。その大切さを。

「そうなのカイ？　デモ・・・・」

「え？」

何故か、横にいるアルバインの方に視線を向けてしまった。声色が突然、厳しくなったからではない。　アルバインの温かな雰囲気が一変して、冷たく変化したからだ。

「・・僕は、やっぱり“こういう場所”は好きにはなれナイナ」

だが、それも一瞬のこと。

クルっと首を旋回させてこちらを振り向く彼からはもうその冷たさを微塵（みじん）も感じられない。

どころかさっきより明るい笑顔。まるで何かをかき消すような笑み。

「それにしても、よくソドム（ここ）のことを知っているんダネ」

唐突なる先制攻撃!?　撫子はひるんだ。

「・・・ふえ」

え？　あ、ちょ・・!?

「まるで“ここに住んでる”人のようだヨ。ナデシコ」

撫子に、快心の一撃。

誤魔化しすら介入させない満面の笑みによる言葉の追い打ち（ラッシュ）。

今度は、別の意味で心を締めつけられ始めた。　うぅっ！罪悪感で胸が・・!!

「あれ？　撫子ちゃんじゃないかい？」

すると突然、私たちではない、しゃがれた大きな声で私を呼ぶ声。

「やっぱり！　撫子ちゃん、今日はいい野菜が入ってるよ！」
声の主は、大きな胸とお腹を強調するように胸を張った中年の女性だった。この市でも古株の八百屋、自分の売る野菜と表情にはいつも誇りを張り付けることで有名な、ミドリ姉さん。自称３８歳。
「え、ホントですか？　いやいや！・・ひ、人違いでござんす・・」
「何言ってんだい、誰が見たって撫子ちゃんじゃないか」
このソドムでは珍しい人情を大切にする人柄から慕われる女性であり、進に紹介されて知り会ってからというものとても親切にしてもらっている。だが、ここは失礼を承知で別人に成りきる！！・・・やめてミドリさん、笑顔が！笑顔が眩しい！！
「ときどき、アホの娘になるね、アンタは。ハハハハッ」
バシン！バシン！と笑いながら背中を叩かれる。イタイ！イタイ！！ッ心も痛い！こんな親切な人を騙そうする私のやましい心に響く！！
そんなやり取りを聞いて、続々と周囲に人が集まってくる。見知らぬ見物人から日ごろお世話になって市のお店の人、さきほどの黒人の魚屋、怪しい薬屋、チャイナ服の型抜き美女職人とそのライバルまでもが集まってくる。ホント、一ヶ月間でここまでいろんな人と知り合えたのは素晴らしいことだと思う。
けど、今は不味い！
「ナデシコ、　マグロ、マグロ買う？」
「お、変な嬢ちゃん。同居してる生意気坊主にクロロホルム使うか？」
「あら、いつかの進と一緒にいた変なお嬢さん？　また型抜き、やる？」
「噂の進のところの変な娘か？　だが、型抜きでは負けん」
「ホラ、やっぱり撫子ちゃんじゃないか！変な子だね～全く」
み、みんなして変、変な子って。しかも噂のってなんですか！？
おそるおそる、アルバインの方を振りむく。彼はすごい笑顔だっ

た。ホントに人の幸せを見ている、そんな笑顔だ。
「なでしこは知り会いが多いんダネ。日本の方に住んでるのに、ソドムの人たちとも仲がいいなんテ」
彼はホントに悪意も何もなく言った。その一言に周囲の人々はアルバインへと首をグルリと捻って一斉に
「「「「なにいってんの、この娘はソドムに住んでるじゃないか？」」」」
「エ？」
言っちゃた・・・
「・・ナデシコ」
言われちゃった。どうする、どうする私？
撫子は、混乱している。
プルプルと震える私。それを不審に感じたアルバインは下向きになった私の顔を覗き込む。その純水に心配という顔を見せられたら私、ワタヒ！
「ニャワーーーーー！！！」
「おワッ！」
私はアルバインの次の一言を聞きたくなくて耳を塞いで、発情した猫みたいな声を上げ、全力で駆けだす！　自分の足で走り出す！！17の夜！！　目には混乱に末ににじみ出てきた涙が溜まる。バイク！どこかにバイクありませんか！？
「ごめんなさい！！嘘ついててゴメンナサイ！」
遠く離れるアルバインと今ここにはいない親友二人に全力で謝罪しながら暗い路地裏へとダッシュ。逃避行を始める私をお許しください！
「ッ！　待つんダ！　ナデシコ！！」
すごい切羽詰まったアルバインの声が聞こえたが、私に止まる余裕はない。やめられない、止まらない！　今の私の動力源は罪悪感、半永久機関に等しいエネルギーにより走りぬけぃギャ！
ドンッと大きな壁にぶつかり、尻もちをついてしまう。このフレ

ーズを使ったのは今日で二回目。つまり、またも人にぶつかったのだ。

「す、すいません！！」

私が走っていた道はそれほど狭くない路地裏に道だったのだが、ろくに前も見ていなかった自分の愚行を呪いながら、ぶつかってしまった人を地面に倒れたまま視線を上にあげつつ、謝る。

だが、被害者の男性は無言のまま立っている。・・そりゃ、怒りますよね。

どうして私はダメダメなのだろうか？一か月前まで完璧なんとかなんて言われていたのに。アレかですか、過去の栄光に囚われているのがいけないんですか？それとも私のダメダメは馬鹿と同じで・・

「・・・し」

「え？」

ちいさな呟きが聞こえる、その発音者は見上げた先の男性。

彼は右手を振り上げている。

その手にもつモノを私は知っている、淵（ふち）を月下の光がなでる様にキラリと輝くアレを。

ソドム（この町）では刃物の類が使われることが多いが、アレを使っているのは私の契約者ぐらいしか見たことがない。

それが私めがけて振り上げられているとわかるのは、粘つくような視線が私を捉えているからだ。

彼の扱う光を遮断するかのような黒でなく、鈍い灰色。

彼の扱う物ほど巨大ではないが、分厚く長い形状。

ソレを、世間一般ではロングソードと呼んでいたはずだ。

「・・死ヲ、オシエル」

馬鹿は死んでも治らない、それを試すかのようにソレが頭めがけて振り下ろされた。

視点変更

「ビンゴですわ」
美しいソプラノの美声が汚い路地裏に響きわたる。
大抵の男は声の主が隣にいれば、道に芝生のように転がるゴミくずも、湿り腐ったこの場の空気すら気にならないのかもしれない。
だが、俺はとてつもなく帰りたい気分だった。
「・・・それはよかったな、クライアント」
「ええ、御苦労さまでしたわね。後はこちらにまかせて車へ戻っていてくださいな」
「・・・そうしたいのは山々なんだがな・・」
今、俺たちがいるのはソドムの中心街に近いが、比較的に生活態度が荒れている所だ。・・・雑な説明を許してほしい。今、俺の勤労意欲はゼロに差し掛かっているほど急降下している最中なんだ。
なにせ・・
なにせ、見るからにガラの悪そうな奴らに囲まれている。数人単位なら簡単だったが、数は次第に増えてゆき、今や数十人単位に膨れ上がった。もう数える気になれない。
俺は平和主義者だからな、交渉を試みる。もちろん、そこは大事な場面だからやる気とドヤ顔も忘れずに一言。
「オイ、お前ら。俺は善良な市民Aとそして、こちらがお金持ちのお嬢様だ。そこを通って帰りたいんだが・・」
「・・アナタ、今さり気なく私に全部押し付けようとしましたわね?」
こめかみをピクピクさせて睨めつけてくるこちらのクライアント。
まあ、市民Aとお金持ちと聞けば、当然後者へと大抵の奴は群がるだろう。それに美人だ。もう効き目抜群だろうと思っていたが、周囲の奴らはまるで反応しない。良い手だと思ったんだが・・・
「聞く耳を持たないのか?それとも・・まさか、俺のやわ肌がねらいなのか?」

まさかの発想に、俺はカッと目を見開く。が、相方はひどく冷たい目で冷静にツッこむ。

「おバカな一人漫才は止しなさい。見て判らないの？」

は～、と嘆息ついて囲んでる奴らに人差し指を突き付ける。誰に突き付けたかと言われれば、まあ全員にだろう。どうせ、こいつらは・・・

「全員、死んでいますわね。生気を微塵も感じられませんもの」

クライアントの言うとおりだ。まあ、死んだら動かないのが死体のセオリーなんだが現に目の前に立って、俺たちを取り囲んでいる。全員に共通して言えるのは生気のない目、口がだらしなく半開き、なによりほのかな腐敗臭と大きな何か刃物の様なもので斬られたような生傷。

「・・・生ける屍（リビングデッド）。いえ、この国では“ゾンビ”と言った方がメジャーなのかしら？」

「なんでもいいだろ？　それよりもこの状況をどうするか、だろ」

数は五、六十体止まりらしい。これだけの数でも俺一人ならなんとか逃げることも可能だろう。だが、全員一斉で襲いかかられればクライアントの方までカバーはできない。彼女を庇う？それもアリだが、ゾンビの攻撃といえばアレだろう？

「ガァァ！！」

囲んでる“群れ”の中の一体が我慢の限界らしかったのか以外に素早く一涎をだらだらさせながら数メートルの距離をつめて掴みかかってきた・・・俺に。何で俺なんだ。

俺は右にクライアントがいるので左へと一歩分ほど横に体を移動させると、突っ込んできたゾンビは抱きつきに失敗し、前のめりになった。

男と男の抱擁の後の、噛みつき・・・あのまま突っ立ってたらと思うとゾッとする。嫌だよ、一か月前にキザッたらしいオッサンに

噛みつかれてんだぞ、嫌な記憶が蘇るだろうが。

「キモいぞ」

そのちょうどいい高さに頭を垂れたゾンビの頭部めがけ上から肘、下から膝で挟み込むように叩き潰す。するとゾンビの頭部はおもしろぐらい粉々にどろりと砕けた。腐乱しているのだから軟とは思っていたが・・気分、わるくなるな。

同類を殺されたためか、それをスタートの合図とばかりに一斉に襲い掛かってきた。

「オイ、クライアント下がっ・・・」

「下がる？　あまり冗談が上手くないようですわね」

俺の忠告を無視し、クライアントは逆にスラリと前進。・・・人の話は最後まで聞けよ。

「下がるのは、負けを認めた時。それは私に対する侮辱に等しいですのよ」

群がるゾンビに立ち向かう美女。絵になる光景になるだろうが、俺にはただの自殺志願者にも見える。

圧倒的に数にしても、なにより人間にある肉体のリミッターの外れたゾンビの力は通常の人間の何倍以上。彼女の細い腕など、すぐに握りつぶされるだろう。

美女は丸腰、武器もない。完全な不利、絶望的な場面。

だが、美女からは余裕の表情が消えない。一歩踏み出したことで、すべてのゾンビが己に向かってきていてもだ。

「私に言葉や助力は無用」

いつの間にか美女の手に何かが握られている。武器ではない、それは小さな掌に収まるほどの小瓶。

「必要なのは」

小瓶の蓋を開けると、襲い掛かるゾンビたちに振りかけるように中に入っていた粉を撒く。

だが、暴食行動に囚われる彼らを止めることには至らない。

美女はそのままゾンビたちによる四方からの波に呑みこまれる。

群がるゾンビたちが飢えたように一心不乱に貪るべく美女に群がる。それは、夜の蛍光灯に群がる虫たちのように見えた。

だが、虫たちは知らないのだろうか？　その光に近付き過ぎると燃え尽きてしまうことを。

「明確なる自らの意思と、もとめる形」

言葉を契機に群がるゾンビたちが一斉に白金の光のもと爆ぜた。中には数メートル吹き飛ぶ奴から胴体が真っ二つになる奴まで。数十体といたゾンビが一斉にだ。それほどの力の放出を成した存在は俺の目の前に変わらぬ姿で立っている。・・・いや、違うな。

「時間をふんだんに使って完成される芸術を、私の魔術（わざ）は瞬きの中で成す」

今、クライアントの両手には一つの芸術があった。

大理石の如くなめらかな印象を全体に持つ白金（プラチナ）の色の長物。その本体に負けないほど美しさを持ちつつも実戦的な形の銀色の斧、槍、カギ爪（フルーケ）などを冠のように穂先に頂（いただ）く。そして、全てが調和するように全体に匠（たくみ）の装飾が施されている。

何年もかけ作られたと言われれば納得するだろうが、作られたのは一瞬の間と聞けば呆れ果てて嘲笑し、その瞬間を見たものは自分の目が信じられなくなるだろう。

見る者全てが勘違いするだろう、とても武器に見えないと。だが、それは実戦的な威力を秘めていると主張していた。歴史上、武器の名は斧槍（ハルバート）と呼ばれている。

「どうですの？　これでも下がる必要があると？」

俺へと振り向きながらの彼女の武器さばきはたしかに心得のある者の動作だった。しかも実戦的な。なるほど、またも彼女を怒らせてしまったようだ。そんなもの見せられたら言う言葉は一つだ。

「い～や、全く」

「よろしいですわ。・・・さて」

巧みのハルバートの乱舞させながら、ゆっくりと振り返る彼女にゾンビたちは襲い掛かることを躊躇（ためら）った、ように見えた。いや、理

解したのかもしれない。
「我が“錬金術（れんきんじゅつ）”。冥土へ至るための駄賃代わりにご覧なさい」
“自分たちが獲物だということを理解したかもしれないゾンビたち”が、美しき戦女神へと立ち向かってゆく。
まるで自殺志願者のように。

視点帰還

振り下ろされた剣（ロングソード）を左腕で受け止めた。
私（なでしこ）がではない。私と、剣を振り上げる男との間に割り込む形で立つ彼がだ。
「大丈夫かイ？　なでしこ？」
彼、アルバート・セイクが先ほどと変わらぬ笑顔で、剣を左腕に受けたままこちらを振り返る。顔には微塵も焦りはない。
が、それも一瞬。そこから急速に体を捻って生み出した回旋力を加えた左腕を振り切り、襲い掛かっていた男を力強く押し返す。
男は押し切られるように後退し、距離を取った。そんなことなど、どうでもいい。
「アルバートさん！　腕は！？」
「アァ、安心してクレ」
血相を変えて涙まで浮かべていそうな私を安心させるような笑顔。
ホラ、とでもいうように持ち上げられた左腕の裾（すそ）はそこに込められた力を象徴するように肘の部分までボロボロになっていたが、そこから覗かれる肌からは血の噴出は一切ない。
その前に、服の下なのに肌色が見えない。肌の上には乳白色の塊が。
手甲、ガントレットと呼ばれるものがそこにはあった。
驚く私にアルバートは腕に力を入れる動作をする。するとさらに

驚く事に分厚い手甲から扇のような物が円を描くように展開され、一秒とかからぬ間に“円盤”ができ上がった。

いや、これは・・・盾(たて)だ。

「もうひとつ安心して欲しイ。彼は・・いや、“彼ら”はボクが滅(メッ)すル」

一人称が三人称に変わったことに気が付き、前方の濃い暗がりを目を凝らして見る。まったく凝らす必要などなかったが。

未だに佇む剣を片手にぶら下げている男の後ろから何人もの人間たちが夢遊病患者のように続々と闇から出でてくる。出てくる、出てくる、出てくる！？

彼らの目からは生気が失われていた。

ゆらゆらと動くさまは糸で操られるマリオネットのよう。

口から漏れ出る声は声にすらならないうめき声。

それはまさに、映画で見たことがあるゾンビそのままだった。

「下がっテ！　ナデシコ」

「前っ！」

後に座り込む私に視線を向けるのと同時にゾンビがアルバインへと襲い掛かったのが見えた。

アルバインは私の声にハッとするように、襲い掛かるゾンビを視覚に捉えたようだが、彼はそのまま飛びかかってくるゾンビの方へと大きく踏み込んでいった。

ゾンビは人間が持つと言われる自己筋力から発生する力からの肉体崩壊を抑えるための制限(リミッター)が脳細胞の大半が死滅しているために、なので人間の何倍もの力が出せると言われている。

そんな常識にも無垢(むく)ではなく無謀(むぼう)な子供の如く挑(いど)みかかるアルバイン。そんな彼が愛くるしいとでも言うように抱擁するように突進してくるゾンビが衝突する。

「男に抱かれる趣味はないヨ！」

二人の距離がゼロになる瞬間にアルバインは上体を深く下げ、“何も持たない右腕”を下から突き上げるようにゾンビの腹に打(アッパ)ち込

む。そのまま腕を起点にすくい上げる様に持ち上げてしまった。
見事なストロークは未だに高く掲げられているゾンビの背中から襲撃が突き出たように見えたほどだ。いや、待て。本当に何かが突き出ているように見えるではないか。
「それト、男を突く趣味もないヨ」
アルバインが振り払うように右腕を払う。“突き刺さっていた”ゾンビが吹き飛び、ゾンビの群れの中へと突っ込みドミノ倒しならぬゾンビ倒しが巻き起こった。
振り払われた右手には、銀色の剣。先ほどのゾンビが持っていた剣と同じロングソード。だが、決定的な相違点があった。
それは隔絶的な美しさ。いつの間にか天に出でた月の光を受けて光る様は聖(ひじり)の力を体現するかの如き、銀。
簡素だが十字架のレリーフが刻まれた装飾。
シンプルな作りではあるが、それには純粋な美があった。
左に盾を、右手に剣。それを手にしたアルバインを見る者は決して彼を王子様のような男とは決して思うまい。百に近い数に立ち向かうその姿はまさに“戦士”。
「どうしたンダ？　向ってこないノカ？」
私の位置からは彼の背しか見えない。だが、感じる。彼から放たれる闘気を。
「ダッタラ。こちらから出向クまでダ」
殺気に近い闘気を受けてか、もしかしたら彼の鬼の様な形相からの気当たりを受けてか、半歩さがったゾンビたち。
アルバインは右手の剣を左肩へと回し、肘を突きだす姿勢となる。一見、防御の姿勢、攻撃を受ける型だと見えてしまう。だが、違う。
「セット、Ｆｌａｍｅ(フレイム)」
一言、呟いたアルバインの声に呼応するように彼の剣から火が噴き出し、剣に纏(まと)わり付く。
「セット、ｗｉｎｄ(ウィンド)」
振りかぶるように背へと回された左腕に装備された盾に今度は風

が。共にあるのが自然とでも言うように滞留する。
これは一気に敵を粉砕する溜めの型だ。
「いくゾ」
溜められた力を一気に解放するように、爆発的な速度で滑走するようにゾンビの大群の先頭へと真正面から飛びこみ、数十メートルの距離をなくし、剣を豪快に一閃。
「ハァッ！！」
轟く気合いの一声と共に振るわれる剣に纏わり付いていた炎が膨張し、爆発する。弧を描くように発生した爆炎と爆風はゾンビたちの腐敗した肌を焼き、その軟い肉体は爆ぜる。
自らが焼かれることがなかったアルバインだったが、爆風の影響は受けてしまった。コマのように回転しながらゾンビ群の中心へと突き進んでしまう。その回転力に怯み、近づけないゾンビ達だが、このままでは四方から掴みかかられてしまうだろう。
予想通りに回転力と勢いが落ち、ゾンビ達は一斉に四方からの抑え込みに・・いや、噛りつきにかかってきた。
そんなことは百も承知だったであろうアルバイン。もう一度、剣を振るのかと思いきや、もう剣に炎が灯っていない。だが、彼にはもうひとつ残っている。
「ゼェアァッ！！」
一喝とともに振るわれたのは剣ではなかった。左手に装着された盾、それを前方のゾンビ群に向かってストレートパンチ。
前腕から手までをすっぽりと覆う盾の縁をまともに受けたゾンビ一体の頭部は粉々に吹き飛ぶが、それだけでは止まらない。その真後ろにいたゾンビ達を巻き込み、不可視の力を受けてその体をバラバラにしながら吹き飛ぶ。盾の周りを滞留していた風を使ったのだと瞬時に理解する。
アルバインを取り囲んでいた四方からの一斉攻撃陣に穴が開き、彼はそのまま前方へと前転し、三方からの突進を回避する。
急には止まれないゾンビたちはぶつかり合い、将棋倒しになり自

滅した先頭に立っていたモノたちは四体をバラバラにされていた。
それほどの力で掴みかかられていればアルバインの体もただでは済まなかったはずだ。
「セット、Ｆｌａｍｅ（フレイム）」
短くも、絶大な超常現象を起こす言葉が再度、唱えられた。
剣に再び灯る炎を手に取り、アルバインはゾンビたちへと挑みかかる。
上段からの兜割りで、頭のみならず股間を突き抜けコンクリートの地面まで切り裂き、剣の熱でゾンビだけでなく地面も赤く熱をもち、火がつく。
そして、アルバインにも火がついたのか、剣と体を乱舞が始まる。
ゾンビたちは剣で裂かれ、時には盾の縁（縁）で砕かれる、時に強引に攻め、時に回避に徹し、隙が生まれた所を大ぶりな一振りで確実に一息に着実に一体一体を屠（ほふ）っていく。
その戦い方は、型にはまった動きの様だが、体には硬さが一切ない。あれは技術を己のモノとしている証拠だ。だからこそ、迷いがない。そこには彼の持つ剣と同じ簡素だが、不純物のない美しさがあった。
進のように拒絶するように剣を周囲に振るうのではなく、確実に一つ一つを確実に倒していく堅実な剣に次々と屍に戻るゾンビ達。
確実に減っているのは確かだが、やはり数が多い。未だに二十体以上残っており、段々アルバインを一か所に追い詰めている。
戦闘に巻き込まれないように、少し離れた場所から見つめる私はゾンビ達の対応がころころと変わることに違和感を覚えた。まるで
（まるで、誰かに指示されて動いてるみたい？）
そんな疑問が頭の隅をかけたが、アルバインの肩が上下し始めていることに気がつき思考が止まってしまう。
しかたない、あれだけ動き周り、大きな動作で戦っていれば体力の限界は来る。
彼はゾンビが予想外に硬かったのか、剣で切り裂くたびに周りの

地面をえぐるように戦ってしまっていた。その証拠に地面は熱せられ赤く染まり、蒸気をあげ、ゾンビと彼の靴が薄い煙を吹いている。

「フッ！」

遂にアルバインが剣を地面に突き刺し、膝を着く。体力の限界がきたのか？

それに気がつき、迫るように、絞めあげるようにゾンビ達が四方を囲み、彼に群がってゆく。

「アルバインさん！！」

役に立てないが、何体かひきつけられればと声を張り上げるが、ゾンビは一体も私に振り向かない。しかも予想外の返事が予想外の相手からくる。

「ナデシコ、そこを動いちゃだめダヨ」

客観的に見れば絶体絶命の状態。だが、言葉を返してきたアルバインの表情はとても疲れた人間が到底できるとは思えない笑み、勝利者の笑み。

そして、客観的に見ることができれば気が付いただろう。まばらにいた残っているゾンビ達が彼の周囲に集まっていることに。

「スプレッド、Ｆｌａｍｅッ！　アクセル、ｗｉｎｄ」

地面に“突き立てられた”剣から先ほど纏わり付いていた炎が周囲に展開される。展開された炎は不自然過ぎるほどにゾンビたちを囲み、逃がさぬように円を描くように動いてゆく。

炎はその周囲が熱せられることで空気の割合を縮小、上昇気流を発生させている。炎は風を生み、同時に引き込み、さらなる規模の災害を生みだす火炎旋風へと加速させる。

乱舞する豪炎に沿って導かれるように天に向かって穿つ熱風がゾンビたち燃やしながらを数十メートル上空へと舞い上げる。

「ゲイザー！」

アルバインの剣が瞬く。彼により生みだされた炎と風が再び集い始め、プラズマを生みだすほどの力の渦が光の剣を作り上げる。

空中へと穿たれたゾンビ達もまた、風の収束場所に巻き込まれな

がら吸い寄せられてゆく。
ゾンビ達は竜巻の如き豪風には逆らうこと叶わず、剣を水平に構える男の元へと。待っていたと言わんばかりの彼らの死神の元へと。
「ズェェアァッ！！」
唸る風の音すらかき消えるほどの気合いの一声と共に体ごと振り切る回転斬り、それとともに放たれた突風。周囲にあった建物を軋ませ、窓ガラスは風を受けて一斉に粉砕。それをまともに受けたゾンビ達はきりもみしながら体を四散異常の粉々になり、二度目の死を迎えた。
風の後には何も残らず、空気は清浄。数十体といた生ける屍の群れは人かけらも残らず、また静かな暗闇が広がる。月明りに佇む男ひとりを残して。
「ナデシコ、もう大丈夫そうダヨ」
アルバインは戦いで見せた戦士の顔ではなく、出会ったころの優しい笑顔で終わりを告げる。
この人は一体？　何もない所から剣を取り出し、火や風を思うまま扱う。まるで、おとぎ話の魔法使いのようではないか？　あれ？魔法戦士？・・・ＲＰＧなどに疎(うと)い私は深く考えるのはまず置いておき、お礼を言おう。
「あ、ありがとうござ」
「・・・今日は、出会いが多いナ」
まずはお礼と思っていったお辞儀しながらの言葉は彼の疲れを含んだ言葉にかき消された。その彼に似合わない険悪な言葉使いにハッと上向く。
私が見えたのは、アルバインは振り返りざまに、剣を薙ぐその瞬間。
私が聞いたのは、鋼と鋼の衝突音のような甲高い音。
彼に相対するように現れたのは・・・

視点変更2

いつから俺はラクーンシティに迷い込んだ？

「昨日といい、今日といい・・」

溜息つきながら俺は引き金を引く。武骨な黒い塊から放たれた鉛玉は掴みかかってきた男の頭に風穴どころか、ごっそり首から上を奪い去ってしまった。正直、エグい。

（見てて、イイ気分じゃないな・・・やっぱり）

そんな感想を何度も繰り返しながら数分、状況は完全されてはいない。数は増えないが、格段減ったともいえない。

ゾンビと戦うゲームで言えばハードモードくらいの出現率だろう。

「セァッ！！」

そんなハードモードの中で鋭い気合いの声が響く。

この陰鬱な腐った者どもの中にいても、ひと際目立つ金色の髪の美女が、自分の体を超えるほどの槍に斧がついた武器、ハルバートを華奢（きゃしゃ）な体で振るっていた。クライアントである、ローザ・E・レーリスである。

重さを利用しての縦割りではなく、長柄の武器特有の遠心力を使った円運動による回転を利用した連続回転攻撃に敵はなす術なく薙ぎ払われ、切り裂かれる。

その舞踏にも似た動きには美しさすらあった。振るうたびに舞う金色の髪、決して重芯を崩さない足さばき、武器の重さに振るわれるのではなく、完全に使いこなす様（さま）にゾンビすら見惚れる・・・のかもしれない。

現に、ゾンビたちの動きが止まって・・・いや、待て！？

「おい、待て！　クライアント！！」

俺は違和感に感づき、隙だらけのゾンビ共をさらに刈るために密集地帯に突っ込もうとするローザに止まるように言うが、あのお嬢様は聞いちゃいねぇ！！

距離を詰めるために走りだすが、それを四体のゾンビが阻(はば)む。
（阻む・・ねぇ？）
走りながら両手で構えた銃で照準を合わせる。
今日持ってきた銃はいつも使っている銃とは違う。
Ｍ１９１１改。世界の警察を名乗っている国の軍に正式採用されていた自動拳銃。よくガバメントの愛称でよばれているモデルだ。性能も、安定していて良い銃だ。だが、この状況には不利だ。玉数の意味でも。一丁しかないことも、これがいつも使ってない他人の銃だということも。
セーフティーなどもう外れているので、そのまま引き金を引く。
左から順番に頭を狙い、計四回。
小気味な反動を流しつつ放たれた銃弾たちは避けることのできない速度で射出され、規則正しい頭蓋ごと頭を破裂させる音を立てる。あまりに頭を失ったのが唐突すぎたのか突っ立ちながら絶命している。
ゾンビの中へと消えていくクライアントまでの距離を算出する。
ざっと、三十メートルくらいか？
だが、それまでに何度か妨害を受けるはずだ。そういう“布陣”を敷いているのだ、ゾンビのくせに。
一瞬のイラツキと思案の後、リスク覚悟で頭を吹き飛ばされたまま突っ立ってるゾンビの“肩”へと跳躍。そこを踏み台にさらなる跳躍。踏み台は俺の人間離れした脚力をもろに受けて崩れたが、なんとか目標までは近づけるようだ。
が、やはり待ち伏せは受ける。滞空する俺を待ち構えるはゾンビのじゅうたん。
落下予測地点にいるゾンビへと銃弾を放つが、射出されたのは三発。すべての対象の頭を貫き絶命させることには成功したが、カートリッジは空になった。当たり前だ、改造されているが９ｍｍを八発までしか装填できない。やはり俺の銃では無いので文句は言えない。

そうこうしている間に意を決っしなくとも、していても俺には翼はないので着地の時間はきてしまい、しょうがないので生き残っているゾンビの頭へひざ蹴りを食らわし着地。着地と同時に、横にいたゾンビの肩へ手を回す様にヘッドロックを決め、着地の衝撃緩和と併せて首を折るため上体ごと捻る。首をへし折るつもりであったが、まさか、もげるとは思わなかったが・・・

「なに、やってますの？」

真後ろから声がして振り返ると、大口開けた女がそこにいた。すぐさま、もぎ取ったゾンビの頭を口へとねじ込み顎を外し、躊躇なく腹に突き飛ばすような前蹴りを蹴り込む。弾丸のように吹っ飛ばされると、後へ吹き飛びゾンビ将棋倒しの駒となってくれた。ざまぁみろ。

「女性にはもっと紳士に接するべきではなくて？」

またも真後ろから声がした。今度は振り返っても攻撃しないようにしなくてはな。先ほどの“女ゾンビ”への攻撃を喰らわせてやりたい気持ちがくすぶっているが・・・

「女性の方も、もっと紳士の言葉に耳を傾けてほしいがね」

「あら、貴方って紳士でしたの？気付けませんでしたわ」

まぁ、紳士って柄じゃないことは認めるがね。

「クライアント。突っ込みすぎだ、死にたいのか？」

ゾンビたちは思考能力も無くしているくせに何故か統率の執れた布陣を組んでいた。一つ一つの動きが本能的なのに、これだけは理知的だった。

優勢であると思わせ、実は相手を自分たちの有利な状況に追い込んでいく集団戦の基本を奴らは演じている。どこかでゾンビの軍勢を動かしている存在がいることの証明だ。

それ以前に、ゾンビをだれが量産したのかが問題だ。そいつは生かしておいたらいけないな。

「わかっていますわ。だから、こうして司令塔を探しているのです」

「突っ込みすぎだと、言ってんだ。あんたの力量は信じるが、無傷では済まないだろうが」
「・・・貴方、私に雇われていることを忘れているのかしら？私（わたくし）の考えに口を挟むのは契約外ですわ」
段々、お嬢様の顔に苛立ちが現れてきた。俺はアンタの高貴なお考えを聞いてないんだが？
俺も徐々に感情が乗り始めるかと思った矢先、俺たちがいる路地裏の約一キロ先から巨大な“魔力”が爆発的に膨れ上がった。
「ッ！！　あっちですの？」
いや、待て。遠すぎるだろ。と言う前にクライアントは懐（ふところ）からまたも小瓶を取り出し、栓を外し、周囲に振りまく。
匂いで判った。これは火薬だ。だが、普通の火薬ではない。何かが配合されていることを俺の鼻が理解した。
「おいっ！まっ」
「数は減らしますから、その隙にお逃げなさい！　私はあちらへ向かいますッ！　着火（イグニッション）！！」
人の話を、聞けよ！！
そう言ってクライアントは人の常識を大きく超えた跳躍を見せ、魔力が発した方へと消えていった。
変化はすぐに訪れる。大量の酸素を消費し、爆炎が生じる。不自然にもゾンビだけを燃やしながら、その範囲を広げていく。
その炎の動きはまるで腹をすかした獣のように、熟しすぎた肉を飢えたように貪り、絡みつき放さない。喰らいつかれたが最後、骨の髄まで燃やしつくされる。普通の火薬だけではこうはならない。なにか別の法則を用いる何かが使われていることは明白だ。
クライアントはゾンビたちに囲まれたらこれを使う気だったのかもしれない。これなら多体戦に向いている。
「しっかし・・」
炎の獣を見ながら思う。炎は効果が薄れてきているのか、段々、希薄になっていく。もうそろそろ燃え尽きるだろう。その風景をあ

の飛び出していった背に重ねてしまう。
火も酸素が無ければ燃えないように、人も・・・
・・まあ、今はいい。
それとは別に、ただ一言、虚空に向って言いたい。いや、言おう。
「せめて、全部燃やせよ」
黒い煙が上がる世界でいまだ数体のゾンビが健全なままでいた。
燃やしきれなかったのだ。隙を見て逃げろとはこの事か？
逃げろとはいっても、残ったゾンビを放置すればどんな二次災害を起こすかわからない。最悪の場合、ホントに何処かの名作ゲームのように街がゾンビで溢れ返ることにも繋がる。
「やっぱり、持ってくるべきだったな」
簡単な仕事と聞かされていたため、いつもの装備（剣と銃）は持ってきていなかった。失態だ。
手元にあるアイツ（ハジ）から渡された自動拳銃（ガバメント）と予備のカートリッジにある弾では心もとないが、やるしかない。のこりのゾンビ数は３０体前後と言ったところか・・・
「お～い、旦那ぁ～。そぉーい」
間の抜けた声に続いて硬いコンクリートにさらに硬いなにかが切り裂いて突き刺さる音が響く。
音の方を見ると、そこには家に置いてきたままであった黒い大剣が地面に垂直に突き刺さっていた。
「必要でしょォ？　まあ、あの銃に触れると旦那怒るから、持ってきてませんけど」
上出来だ。　まあ、全てはお前のせいとは言わない。す・べ・ては！　だから後でご褒美として、しこたま鉛弾打ち込んでやる。全部じゃなくとも大半はお前のせいだからだ。
俺はヒステリックに口元をつり上げると、地面に未だ残る浄化の炎すら拒絶する黒い剣（イザナミ）を引き抜く。
いつものことだが、思う。
ああ、どんな仕事だろうと、疲れない仕事はないな。

そこに現れたのは金色の妖精。
ただしこの妖精。背中に翼はなく、その変わりにとても綺麗な柄の長い棒の先端に斧と槍がついたような武器を手に持っている。
そんな幻覚を振りほどくように頭をブンブンと横に振り、改めて前を見据え“彼女”を目視する。
妖精。
一瞬、そう見えてしまった。彼女はまぎれもなく人間なのに。彼女の人間離れした美しさで幻想に近い錯覚を引き起こされたのだと、素直に思えてしまうほどの説得力のある美貌なのだ。
そして、気が付く。私はこの綺麗な女性（ひと）と一度、出会っていることに。
「あら？」
あの空港で出会った時とは違い、武器を持っている。だが、あの時の女性（ひと）だ。一目見たときから綺麗な人だとは判ってはいたが、武器を持つ彼女はさらに美しさが際立っていた。まるで神話に出てくる戦乙女だ。純粋な正義で武器を振るう女戦士のように見える彼女。
それが、なぜアルバインにいきなり斬りかかってきたのだろう？
「お久しぶりですわね。イギリスでの事件以来ですわね、騎士（ナイト）」
まるで昼下がりに知り合いに偶然出くわしたような、自然な挨拶を始める女性。なにごともなかったかのようにしているが、素人の私にもわかった。あれは確実に殺意がこもった攻撃だった。
「やあ、こんなところで出会うなんて奇遇だね。もしかして、僕に会いたくなったのかナ？―魔女《ウィッチ》」
こちらも同じような雰囲気で返事を返す。だが、言葉の音程で判る。アルバインには似合わない怒りに似た感情が言葉に込められて

いた。
ビキッ
「あらあら、冗談がお上手なのは変わってませんのね？　剣を振り回すしか脳にない下品な騎士の一人にしては」
ビキッ！
「陰でこそこそ動いて敵を倒すしかない魔女の一人なのに野蛮にも近接的な攻撃的な武器を使っている品性がない君に褒められるとは光栄だネ」
ビキィィ！
「あらあら。言ってくれますわね、能なし騎士（ナイト）。ウフフフ」
「ｙａ、ｙａ。それほどでもォ。この単細胞一魔女《ウィッチ」
ビキビビキッ！！
「ウフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ」
「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ」
何かが決壊するのを耐えるような音を立てながら、二人は会話する。静かな罵詈雑言を言い合うには不似合いな笑顔で。二人の笑顔は次第に彫を深くなり、子供が見たら失神でもしそうな強烈な笑顔になってゆく。・・・怖い
それに比例するように、場の空気が悪くなる。数値にするなら現在、最悪値だ。あまりの険悪な空気に私はすぐさま土下座したい気持ちになった。なぜ私が？
長い長い笑い声、それは突如として終わりを告げる。
「フフフ、殺しますわッ！！」
「ハハハハ、滅すルッ！！」
笑顔は遂に決壊し、怒りむき出しに、ふたりとも同時に横一線。
二つの刃が向かう先は私。
・・・私ッ！？
ズバッと音と共に血が飛び散る。死んだ、私
の斜め後ろに静かに接近していた二体のゾンビが。

もしかしたら私の首が飛んでいたかもという事実が後から湧き起こり恐怖で腰を抜かし、ヘタリ込む。

そんな私の姿を見下ろす二人から次第に殺気が消えはじめたのはすぐのこと。

「今日はこれでよしましょう。こちらも貴方に構(かま)っているほど、暇ではありませんの」

「こちらのセリフだヨ。あぁ、危なかったネ。ナデシコ」

そういって助け起こしてくれるアルバイン。こちらには目もくれず、周囲をキョロキョロと見渡す魔女(ウィッチ)と呼ばれる女性。・・・ふたりとも謝る気はさらさらなさそうである。

「・・・ない。ようですわね」

「・・まさか、君も“アレ”ヲッ！？」

アルバインらしからぬ不意打ち気味で横殴りの斬撃を驚愕の声とともに放つ。

そんな彼の攻撃は虚空を斬る。彼の斬ろうとした相手は近くの三階建のビル廃屋の屋上に立っていた。どうやって？

高さ的に見下ろす彼女は怒りの声を叫ぶ。

「やはり、“騎士団”も絡んでいたのですわね！？　この聖人面した悪人共ッ！」

「英知の向上を理由に、非道の違法を繰り返す君たち“協会”に言われたくはナイッ！！」

謎の単語が多すぎて状況が整理できないが、つまるところ彼らは仲良くはないらしい。

「とにかく、これ以上私(わたくし)の邪魔をするなら容赦しませんわ。この国からすぐさま立ち去りなさい。次、会った時が貴方の最後となるのが嫌でしたら」

「僕もそのつもりだ。魔狩りは僕らの義務だからネ」

最後の二人の間に本物の殺意が交錯し、最初に離れたのは金色の妖精の方だった。ビルの屋上の縁から飛び去るとすぐに街の暗闇へ

と消えて行った。
そんな彼女の去った後を見続けるアルバインだったが、姿が見えなくなるとゆっくりと大きく息を吐いた。まるで緊張した空気を消し去るような仕草。
でも、私には別の意味が含まれているように見えた。
「・・・ナデシコ。すまなかったネ、危険なことに巻き込んダ」
「・・いえ、私が勝手に突っ込んだだけですから」
「それより、ナデシコ」
「？」
「君、ソドムに住んでるのカイ？」
ハイ、と肩を落として謝る私に、アルバインは苦笑して気にしてないというように肩を叩いた。

「いや、でも実際に助かったヨ。地図もあったんだが、どうしても見つからなくてネ」
「・・・その地図は信用しないほうがいいです」
私がソドムに住んでいることを隠していたこと話すと、アルバインはそんなこと隠さなくていいのに、と笑って許してくれた。
許す次いでに、彼が今日泊まることになっていたソドムにあるホテルの場所へと案内してほしいとのことだったので喜んで引き受けた。
地図を渡されていたそうなのだが、地図は最初の空港内の地図同様に使えた物ではなかった。グチャグチャで小学生以下の絵、方向もあやふやで意味不明、東西南北も示されていたが何故か、太陽が、南から東に落ちていた。数年前くらいのカーナビの方がまだ使えるくらいだった。
まあ、ソドムにあるホテルなど一つくらいしかないのですぐに案内できた。そこはソドムで唯一にして、世界に誇れるであろう高級ホテル。接客態度から料理、室内装備に至るまで五つ星らしいこと

を進から聞いていた。
位置もすぐ近く、なにせ私たちがゾンビに襲われていた場所の裏が目的地のホテルだったからだ。
そして、すぐに到着した私たちを待っていたのは

「申し訳ありません、お客様方。本日は事情により休業させていただきます」

大きく豪奢（ごうしゃ）に作られた自動ドアを抜けた先で待っていたのは胸の名札に支配人と書かれた温和そうな初老の男性と上記の言葉だった。
「一体、なにがあったのですカ？」
流石に、心の奥底からの謝罪の声と判ってしまうほどの声に文句は言えず、事情を知ろうとアルバインは心配そうに事情を聴いた。
「さきほど当ホテルの“裏手”からとても大きな“謎の衝撃”が発生したようでして、ホテルの各所に倒壊の危険を伴う“破損”が発生してしまったのです」
訳を聞いた自分が、その衝撃をおこした張本人だと知らずに。
「・・・ｈａ（ハ、ハハ）、ｈａｈａ、そんなことガ・・」
「申し訳ありません。代わりのホテルへの手続きはこちら誠心誠意持っていたしますので」
「・・・いエ、そこまでしていただくことないデスヨ」
苦笑いしながら断るアルバインを、支配人はなんて理解ある若者だろうと思ったのかもしれない。実際は、ホテルを破壊した張本人である人間が、被害者からサービスを受け取ることはできないと考える不憫な青年が無理して引きつった笑顔をしているだけである。
「犯人、もしくは原因はこちらではっきりとさせ、断固たる報復はつけますので」
「ほ、ほうふク！？」
「ええ、我がホテルの品格を落とした罪は死、だけでは済ますことはできません故（ゆえ）」

温和そうな支配人の顔が一瞬にして、冷酷で冷たい殺意ある悪人の顔に変貌する。

実は、進が言うにはこのホテル、無法地帯という立地条件を利用し、世界中のマフィアや裏の世界の重鎮たちも御用達のホテルらしく、セキュリティ部門から情報漏洩の対処として私設の武装部隊まで雇っているほどの武装ホテルなのだ。所持する武力は一国家の保有するものと相当といわれている。

裏の世界でも、このホテルの中での抗争は御法度、やらば敵ではなくホテルに消されると有名で、暗黙のルールになっているとのこと。

「そ、そうですカ～。はやく・・・終わるといいですね」

「御心使い、ありがとうございます。・・・お客様方、お汗の量が凄いのですが？　どこか、お身体の調子でも悪いのですか？」

「「いえッ！御気になさらずッ！！」」

「ハ～、まいったヨ」

ホテルを後に、とぼとぼと人気のない通りを私たちは歩いている。時折、振り返りホテルから追手が来ないかどうか心配で振り返るアルバインは疲れ切ったように肩を盛大に落として、困ったと溜息声と一緒に吐き出した。

「・・本当にスイマセン。私があんなことにまきこまれなければ・・」

「イヤ、あれは君のせいではないヨ。あれは“僕達”のせいでもあるからネ」

「僕たち？　あの綺麗な女性が言っていた、騎士団ですか？」

フッ、とアルバインの顔に影が作られる。慌てて私は失敗したと悟る。

「あ、あの詮索したりとか、そんな気はないですから。話したくない事だってありますよね！」

誰にでも話したくないことはあう。そのことは私も十分、理解しているはずだったのに。

「キミも君は“こういうこと”は初めてではないんだろう？だから、悲鳴一つ上げなかっタ」

進からは吸血鬼にかかわっていたことの一切をあまり話すなと言われていた。世間で未だドレイクの名は根強く残っている。彼が吸血鬼であったことは知られていないが、彼の真実を知る存在が残っているかもしれないから危険はまだあるらしい。

また吸血鬼だけに関わらず、魔族に関係した全ての者を忌み嫌い、この世から消そうとする者たちがいることも聞いていた。

だが、彼の目は何かを見抜いた鋭い目ではなく、同情に近い憐れみの目。決して追求しているのではなく、同じものを知っている理解者の眼差しで口を開く。

「そうだネ・・改めて自己紹介しよウ。ボクはアルバイン・セイク、騎士団第2師団所属の巡礼騎士ダ」

「巡礼・・騎士？」

「別にボクたちは宗教家とかではないヨ。簡単にいえば、世界中を回って魔族がらみで困っている人の所に行ったりする人ダネ。騎士団というのは危険な魔族と戦う人たちの集まリ。別に何処かの国に所属しているわけでもない、独立機関と言ったところカナ」

ハジさんが前に言っていた。魔族と言う強い存在がいるのになぜ世界は彼らのモノになっていないのか？それは抗える者が存在するからだと彼は言っていた。それが目の前にいる。まさか目の前に現れようとは・・・

・・・待て、何でこの時期に現れたのだ？

まさかと思う。まさか自分が関係しているのではないだろうか？

それにより周りの大切な人たちが巻き込まれるかもしれない恐怖が全身を一気に冷やした。だから、震える口を動かしてでも聞かねばならない。

「・・誰を・・ですか？」

一拍の間、空気が張り詰めて私は一度歩みを止める。彼もまた立ち止まり、私の方へと振り返り口を開ける。

「誰？　いや、ボクが探しているのは“物”だヨ。安心してくれてイイ」

邪気と嘘のない笑顔。これで嘘をいっているならば、相当の悪人。だが、アルバインはそうは見えない。

彼と出会って数時間だったが、悪人でないことはだけは理解できた。イイ人なのだ、きっと根っからの。だからこそ助けたいとも思う。

「・・・はい、ありがとうございます。で」

「？」

「泊まるところ、どうするんですか？」

「・・・本当にどうしようカナ・・」

空には満点の星空。電灯やら家の明かりが少ないソドムでは星が良く見える。時刻は夜９時、ホテルのチェックインには遅すぎる時間だし、予約をしても明日以降ということになるだろう。しかもソドムにはホテルは先ほどの一つしかない。宿泊施設などはソドムで経営しても客はほとんど入らないからだ。

それに今からソドムを出ることはマズイ。最近は手薄になったがソドムと日本の“国境線”は今でも自衛隊による監視がある。昼はそれほどでもないが、夜はとても厳しい。よければ補導、悪ければ牢屋行きらしい。いかにパスポートや住民票があろうとソドムから出てきた人間に彼らは優しくはないはずだ。

「最悪、野宿カナ？」

「それは、やめた方がいいです」

アルバインが公園や道路で寝ているところを想像する。なんとも不憫で、間違いなく危ない人に目を付けられること必至（ひっし）だ。今の時代、同性愛はもちろん、女性から男性を襲う時代ですたい・・・とハジさんが言っていた。

「ＨＡ、ＨＡ。これでも野宿には慣れているんダ・・・ほんと、

慣れてるんダ・・周囲への警戒は怠らないヨ」
アカルイックな笑顔の後、すぐ隠す様に手を顔に当てて上を見上げるアルバイン。遠い何かをみるような、自然と出てきた涙を押さえつけているような仕草だった。
（・・・あぁ、経験者だったんですか・・）
しかし、どうしたものか？　このまま別れ、自分だけ家に帰るのも酷い気がする。　だが、知り合いなど少ないし、宿屋などしらない。
・・・本当に無能だ、私は。命の恩人になにもしてやれないのか？　それだから多くある家の空き部屋に住ませてもらっている大家兼契約者にいつもポンコツ、ポンコツと・・・あれ!?　あるではないか！
「アルバインさん！　あります！空き部屋！」
どうやら、ポンコツでも役には立てるらしい。

現在、私は進の事務所兼自宅に住み込みで住まわせてもらっている。
この事務所はもともとアパートを改造して作られた物件だったらしく。一階は事務所で、二階は住居となっている。それを進が購入したらしい。
住んでいるのは私と進の二人だけ。物置として使われている部屋もあるが、それでも部屋は余っている。たしか2部屋くらいは綺麗な状態で空いていたはずだ。
「本当にいいのカイ？」
「大丈夫だと思いますよ。お金も無料かもですよ！」
「いや、さすがに宿泊費は出さしてもらうヨ」
そう言うアルバインだったが、見えてきた巧妙に口元が緩んでいる。
ソドムの中心街から進の事務所のある内縁部（日本側が内縁部、

太平洋側が外縁部）までは遠かったが、道の凹凸（おうとつ）が激しいソドムでも比較的安定した路面がある道を通ってゆくバス（バスと言う名の軽トラックの荷台）がある。

それに乗車すること３０分ほどで、現在の我が家についた。

二階建ての事務所のような外見。周りのご近所さん（ほとんど廃屋）と比べるとひび割れもなく、綺麗な白塗りの外壁、中を見るための窓ガラスは正面にはないため一切内部が見えない使用になっている。

私の家ではないが、いつもお掃除やら修理やらをしているため愛着があった。見よ！この綺麗に修復されたドアを！　一週間ほど前に蹴り破られた物を私が修理したのものだぞ！

「・・・うん、なんか歴戦の家って感じがあるネ」

ドアの穴を塞ぐために用いたベニヤ板を見てアルバインの一言。

「・・・それは褒めてますか？　まあ、いいです。あ、大家さんは気難しくて、いじわるで、天の邪鬼で、魔王っぽいので気を付けてください」

「魔王？」

キィィ、と錆びれた音を発ててドアを開く。いつもなら彼はソファでだらけながら新聞の夕刊を読んでいるはずだ。

そのはず、だった。

ドアの先、ソファに座っていたのは

「あら？　どちらさ・・ま・・」

空港で、そして先ほどアルバインに明確な敵意を持って斬りかかってきた芸術的な美しさの美女だった。

「・・・・」

見つめ合う二人。

玄関と部屋の中という離れた位置関係、どちらも美男美女なので絵になる。

残念なことに見つめ合う二人の間に恋愛感情はない。先ほど約束を交わあった仲ではあったが、あるのは甘い恋慕の感情などではな

く、明確な殺意に近い敵意。
ただ気まずい沈黙だった。なにせ、今度会った時が最後だ、と二人で言いあったのにまさか三十分も経たぬうちに再会するとは二人とて思わなかったに違いない。
このまま何もなければ、もしかしたら何事もなかったように戦わない道があるのではないか？そうだ！それがいい。それが良
ガチャ！
「おい、クライアント、風呂空いたぞ？」
「騎士（ナイト）オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」
「魔女（ウィッチ）イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！」
女性はソファから高速で玄関まで走破、そのまま何処からともなく取りだした綺麗な装飾の棒をアルバインへと押し倒す様に叩きつける。
アルバインは左腕の盾を素早く展開し受け止めるも、彼女の突進力までは受け止めきれなかったのか、力に身を任せて後へと押し切られるように一緒に飛んでいった。
その際、ドアを巻き込んでいった。直（なお）したばかりだったのに・・。
「・・なんだ、あいつら？」
「進いいいいいんっ！」
涙目になりつつも沈黙を破壊した進に抗議するように睨めつける。が、この男はめんどくさいと顔に書くようにヤル気のない顔になった。
「二人を止めてくださいっ」
「嫌だよ、犬も喰わなそうなカップルの喧嘩」
「アレが恋人同士のランデブーに見えますかっ！？」
いつの間にか棒は槍に変わり、女性はアルバインの胴へと突きを放ち続ける。アルバインはそれを槍の側面を滑らす様に剣を巧みに扱い、攻撃の軌道を逸らし、槍の引く速度が緩慢になったと見るや、

巻き込むように剣をかき回し、相手を死に体へと持ち込む。隙を生みだした後はすぐさま重く鋭い薙ぎ払いを繰り出す。

それを見越していたかのように女性は地面スレスレまで体を低くして回避、その状態から下からの頭部を狙った突き上げられた槍だったが、ギリギリで盾で防がれる。

この光景が恋人同士のじゃれあいだと言う人間は、たぶんまともな恋愛をしたことがないのだ！

「まさか、こんなに早く再会するとはおもいませんでしたけれど？　そんなに私に会いたかったのかしらっ！！」

「冗談じゃないっ！！」

苛烈な戦いをしながらの会話。それを聞いているのかいないのか、進はマイペースに夏用の寝巻である浅葱色の甚平に着替える。この人はっ！もうっ！！

「ほっとけ、ほっとけ。どうせ、どちらかがヤられて終りだろ？」

「それ普通の死合いでしょうが！！　死ぬんじゃダメなんです！

些細な誤解が生んだ悲しい戦いなんです！！」

「どーでもいいよ。まぁ、クライアントがピンチになったら助けるさ」

そう言うと進はソファにあった新聞を手に、奥の自分の席へと向う。

「もうっ！　しィィ！！？」

進、と呼びかけようとした瞬間、私の髪スレスレに何かが飛んできたため声が変に上ずる。飛来物は進が片手で持っていた新聞を貫通、勢いをそのままに彼のお気に入りのデスクに突き刺さった。

正体は綺麗な形と装飾をしたナイフの大きな欠片。

私は振り返り、外の激闘へと目を向けると進がクライアントと呼ぶ女性の武器がナイフに変わっており、半ばで断ち切られていることが解った。

ブチッと嫌な音がしたので再び振り返ると、新聞が二つに分かれた音だった。同時に進の何かが切れた音がした、気がした。

「これで終わりですわっ！」
「こちらも同じダ！！」
クライアントの女性の方の武器がまた様変わりし、巨大な槍の上に斧がついた武器となっている。それを大きく上段に構えて体を弓のように反らす。不気味に振動する武器が音を発てる。
アルバインもまた剣を水平にし腰だめに構える。剣は燃え上がり、剣身（けんしん）は赤く染まっている。
二人とも決着を想定した攻撃。開始の合図はなく、スタートはきられる。
二人の間の待機範囲は彼らの一回の踏み込みで攻撃範囲へと変える。
「ハァァっ！！」
「ゼェアっ！！」
「そうだな、二人とも終われ」
今まで誰もいなかった二人の間を埋める様に、突然人が現れた。阻むように、立ちふさがるように武器を持った両腕を大きく開いているのは、進・カーネルだった。
「なっ！」
「うッ」
二人は息を止めるような声を上げて攻撃を止めた。なにせ、アルバインには顔面に白い銃が一ミリ手前でつき付けられ、クライアントの女性は攻撃を黒い刃で受け止められて細かい振動ごと動きを止める。
二人は止まった。共通してるのは二人の顔は驚愕に染まっていることだろう。
「ご近所迷惑だろうが？　そろそろ、止（や）めろ」
目を怒りでいっぱいにしながらも、進は剣と銃を納めて家へと戻る。そんな彼の背中を見つめていた二人は再び睨みあおうとしたが、冷めてしまったためか失敗。言葉の喧嘩に移行した。
「貴方がいけないのですよ！」

「飛びかかってきたのは君だろウッ！」
小さな罪を擦(なす)り付け合う子供ですか。
「そうだ、貴方には言っておきたいことがありますわっ！」
「ボクも言い忘れていたヨッ！」
同時に息を吸い、同時に宣誓。

「“魔本”は渡しませんわっ！！」
「“魔剣”は渡さないッ！！」

「「・・え？」」
二人が初めて怒り以外の感情でお互いを見つめ合う。
「オイィ？」
ズォォンッ！　と、とても大きな炸裂音と放たれたものが二人の間を突き抜け、割り込んだ。
音の正体はドスの利いた声で割り込んだ進が左手に握りしめた大きな銃から、実際、割り込んだのは地面に到着すると地面を炸裂するほどの威力を込められた弾丸(ツッコミ)だった。
「とっとと入れよ。ご両人」
今にも爆発しそうな怒りを必死にこらえる進の声は地獄の底から響いてきそうな超低音。それを受けて、本気でシュンとしながら家へ向って歩いてくる二人。
その二人の姿には苦笑うしかないが、彼らの言葉が妙に引っかかった。
魔剣と魔本。
二つの魔。
胸がざわつく。また何かが起ころうとしている、そんな不安が心中に駆け廻った。
「そういえば、撫子」

そんな不安に揺れる最中、家の外壁に寄りかかる進から声をかけられる。

「なんです？」

まさか、私の不安に気づいてくれたのだろうか？　す、少しだけ嬉しいな・・・。

「誰が気難しくて、いじわるで、天の邪鬼で、魔王っぽいんだ？」

「・・え」

一瞬の甘いときめきは、一瞬で苦い灰と化す。

さきほど家の前でアルバインに話していたことを思い出す。まさかっ！？

「イイ度胸じゃねぇか？　大家様に向かって喧嘩吹っ掛けるとは、ずいぶんイイ女になったようだな、撫子ォォ」

「え、ちょ、いやぁ。あははは」

「昼間にやった金は借金とは別にしてやろうと考えていたが・・・やっぱ、やめよ」

「えええええぇ！！」

夏の夜の空に、少女の叫び声が轟いた。

視点変更？？？？

そんな同じ夏の夜の空に、女性の悲鳴が轟いていた。

「や、やめてぇぇぇッ！？」

「・・える」

暗闇の広がる路地裏。家の近道と通った道。その道の真ん中に立っていた男を通り過ぎた瞬間、自分の左腕を“切り落とされた”。

「ア、アアアアッッ！！」

声は全て痛みと恐怖で嗚咽に変わる。

痛い、酷い、意識が飛びそうなのに、命を取られる恐怖で意識が

さらに覚醒してしまう。
そんな自分をなぶるかのように、男は残っている私の右腕を“握り潰し”そのまま小さな路地裏へと放り込んだ。
私はただのＯＬだ。最近やっと仕事になれ、気になる男性もできた。それだけのただの、ただの！
そんな願いはむなしく、男は握った“剣”を躊躇なく振るう。
「オシえる」
もうどこを斬られたか考えられなくなったころ、自然と男の呟きだけが耳に入ってくる。
凄い出血なのだろう、道一面赤色に染まっている。そんな光景も徐々に閉じる瞼の裏に消えて行く。
このまま私は目覚めることはないだろうと静かに理解し、意識は消えてなくなった。
だが、最後の男の声だけが異様なまでに明確に聞こえた。まるで呪いのように。
「死ヲ、教エタ」

四話へ

3、ゴールデン・エンカウント（後書き）

始めに、謝罪を一つさせていただきます。

私、実はタイトルを決め、こちらに投稿した際に同名に近いタイトルの小説があるとは知らずに投稿していました。気づいたのは最近で、友達よりの注意メールで気がつきました。

ホントに申し訳ありません。迷惑したかもしれない方々にここで謝罪しても伝わらないかもしれませんが、ここで謝罪をさせていただきます。

一応、タイトルの方を変えましたが本質的な意味は変わりません。契約といういみのコントラクトでもありますし、ｃｏｎとｔｒａｃｔにも意味があり、それを線で繋げてたことにより、逆に本質的な意味に近づいたぐらいです。一応、コンセプトぐらいはあります。

不完全な主人公たちが、どんな形でも繋ぎ合いながら生きることにこの小説の主題であります。

技術が未だない自分の文で語られるモノですが、良かったら見ていてください。

追伸ですが、仕事がきついので更新に定期的な断言ができません。ごめんなさい。

4、外側からの判断

4、外側からの判断

せめて、せめて。

「魔女（ウィッチ）、君の負けダとわかるはずダ。引くなら今だヨ」

「騎士（ナイト）、目の調子はよろしくて？　不利なのはあなただと、お気付きになられてないのかしら？」

突然の膠着（こうちゃく）状態。

相対する二人、騎士アルバイン・セイクと錬金術の魔女ローザ・E・レーリスは手にする武器で求めるモノを奪いあいつつ、目と目で殺意のぶつけ合いを器用におこなう。

彼らの求めるものが、ただそれがこの場に一つしかないという現実により生まれた悲劇。

睨みあう二人は互いに退こうとはせず、両者が欲するもの手放さない。

獲物で器用にさばき合い、超絶技巧を駆使し奪い合う様はまさに死闘。

このままでは互いを滅ぼし合い、血を見る戦いへと発展するだろう。

あぁ、なぜだ。

なぜ、ここにもう一つないのだろうか。

同じものくらいあってもいいのにと思わずにはいられない。

もうひとつ・・・・せめて、もう一本“ソーセージ”があれば！！

あ・・・おはようございます、九重（ここのえ）　撫子（なでしこ）です。
現在は日曜の朝、ＡＭ８：００を回ったところであります。
「君はさっき食べていタ！！　だからこれは僕のダッ！！」
「それは貴方も一緒でしょうッ！！　男らしく渡しなさい！！」
「男女平等の時代ダっ！」
「それは女のセリフですわ！！」
熾烈な戦い・・・ソーセージ戦記は続く。低レベルな争いなのに、手さばきが凄いので高レベルの熾烈な戦いにすら見えてきた。なんで目を向けないであんなに巧みな手さばき可能なのだろうか？　お箸（はし）ってあんなことも可能なのだと感心しそうになる。
が、実施は結構低レベルな喧嘩である。
「進、止めてください！」
「あぁん？・・・まぁ、いいんじゃねえの？」
現在、私たちがいるのは進の事務所の中央に位置するテーブルに座って朝食を取っている。・・・二名は中腰だが。
四角いテーブルなので二人が対面する形になるしかなかった。いまにして思えば、この二人を対面させる形で座らせたのがそもそも間違いだった。
二人は所属する組織の違いからか、互いを敵視し合っていた。それを何とかできないかと、二人で朝食を通して、わかり合ってもらおうとした私の考えが浅はかだった。
なにより目の前の喧嘩をほったらかして新聞を読むこの男に仲裁を求めた私がバカでした！
「いい加減、やめてください！　一つのものをお箸で取り合うのはダメなんですよ！」
「「うるさい、外野は座ってなさいっ！」ッイ！」
仲が悪い癖にユニゾンして、私にズバッと振り向き、逆ギレする二人。同時に肉汁たっぷりのソーセージが彼らの束縛から外れて勢いよく、あらぬ方向へと飛んでゆく。
あらぬ方向・・・新聞を読んでる進の元へと飛んでゆき、新聞を

油で汚し、果てには彼の顔面へと直撃し床へと着落した。
「「「あ」」」
「・・・・」
気まずい沈黙が部屋を満たす。
カチカチカチと時計の秒針が進む音がはっきりと耳に響いた。
それまで他愛のない争いをしてきた二人も熱が冷めてゆくようで、お互いにどうしようと顔に出始める。
カチ、カチ、カチ。つまり六秒後に最初に口を開いたのは目が据わり、半眼になった進（被害者）だった。
「・・・おい」
「「コイツが悪イ！」」
続いて口を開いたのはいがみ合いつつも、息がぴったりそろう二人。私は口元に微笑を作った。もしかしたら本当は、気が合うのでは？　この二人。
「・・・もういい。とにかく静かに食えよ。・・・それと撫子、落ちたソーセージそのまま、お前が食えよ」
「ハイ・・って、なんでッ！？」
最後に私が理不尽な命令に驚愕して口を開いた。

先ほどの朝食から一時間ほど経ったのに未だ事務所には不穏な一触即発の空気が張っていた。
先ほどのソーセージは水で洗っておいしく頂きました。
「・・・・」
「・・・・」
食後はローザさんがソファーで瓶に粉状の何かを真剣に注ぎ込み、アルバインは外へ行くための準備にいそしんでいた。
二人は視線を合わせない、声も、始めから相手がいないように振舞っている。だが、実際は何かあったら即行動するように心がけているようで、空気がビリビリと緊張している感覚が部屋に満ちてい

るのだ。
　クラスメートが喧嘩したときの、あの居づらい雰囲気に似ていた。判ってくれるだろうか？
「なぁ、クライアント」
　判ってくれない人がいた。我が契約者、進・カーネル。
「・・・なんですの？」
「仕事での確認をしておきたいんだが」
　ものすごく嫌そうなローザの表情と口調にも動じない進は続ける。
「対象との遭遇時の対応と要望があれば・・」
「ああ、結構ですわ」
　しん、と空気が冷えた。
「いや、行動すべき時の対応のために」
「ですから、貴方は私の邪魔にならない範囲にいてくださいな。戦いになれば、私一人で戦いますわ」
　ローザの返事には明らかに、苛立ちと拒絶が含まれていた。
「貴方は、私のボディーガード？　違いますわね？案内役がしゃしゃりでることありませんのよ。貴方は、貴方の命じられた仕事をしていただければ結構ですの」
「ッ！　そっ・・」
　あまりに人をバカにしたようなローザに私は瞬間的な反感から抗議の声を上げようとした。それを止めたのは、今まで無視を決め込んでいたアルバインだった。
「魔女、君はまた一人で勝手な行動ばかりするネ。周りの気苦労がわかってないようダ」
「気苦労？　私は親切で申し上げただけですわ。貴方、まさか“事件”の時の事をまだ根に持っていらっしゃるのかしら？」
　この二人は過去に接点があったことに・・・驚くこともないのか？　ここまでいがみ合うには理由があるとは思っていたが、何があったのだろうか？
「あの時のことだけじゃなイ。君は協調性がないノカ？　少しは

周りのことに気を配ろうとは・・まあ、魔女には無理な話しカイ？」
「協調性のことを貴方にとやかく言われる筋合いはありませんわッ！！　どうせ高すぎる魔力適正で仲間との連携ができない巡礼騎士(はみだしもの)が！」
「ッ！！　君は人のことを階級で見定める愚かな人間なんだネっ！！　ずいぶん器と技量の小さな人間のようダっ！」
「言いましたわね！　そんな剣に凡庸な刻印を刻(きざ)んだだけで発動する、お粗末な大量生産物と私の緻密な計算がなされた術式がどちらが上か、ハッキリさせた方がいいようですわねっ！！」
「望むところダッ！！　君たち魔女のエリート主義には・・・」
「やめてください！！」
「そうだ、いい加減にしろ」
私の悲痛な声の後に、冷静で感情の起伏も感じられない呆れはてたような進の声が続いた。
キッと、睨みあっていた二人がその視線を同時に変更する。向う先は彼らと同等かそれ以上の睨みを利かせる進へと。
「・・クライアントの要望は確認した。なんら“問題ない”、結構だ。　仕事にえり好みはしない主義なんでな。快く賜(たまわ)った」
進の素直な肯定に、ウッと息をのむかのように怯んで末(ばつ)の悪い表情となるローザ。彼女も言いすぎたと思っていたのかもしれない。
進は視線を反らしたローザからアルバインをそのまま直視する。
「騎士様よ。何処かに行くんだろ？　早く行っとけ」
それと、と繋(つな)げて。
「それとな、アンタもクライアント(こいつ)のことを、どうこうと責められるのか？」
？
「・・・それは、どういう意味ダ？」
しかし、進は答えず。手でシッシッと払い、行けと促(うなが)す。そんな進に熱が冷めたのか、疑念の眼差しを外し、なにも言わずにドアから出て行くアルバイン。

「撫子、お前も行け」
「あ、はいっ」
進の言葉の意味を考えるのを後回しにし、アルバインを追いかけ、外へと走る。
ドアを開けた先で私を出迎えたのは日曜の朝の陽ざし。

視点変更1

撫子がドアを開けて出て行ってから数秒。
ヤレヤレだ。子供の喧嘩の法廷じゃないんだぞ、家(うち)は。
そんな心で静かに溜息をつく俺に声がかけられる。
「・・・確かに、先ほどは、言いすぎましたわ・・」
小さな声でさえずるクライアントの声が届いた。だが、申し訳ないと思ってはないだろう。どちらかと言えば自分の失態を恥じているといったところなのだろうな。
「ですが、あれは本心ですわ。貴方はなにもしなくていいの、よくて?」
強引にも上から目線で告げてきた。ほらな。まぁ、楽させてくれると言われれば、それはそれでいい。
「ああ、わかった。大丈夫だ、邪魔はしない」
「それではよろしくお願いしますわ」
笑顔の一つもなく。再び席に戻り、粉末でいっぱいになった瓶を丁寧に特注品であろうスリットのついたベルトへと差し込んでゆく。
「・・・ひとつ」
「? なんだ?」
あちらからの質問とは珍しいな。
「貴方は・・・いえ、あの剣は何ですの?どう言ったルートで手に入れましたの?」

「貰いもんだから、どういったモンかなんてわからない。それと剣は剣だろ、なんの変哲もない鉄剣さ」
本当の事も嘘もいいつつ、さり気なく流す。あの剣が欲しいなんて言われたら困るからな。
「質問次いでに、聞きたいんだが」
「なんですの？」
あからさまに流されたことに気が付き、苛立ち気味の返事。目も半眼で怖いな。
「アンタ、なんでそこま個人戦（ワンマン・プレー）にこだわる？」
「・・それこそ、貴方に関係ないことですわ」

視点帰還１

「・・・・・クソ」
アルバインを追って、家を出た私。彼はまだそんなに遠くまで行ってはおらず、すぐに見つけることができた。すぐさま、走って追いついた私が最初に聞いた言葉は後悔するような悪態だった。
「・・・アルバインさん？」
「・・・あぁ、ナデシコ」
振り返る彼は、無理やり笑顔を作ろうとしたようだが失敗したようで、困ったような笑顔になってしまっていた。本人もわかったようでさらに嘆息（ためいき）。
「・・ゴメン。嫌なところを見せてしまったネ」
「そ、そんなことは」
さすがに、そうですねと言えるわけない。そういう人間なのだ、私は。
「それより、探し物を探すんですよね。お手伝いしますよ」
「え、でも」

「地の利がある人が必要ですよね？　私は適任だと思いますよ！」
「あ、ああ。そうダネ」
強く押し切るように、言いきる私にたじろぐアルバイン。私の必死さに流石に困ったようだ。
（私もこんな強引には言いたくないです。でも今晩の夕食がかかっているのです！）
昨日の夜に、進からある命令を受けていた。
それはアルバインの街案内、そしてローザとの接触を回避させること。
あらかじめ二人で決めた範囲から出ないように内密に先導し、彼らを会わせないようにする。なにせ彼らは出会えばすぐさま戦いになる。それでは、どんな被害がソドムに訪れるかわからないからだ。最悪、二次災害で、感化された血の気の多い奴らによって、この街で抗争が起きる可能性があると進は行っていた。
そして、なにより。
（もし、二人を出会わせたら今晩の夕食抜きだ、なんて！　やっぱり進は意地悪で、極悪非道な魔王でで地獄耳で、守銭奴で・・それから、それから！）
（なんか文句あるか？　借金娘？）
（！！？？）
心の中で理不尽極まりない契約者への悪口の最中、割り込んできた謎の思念に驚愕し、周囲を警戒する。あの黒いコートは見えない。
・・・幻聴か？
やはり周囲にあの男の姿はなく、ホッと息をつく。
（はぁ～、寝ても覚めても進、進、進。私・・疲れてるのかな？夢に出てきたらどうしようかな）
「ナデシコ？」
「ふぇっ！　アルバインさん。なんですかっ？」
「君が急にブンブン首を振ったり、百面相（ひゃくめんそう）を始めたりと挙動不審だったからネ」

カッと顔に熱が入った。そんな変だったのかと恥ずかしくなったのだ。

「大方、好きなヒトのことでも考えてたのカイ？」

「えぇっ？　あ、いえ。そんなことないですよ！」

好きなヒト！？　そんな、まさか！　そんなはず・・ない！あんな、あんな、いじわる魔王のことなんて。

オロ、オロ、オロ。

ククククっ。

ククク？

「ハハハッ！　ゴメンネ。からかうつもりはなかったんダ」

体をクの字に曲げ、腹を抱えて、目に涙を溜めて笑うアルバイン。さきほどの暗い影など、見る影もない。それ以上に、いつもの真っすぐな雰囲気がなくなり、年相応の顔になっている。

それよりも、からかわれた。

「か、からかわないでください！」

「フククッ！　イヤ、すまない。そうだね、案内訳を頼もうカナ」

「やはり、人は少ないネ」

やってきたのは昨日も訪れた“市”。

昨晩ほど人数は少ないのだろうが、日曜日ということもありそれなりに人はいるはずだったが、心なしか人がいつもより少なくように思えた。

だから、アルバインが呟いた一言が、気になった。

「やっぱりって？」

「あら、撫子ちゃんじゃないか！」

大きな声で真後から名前を呼ばれて振り返る。昨日も出会った、八百屋のミドリ姉さんがそこにいた。

「色男連れて。デートかい？」

「そうなんデスヨ」
アハハハ、と笑い合う二人。アハハ・・いや、違いますよ。デートなんかじゃ・・
「そんなことよりさ～あ」
そんなことより！？　このままでは間違いが訂正されずに噂になるッ！
「昨日、また人が大勢いなくなったらしい。人さらいか、もしかしたら切り裂き魔かもしれないよ。嫌だね～。だから、デートも早めにきりあげるんだよ」
アハハ、と言いながら颯爽と去っていくミドリ姉さん。その早さは私に誤解を解けさせないとせんとするかの如く俊敏だった。・・・ちょ、待って！
「フム、切り裂き魔、カ」
「フムじゃないですッ！！　どうするんですか！！デートって！！違いますよ！　そうなんデスヨ、じゃあないですよ！！」
泣きわめく私を見て、まあまあ落ち着いて、とでも言うように手でなだめる仕草をするアルバイン。落ち着けますか！！
昨晩、起きたゾンビの大量発生した場所へと再び赴くためにアルバインは市へと調査に行きたいといった。月明りがあったとはいえ、あの暗闇の中でなにかを見落としていた可能性も考えられなくもないからということだったから心よく引き受け、再びココにやってきた。
なのに、この仕打ち。誤解は広がるだろう。ミドリさんは噂を流すのが得意で有名なのだ。それが嘘であれ、真であれ関係なく広める。
「魔剣の仕業かもしれないナ」
「真面目に締めないでください！　って魔剣ですか？」
魔剣。昨晩いっていたアルバインの目的。聞かないことにしていたが、ここまで事件にかかわると聞いておきたい。
「ゾンビを作る、剣ですか？」

「イヤ、そもそも僕は能力、形状、持ち主すら聞かされていないんダヨ」

視点変更2

「あぁ？　どんな魔本か、わからないだぁ？」

今日は車で通れない場所の調査もするらしく徒歩で移動するクライアントと俺。さすがに形状をしらないと探すに探せないと、目的の品について聞いたが、帰ってきた一言は

「わからないものはわからないのです！　文句なら仕事を依頼した魔道協会に言いなさい！！」

逆ギレかよ・・。そんな仕事を受けるクライアントもクライアントだが、寄こす方も寄こす方だ。

「・・・魔道協会ねぇ。魔術師を千人単にで抱えてる大御所って聞いてたが・・・」

「少し前までは、魔道の探求者の集いとも呼ばれていたようですが、今は協会が国々とのパイプ作りのための依頼を自社でつくる仕事斡旋所になり下がってますわ」

クライアントは腹を立てているというよりも、呆れかえった声色で呟き、目は明後日の方向を眺めている。

昨日、車内でやっていた魔力の流れを探る探知魔術の一種を歩きながら起動しているのだろう。魔術について俺は門外漢なのでよくわからないが、歩きながらできるような代物ではない気がする。

俺の目に映る幾何学模様のような靄が複雑すぎることが証拠だ。

俺の目は普通の人間のそれではない。魔力の流れまではわからないが、人に見えないようなものを写すことができるらしい。・・・

一体、俺は何なんだろうな？

「そんな仕事を受けるクライアントも物好きだがな」

俺の呟きが気に入らなかったのか、頬膨らめてムっとするクライアント。

「仕方なかったのです。協会からの直接の仕事なので、それなりに名は売れます。・・・それに難易度が高かったから・・」

最後の方は小さくつぶやいたつもりだろうが、俺の・・・ポンコツいわく地獄耳は聞き逃さない。・・・難易度、ねぇ？

「ま、いいさ。で、目的地は？」

「ここですわ」

あ？ココ？　と問う前に俺の真上から気配と真下に人一人分の影が出来上がる。

「オシエル！！」

急降下から豪快な唐竹割を振り落とされた。振り下ろされたのはロングソードってヤツだ。

俺は右へ体を捻り、スレスレで剣をかわし右回りに半回転。黒いコートの下に隠していた白いソレを抜き取り、剣を見せつけてくれた男の顔面スレスレに押し付けて見せつけるてやる。

「俺の自慢の愛銃だ。ついでだ、最後に威力も見て逝けよ」

ズォォンと、耳に音を残し続けるかのような轟音が鳴り響き、感動のあまりか反り返るように逆エビぞりになり、そのまま地に落ちる。

「おいおい、人さまを真上から襲うなよ。常識がないのかよ、近頃の奴は」

「デザートイーグルのマグナム弾を、片手で打って平然としている貴方の方が常識がないのではなくて？」

そんなクライアントの呆れかえっている呟きを無視し、地面に転がる剣を拾い上げる。剣という単語がどうしても気になったからだ。

「なあ、コイツは魔本じゃないのか？」

そんな俺の考えを問うべく、後をついてくるクライアントに尋ねたが、帰ってきたのは辛辣な一言。

「どう見たら本に見えますの？　目が充血しすぎてダメになりま

したの？」
「紅（あか）いのは、生まれつきだ。魔剣と魔本、似てるだろ？」
「全く違いますわ」
凄い冷たい目線が俺を貫く。は～、バカがいますわと言われているようである。魔術初心者なんだよ、俺は。
そんな俺を見て耐えきれなかったのか、めんどくさそうに視線を空へと向けて解説を始める。
いや、違う。
めんどくさそうに見たのは俺ではなく、空でもなく、再び上から落ちてくるゾンビどもだ。
「魔本とは魔術の知識を書物という形に押し込めたもの。魔道書、魔術書、原典それぞれ呼び名と細かい違いはあれども、これらは魔術を寄り集めたモノですわ」
口で物を解りやすく、バカにも解るように噛み砕いて話しながら、クライアントは特製ベルトのスリットに収められた小瓶を二つ取り出す。
「魔術を使役する魔術師たちが自分の秘術を後世に残すため、もしくは複雑怪奇な文言（もんごん）などを記録するための、つまりノートですわ」
左右に握った小瓶の蓋を親指で弾き、中に込められていた粉末が溢れだす。砂は風に乗って消えるはずだが、砂はまるで砂鉄同士が取りつき合うかのように、一つとなり、形をとる。
「その内容は、他所多様古今東西の術が複数ある物から、一つの系統のたった一つの魔術についてだけ記載される書などがありますわ。正直、後者の方が圧倒的に多いですわ。魔術師は自分の術にプライドを持っている者が多いですし」
クライアントの手には小瓶はもうない、そこに有るのは剣。美しい装飾が施された柄（ヒルト）と細身の剣身、二振りのレイピアがそこに握られていた。
「ですが、たった一つの簡素な魔術が一つだけ記された者は魔本とは呼びませんわ。それはただの魔法陣、簡素な発動術式に過ぎま

せん」
　自らの体を抱くように腕を交差させ、レイピアを体へと引き寄せる。体を捻り、螺旋の力を溜め解き放ち、コマのように回転し、剣を己(おの)が翼の如く広げる。
　広げらた剣の翼は地へと落ちてくるゾンビを落下前に真っ二つに切り裂く。
「つまり、魔本は細かくて小難しい術式がたくさん書かれた本のことだろ？」
　俺は落下してくるゾンビたちをゲームセンターのシューティングゲームのように銃で撃ち落とし？ながら、内容を略する。
「・・・もう、いいですわ。そうそう、そんな感じ」
「投げやりだな。で、魔剣とどう違うんだ？　あれも魔術が入った剣なんだろ？」
「魔具であることは確かですわ」
　クライアントは切り裂くと、そのまま演舞するかのように舞う。重芯を崩さず、かつのびやかに柔軟なほどなめらかな動きは舞踊を彷彿とさせるが、その速さと的確さはまさに本物の武術。
「でも、魔剣などの物質を媒介に、ましてや武器媒体では、収められる魔術はできて“一つ”」
「なんでだよ？」
　美しすぎる死の舞に、切り裂かれ、恐れ慄き、見惚れ、再びただのたんぱく質の塊に戻されるゾンビたち。
「本と言う、記載された“知識を教え、広める”、“その文献を保存し、編集する”という物の性質を秘めた存在なら、いざ知らず、剣や武器と言った“戦い、敵を傷つける”ための存在にどう、魔術と言う名の叡智を記せるのです？」
「あ？　剣に刻むとか、いろいろやり方があるじゃないか？」
「それでも、一つだけですの。複数刻んだ場合、混じり合って効果が無くなるか、合わさって別の術になり下がりますわ。」
　剣の動きとクライアントの動きが止まる。それはゾンビの殲滅を

示していた。
剣についた血を振り払う動作すら絵になる、これはクライアントの美点なのだろう。
「それに剣やら何やらは一つの物質。本は同じ紙媒体といえ、複数枚綴じることが可能ですから、いくつも記載できるでしょう？だから魔術同士が不用意に混じり合わないようすることもできるのです」
「剣やら武器は二つの鉄を組み合わせて作る場合も・・・いや、結局混じり合わせるから一つのカウントなのか」
「あら、解ったようですわね。単調でも強大な一つの能力とその身に魔力を持つ存在が魔剣と呼ばれる魔武器。多くの魔術の知識が秘められ、読む者に巨大な叡智と力を与えるのが、魔本。後者は最悪、適正無しと本に“想われれば”読者を殺しさえもする危険な物ですわ。どちらも魔力が錬られなければ使えませんが」
「それに鋼や鉄などの普通の鉱物ではもともと魔力の許容量があまりありませんのよ。大きすぎる魔力を受けた鋼は砂になって消えますわ」
「ご高説、どうも。それで？　アンタの探す魔本ってのはゾンビを作る魔本なのか？」
ゾンビが自然発生するわけでもあるまいし、たぶん一連の騒動は魔本が絡んでいるに違いない。能力は死者を操る魔術が記載されていると考えて間違いないのだろう。
「作るだけならまだ魔剣と疑えましたけれど。でも、これは明らかにゾンビ達を操っている。つまり、作成と操作の二つを持っている。つまり魔剣の所業ではありません」
一息ついて、空をまた見上げる。もう話しても構わないか、と言うような呆れた口調で、協会から依頼された本当の内容とあるいわ、それと戦わなければいけないのか、という嘆息も含まれていたのかもしれない。
「私が探しているのは、たぶん死者の文言が多くの秘術が詰め込

まれた魔本。それは依頼の一部、本当の目的はそれを協会から奪った賊から奪い返すことと、賊の殲滅ですわ。魔道協会の監視の目をかいくぐり、かつやり手の魔術師たちを容易く葬る敵を相手にしなければなりません」

視点帰還2

「じゃあ、ゾンビが発生したのって魔剣のせいではないんですね？」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれなイ。どこかの組織が最近、作り出した魔剣があって、それが何者かに奪われたという情報を受けた騎士団から、回収または破壊命令が僕に下ったんダ。第一発見者である被害者が剣の形だったという目撃証言の情報しか渡されなかったけどネ」

今、私たちは市の路地の一角に置き去りにされた木材の上に腰掛け、アルバインのおごってくれたジュースを飲みながら、ココまで巻き込んだからと、知っている情報を私に聞かせてくれていたところである。

魔本と魔剣の違い、自分に下った命令が白紙同然だったことなどだ。

「それが、日本に来ているですか？」

「断定的な確証はないんダ。世界各地の事件や変化があった場所に僕を含めた仲間たちや、巡回騎士たちがそれぞれ派遣されて探りを入れていル。僕は日本に派遣されたというだけダヨ。でも実は、ここの噂話を聞いていて、ココかなっていう予感もあったんダ」

「？」

「日本には、ソドムがある。世界から見放され、法がなく、比較的安全に悪さができるこの場所なら魔剣を隠せる。利益目的なら取

引場所には最適じゃないカ？」

なんとなくだが、胸がもやもやしてきた。なんだろうか、この気持ち。

「来てみて確信になったヨ。この街も汚いモノや、見たくないモノは見ない街ダ。ココでなら、魔剣が暴れていようと、隠せル」

アルバインが視線を私たちが据わる場所から同じ路地先へと視線を向ける。その視線は全ての光をなくした瞳で作られていた。まるで絶望しているかのような、怒っているかの様な。

視線の先は、光が少ない暗い暗い路地。

そこには寄り添い合うように、御世辞にも綺麗と言えない衣服をきた小さな子どもたちが小さくなって壁を背にして寝ていた。

日本人の子もいれば、白人や黒人、中国系など外国の子供たちが夏が近いとはいえ、未だ肌寒い風が通り抜ける道の上で生活する家（ストリートチルドレン）なき子たち。

家と呼べるのは地面にひいた段ボール、布団と呼べるのは服の上に纏った新聞紙だけ。

路地裏とはいえ、市に面する道だ、人の流れはある。だが、どんな人間が通ろうと彼らには目もくれない。

もしかしたら昨日、アルバインと一緒に市を歩いていた時に彼が見ていたのは彼らだったのではないだろうか？

「あんな場所がある街はココだけではないヨ。どんな大人も、彼らを見なイ。見たとしても汚物でも見る様な目線と、汚い罵倒、慈悲とばかりに蹴りを入れてくル」

視線は現実の彼らを見ているのに、アルバインは遠い何か、別の何かを見ている様に話す。まるで過去でもみているかのような、そんな虚ろな目と言葉。

「自分は無関係だ、自分は選ばれた存在だ、生きるれることが普通であり、夕食と温かい寝床があることが当たり前だと本気で信じている阿呆な奴らが多いところほど、あんな光景がよくあったヨ」

淡々と話していた彼の目と口調に徐々に命の流れが再び戻り始め

る。

怒りと嫌悪、そして憐れみ。

「そんな場所は、誰もが目を“逸(そ)らス”。何があったとしても、それに気が付いたとしても、自分に害があると理解すれば善であろうと悪であろうと、見向きもしないんダ」

小言のように呟く彼に私は何を言うべきなのだろう？

「そんな場所なら魔剣が来たことも、誰も気が付かなイ。浮世から噂話なんかが出る程度サ。自分たちが関わらない世界で、どれだけの不運な人間が泣き叫ぼうともネ」

再び視線が小さな子供たちに戻される。

「この街(ソドム)も同じサ。誰も見ようとしなイ、あのゴミダメのような街と。あの子たちも・・・“かわいそうに”。こんな街で一生を終えるなんテ」

ブチッと何かが切れた。進がこの場にいて、これは何の音と問うたならば、言うだろう。

（そりゃ、お前。キレた音だろ？　堪忍袋の緒がな）

そうだとも、私は今、怒っている！！

「バカにするのも、いいかげんにしてくださいっ！！！」

「ナデシコ？」

私は立ちあがり、憤怒の表情でアルバインを睨めつける。わかっている、私の睨みはしょせん怖くも何ともないのだろう。彼の反応が、キョトンとしているのを見てわかる。なにを怒っているのだろうと思っている人間の顔だ。

だが、私はそれでも見据えなければならない。言わねばならない、彼の心に響かなくとも！

「ゴミダメのような街と同じ？　あの子たちが可哀想？　ふざけないでください！」

「僕も、言いすぎたと思ウ。でも、本心ダ」

知らないくせに！見たこともないくせに！　外から見ただけのくせに！

「あの子たちは、家も親もいないかもしれない！でも、生きています。きちんと頑張っています！」

「頑張っても、どうしようもないこともあるだろウ？　君も息をしているだけで生きている、なんてうわ言をいうのカイ？」

私が怒りにまかせて大声で話すのに対して、アルバインはたしなめるかのような落ち着いた声だった。それは宗教の宣教師のようで、子供を言い聞かせる大人。でも、引き下がられるか！子供にだって意地はあるものだ。

ビシっと指を中国系の女の子に向ける。

「あの中国系の女の子、この前に薬局で働いていました！」

「エ？」

「黒人の子は、魚屋さんについていって漁を手伝っています。あそこの日本人の男の子はミドリさんの八百屋さんの裏で野菜を運ぶ仕事をしています！　白人の子は、新聞配達してました」

「ちょっと、待っ」

私は確かにソドムに来てから一カ月ほどだ。でも、確かに見ている。彼らが生きていた瞬間を。それを目にしていながら彼らがバカにされるのは自分のことのように嫌だった。

どうせ、あれだろ。まっとうでない子供は働かせてもらえないだろ、とか言う気でしょう？　貴方が見てきた街なんて知らない、でもココは

「ココは、ソドムです！　あなたが言ったはずです。ココは法なんてない、常識もない！！　どんな人だってやろうと思えばやれる場所です！」

真夜中は犬の鳴く声より銃音が聞こえるほうが多く、どこかのマフィアが日夜抗争していたり、違法な取引が多かったり、家には週に五回くらい押し入りがあるけど！（それは進の事務所だけかもしれないけど）

進が言った、安住の地が無い者たちだからこそ、自分がいることができる場所の大切さがわかると。ココにいる人たちはみんな居場

所を無くした人達だと、ならばあの子供たちと同じ経験をした者もいるはずだ。

「あの子たちの境遇を“理解”する大人だっているかもしれません。それで雇ってくれる人もいるかもしれないでしょ。それにソドムは圧倒的に」

一拍おいて、大きく断言する。

「変人ばっかりです！！」

ズバンと言い切る。

市の側の通りからどよ～んとした空気が流れてきたり、えぇ～、通りがかったら変人扱いぃ？　と複数のうな垂れた声が聞こえたが今は無視だ。

「変で危ない大人を雇うより、扱いやすくて賃金の安い子供の方が雇うほうがいいでしょ！」

どうだ、道理にもかなっているだろ！　と大きく胸をはる。

撫子無双は続く。後（あと）！

「ソドムは確かに、危ない場所かもしれないです。けど、ゴミダメなんかじゃありません！！　私、あまり他の街と知りません。でも言いきれます」

あの恐ろしい吸血鬼に強要されて生きる日々の中で、いつも送り迎えの車窓から見ていた街の風景。

友達と遊びに行った昼下がりの繁華街。

そして、荒れ果て、国からも見放された場所でも生きていられるとする人々の市場。

１７歳にも関わらず、これだけしか人が多く集まる場所をしらない。あの恐ろしい吸血鬼に強要されて生きる日々の中で、いつも人が普通に生きている場所を、そこから遠く離れた異常の日常から嫉妬するぐらいに見つめていた私だからわかる。

「ソドム（ここ）はどんな街よりも、人間が輝いて生きてます！！」

どうしてか、わからないが私はそう表現するしかなかった。それが、イキイキと生きている人の事なのか、生きる目的を得た人間のことなのか、まだ十七年の歳月しか世界を見ていない私にはわからない。

でも、そんな人たちが生きる場所を、大勢もの人間を見殺しにしてきた最低な私でも受け入れてくれた場所をバカにされて許せるはずないではないか！

「私は、ココが好きです！　この街でも頑張って生きている人たちをバカにしないで！！　外側からの見た程度で判断なんかしないで！！」

ゼェ、ゼェと息を荒げて、目に涙をいっぱいにためて怒りに任せて言いきった私を、アルバインはポカンと口を開けて驚いている。

そんな彼の足を、小さい子供がジャンプして踏みつぶした。

「イタっ」

彼の履く白いスニーカーの爪先部分の地味に痛い場所を踏み込んで、そのまま路地の入口に駆け走る。　犯人は先ほどの家なき子（ストリートチルド）たち（レン）。寄り添い合うようにいた四人がそこまで辿り着くとクルリと振り返る。

「オレ、いつか、いえをかうんだ！」

日本人の子が、元気に言いきった。

「わたし、いつかがっこういって、ケガをなおせるくすり、つくるんだ」

中国系の女の子が、はにかむようにいった。

「ぼく、せんちょうみたいに、リッパなりょうしになるんだ」

黒人のちいさな子が、胸を反らして、宣言する。

「新聞キシャになる。それで、カネかせぐ」

白人の男の子が、小生意気に言い放つ。

だから、と四人一斉に大きく息を吸い、吐き出す様に

「「「「わたしたち！！　カガヤイテいきてるよ！！！！」」」」

キャー、はしゃぎながら逃げ出す四人の子供たち。それにいつの

間にか集まっていた人だかりが、俺も輝いて生きるかね～とか、私もさらに輝いて生きるかね～、とか、あの娘、凄いわね。あんな恥ずかしいこと平気で言えるのね、などそれぞれ言いたい放題、言いながらバラけて行く。

・・・なんだろ、私。間違ったこといってないよね？　頑張ったよね？　いまさらながら恥ずかしくなってきてないもん。・・・泣いてなんか、ないもん。顔も真っ赤になってないもん。

怒りと理不尽に泣きそうになりながらも、もう一つ。

「それよりも、なんですか！　ローザさんへのあんな態度！」

「エ？　魔女（ウィッチ）？　いや、それハ・・・」

「何か嫌なことでもされたんですか？　机にラクガキされたとか、下駄箱に腐った弁当を入れられたとか？」

「イヤ、何でそんなありきたりな学校でのイジメの例なんだイ。別に、それは彼女が」

「魔女だからですか？」

精神的に戦士アルバインを平凡完璧偽称娘ナデシコは追い詰めていく。じりじりと後退するアルバインを逃がすまいと、こちらもじりじり前進。

それに負けたでも言うように真面目な顔して話し始める。

「魔女と言うより、魔術結社や魔道師、魔術師たち。彼らは魔術を探求する者たちダ。それゆえに、良く表れるんダ、叡智の探求と称して堅気で普通に生きる者を犠牲に己の欲のため行動する異端者ガ」

「騎士団は、魔から生まれた獣や化物どもから世界を守るのが仕事だが、同時に魔の知識を持ち、それで悪行する異端者たちを駆除するのも役目としていル。だが、魔術師側は異端者を自分の側で処理するとして、なんども争いが起きタ。時には、その異端者たちを保護して、彼らの魔術を自分たちのモノとしていた場合もあっタ！

何百という人間を犠牲にしていたとしても、彼らは叡智のためなら勝手に免罪符を作り出ス。そんな奴らを信じられるわけないだろ

ウ！」

魔術師と騎士。絵本やおとぎ話の中では、共に闘う仲間であることが多い。だが、実際は相反する存在。片や探求者と守護者、ペンと剣。そんな彼らは同じ力持つ者であっても目指すべきところ、在り方が違いすぎるのだ。

でも、それでもだ。

「それを、ローザさんがなにかしたんですか？」

「・・それは・・」

「私、あの人と全然話したりしてません。会ったのだって昨日が始めてで、彼女のことなにも知りませんけど。そんなことする人じゃないと思います」

「見ただけで、決めるのカイ？」

「あなたと同じで“外からしか見たことありませんから”。あなたは魔女という総称で、私は第一印象という“外側（そとがわ）”で決めつけています」

うっ、というように目を見開くアルバイン。

進の言わんとしていたことがわかり始めた。

人を外側と内側に分けるとするならば、内側が本質、外側が魂やその人間存在そのもの、と言ったのは偉人は誰だったか。

その人間がどういう人物なのかは、大抵の場合は見た目で判断できる。どういった人格なのか生活態度や、性格、友人関係は如実に現れ、体系や服装、目付き、声色等でわかる。

だが、そこまでだ。

本当のところはわからないのだ、なにせ、皮膚と情報感覚器官である外側からの判断でしかないから。視覚という器官から脳が情報を処理して判断しているに過ぎない。

本質という内側を知るには至らない。

「アルバインさんは、ローザさんを見たことがありますか？」

「・・・今朝も昨日も会っているヨ」

「違います。彼女の内面、考え方や本質を見たことが・・いえ、

“見ようとした”ことがありますか？」

本質を知るには、その者と生きなければ、どんな存在なのかを見ようと近くで長い時間をかけなければならないのだ。

友達となり、親しくなるのは誰でも出来る。だが、相手がどのような人間かを決めつけることはできても、真に本質を理解できるだろうか？

まして、世界や社会的な多数の情報や称号、名称で区別するような人間には不可能だ。それ以前に見ようともしないのだろう。わかっているという錯覚に踊らされ、満足して、断定してしまうのが落ちだ。

「本当に悪い魔法使いさんもいるんでしょう。ローザさんと昔、何かあったのかもしれない。でも、私にはあなたがローザさんじゃなくて、魔女という名前に接しているようにしか見えませんでした」

彼は、ローザの名前を読んだことはなかった。君と呼ぶことが少しあった気もしたが、何処か何かの定義に当てはめた言い方をしていなかっただろうか。

それをあの紅い目の魔王は気が付いていたのだ。

「違う、僕は彼女“たち”の凶行（きょうこう）を見てきタ。あの時だっ」

「過去の記録とか、見た目とか、社会的な意見とか、一般的なとか、自分以外の多数の意見に犯されないでください。悪い魔女の定義じゃなくて、ローザさんや、ソドムを自分の目で見て、考えて判断してください」

自分を否定されているアルバインは聞くのも嫌かもしれない。でも、わかってほしい。

そんな私はアルバインの手を取って優しく包む。

「私は、アルバインさんが・・私の大切な友人が、見た目と他人からの情報だけで判断してしまう人じゃなく、私を見返りもなくピンチから助けてくれたカッコイイ騎士であってほしいです」

たしかに、見た目も本質も悪な存在はいるかもしれない。だけど、確かめる前から決めつけてほしくない。それは少し前まで、完璧な

人生を送っていると勘違いされ、誰からも見放されていた自分であるからわかる。
なにも知らない人間に、自分のこと決めつけられ、とやかく言われて傷つく辛さがわかる。
進は自分の評価は他人が勝手にすると言っていたが、正直それが辛い人間もいる。
そんな意見だけで決めつけないでほしいのだ。
だがら・・・
「・・ナデシコ・・」
「そ、それにソドムにだっていいところあります。だから、え～と・・その」
急激な思考の失速。次第に自分がとてつもなく青臭いことをいっているのでは、アルバインにだって意見があったのではなど、なに熱く語っているのか私？など、怒りが急に冷めてきたからだった。
それより、なぜ私はアルバインの手を握りしめているのだろうか！？
あたふたし始める私の視線は徐々に下へ。彼の顔を見ることすらできない。
そんな私を見てか、向き合う彼の声が私に降り注ぐ。
「・・・ああ、そうダネ。僕は何を見ていたんだろうネ。ホント、わかっていたはずなのに、どこかで誰かの意見や価値観で決めつけていたのかも、しれなイ」
声の起伏は高く、晴れ晴れとした声色だった。そんな彼の声がうれしくなり、顔をバッと上へと向ける。
「あ、アルバインさ」
否（いな）、向けようとした瞬間、南の方向からのすさまじい爆発音に、そちらを振り向かざろうえなかった。

視点変更３

「見つけましたわよ。盗賊！」

太陽の光が燦々と照らすビルの中。なんでビルの中なのに太陽光があるのかって？　それはココが廃ビルで、現在いるのが5階くらいなのだが、それから上である6階の床半分を残して、それから上の階がないからだ。理由はどうあれ、こうなればココが屋上ともいえる。

ちなみに廃ビルになったのは今さっき、このクライアント（爆発魔）が火薬で奇襲をかけたからだ。ターゲット以外いないとわかった途端、これだよ・・。

俺とクライアントは光の中に。

盗賊と呼ばれた男がいるのは影の中にいた。

肌は死人のように白く、頬はげっそりと削げ落ち、目はくぼみ大きなクマができている。髪は落ち武者のようの無造作にのばされ、体を昔は大層立派なローブだったようだが、今はボロと呼ばれてもいいぐらいボロボロだった。

「東の死霊使いとも呼ばれた貴方が。盗賊に落ちるとは・・嘆かわしいですわね、グレイ・アライスマン」

グレイ・アライスマンと呼ばれた男はピクリともしない。まるで自分のことではないかのように無視を決め込む。

「知り合いか？」

「面識はありませんが、死霊使いの中でも名のある魔術師だったようですわ。顔と名前ぐらいは把握しているくらいには・・」

クライアントが言葉を止める。止めたのは、グレイと呼ばれた男が手にしている“本”が開かれたからだ。

クライアントと俺は飛びずさるように距離を取る。能力は大体見当がついているが、実際は何があるかわからない。

それにココは敵の本陣。何が飛び出してきても不思議じゃない。

「グアァ、アアア、アアアアアアアアアアアアア」

感情の起伏が一切なく、ただの言葉の羅列がグレイの口から出てくる。その聞いている者に不快さを与える声にいち早く反応したのが、クライアント。

「ッ！　カーネル！　ここからすぐに離れなさい！　彼はもう魔本に“心”を乗っ取られています」

「心？」

「心、魂、なんでもいいのですが、魔本に寄生された状態の人間は、ただの生きる魔力生成器官扱い。魔術の詠唱なしに魔術が行使できますの。使用者ではなく、魔本の意思（せいぎょ）で！」

「それ、セコイぞっ！」

「アアアアアア、ゴア」

グレイのうめき声が放たれるとコンクリートであるはずの地面からゾンビが次々と現れる。なんて所に埋葬してやがんだ！

「伏せ！」

犬のように命令されるのは癪だったが、クライアントの命令にしたがい伏せる。地面の冷たさが体に感じた瞬間、同時に頭上を何かが駆け抜ける。

上を通りすぎた鋼色の何かは、囲むように現れていたゾンビの首や胴をかき切りながら、フロアを３６０度、横に振りきられた。

「グレイ・アライスマン！！」

クライアントはゾンビ達の体を分裂させた武器、農具から戦いの道具へとされた武器サイズを振り上げ、グレイめがけて振り下ろすべく跳躍。

本来、敵へと飛び込むため跳躍するのはあまりイイ手ではないが、地面からゾンビが這い出て足を掴まれる危険性がある今はいいルートと言える。

そのまま、死神の使う大鎌（オオカマ）が敵から魂を刈り取るようにえぐり込むかと思いきや。

「ゴゴゴオジャイ」

意味不明な言葉の羅列は、実は意味があったのだとでもいうよう

にクライアントとグレイの間に割り込むかのように地面から“壁”がそそり立つ。

「！！　キャアッ！！」

グレイの出した壁に幅まれた大鎌（サイス）は、その刃の鋭さからか壁に突き立つが切り裂く事叶わず。壁のそそり立つ速度に引っ張られ高く空中へと飛ばされる。

その高さはビル七階分くらいか？　そのまま、落ちても魔力を体で循環させ、肉体の強化を図っている魔術師なら大丈夫だろうが、落ちる予定の地面が安全とは言い難いので、受け止めるべく跳躍し、空中でクライアントを受け止（お姫様だっこ）める。

「案外、可愛い声でなくんだな？」

「ダマリナサイ！！」

顔を真っ赤に俺の冗談に対し怒る。ボケとツッコミは大事だが、なんと敵もツッこんできた。

さきほどの壁を空中へと伸ばしてきたのだ。

俺は落下途中で壊れたビルのむき出し状態の鉄骨を踏み蹴り、空中で方向転換。ギリギリを通り過ぎる壁を・・・いや、違う。

これは壁なんかじゃねぇ！

鉄骨を利用し素早く縦横無尽にそそり迫る“肉壁”からの回避の最中、グレイと呼ばれる死霊使いと目が合った気がした。生気のないの気色悪い目と紅い瞳が交差する。

俺は何とか、元のフロアにたどりつくと、開口一番で聞く。

「おい、クライアント？　ありゃ、なんだ？」

「さすがに気が付きましたのね？　アレは」

薄桃色の壁。カジュアルな家の壁を連想した奴に問いたい。壁に腕が無数についているか？　苦悶に歪む顔が涎を垂らして呻くか？

見た目から言うぞ。

その壁はゾンビが固まってできていた。

「ゾンビ、いえ死者が固まって作られた地獄の手前の壁。日本では地獄門と呼べばいいのかしら？」

「い～や断る、日本の地獄門はもっと風流な感じのはずだと俺は信じる」

これが日本の地獄にあるとは思いたくない。

そそり立ち、異様で異常な存在感のあるゾンビ壁が４つ。この廃ビルもずいぶんな模様替えをしたもんだな・・・。

「ゾゾゾゾｚ・・ニンチする・・まじゅつ、かかぐ・まがいもの・・・れんきんじゅつ。アルケミ・」

そんな悪趣味なインテリへと変貌させた張本人グレイの口から再び音が出るが、こんどは魔術の文言ではないようだ。

「形態術式が書き込まれたビンに入った粉末状までに砕イｔａ呪物に、ｂｕんれつｋａｚｏく・コクウ素、魔力かで物体を錬成シテｉｒｕ・・介入・ｄｉｓｐる不可。錬成速度は魔術中さいそく」

「ハッ！　魔本の奴隷ごときが、私（わたくし）の術の解析ですの？」

敵の能力を見極めるのは戦う者にとって当然のことだ。だが、なぜだ。とてつもない違和感に襲われる俺がいた。

「魔術師殺しの魔術ｈｅｎｏ・・がされて・・いる・・・だが」

ふらふらと体を左右に振るわせニヤリ笑う。それは純粋に嫌悪感が背筋に走る下卑た笑い方。まるで、低俗なのはお前らだと言うかのような目線とともにハッキリ言った。

「錬金術・・・魔術を犯した科学の先駆（センク）、汚れた学問」

チッ、しくじった！　たかが本だと思って油断した。

「完成がナイ・・・完成“できない”終わった魔術ダナ・・」

俺は咄嗟に手を伸ばすが間に合わない。予想どうり、クライアントは侮辱に怒り、グレイへと突貫した。

グレイの狙いどうりに。

「貴様ぁぁぁぁぁあああッ！！」

「ババババｍｍｍｍ」

怒りの咆哮を上げて突貫したクライアントの手には先日見せたハルバートが作られ、グレイの胸部へと突き出される。対してグレイは凶気の笑み。

敵がほめたたえた錬成の速度は確かにどんな魔術よりも早いかもしれない。それが先手となり、魔術師殺しと呼ばれたのかもしれない。

だが、クライアント。相手はもう魔術を作り上げてるんだぞ。

再び現れたゾンビ壁に矢じりは防がれる。それでも負けじと押し込まれるハルバート。

「ムダ・・ダ・・壁に錬り込まれた死体ノかずは５００と３０。お前のやりが貫けるのはせいぜい３」

「知ったことかァァァッ！！！」

叱咤の如く放たれたクライアントの声に応えるようにハルバートが赤く赤光する。炎の魔術かと思いきや、違う。赤く燃えているのは壁の周囲。ハルバートがもともとの大きさより分厚くなってるように見える、あれは・・・高周波振動か？

「！！」

「侮辱の罪を、死で贖エェェェ！！」

接触する物質を分子レベルで“切り裂く”刃が、遂に壁を突き抜けグレイの眼前に矢じりが迫る。

グレイは驚きに表情を作ったが、遅かった。気づけ、ド阿呆！

死体の壁は４枚あっただろうが！！

走りだす俺だったが間に合うかわからない距離だ。

壁がクライアントの四方から取り囲むように信じられない速度で迫っているのに気がつかねぇのか！

「ッ！」

迫る壁の音に振り返るが、もう遅い。四方を取り囲まれ、退路を失ったクライアントにグレイは感情もなく告げる。

「総計２１２０の死体ニ、押し潰サレロ」

あの野郎、壁の構成を解いて圧死させるつもりかっ！

俺の手にはイザナミもある。だが、こいつはどんな魔術だろうと拒絶する。つまり、俺があのゾンビ壁を切り裂けば、“構成を解く手伝い”をすることとなる。

どう・・す・・。その刹那の間に。
「ｐｕｔ　ｏｎ、ｔｈｕｎｄｅｒ（サンダー）」
その瞬間、俺の真横を黄色の風が駆け抜けた。
「サラバ、ダ。デキソコナイの魔術シ」
遂にゾンビ壁の檻が総勢２１２０体のゾンビの圧力へと変換される。中に囚われる者の末路は死体の仲間入り。
だが、クライアントはそうはならないようだ。
下へ向かうはずの力の流れから、横へと向う力が“脱出”する。
それはまさに横に走る黄色い稲妻。稲妻はグレイへと向い。
胸を一閃、切り裂き、稲妻はグレイの背後へと駆け抜ける。
「！！ギョギョギョ」
「・・・変な悲鳴ダネ。それに死体で圧死させるなんて、趣味が悪いヨ」
突然の斬撃に驚き、傷をつけられたのが信じられないかのように見るグレイ。そんな奴に声をかける男はクライアントの腰に手を回し、意識を失った彼女を支えている。
灰色の使い古したジャケットと白地のシャツと青のジーンズという目立たない着こなしの金髪の美青年。
この男はこの場の誰よりも目立っている。黄色の電光を身に纏い、剣を右手に握る姿はファンタジー小説に出てくる魔法の剣士。いや、騎士だったか？
「なんだ、遅れてきたくせにカッコイイじゃねぇか？　騎士様よ」
「遅刻したつもりはないヨ。僕みたいのは、遅れてやってくるのがセオリーだロ？」
「ふん、言うねぇ」
騎士、アルバイン・セイクがまさしく遅れてきたヒーロの如く、剣を構える。

次話へ

4、外側からの判断（後書き）

最初から見てくれている人、すこしでも興味を持ってくれた方々、こんにちは、桐織　陽です。

未だ初心者臭が消えない我が文を見ていただいて本当にありがとうございます。　ちょっと見て“つまんねぇ”と思われた方、スイマァァッセン！なんとか頑張って文章にするのでどうか、また見てくれることを切に願っています。

友達にアウトファンタジーってなんぞ?ププ、流石、中二病だな～　と問われたので言おうと思います。

友よ、聞け・・いや見ろ!ってゆうか、あとがきで書けってどんな命令!?メールでいいやん!

・・・アウトの名の通り、ダメなファンタジーです。良い子のみんな真似しちゃだめだぞ～と言う意味です。

・・・嘘です。外れた、常識外、規定外、外れた者たちのお話って意味です。

駄文、失礼しました。

5、教鬼の魔剣

5、教鬼の魔剣

アルバイン・セイクがヒーロのように立っていた。

すぐさま、気をとり戻したクライアント・・・錬金術の魔女ローザ・エン・リーリスの拳が彼の鳩尾（みぞおち）にめり込むまで。

「こぉ・・のぉ！　変態騎士ぃぃッ！！」

「ゴボォアッ！！」

かなり恩知らずな魔女による渾身の一撃（ブロー）が叩き込まれ、カッコよかった騎士は、クの字に折れ曲がり胃の内容物を吐き出しながら、地に落ちた。

「ゲォ・・ボぉ。　キミ・・君たち・・女性陣は・・僕の胸部に何か、怨みでもある・・のかォア？」

「お黙りなさい！　この変態！　け、結婚前の婦女子を抱きかかえるとは　ハジを！　恥（はじ）をしりなさい！！　くぉんの！　コォンノォ！！」

マジか、そんぐらいで今は変態扱いの時代になのか。

地に伏した騎士に容赦なく行われる踏みつけ（スタンピング）。魔力で強化された力なので、ドンドンとコンクリートに埋没してゆく姿が痛々（いたいた）しい。最悪なのが、全ての攻撃が執拗（しつよう）に腹部なところだ。

やり過ぎだとは、言えない。さっき俺も抱きかかえてたし・・・変なとばっちりは勘弁だった。

アルバイン・セイクの体全体がコンクリートにはめ込まれた頃、後ろからアレがやってきた。

「よ、ようやく上（のぼ）れた・・階段が途中から無くなってて・・って

！　アルバインさん！！」

我が契約者にして、天然記念物級の完璧ポンコツ娘、九重（ここのえ）　撫子（なでしこ）だった。

ナデシコは、物理的に地面と一体になったアルバインの元へ駆け寄る。

「そんなぁ！　しっかりして、アルバインさん！　あれほど強いアナタをこんな風に出来るなんて！　どんな化物やられたんですか！？」

「そ、そこの・・金髪のロングヘアーの・・バケモノ・・錬金術師・ニ・・」

「誰が化物ですってっ！？」

「ドっ！？」

金髪の化物がブーツの足底を叩きつけ、ドスっと肉を殴る鈍い音が再び踏みつけられた騎士の腹部から鳴る。ついに力尽きたかのように動かなくなる騎士を見下ろし、質問・・いや尋問するクライアント。

「で！　何の御用かしら！？　今さら私を助けるなんて、どんなことを企んでいるのか聞かせてくださる？」

強く断言するように言いつけるクライアント。それもそうだ、あれほどいがみ合っていたのだから今さら無償で助けるわけがない。そう思えるのも、うなづける。

そんなクライアントに、詰め寄るように抗議する撫子。

「そんなことないです。アルバインさんは！」

「良いんダ、ナデシコ。自分で言わなければならないかラ。魔女・・・いや、“ローザ”」

遮るように止めたのは、あれだけ攻撃を受けたのにスッと起き上がるアルバイン。奴の目に宿る真剣な光を見ればわかる。

撫子、何（なに）かしやがったな？

始めて自分を名前で呼ばれたためか、奴の真剣なまなざしを受けてか、一歩下がるクライアント。

「僕に・・・君と共に戦わせてほしイ」

視点変更　―1

南の方向からのすさまじい爆発音が響き渡り、そちらを振り向かざろうえなかった。

「爆発!?　一体、何が・・」

「・・アレは、魔女(ウィッチ)の・・交戦、しているノカ?」

どうやらあの爆発はローザによるものらしい。

「加勢しに行かないんですか?」

アルバインの表情を見ればわかる。すぐ駆けつけて、助けたい。でも、堪(こら)えるような顔であった。

「加勢?　アレはきっと嫌がるヨ。なにせ、彼女は自分の・・いや、“錬金術という魔術体系”を誇りにしているからネ。加勢も侮辱と考えているんだろウ」

あきらめにも似た表情は、憂いをおびており大概の女性は見ただけで、助けたい気持ちでいっぱいになる、そんな表情。でも、私はなんとなくムカついた。

「・・・さっきから、魔女とか、アレとか・・ローザさんに失礼じゃないですか?」

「エ?」

頬を膨らませ、抗議する私に押され気味になる騎士。

この人は女性の押しに弱い一面がある。そこを利用しよう・・段々、私、悪女に近付いている気がします。

「そこからです。まず、謝ってから、一緒に戦わせてくださいって言いましょうか」

「え、僕がお願いするのカイ?」

「どっちも意地っ張りなんだから、どちらかが譲歩するしかない

でしょう?」
「それは・・・そうダネ・・・」
流され、押し切られて納得するアルバイン。ウフフ・・上手くいったわ。って！　ダメです！　・・・目指せ、清純派ヒロイン！
「さぁ、善は急げ！　ヒーロのように助けにいくのです！」

そんなこんなで戦場であるビルの前まで、魔力で身体能力を強化された彼の背に乗り、連れてきてもらったが、待っているうちにビルの真下からわんさかゾンビが這い出てきたため、ビルを上るしか助かる手はなく、この場に至った。
「私(わたくし)と一緒に戦う!?　それこそ、ありえませんわ！　助けなんて必要ありません。
これは私が戦い、勝利せねばならないのです」
ローザは大きな声でアルバインの申し出を断る。
「“君の”錬金術を認めさせるためニ？」
金色の錬金術師が怯んだ。初めて見せる弱気な表情、数歩の後退にどんな意味があったのか、私にはわからなかったが、アルバインは言葉を続けてフォローした。
「安心してくレ。君の邪魔にもならないし、君の術を信じて戦ウ」
「連携など、私には・・・。息を合わせて戦うなどできませんわ！」
「君が合わせなくとも、僕が合わせよウ。集団戦は騎士の得意分野ダ」
執拗に喰いさがってくるアルバインに嫌気がさしたようにうな垂れるローザ。
「・・・わかりましたわ。では、足手まといにはならないように！　その場合、助けては差し上げませんわよ！」
「了解しタ」
なんとなくやり込められたと感じ、赤面するローザといがみ合い

がとれ、ホッとするアルバインは同意のサインのように互いの武器を敵へと向ける。敵である男はそれこそ、ゾンビのように生気のない男であるようだ。

トン、と肩をたたかれ、振り返ると進・カーネルが困った顔して立っていた。

「・・・それより、撫子？　なんでお前、ここに上ってきた？危険だから帰れよ」

「え？　あぁ、ゾンビが下から湧き出てきて、ここまで逃げてきました」

「あぁ？　マジか？」

マジです、と返事を返すと盛大な溜息を吐いて進はクルリと転進してビルを降りようとする。

「いいんですか？　ローザさんをボディーガードしなくて？」

「良いだろ？　あの騎士様に任せても・・。それよりも離れて見学してろよ？」

トン、とビル五階程度の高さからジャンプし落下してゆく進は、大丈夫だろう。彼の強さは私が一番良く知っている。

振り向くと視線が絡んできた。

ローザでもアルバインでもない、もちろん進でもない。

敵とされる男から、ねっとりとした視線を確かに感じた。

ゾッ、とする。四体を舐められてるような不快感が全身を満たした。

「行きますわよ！」

それも一瞬、ローザの掛け声とともに二人は飛びかかるように敵へと駆け走る。

ローザは右側から、アルバインは左側から挟み込むように向う。

「イイイイイイ」

敵の言葉にすらならない声に呼応するように、地面、床から阻むように壁が突き出る。その壁はゾンビが這い出てくるかのような奇怪な造形をしていた。

「死者の門!?　そうか、ゾンビは作っていたのではなく“召喚”していたのカ」
「貯蔵していようが、作っていようが！　関係ありませんわッ！！」
ふっきるような声とともにローザのハルバートが薙ぎ払われる。
「セアッ！」
壁にくいこみ止められると思われた刃は、全く止まらず、阻んでいた二つの壁を易々と切り裂いた。
「高周波の刃カイ？　スゴイの持ってるネェ！」
「私（作り手）と武器（作られたモノ）の関係を利用して、共鳴に似た共振起こした・・高周波まではいかない刃の高速運動を起こしただけですわァッ！」
会話しながら二人同時に敵へ、縦の攻撃。狙うは二人とも顔面。
だが、それが不味かった。
「ｏｒｏｆｋｆｏｏｆｆｋｏｆｋｏｆｏ.ｊｆｏ.ｊｏ」」
ギィィンと、衝突音。二人の攻撃は敵の手に突如現れた、剣先の無い剣に“止められていた”。
「エクスキューショナーズ!!」
「ソードっ!?」
エクスキューショナーズソードと呼ばれた剣を払う、敵は二人を後ろへと吹き飛ばした。相当な力だったのか１０メートルほど押し戻されるが、綺麗に二人とも空中でクルリと回って着地、大したダメージもないようだ。
「処刑用の断頭剣・・・まったく、死者を操る者だから、死者を作る武器とはネ・・」
「・・・もっと、喜んだらいかが？　貴方のお探しのモノが目の前にありますのよ？」
ツッと汗を流し、苦悶の表情のローザ。彼女の言葉にハッとするアルバインは敵が持つソレを凝視する。
「・・・魔剣」
「の、ようですわねぇ」

攻撃をその身に受けたのか、ローザは苦悶の表情を浮かべる。しかし、彼女の体や衣服には傷一つない。

「断頭剣・・なるほど、処刑するには首を固定しておく、処刑台が必要。それを一本でまかなえる“縛る”、捕縛の魔剣ですのね・・」

良く見るとローザの体を影の様なものが足に絡まり、その場から動かないようにしている。あれが魔剣の能力。

「僕とローザの攻撃が剣と接触する前に“止まった”のはそういうことカ・・厄介ダネ」

キリっと、ローザへ振り向くアルバイン。

「何カッコつけて突っ立ってますの！　貴方も掴まってますのよ！」

あ、ほんとだ。

「どうにか・・してくれませんカ・・」

「ああ、もう！　役立たずッ！」

ローザは縛られる体を無理やり動かし、ベルトの小瓶へと手を伸ばす。

その隙を敵は見逃すことはなく、二人の周囲を這いずるようにゾンビが現れる。

「舐め過ぎでなくて、グレイ！　私が錬金術師だと、もうお忘れですの！」

体にゾンビが取りつく瞬間とローザが取り出した小瓶を開けて周囲へ振りまいたのは同時だった。振りまかれたのは液体。そして、それを浴びたゾンビは人体模型の中身をばら撒くように体をバラバラにされ動かなくなり、二人の動きを止めていた黒い影も一緒に消え去っていた。

「・・万物融解剤（アルカヘスト）・・。物質から、精（エーテル）を取り出すための融解剤」

「少し、補足が足りませんがね！　物質だろうが、魔術だろうが分解できますのよ！」

捕縛が解けたと同時に、真っすぐ最短コースで敵へ・・グレイへ

の距離を無くし、ハルバートを振り下ろすも、やはりあのゾンビの壁が邪魔し、届かない。高速振動の魔術も働いているが、切り裂く事ができないほど肉厚らしい。

「チッ！　やっぱりこれを何とかしないと・・」

「ちょっと、待った僕にもかかったヨ！」

「人には利きませんわよ！　さっきの威勢はどこにいきましたの！」

「良かっタ・・それで、ローザ。そのアルカヘスト、あとどれくらいあル？」

「これは超が付く高級品です。今あるのは後、小瓶に入った一杯だけですけど、なにか？」

ジト目で睨みつけるローザ。文句があるか？　と言いたげな彼女から視線を話すとアルバインは理解したように頷いた。

「そうか・・セット、Ｆｌａｍｅ（フレイム）、ｗｉｎｄ（ウィンド）！」

剣を天に向かって高く掲げ、声高に叫びロングソードに灼熱の炎と渦巻く風が渦巻く。

「いくゾ」

一言とともに駆けだす。経路はローザと同じ一直線。

「ｊｇｉｍｉｊｉ・・ｂかあかｂか」

相手は剣先・・はないが剣を突き出しバカにするように笑いながら、直進してくるアルバインへと影を放つ。

アルバインは時に速度を上げ、跳躍、左右へと揺さぶりをかけながら影を全て避け、輝く剣をグレイへと袈裟に切り裂く。

グレイは半歩ほど跳躍し回避、そこへとアルバインの逃がさぬように放たれる突きが奔る。だが、それを軟体動物のように体をくねらせ避ける。

突きの体勢から右の逆袈裟切りを流れるように生みだし振るったが、またも後方へと距離を取ろうとするグレイ。それを見越してか剣を素早く小ぶりに振り、高速の返しで左からの袈裟切りへと変事させる。

グレイの魔剣は相手を止める能力を有する、つまりぶつかり合った瞬間、動きを止められ首をかき切られる。剣を絡めないことが絶対条件・・・のはずなにに、どうして!?　と驚く。

アルバインは大きく剣を振りかぶり、縦の一撃をしたのだ。

剣と剣がぶつかりあう音は聞こえない。当たり前だ、アルバインは魔剣の影に絡め取られたからだ。

「ｂａｋａだな・・・騎士は・・ダメｄａｎｅ」

「バカは君ダ。本当に魔術師かイ？　簡単にワナに引っかかるナ」

「な・・・ニ・・・」

「物体である剣や肉体は縛られるだろうサ。でも、爆発の衝撃までは止められるのカイ？」

「！？」

剣にが纏う光が膨張した。

アルバインは剣を止められたのではない、止めさせたのだ。

「加速（アクセル）しろ！　Ｅｘｐｌｏｄｅ（エクスプロード）！！」

剣の炎が爆発的に膨張、増大し、激しい勢いで炸裂した。その熱と衝撃波を風の指向性を持たせ、グレイの周囲へと向けられる。やはり衝撃を止めること叶わず、後方へと吹っ飛ばされ、地面へと倒れ込む。

「今ダ、ローザ！　万物融解剤（アルカヘスト）を奴の頭上ニ！」

ローザがハッとなって小瓶を宙へと放り投げた。それをグレイは食い入るように見つめ、アルバインはそれを風で壊し、雨のように降らせようとする。

アルカヘストは人間の肉体には作用しない。だが、彼の持つモノなら別だ。たとえば、魔本や魔剣は、かの薬品の餌食となる。

「ｋｉｆｉｒｉｊｒｋ！！！　ｊｉｏｉｈｏｉｊｏｊ！！！！！」

やはり、私たちには理解できないが、焦燥の声を上げて、ゾンビの壁を召喚しようとする。

小瓶が割れるのが、早いか。それともゾンビの壁が召喚され、防がれるのが先か。

早かったのは

「ｊｉｇｇｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｋｋｋｋｋｋはははっははは」

ゾンビの壁を召喚し、アリ一匹は入れれぬように四角形の箱のようにゾンビの壁を作り出したグレイ。

万物融解剤（アルカヘスト）は強力なモノだが、それを溶かすことができるの一つぐらいなのだろう。一つを溶かした後に、貫通することはない。ゾンビを溶かした時に、フロアの床が溶けなかったのがその証拠だ。

勝ったと思っているのかもしれない。完全な城を築き上げたことを勝ち誇り安心もするのだろう。

実際はただ、外の状況が見えなくなっただけに過ぎないのに。

「待っていたヨ。君が閉じこもるこの時ヲ・・アタック！　ｗｉｎｄ（インド）」

アルバインの狙いは、万物融解剤（アルカヘスト）を雨のように降らせようとすることではなく、グレイをそこに閉じ込めておくこと。

液体が四方から降ってくると聞けば、全体を囲むしかない。上に傘をはっても、下の地面から弾けて飛んできたりと、どんな形で入り込むかわからないからだ。

その内に、風に小瓶の中身（アルカヘスト）を絡ませた。魔術をも溶かす液体だが、触れなければ溶けないらしく、風の中に液体が浮遊している状態にして保管し、風を圧縮するように伸ばし、ちいさな竜巻を形成した。その形はまさに両端に鋭利な先端を持つ槍。操る者の意思しだいで敵を貫く槍。

まさに百発百中（グングニル）の槍。

それがグレイの岩戸へと突き刺さる。ドリルのような高速回転はえぐり込むような突貫力を生みだし、容易く壁を貫通し、中のひきこもり（グレイ）へ突き刺さった。

「グォ・・」

「まだだヨ」

苦悶の声が聞こえたが、まだだ。彼らの狙いはもっと別にある。

槍でグレイを貫く事が目的ではない。槍が“運んでいたモノ”を

内部へと運び、四散させるのが目的なのだから。
風が解きほぐされ、中にあった全ての無機物質、魔術を分解する万物融解剤（アルカヘスト）が、囲まれた内部へと風に乗り四散した液体は、“ゾンビの壁を分解する”。
「５００と３０体のゾンビで出来ているのでしたわね、その壁。さっき、それで殺されかけましたから憶えていましてよ」
それがホントならば、どうなるのだろう。さきほどのゾンビは体がバラバラになるように分解されたではないか？
「ゾンビの体重はわからないガ、少なくとも君には人が５３０体分落ちてくることになル」
自分の魔術としての壁が解かれたため、操ることもできない。つまり逃げ場はない。なにせ、自分で全ての退路を塞いでしまったのだから。
「ごきげんよう、自分の魔術で身を滅ぼすなら、魔術師冥利に尽きるでしょう？」
分解は始った。壁が膨張し５００もの死体に変わるのではなく、スライムのようにゆっくりとなめらかな黒い塊となって、閉じ込められた魔術師に迫っている・・・ように外側から見えた。
「君の趣味に合わせたつもりダ。どうだっカナ？」
怒りのような怒号もあったのだろうが、死体が四方から迫る音でかき消える。
死霊を操る魔術師は、自ら呼び出した死体によって圧死した。

視点変更１

実際、僕らが勝てたのは運の要素が強かった。
剣を納め、隠すように安堵のため息を僕は突き、空を自然と見上げる。空は濃く大きな雲が太陽を隠し薄暗い世界を作り出していた。

「実際、あっけのない戦いでしたわね」
フン、と傲慢極まりない勝利者の言葉を放つローザを横目に見る。
傷らしい傷もなく、無傷の勝利と言っても過言はないだろう。
しかし、実際はどうなのだろう。彼女の万物融解剤（アルカヘスト）がなければ、現在の装備と技であの鉄壁ともいえる死者の壁と、物体を縛り、動きを封じるあの魔剣に対抗できたのだろうか？
「ローザさん、アルバインさん！」
背中の方から僕らを呼ぶ声が聞こえ、暗い感情から解放される。
優しい太陽のような雰囲気をもつ彼女の歓喜の声に、今度こそ本当に気を緩める。
（そうダネ、僕らは勝った、それでいいじゃないカ？）
振り返り彼女を安心させようと振り返り、

僕は、僕の甘っちょろい考えを呪った。

爆発的に膨れ上がる存在感と魔力。
重たい何かが弾ける音と同時に暴風が右横顔を殴りつけ、僕とローザの左右の間を駆け抜けナデシコへと長く、胴の高さと横幅が人一人分くらいある物体が飛んでいく。
それは黒い大蛇を連想させる物体。掠めた瞬間、見えたのは眼球がないのっぺらぼうな頭部に人を丸のみにできるような裂けた口だけの生物。
言葉よりも、もし自分が狙われていたなどの思考よりも、体が反射的に動こうとするが、間に合うのかか！？
距離があり過ぎる。
ローザも僕とそう変わりない位置にいた。あの死霊使いを圧死させた場所から伸びているのだから、横に見える胴を断てば！？　いや、それでも彼女を丸のみにしよう開けられた口を止めることはできな
様々な思考が刹那に行われるが、頭に浮かぶ未来の映像はすべて、

ナデシコが助かることがない。
そんな絶望的な未来像の通り、驚きに身を固め、目を見開く彼女を、大蛇が大口を開け、喰らう。
喰らわれた彼女はゆっくりと強い酸性の唾液と体液で溶かされ、視るも無残な死体となる。
はずだった。
ビクッッと、太くて長いその体を痙攣させるように振動を起こし、動きを止めたからだ。
（何・・が）
頭で原因を理解する前に、原因を目視できた。
動きを止めた理由は、赤。
太陽が隠れる薄暗闇に光る二つの赤が、そう“紅い瞳”が大蛇を睨んでいた。
紅い瞳の男は仁王立ちしているだけだ。何のアクションをとる仕草も見せず、ただナデシコのすぐ後ろに立っているだけ。
それだけで、大蛇は動きを、まるで己の死にざまが見えるかのように動きを止めたのだ。
蛇が蛙を睨み、動きを止めるという俗説は知っているが、人に睨まれた、まして蛇でもない魔術的な生物が動きを止めるなど・・！！
「騎士（ナイト）っ！」
蛇を挟んで向かい側からの声にハッと我に返る。
今はそれどころではないと言わんばかりの罵声の主は蛇の巨躯に阻まれ見えない、が意思は伝わってきた。
剣を構え、突き出し、蛇の体躯へと鍔までしっかり潜り込ませる。
その体は予想よりも軟（やわ）く、すんなり突き刺さり、そのまま“胴の根元”まで切り裂きながら走る。
向い側の彼女も同じようにしているのか、大蛇の体は血を噴き出しながら横に開かれていく。
「オオオオッ！！」
「ヤアアァ！！」

二人の気合いの一声とともに根元、スライムような死体の山である死霊使いグレイの棺（ひつぎ）へと刃を喰い込ませ引き裂く。

「ｇｕｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉ！！！」

絶叫の声？を上げ、大蛇は痛みに悶（もだ）える様に激しくのた打ち回る。その鞭（むち）のような体をしならせ、暴れまわり、周囲を破壊し、遂にはビル全体の柱を叩き折り、倒壊を始めた。

「きゃあああああ！」

崩れる床と周囲の壁を瓦礫をうまく足場にして、落下をさけるのは僕らには造作もなかったがナデシコは一般人だ。悲鳴を上げながら落下してゆく。

「ナデ・・！」

「捕まえましたわ！！」

落下する情景の中で、ローザがどこからともなく取り出したアタッシュケースに切り裂かれた魔本を入れるのが見えた。

それは自分の探していた魔剣も内包しているモノだったが・・・

今はナデシコを！

「ポンコツは任せろ、だから、お前はアレを何とかしろよ」

声の主である僕の横を駆け抜けていった者は真っすぐナデシコへと落下していった。

黒いコートの男はナデシコがシンと呼んでいた男だ。彼は彼女をまるで荷物みたいに肩に担ぐと、鉄骨を蹴りつけ、大きく横にずれる。アレから逃れるために。

アレ・・いまだに動き回る大蛇の頭部は大きく口を開け、驚愕することに頭だけを体から切り離し、上へ・・・ナデシコを未だに諦めきれぬかのように、下から大きく口を開けて飛び出してきた。

その執着に驚くが、同時に違う方向から僕を見る二つの視線を感じる。そのひとつ、紅い視線の主は目で語りかけてくる。

できるだろ？　と。

そうだとも。意思は、もう決めてある。

落下を促す重力に身を任せ、頭から地面へと突き進む。だが、行

く先は地面ではない。欲望のままに重力に逆らう大蛇の頭へと向ってゆく。

剣を大きく上段に構え振りかぶる。

僕は騎士だから、だれかを守るのは当然かもしれない。だが、騎士と言う名前を持っているただの人間だ。自分というアルバイン・セイクの称号のひとつ。僕を形作るものの一つ。ただそれだけのモノ。僕の外側だ。

彼女は言った。外側から見ただけで判断するな、自分で見て判断しろと。

そうだとも。内面を外側から見ることなど、出来ない。

物や街などは、歩きまわり、長く住めばわかるのかもしれない。しかし、人の内面などは難しい。見てわかることなど、その人のどれほどなのだろうか？

だから、自分から見せつけなければならない。

わかってほしいから。自分を誰かに、わかってほしい他人に向けて、内側から外側へ自分を露わに見せつけるのだ。

意思が内側（本質）から咆哮する。

「オオオオオオオオオオオオッ！！！」

これが本質（僕）だ！　アルバイン・セイク、―誰かを守るために戦う存在《騎士》だ！

大口を開ける大蛇の口へと自ら飛び込み、弓のように張り詰めた力を一気に斬撃へと変換する。

ダンッと足元が硬いアスファルトの地面を踏み砕く音としびれを伴う衝撃。僕は振り向くことはなく剣にこびり付いた血を払う。

直後、後ろに重たい何かが落ち、衝撃に粉塵をまき散らす。

それは縦に真っ二つにされた大蛇の頭部。

「願わくば、僕を許さないでほしイ」

「死体に許さないでとは、ずいぶん強欲ですわね。まるで許してくれと言っているのと同じでは？」

背後に着地してきたローザが、呆れたように指摘してくる。

「そう、言わないでくレ。僕も決めゼリフぐらい作りたいヨ」
「決めゼリフね？　ずいぶん角が取れたじゃねぇか、騎士様よ」
さらには背後、粉塵を裂いて歩く男からの声に僕は緊張を隠せない。
進・カーネル。
そう呼ばれている男はナデシコを丸太を肩に担ぐように持ちながらゆっくりと近づいてくる。それだけのこと、なのに僕は剣の柄を持つ手に力を込めた。
「進・カーネ・・」
「カーネル！　やりましたわよ！　魔本を遂に捕まえましたわ！」
目をキラキラさせて歓喜の声を上げるローザに、シンはめんどくさそうな顔をして、ハイハイと軽く反応を流す。下ろしてください！　とナデシコが足をバタバタさせる。
緊張感が次第になくなってゆく光景が広がるが、そんな中で唯一、僕だけが緊張を隠せなかった。
ローザは見ていなかったのだろうか、あの紅い眼を。
あの化物すら恐怖した本当の化物に気が付いていないのか！？
「ん？　どうしたよ？」
僕の視線を感じたのか問いてくるシン。
「・・・イヤ、なんでもないヨ」
僕は振り返り、歩き出す。
彼をこれ以上見ないように。どうしようもない恐怖をひた隠しにするために。
進・カーネル。彼は一体、
何だ？

視点回帰　2

「二人とも・・ホントにもう帰っちゃうんですか？」
往来が行きかう広いロビーで、上目使いで目をウルウルさせる私、九重　撫子。せっかく知り合えたのに・・
「あ、当たり前でしょうに！　私は遊びに来たのではないのです！」
「僕も心残りがあるけどネ。仕方ないヨ」
先日も遊びに来ていた羽田空港にいるのは、アルバインとローザの見送りに来ているからだ。
縦にも横にも広い、世界に飛び立ち、また外国からの飛行機を受け入れる滑走路が見渡せるガラス張りのロビーで、別れの言葉を言うつもりが、先ほどの未練たらしい言葉になってしまった。
「だって、だって・・」
実際、あの戦いから一日も経過していないのだ。あの後、すぐに事務所に帰り二人は部屋にひきこもり、ほとんど会話もないままで、朝起きると二人すでに帰る用意万端だった。
「私（わたくし）は、この魔本を協会に届けなければなりませんの。期日も近いですし」
「僕は事の顛末（てんまつ）を、本部に報告しないといけないしネ」
なだめる様に言うアルバインに、次第に申し訳無くなってきて、引き止めるを辞める。
「・・・そうですね。でも、またいつか遊びに来てくださいね」
これで永遠のお別れではない。またいつか会えると信じ、今は見送ろう。
そんな私を見てローザが朗らかな笑みを見せてくれた、がそれも一瞬で苦虫をつぶしたような表情に変わる。
「貴女（アナタ）は本当にお人よしですわね。それに比べてアレときたら・・」
「進には私から言っておきます」
あれほど仕事にプライド持ってますと言っておきながら、この場に進はいない。朝方に仲介役であったハジさんから電話で連絡があ

り、そちらへと向って行った。進いわく、魔本が回収された瞬間、契約は果たされた、そうだ。

そんな言い分を聞いて、ローザは呆れかえっていた。

「・・・ローザ、フライトの時間だろ？」

「そうでしたわね。って、貴方も！？」

「ロンドンに向かうなら一緒のはずだヨ」

「貴方となんて・・って今さらですわね」

あの本気の殺し合いをしていたとは思えない二人の会話に、ほんのり笑顔がこみ上げてきた。ローザの方はわからないが、アルバインは彼女を魔女としてだけではなく、一人の人間として見ようとする姿勢が伝わってくる。

「そろそろ、行くヨ。いろいろとありがとう、ナデシコ」

「まぁ、迷惑をかけましたわ」

二人が手を振りながら去っていく。それが見えなくなるまで見送った。

「・・・さて」

今日は月曜日。本来なら学校があり、一時間目が始まっている時間だ。彼らの見送りのために遅刻することを選んだのだが、休むことはない。このまま学校へ行こう。

そうして、私の日常が戻った。

視点変更3

「一体、何の用だと思ったら・・・遅刻とはどういうことだぁ？」

愚痴が口から零れ落ちる。当たり前だ、クライアントの見送りよりも大事な話と仕事の件がある、と聞いてやってきたのは、東京都とは思えない西の外れ、ド田舎の車の廃棄場。

アイツの仕事はめんどくさいものばかりだが、時間にルーズだっ

たことはなかったはずだが。
「いやいやぁ～、スイマセン。旦那ぁ」
ふらふらと左右にゆられながらやってくるのはハジだった。
白いポロシャツに、黒のズボン。トレードマークの野球帽。いつもシンプルな着こなしを好む奴らしい服装。たしかにハジだ。
そう、形はハジだ。
「何だ、テメェ？」
「スイマセン～。渋滞で遅れちゃって」
「遅れた理由は聞いてねぇ。お前は何だ、と聞いてるんだ」
姿、形は完璧にあのふざけた野郎だ。だが、俺の異質な紅い目はごまかせねぇ。
「ｈｕ，ｋｕｋｕｕ、ククカカカカｋァッカっ！！！」
“あの”意味不明な言葉を吐きながら、猛烈な速度で掴みかかろうとするニセハジ。
だったが。
「いやいや、旦那お～みごと～」
キュポ、と何かが抜ける音が鳴り響たと思ったら、ハジが二人に分裂した。そのまま俺の所まで来れたが、左右に分けられたハジは裂かれるように地面に落ちた。
「お見事～、じゃねぇ。どういうことだコレ？」
俺が訪ねたのは、困ったことに本当のハジ。こいつを“切り裂いた”男だ。
「困ったことにって・・旦那ぁ。この裂けちゃったチーズみたいのがアッシだったらって意味ですかいぃ？　ひどいぃ！　ひどいわ！　あっしのこと、そんな風に思っていたなんて！！　もう、この魔王！　あのことなんて教えてあげないんだからぁ！　あたしの献身を返してぇ！」
ハンカチを取り出し、男におもちゃにされた悲劇のヒロインを演じてる男。見ているだけで吐き気がこみ上がってくる。
「クネクネ、するな気持ち悪い。で、あのことってなんだ？」

「教えてあげないんだからねぇ！」
イラ。
「殴るからな」
「決定事項ぅ！？」
渾身の右ストレートを出したが、やはり体をくねらせ、避けられた。クソっ。
「っと、そんな話をしている場合ではなかったぁ」
「・・お前が始めたんだろうが」
段々、イライラしてきた。
やっとおふざけに満足したのか、帽子を深くかぶっているため見えないハジの眼が真面目、キラリと光った・・・気がするほど真剣な雰囲気で告げてくる。
「旦那、あっちにアッシの車があります。詳しいことは戻りながら話しましょ。早く戻らないと、あなたの帰るべき場所がなくなる」

視点変更４

まったく、イライラしますわ。
「ローザ、君はどこの席なんだイ？」
私、ローザ・エン・レーリスは魔女だ。錬金術を魔術的に扱う以上、魔女と呼称される。それで常に侮辱や嫌悪されることには慣れている。
（む～）
目の前で今、私のスーツケースを持ってくれている男、騎士アルバイン・セイクは、私の知る限り魔女や魔術師という存在に嫌悪感を持つ者どもの一人だったはずだ。数ある面識ある人間の中ではその筆頭と言ってもよいほど嫌われていたはずだった。
そう、“だった”。過去形なのだ。それが異常に・・・

「・・・気色悪いですわ」
「？　君、飛行機に弱いほうカイ？　困ったな、酔い止めの薬は持ってないヨ」
「違いますわよッ！　貴方の事です、あなたの！！」
「コラ、ダメだヨ。ココはもう飛行機の中みたいな場所なんだから、マナーは守らないト」
この男の言うとおり今は飛行機の中。だが、構うものか。ここで口の前で人差し指立てて、シーとかやってる騎士の真意を聞きださねば、おちおち空で寝ていられないのだ。
「なんなんですの！　あれほど敵意むき出しだったくせに、掌（てのひら）を返すように優しくなって！　何が目的ですの！　ハッキリ仰（おっしゃ）い！」
ビシッと指を突き付けてやる。騎士と魔女は相容れないものなのだ。それに礼儀にうるさいこの男の事だ、指を突き付けられて良い感情を抱くまい。
ところがの指ごとそっと手を沿わされ大きな手で包みこまれた！
「な！　なにしま・・」
「君は確かに魔女ダ。だが、僕は君をローザという個人としてあまり見ていなかった気がすル。いや、視ていなかっタ」
真剣なまなざしで、しっかりと私の目を見て話す男の言葉が耳に入る。
それは嫌悪を抱く人間の声色では決してなく、謝罪となにより乞うような感情が強い、一人の人間として対等に話がしたい者の声。
「ナデシコに怒られて気が付いたヨ。僕はどうしても型にハメテしまう悪癖があル。それを押しつけてしまうこともネ。　君の本質を見ようともしなかったくせにネ」
そっと手を放し、背を向け歩き出そうとする騎士は、背中越しに言ってくる。隠そうとしているのだろうが丸わかりだ、耳が真っ赤になっている。クサいことを言っている自覚があるのだ。
「だから、ローザ。これからは誇りを持つ錬金術師である君という存在と接して、わかり合いたイ」

なんと青臭いことを。こちらまで恥ずかしくなってくる。
まったく、こちらまで顔が真っ赤になってしまったではないか。
そうだ、“アルバイン”が変なことを言うから、恥ずかしくなったのだ。
「お客様、席へのご案内は必要ですか？」
飛行機の中とは言っても、未だ入口付近。そんなところで口論していたためか、飛行機の中からキャビンアテンダントが現れた。飛行機初心者と思われたのだろうか？
「いえ、必要ありませんヨ。ローザ、君もファーストクラスだろ？」
「は？　何ですの、嫌味？　エコノミークラスですわ」
私の発言にアルバインはおろか、キャビンアテンダントの女性まで大口開けて驚いていた。
「な、なんですの!?　イイではないですか！　安いことはいいことです！　こっちは自費で来ていますのよ！」
額に掌を当てて、頭が痛いでも言うように首を振るアルバイン。
なっ、なにかいけませんの!?　そういえば、最初に日本行きの便で、私の周囲の人たちが居心地悪そうにしてたのは、私が何か粗相を犯したからでしたの!?
「し、仕方ないでしょう!?　飛行機なんて全然乗らないし・・」
「・・・今からチケットを買い直そうカ。大丈夫、費用が余っているからお金貸せるヨ」
「何ですの、憐れみの目をして！」
「席の方は空いていますので、中の方で代金の支払い方法を選んでいただけますが」
「では、それデ」
くっ、こいつの世話になるなんて・・。でも、私とわかり合いたい？
「何を今さら・・」
「・・・そうだよネ」

苦笑を浮かべるアルバインの表情を見る。
ま、良いでしょう。
「勝手に判ろうとしてくださいな。私は隠すつもりなんて一切ないですから。精々、頑張ってください“アルバイン”」
すたすたと私の前を歩いていたはずのアルバインが立ち止まり、放心したようにポカンと口を開けて驚いている。それになんとなく腹が立った。
「何、ボケてますの！　ほら、騎士らしく淑女をエスコートなさい！」
彼の顔を見ずにすたすたアテンダントが示した方向へと歩んでいく。後から追ってくる男の気配を感じながら。
そうして飛行機内部に入った瞬間、違和感を感じる。
その違和感を共に感じたのか、私の隣で立ち止まるアルバインに問いかける。私はそんなに飛行機に乗らない。もしかしたら、これも常識なのかもしれないからだ。
「アルバイン、一つ、お聞きしたいのですが？」
「なんだイ、ローザ」
「飛行機はフレグランスに血臭を使っているのかしら？」
尋ねた瞬間、後ろで何かが閉じられる音がした。振り返ると、ドアが硬く閉じられ、同時に機内アナウンスが流れ始める。離陸を開始する、ベルトを締めろと。
「不味いナ。この便で何かが起きていル。すぐさまパイロットにフライトの停止を求めなけれバ！」
「出来ますの、そんなこと!?」
コックピットへ向かうために通路を急ぎ足で駆け抜ける。そんな私たちの姿を乗客たちは奇異の目で。目で・・・？
「アルバイン。待ちなさい・・」
「今は急いで・・」
急いでいる。それはこのままだと、この飛行機に乗る乗客の命が危険にさらされる可能性があるからだ。

早くに気が付くべきだった。
私たちが感じた血の匂いは少しだけではない。むせ返るほどの、この機に入った瞬間で血だと判別できるほど濃い匂いだ。そんな匂いが充満しているというのに、乗客は騒ぐどころか、全員が俯き、静寂が満ちている。笑い声や、友達とのふざけ合い、家族との楽しい会話、まして恐怖の感情すらこの者たちにはない。
私はこの二日間、飽きるほど、このような存在と相対してきたのではなかったか？
急ぐ必要などなかった。なぜなら、この飛行機の中に生きているモノなど一人もいないのだから。
「・・・ローザ」
「ええ、はめられました」
静寂と死の空気に満ちていた空間に鎮座していた乗客たちが一斉にこちらを凝視する。
ここには、ゾンビしか乗っていなかったのだ。
決壊した川のように、ゾンビたちが私たちに襲い掛かってくる。
一斉に足や、腕を掴まれ、揉みくちゃにされる意識の中で、場違いな機長の声が聞こえてくる。
「快適な、空の旅を」
そうして、ゆっくり黒い雲が広がり始める空へと、飛行機という名の棺桶が舞い上がる。

視点変更？

平日だと言うのに、この人ごみ。この国の人間は知りたがりだからと“ボクたち”は思う。
並行して並び立つビル群と店が続く道は首と視線を向けなくとも聞こえてくる喧騒が溢れている。

これが欲しい。
アレはどういったモノか？
今日は何をしよう。どうすれば？
自分をどこまで飾りつけることができるだろうか？
欲しがり、知りたがる。
そして、その知識を教え合い、さらに自分たちを昇華させようとする。オシエル、マナブ、コタエル、キモチガイイ。
そう、教えることはスバラシイ。
“オレ”は思った。そうだ、“ワタシ”も彼らに教えてあげよう。
“僕たち”がとても良く知ってることを。
まず、彼女に教えたい。
最近はそのことばかり考えていた。その彼女が目の前を歩いている。不用心に教えてくださいといわんばかりに背後を見せているではないか！
茶色のクセひとつない長い頭髪、同じく茶色のブレザー、緑のチェックが入ったスカート。すらりとモデルのような肉体と調った顔立ちは彼女だ！
ゆっくり、それでいて相手に近づくことができる速度で着実に距離を縮めて行く。
なぜ、君にひかれるのか判らない。だが、教えたい、教えたい！
あの時は邪魔されたけど、もう邪魔ものはいない。
さあ、僕が伝えてあげる。君の体に、その穢れのない所へ。
剣で切られた時の熱さを、鉄の塊でメッタ刺しにされる疲労感を、すり潰される細胞の絶叫を！
彼女の耳元で、そっと愛を囁（ささや）くように呟（つぶや）く。
「死を、教えるてあげる」
こわばった表情で、すぐさま振り返ってくれた彼女に、高く振り上げたロングソードを振り落とした。

視点回帰

耳元で呟かれた死の言霊に、悪寒が走り、振り返った。
振り返った目に飛び込んできたのは、私の真横から割り込んで反対側に行こうとしていたスーツ姿の男性が、間欠泉から水が噴き出す様に首筋から血を噴き出している姿。そして、夏も近いこの季節に分厚いパーカーと付属する帽子を深くかぶる男が、剣をスーツの男に捻じ込む光景だった。
血のシャワーが空港の繁華街の道へと降り注ぎ、どす黒い赤色の雨に通行人たちを染めていった。
あまりに異常な光景に世界が緊急停止したように人々は思考を止めた。
「あーあ、間違えちゃった」
ズルリと大量の血液がついた剣を引き抜いた男の一声で世界が急速に
動き出す。
「い、イヤャャャァッ!!!」
「どうなってんだ!?　何なんだよぉ!!」
「助けて!　助けて!」
「キャァァア!!　退いて!　退いてよォ!!」
平日といえど年間、数百万単位を軽く超える人々が訪れる空港手前の繁華街には今日も人波が絶えない状態だった。
そんな中で突如発生した惨劇に、周囲にいた者たちは各々の恐怖の叫びを上げながら殺人犯から駆け逃げる。そんな彼らに触発された者たちにも逃げ惑い、感染するように規模を拡大してゆく。
そうして賑(にぎ)わうはずの繁華街は誰もいなくなった。
二人を除いて。
「やっと、会えたね。九重(ここのえ)　撫子(なでしこ)さん」
「誰、ですか?」

何故、逃げなかったのか。違うのだ、逃げられない。
恐怖などの精神的な要因ではない、体が何かに縛られ、動けないのだ。
このフレーズを何処かで聞いたような気がしていた。そうだ、これは、アレの能力。でもアレは、ローザ達が持って行ったハズのもの。
「どうして、魔剣のっ」
「魔剣の？　違う、違う。あんなモノのモノではなく、もうボクタチの能力だ」
ボクタチ？
「そんなことはどうでもいいだろ？　やっと会えたんだ。あぁ、やっと君に教えてあげられる。もうあの騎士も、魔女もいない。オレたちを阻む物は何もない」
熱に浮かされたようにしゃべる目の前の男に違和感を感じた。
流暢でなんら問題がないように聞こえる言葉を口から出しながら、ゆっくりと着実に近づいてくる男。
そんな些細な違和感の正体に辿り着く前に、男は私の眼前にたどりついた。
「ハイ、さよなら」
アカルイックな声と共に振り下ろされた剣は、縦に体へと入り込み、真っ二つに私の体を切り分けた。
噴き出す血、真っ暗になる視界、駆け抜ける思い出の走馬灯。
あぁ、死んだ。
最後に思い浮かんだのは、大好物のツナマヨのおにぎりの味。

ＢＡＤ　ＥＮＤ

「いつまで目を瞑（つぶ）ってますのっ！！　起きなさいっ！」

真っ暗な世界の中、いきなり入り込み響き渡る怒鳴り声に目を開ける。

そこにいたのは、まさ芸術的な美しさ秘めた女の天使。天使が私を抱き上げ抱擁してくれている。

「ぁあ、天国・・・天国に来れたんだね。私、最低な女だったけど天国に来れたんだ」

「何、おバカなこと言ってますのっ!?　貴方、まだ生きてるでしょう!!　助けてあげたのに、その言いグサはなんですの!?」

ハッとなって足元を見る。私、足が付いてるではないか！

私、まだ生きてる！

「ローザさん！」

「九重さん、目が覚めたのなら早く逃げなさい」

気付くと、さっきまでいた位置と少し離れた場所にいる。魔剣の効果はローザが解いてくれたらしい。

「どうして、オマエがいる？　あの飛行機に乗らなかったのか？」

なんの感情も含まれないパーカー男の疑問に、金色の芸術は答える。

「お生憎様（あいにくさま）。あんなサービスの悪い飛行機なんてゴメンですわ」

よほど嫌な事をされたのか忌々しく表情を作るローザ。見れば彼女の衣服はボロボロだった、シャツの上に羽織っていたカーディガンが無くなっている。藍色のロングスカートも半ばまで破けスリットを作り、美脚が露わになっている。

なんの事だかわからないが、美しき女錬金術師ローザは飛行機を降りてきたらしい。

再び再会することを五分ほど前に祈っていたが、まさかこんなに早いとは・・・。

「サービスが悪いとは言ってくれる。最高のもてなしだっただろう？　ワザと勝たせてあげた上に、お土産に、価値の無くなった魔本までプレゼントしたじゃないか？」

「なるほど、あの悪趣味な感じ・・・まだ、生きていましたの？

グレイ・アライスマン！」

「グレイ？　アハハハ、違う。違うよ、錬金術師。彼は、わたしたちでは無い。別物さ。それに、あの魔本は本物だよ」

「わたしたち？　やはり複数犯で・・」

「違う、違う、ナンセンスだな君。やはり君には教える気にもならない」

会話がかみ合っていない。そもそも相手はローザを見ていない。

視線は全て私に向かっている。

それが判っているのかローザは、会話ではなく武器で戦うことを選択する。聞く事を、まして話すことを投げやりにする人間への会話に意味がないから。

「教える？　貴方に教えてもらうことなんてありません！　とっとと終わりにさせていただきますわ！」

瞬時にハルバートを作り上げ、それをもって一直線にパーカー男に突貫するローザ。

「バカは困るな、“おいで”」

まるで優しく語りかけるような男の声に、吸い寄せられるように現れたのはゾンビだった。

一桁、二桁、いいや三桁にも届くほどのゾンビが地面から“射出”された。

射出されたゾンビは上空へと飛び立ち、ほどなくして落下の加速を付けてローザへと降り注ぐ。

人権がない存在を理不尽に扱う攻撃に名があるのなら、ゾンビ弾頭だろう。

「なっ！」

ゾンビ弾頭の威力たるや、地面に穴を開け、周囲のビルに突っ込み容易く貫通する威力。それが雨のように降り注ぐが、ローザは驚きつつも、驚異の集中力をもって、滑るように、踊るように回避する。

「やってくれますわね。ですが」

一瞬にも感じるだけの時間で、清潔感のある繁華街の街並みが、戦時中の廃墟群に変えられてしまった。

「バリエーションをつけても、やっていることは大差ないですわね？」

目立った傷一つなく、不敵に笑うローザの健在な姿が粉塵広がる世界に現れた。

だが、そこで蠢（うごめ）くのは生者ではなく、生気をなくした死者ばかり。

ローザの周りに打ち込まれたゾンビたちが次々と立ち上がり、生きている者が羨ましいとローザに群がる。

「ローザっ！」

パーカーの男でも、ローザでも、まして私でもない第三者の声が届くと同時に上空から騎士が舞い降り、ローザに群がるゾンビを剣で薙ぎ払う。

見間違いようもない、アルバイン・セイクだった。

「無事カイ！？」

「見て理解なさい。それより飛行機のゾンビ達は？」

「全部、滅したヨ」

「よろしいですわ」

「やはり、あの程度ではお前らを始末することもできないか」

淡々とした声色で、ローザとアルバインの始末の失敗を悟ったパーカー男。

「お前はなんダ？」

「教える気がないよ。低俗な騎士にも魔女にもね」

尋ねたアルバインは質問したことを呪うかのように、苦い表情になると盾を構え、剣を相手へと向ける。

二人に教える気がない、だったら。

「私が聞きます。あなたは何ですか？」

味方であるはずの二人までがびっくりしてこちらへと振り返り、パーカー男がその質問を聞くと、やはり歓喜したかのように答えてくれた。

「撫子、僕が知りたいか？　なら、教えてあげよう」
教えると口を開いた瞬間、ゾンビ達が一斉に爆発した。
今だ立っていたゾンビも、アルバインが薙ぎ払い、地に横たわっていたモノも全部だ。
発生した爆風と火炎に二人はさらされ、吹き飛ばされる。
それぞれ左右に並び立つビルの外壁に打ちつけられ、予期せぬ突然の痛みに肺から空気が強制的に吐き出され、苦悶の声を上げる。
「僕たちは痛みを与えられ、作られたモノ」
そんな彼らを追撃するように、両手を広げたパーカー男の掌から、剣が銃弾のように飛び出し、外壁に張り付く二人へ飛んでゆく。
「私たちは、故に痛みを誰よりも理解する」
風圧に逆らい、何とか風の束縛から外れ、体をくねらせて二人は飛来する刃を避ける。だが、掌からは何度も、何度も剣が生みだされ、飛んでくる。
壁沿いに疾走し、避ける二人は声高く叫ぶ。
「貴様、どこの魔術師ダ！」
「どこの手の者か、名乗りなさい！」
二人が駆ける方向はもちろん敵の元。二人は己の武器が射程距離に入るやいなや、横薙ぎに斬る。
そんな二人の攻撃を嘲笑う男への攻撃を阻むように現れる死者の壁に、刃が立つことなく、はじき返される。
「我々は、人ではない」
死者の壁から地獄の剣山のように剣が生えると、掌と同じように二人へと降り注いだ。ゾンビの弾頭とは比べ物にならない物量に、下がるように回避に徹していた二人だったが、アルバインは左肩を、ローザは太ももを軽く裂かれた。
剣が道を埋め尽くし、その中央に立つ男はゆっくりと一番上まで閉めていたパーカーのファスナーをゆっくりと下ろしてゆく。
「私たちは魔本」
ローザがあり得ないと、それを睨みつける。

「僕らは魔剣」
探し求めていたソレに、目を見開くアルバイン。
「我らは、合成型調律魔導兵器。　そうだな、名前はティーチャーとでも呼んでくれ」
男の体の胴体に展示するかのように、分厚いナイフが。
それは、まるでむき出しの心臓のように鼓動を打っていた。

視点乱雑

「合成型調律魔導兵器ぃ？　そりゃまた、中二病くさいネーミングだなぁ」
目の前の光景が高速で流れていく車の助手席で、俺は心底、がっくりした。
周りはのどかな田園風景を見下ろせる高速道路の上。他に走行する車は運送会社のトラックのほうが多く、普通車はあまり見えない。高速道路にはあまり詳しくはないが、まだ首都圏に近付いてもいないことははっきり理解できる。
ネーミングセンスにではない、そんな兵器が関わっていたという事実に嘆息した。
「日本名に訳すとですがね。まあ、まあ進の旦那ぁ。がっかりしないで。人生いろいろありますよぉ」
「お前が持ってきた仕事だったろうが」
ドスを利かせた声でも、こいつはサラっと流して話を続ける。
「調律魔道兵器。こいつはあるお国にある、ある組織が、また、ある」
「ある、ある、うるせぇ！　わかってる、下手な首を突っ込むなってことだろう」
どこぞのお嬢様の案内だけの仕事だったはずが、国家規模の問題

を引きつれていたようだ。こういう場合、実害が及ぶような情報には目をつぶるのが鉄則、でなければ入る前に深くかかわらない。正義感から首を突っ込むほどお人よしでも、冒険家でもない。

「まぁ、言うと思ってやした。簡単に言ってしまえば、魔本と魔剣の融合体でやんす」

「それは無理なんじゃないのか？」

「現実的にはできません。大抵の場合、本という記憶媒体と剣などの武器が相反しあって、魔術的には使いモノにならない物質になり下がります。というか、ただ文字が書いてある石になる。って、よく知ってますね、旦那？」

「・・・常識だろ？」

昨日、教えてもらったばかりの常識だったがな。

「そもそも、何で合体させる必要がある？　それぞれ単体でもいいんじゃないか？」

当然の疑問を問う。強力な力を叡智という形で知ることができる魔本、宿る力を武器として振るうことができる魔剣。それだけでも強力な武器といえよう。合体させずと二つ扱えばいい。

「魔本はね、旦那。本自体に力とそれを発動させてしまう“原典”ならともかく、写本やそれ以外の魔術師のメモ帳ぐらいじゃ、魔術は発動しないんですよ。キーとなる言語や、隠匿された文を追加するとか、各々のやり方で自動起動を抑えている。つまり、発動させるにはめんどくさい過程を得て、さらに自分で魔力を作り、奔らせ・・・とにかく発動させるのに時間がかかるんでやんす」

「内容をシンプルにすればいいんじゃないか？」

「それはダメなんですよ。簡単すぎると、魔本は本の特徴である利発さを失って暴走するんですよぉ。例にするなら、いつ不発するかもしれない中古の手榴弾。そんなモノを持ちながら歩くなんて考えたくあないでしょ？」

まあ、確かに。

「それにくらべて魔剣に代表される魔具は簡単です。魔力を流し

てやるだけで、シンプルだが強い実戦的な術を行使できる。まぁ、扱いが難しいくて、使用者の魂まですり減らすのが多いですけどぉ」

「・・・つまり、高度な魔術を扱え、かつ安易に力が扱える端末（デバイス）を作りたかったわけか」

「そうでやんす」

よく出来ましたとカラカラ笑うハジ。始めからそう言えよ。

キュキュキュキュ、とタイヤの擦れる音が鳴り響くほどの急カーブで、横に流れる慣性を感じながら、外の景色に目を向ける。

東京の方角には暗雲が立ち込めはじめていた。

ところで、現在俺たちの乗る車の直線上を誰も塞ぐことはしない。なぜならハジが操るこの車が赤色のフェラーリ社製のスポーツカーだったりするからだ。

チッ。

「何がティーチャー（教師）ですか！　戯言といい、人を舐めるのも大概になさい！！」

ローザは構えていたハルバートを投げ捨て、新たな小瓶から、二振りの剣（レイピア）を錬成する。大ぶりな武器から小周りの利く武器に変更し、近接攻撃に変えるようだ。

アルバインは一言も発言はしないが、腹で胎動するナイフを凝視しながも、次の攻撃の機会をうかがっている。

「魔剣に取り込まれた人間なのかい？　ローザ」

「わかりませんわ。でも、ありえません。魔剣と魔本は別モノ。でも・・・アレは・・」

「判っているだろ？　錬金術師？」

ケラケラと困惑するローザの表情を愉快そうに嘲笑うティーチャー。

「感じるはずだぁ、この深い叡智と静謐（せいひつ）の如き気配を。それとも、そんなことも判らない出来そこないなのかい？」

「黙れ！」

ローザが駆けだす。それに合わせてアルバインも随行する。ティーチャーはそれを受け入れ、自分の間合いに誘う。
美しい構えから繰り出されるローザの突きと、アルバインの袈裟切りから始る流れるような連続攻撃を体をグニャリとさせ、避けていくティーチャー。
ふたりの攻撃は常人では目視も困難なほどの速さだったが、それを余裕を持ってかわされる。
「君たちの攻撃は飽きるほど受け、退屈が生まれるほど観察している。我々には容易く避けられる」
「戯言をっ！」
「・・クッ！！」
「信じられないか？　なら」
言葉を証明するように二人の武器を素手でつかみ取る。掴む手からは血が滴るがティーチャーの表情は喜悦に歪む。驚く二人にまだまだこれから何かを見せつける様に。
「セット、フレイム」
「「！！」」
すぐさま二人は掴まれた武器から手を放した。
聞きなれたアルバインの文言を、ティーチャーが唱え、二人の武器が出現した炎により爆発したのと同時だった。
「それは・・僕のッ！？」
ローザは諦めず右手に残ったレイピアをティーチャーの顔面へと突きだす。
「私たちの魔術に言葉はいらない」
「！！？」
突き出された剣先の行き先を、掌（てのひら）が待ち構える。剣はその掌を貫通することはなかった。剣はまるで吸い込まれるように、正確には掌に当たる寸前から溶ける様に無くなっていった。
「分・・解っ！？」
「錬金術の基本だろうっ？」

驚愕に固まるローザの脇腹に鋭い蹴りが食い込む。蹴りの威力を語るように横へと吹き飛び、ビルのガラス張りのショーウィンドへと叩き込まれる。

「ローザっ！」

「セット、ウインド」

「っ！」

アルバインの扱う魔術が使われる。彼の立つ位置に爆風が突如生じ、後へと弾き飛ばされる。受け身すら取ることが出来ない衝撃に二人が動かなくなる。

「あひ、っひひひいひひひ、ハハハハハハア！！」

二人の魔術をまるで自分の術のように扱うティーチャーが、相手を痛みつける快楽に凶気を爆発させ、涎をたらしながら大口開けて笑いだす。

彼の狂気に呼び集められるかのように、私たちの上に広がり始めた暗雲が嘲笑うように、轟音を響かせる。

「・・・どうして、二人の魔術を使えるの？」

「僕らは魔本だからね。いろんな魔術ができて当然じゃないか」

私のうわ言を聞いていたのか、律義に答えてくれるティーチャー。そんな彼の頭部にガラス片が投げつけられる。投擲された方を見ると、ショーウィンドに蹴り込まれたローザがのっそりと立ち上がっていた。

「ちいさな子供に教えるんじゃあるまいし、嘘を教えるものではありませんわよ」

「嘘ではないよ」

「今の魔術師は、扱う魔術式を体に、魂に刻みこみ発動させる。それは長い時間をかけて、己の魔術に誇りを持って、自分に一つの術式を確立させるのです。それを貴方は、そんな素振りも、体を作りかえる時間もなく共通点のない複数の魔術を扱ってみせる・・・・貴方、いったい何ですの？」

受けたダメージが大きいためか、フラフラと立ち上がりながらロ

ーザは質問する。目の前の人ならざるなにかに。
「言ったじゃないか？　僕たちは魔本」
「複数の系統の魔術が載る魔本？　魔力の精錬法すら違う術式同士が相反し合って暴走することすら貴方は知らないのかしら？　自らが魔本だと、魔剣だと名乗る前に、自分の愚かさを理解しなさい！」
「ブハハッハハ！！」
ローザの指摘につぼに入ったとでも言うように、体をクの字に折り曲げ笑いだすティーチャー。
「自分を理解しろとは！　カカカっ、お前たち人間に言われたくはない！！　自分たちほど醜い存在がないことを理解しようともしない者たちに！　これだから教えがいがあるのだ、人間！」
そこにあるのは狂気、怨恨、そして悲しみ？
「教えてやろう、まず僕らの・・・我々の“材料”から」

首都へと向うにつれて黒い雲が広がっていることが、フロントガラスからも確認出来るようになってきた。
「その魔剣、厄介なことに人間を斬ることでその人物が蓄えた知識を吸い取ることができるそうでねぇ、まさに自動記載能力。魔術師にとっては夢のような能力ですね～。死者を操る能力なんかは元になった魔本の能力で、元になった魔剣の能力は物体の行動抑制らしいでやんす。立案者は・・・おお、グレイ・アライスマン。旦那、有名な死霊使いですよ、この人」
どこで仕入れてきたのか、この事件の元となった兵器開発計画の内容書を片手に運転するハジ。安全運転という概念がコイツの頭にはないのか？　・・・それにしても。
「それにしても、どんな考えで魔本と魔剣を合体させようとしたのかね」
「アハハ、旦那ぁ。魔術に関わる人間なんて知りたがりな人間ば

かりですぜ。二つをくっつけてみたいなんて当然の欲じゃないですか？」

「単なる欲だけか？」

「そうですよ、欲です。人間は欲で動く。それが可能だと判った瞬間なんて、とくにドロドロした欲溢れだす生き物なんですよ人間は。それがどんなに非道なことでも己の目的のためなら怨嗟の声すら気にも留めないほどです」

語るハジの声が呆れた果てた声に変わった時、遠くの方で雷が落ちるのが見えた。

案外近かったのか、うすぐらい車内に光が一瞬入り込む。

「ところで、旦那。魔本の作り方しってます？　案外簡単なんですが、魔導師や魔術師が明確な意思を持って書き込めば出来上がり」

「いや、大事なところを省き過ぎだろ」

「良いんですよぉ、適当で。どぅーせ、旦那に魔術なんていらないですし」

「バカにしてんのか」

「違いますよぉ。・・・続けますよ。媒体は紙なんですが、時代や風土によっては粘土版なんてものもありました。それらに共通するのは柔軟で、安易に書き込めることができること、知識や叡智を受け止めることができる物。硬い鉄なんかでも出来そうですが、あれは硬すぎて書きこみの大変で、さらに力ある文言などにあまり耐久力がない」

物や存在の存在意義を重要とするのが魔術師だと、あの錬金術師も言っていたか。

「魔剣を作るには、さらに魔力に耐えうるだけの鉱物が必要。それを作り出すにはめんどくさい儀式や時間が大量に必要なんですよ」

でもね、と一拍置く。雷が落ちたようで轟音とともに光が車内を再度照らす。

「いるじゃないですか。すばらしい呪への耐久力を持ち、最高の鉱物にも匹敵する硬度を有する“生物”が」

なるほど、と思う。その手の発想はなかった、と言うより考えたくなかった。

「人間を遥かに超える強靭な力と寿命、人の世の理の外からやってくる我らの世界の隣人。そして、魔術という欲望の源泉」

人類の大半はその存在を空想の産物、妄想から生まれる化物として信じていない。だが、この世界には確かに存在する。なにせ、俺は奴らと実際、戦ってきたのだから。

奴らの存在を知る者は総称でこう呼ぶ。

魔族。

「俺たちは、一万七千九百五十一体の魔族の体を押しつぶされ、ねじられ、切られ、打ちつけられ、固められて作られた存在」

ティーチャーは顔半面を鷲頭掴むと、ビリビリと皮を仮面を取るかのように剥がす。その下にあるのは筋肉ではなく、地面の断面図のように層ができた筋肉とは別質なものがあり、びっしりと何層にもわたって押しつぶされた生物の目がぎょろりこちらを目視した。

「うっ」

吐きそうなのを懸命に手で押さえる。そんな私の反応を笑いながら、抱きしめるために両手を広げながらゆっくりと近づいてくる。

「彼らは、僕らを作った魔術師たちは、実戦向きの兵器を作り出そうとしていたようだった。彼らが目指す兵器は戦略的戦闘が可能な多くの魔術を発動することができる武器。でも、既存の鉱物や紙を使っては術式同士の混合が起きて使いモノにならない。すぐ寿命がくる兵器などに価値などないからね」

彼と私の距離は十数メートル。その間にアルバインとローザが立ちふさがる。二人とも体に怪我を作りながらも狙われる私を庇う。

「たとえ倫理やモラルから外れた魔術師といえど、自分たちの敵にも等しい魔族で武器を作ったとは・・・なるほど、協会も隠したいわけですわね」

「魔族の肉体を固めて武器ニ？　ローザ、出来るのかイ？」
ティーチャーを睨めつけながら、ローザはアルバインの質問に気分が悪そうに答えた。
「ええ、ええ出来ますわよ。魔族は魔術の原型を扱う存在、魔術的耐久力やら硬度的にもなんら問題なく、最高の呪物と言えるでしょうね。でも、それは形が残り、生きている場合に限りますわ」
「そうだよ、錬金術師。やれば出来るじゃないか。原型がなければ存在定義が無くなり、呪物的な効果は半減、もしくは何の価値も無くなる」
「だから、死者と魂を操る術式が記された魔本・・・生ける屍の術式」
出来の悪い学生が頑張ったところを見る様に、喜ぶティーチャー。
「そうだよ、魔術師たちは我々を生きたまますり潰し、叩いて鉱物のようにした。死なないように生ける屍（ゾンビ）にして、元の形に戻らないように、混ざり合わないように呪いで魂を括って、一体一体丁寧に意識を持たせながら叩き潰し、打ちつけた」
淡々と語るティーチャー。
「その痛みは苦痛を通り越し、魔族が天国と救いを求めた。ぺしゃんこにされて上手く使える状態になった奴はまだよかったが、そうならければ他の個体と一緒に冷たいプレス機で何度も必用にすりつぶされた。板のように横に広がり交わり合うとわかるんだが、聞こえてくるんだ苦しむ声が」
「僕らの中には懇願した個体もいたが、無駄だったそうだよ。自分は人間に近い体を持っているから慈悲に応えてくれるかもと考えたそうだがね。彼らはゴミでも見るような眼で、動けない自分の体をハンマーで殴りつけられたようだね」
自分たちと違う存在に対して、人間は異質に残酷だ。
特に自分たちの利益や生き死に、生存競争の際には他の種の命の価値など見ようともしない。
仕方がない、こうするしかなかったと言い訳をつけて命を喰い物

にする。

「だがね！　私たちは君たち人間を怨んではいない。むしろ、この体を作ってくれて感謝している。魔本になったからだろうね、崇高な意識が溢れてくるんだ。教えたい、知識を広めたいと深層意識から溢れてくるんだ！　僕らが持つ一番の知識、痛みを！！」

人の静かな狂気から作られた存在。人の欲と悪意と万もの怨恨から生まれた存在。

壮絶な痛みを受け作られたために、教師が自分が得意とする知識を教えるように痛みと死の知識を持つ魔剣が生まれた。

彼は自分自身で気が付いていないのだろう。万もの人間への憎悪の気持ちが、魔本の影響で歪んだ教育論へと変わっていることに。

正義にも等しい正しさが自分にあると誤認し、暴力的に教育を施そうとする教育者に。武器である剣は社会的な制約が無いため限度を知らない。純粋なまでに残酷で血も涙もない、まさに鬼のような存在でもある。

狂気に染まる教える気持ちをぶつけてくる鬼の如き魔剣。

教気の、教鬼（きょうき）の魔剣。

「だから」

ティーチャーが腕を振るう。袖から出てきた触手が私たち三人の首に巻き付き、宙へと持ち上げられ、地面から足が離れていく。頸動脈が締められる痛みと、空気を強制的に止められる苦しみが襲いかかってくる。

「痛みを、それに連なる死を、教える」

アルバインたちも同じような状況で、何とか脱出しようと試みているが、四肢の自由を適切に奪うよう触手が絡まり抜け出せずにいる。

「さぁ、撫子。勉強の時間だ」

首に絡まる触手の締めあげが徐々に強くなっていく。気道が閉鎖され、それでも空気を求めて口を開くが涎（よだれ）と泡（あぶく）ばかりが口から漏れ出るだけ。

「ナデシコっ！」
「クケケケケケっ」
ティーチャーの狂喜の笑い声を聞きながら、本当に死を覚悟する。
薄っぺらな私の人生では大した走間灯もでないのか、一人とその一つだけ。
頭に浮かんだのはただ“一人”と
空の彼方から飛んでくるのが横目で見えた、彼がいつも背負う光すら拒絶するような黒い大剣。
「っ！！」
ズォンッ、と私たちを縛る触手を全て砕き散らし、地面に突き刺さる黒い大剣“イザナミ”。
「っ！　ゴホ、ゴホっ」
五、六メートルほど持ち上げられていた私は突然の解放感と浮遊感に戸惑いながらも、着地の衝撃と急激な酸素の流入に目を覚ます。
アルバインも同じように着地した。
私たちより高く持ち上げられていたのか、未だ落下しているローザだけはその様子が無い。気を失っている！？
そのままでは頭から激突する体勢だったが、そこに横合いから豪風を引き連れた男が、ローザを宙で受け止める。
夏が近いというのに、青色のジーンズと白いYシャツにその上から黒いコート。
癖が少し強い日本人のような黒い頭髪を風でなびかせ、人のモノとは思えない紅色の瞳が、鷲の如き鋭さで相手を、敵を見定める。
我が契約者にして、大家さんである、進・カーネルが。
「ん、うぅん？」
「どうした、寝不足か？　クライアント・・・じゃないな、お嬢様」
「っカーネル！！？」

バッ！　と音でも出しそうなほど素早く、進のお姫様抱っこする腕から逃れるべく、空いている左腕で進の顔面へとパンチ。でも、首を傾けることで容易く回避されてしまった。

「危ないだろうが」

「っ！？」

ローザは逃れるために攻撃したのだろうが、逆効果だった。進の首が傾いたことによりさらに顔同士が接近し、お互い息がかかるほどの距離間に詰め寄ってしまった形になっている。

顔が真っ赤になっているローザ。壮絶な美系ではないにしても二枚目半くらいの進の顔と見つめ合う。

「命に恩人に攻撃するたぁ、綺麗な顔してやることはおっかねぇな」

進はそのままローザの片頬に手を沿わせ、ほほ笑む。

いや～、今時こんな純粋な女いるんだな～的な笑みだったが、ローザの瞳には別の意味で写ったのか、そのまま彼女はさらに顔を真っ赤にさせ、俯き、黙ってしまう。

「キモイですよ」

「ナデシコ・・・」

「なんですか？」

「あ、イヤ～。その、あの・・・スイマセン」

アルバインが何か言いたげだったが、私の顔を見ると目を反らして謝ってきた。まるで私が阿修羅のような表情をしているみたいに。

「で？　あいつが魔剣か？」

何事もなかったかのように話を進めようとする、この魔王がいたらこんな奴。

「そうですよ・・・」

「なに不貞腐れてるんだ」

「別に」

地面に穿たれた大剣を引き抜き、肩に担ぎ直す進が直視する先にはティーチャーがいる。だが、先ほどとは明らかにあの魔剣の様子

が違う。
「なぜっ！　キサマがココニいるッ！！」
「ひどいな、何とか兵器さんよ。いや、先生？　招待状の住所が間違ってたぞ、おかげで田舎まで電車の旅だ。・・・経費だせよ」
進が二人の見送りにこれなかった訳は、ティーチャーの策略だったようだ。ただでさえ金欠の進は電車賃を使わされてイライラしているようだ。
「きさまのようなバカに教えてやる気も起きないのだ、我々わ！　帰れ！」
「ひどいな先生。少しは、痛みとやらを教えてくれよ」
イザナミを担ぎながらゆっくりとティーチャーへ向かって歩みだす。顔に皮肉な笑みを張り付けながら。
「そこまで死にたいなら、殺してやる！！　来いっ、愚かな死者たちよ！！」
進に向かって来いと言ったわけではない。彼が声をかけたのは、地面。
そこから這い出てきたゾンビたちが、進とティーチャーの間、二十メートルほどの距離の道を埋め尽くす。
ローザとアルバインが対峙した数の倍近く、数えきれないゾンビたちが進を威嚇し、一斉に掴みかかってくる。
「カーネルっ！」
「シン・カーネルっ！」
二人とも逃げろという意味で彼の名前を呼んだのだろう。自分たちでどうにかするには手こずる量の数であるようだ。
でも、意味はないだろう。
「はいよっ！　先生っ！」
優等生のような爽やかな返事をする進が剣を真横にイザナミを薙ぎ払う。先頭にいたゾンビに剣が食い込む。
はずだった。
ゾンビ群団の前衛の大半が吹き飛ばされる。剣を直接くらったはず

ずだったゾンビは刃が食い込む前に風圧で粉々に砕け散り、その余波だけで後にいたゾンビたちまでもが押し返されるように数メートルふき飛ぶ。

進の剣の風圧は爆風にも等しく、私の体を殴りつける様に叩き、それだけで後へと倒れてしまう。

進の進撃は止まらない。

「そらそら、どうした！　軟ぇぞ！　カルシウムとビタミンＢ１摂取し直して来いっ！！」

剣の刃まで辿り着いたゾンビもいたが、前者と変わらず一瞬で原型を無くす。

それでも果敢に突進するゾンビたちだったが、横に殴りつけるな斬撃を受けて後へ、空中へ、横へ、進の真後ろ以外の様々な方向へと豪快に弾け飛ぶ。

拒絶するように、暴力的に切り裂かれ、砕かれ、吹き飛ばされ、爆死する。爆死とは剣の攻撃にしては変な表現だが、進の常識外の腕力とイザナミにより技もなにもにないただの力だけで実現される。

生みだされる続けるゾンビたちは数百体いたが、一分も経過しない内に半数以上が駆逐された。

「聞いたぞ、先生。あんたに何があったのか、どうやって作られたか」

千に近い死者の軍団が、たった一人に壊滅させられていく光景に声をなくしていたティーチャーに、壮絶な笑みを浮かべて語りかける進。だが、その手は止まらず、近くにいたゾンビの顔面を鷲掴み、左手だけで握りつぶした。

「何人も斬り殺して、知識を奪って、人間並みの知性を得て、言葉をつかってコイツらにご高説立ててたようだな、僕らには人間を苦しめたい理由があるってな」

「そうだ！　私はお前たち人間に痛みを教えてやるのだ。その権利が私には！！」

「知ったことかよ、そんなこと」

嘲笑うように無慈悲に言い放つと、近くにあった長さ6メートルほどの電灯を地面から引き抜く。剣と電灯の異色の二刀流を見せるかと思いきや、進はそのままティーチャーへ向かって縦に投げつけた。

「なっ！？」

ティーチャーは死者の壁を素早く出現させ縦に回転し向ってきた電灯を止めたが、その速さと威力とビルが倒壊でもしたような衝突音の後、死者の壁は崩れ落ちる。

防御壁を無茶苦茶なやり方で容易く破壊した進。私の後ろで佇(たたず)みその様を見ていた二人はポカンと口を開けて動きを止めている。

「お前がどんな拷問じみた所業を受けたかなんて、俺にはどうでもいいんだよ。知ったことか。不幸の比べ合いも、不幸の相談相手も勘弁だ。めんどくさいし、キリがねぇからな」

大抵の人間はティーチャーの出生を聞けば何か思う感情が生まれる。だが、どうすることもできない。不幸を聞き、相談にのることで軽減することができる内容ではない。

なにより不幸を振りかざすことが正義で正しいことだと思っている者に、論理的な解釈も、安易な説得も意味をなさない。硬くなに理解しようとする心を閉じ、他人の意見に耳を傾けないからだ。

「どうせ説得なんて聞かなぇんだろ？　だったらやることは一つだ。お互い、敵の言葉に耳をかさない同士な」

宣戦布告をするかのように白い肉厚な銃を素早くコートに内側から引く抜き、引き金を引く。

ティーチャーは今度は壁を作ることなく、地面を滑走するように進へと接近する。銃弾を体をくねらせることで避け、掌(てのひら)からロングソードを引き抜くと進の肩口へと振りおろそうとするが、右手一本で操るイザナミにより受け止められる。

「カーネル！　その剣を受けてはいけませんっ！」

「あぁ？」

「クカカカ」

ギリギリと刃同士が削り合う音と共に進の体に影のような闇が纏わり付く。断頭の魔剣の能力だった。

「引っかかったな。俺たちの元になった魔剣の能力はすでに転写済みだ。アレの数倍の拘束力を持つ魔術だ。これでお前も」

「ところがどっこい」

この場の三人？　は知らないだろうが、進の黒い剣“イザナミ”の能力はあらゆる干渉を受け付けず、拒絶し、無力化する性質がある剣。どんなに強力な魔術だろうと、イザナミ事態に触れている時点で能力は失われるようだ。

そんな動けないはずの進が、いとも容易く左手に持つ白い銃ををティーチャーの顔面めがけて押し込み、何のためらいもなく引き金を引く。

「グオオォッ！！　お、お前ぇっ」

ティーチャーは痛覚があるのか、失った右顔を抑えながら絶叫し、呪いの言葉を吐こうとする。

「テメぇを倒す前に教えてやる」

間髪いれずに、詰め寄ろうとする進から逃れるべく、死者の壁で二人の間を遮る。

「痛みを教えたいから、テメェ以外のモノを傷をつけた時点で」

遮るように現れた約５３０体のゾンビでつくられた壁を、押し返すような前蹴りで蹴り破る。

壁の向こう側で驚愕に顔をこわばらせるティーチャーを確認すると、前蹴りから流れるように肩に担いでいたイザナミを奔らせる。

「テメぇ自身が傷つけられることを覚悟しとけよ」

傷つけることで、傷つけられることを知っている男の黒い拒絶の斬撃が、ティーチャーの左肩から縦に切り裂いた。

「やった後の説明で、悪いがね」

「ゴ・・・ガぁっ」

斬線に沿うように鮮血が溢れるティーチャーは倒れそうになりながら後退してゆく。

「進っ！」
勝利したと思い、進へと駆けて行こうとした
その時。
「撫子ぉ！　伏せろぉっ！！！」
その進の口から警告の絶叫がこだました。
突如、巨大な腕がティーチャーの胸元から飛び出し、私へと拳が
飛んできた。
「クソがっ！！」
私の頭をかすった風圧で、地面に叩きつけられた。
その腕の半ば当たりに進が蹴りを入れていなかったら、確実に私
は死んでいた。
「なに・・が？」
何が起きたか確認するまでもない。
なにせ、ティーチャーがさきほどまでの人間の形から逸脱した細
胞の塊、肉塊に変じていたから。
その肉塊は徐々に膨れ上がり、周囲のビルおも呑みこんでゆく。
「死を」
「・・・コイツは」
「貴様ら、だけには死を必ず！　シオ、シオ、死ォォォッォォォ
ォォ！！！！」
どこに口があるのかも判別できない、その肉の塊から怨嗟の声が
木霊する。
暗雲から涙のような雨が降り始めてきた。

次話へ

5、教鬼の魔剣（後書き）

やめられない、とまらない。
何がって？
そりゃ、仕事が。

もうしわけありません。局所を修正させてください。8月25日
現在。

6、内側からの涙

6、内側からの涙

「えー、こちら花園。スタジオの皆さん、聞こえますでしょうか？　私は現在、羽田空港上空から中継しています！」

私の名前は　花園（はなぞの）　蜜柑（ミカン）。テレビ局に所属する“美人”リポーターである。

化粧で歳を誤魔化そうと、世間から美人リポーターと呼ばれているのだから美人でいいのだ。文句あるか？

「花園さん！　現場はどのような状況なのでしょうか？」

遠く離れたスタジオのセットからベテランの男性アナウンサーがさも緊迫した様子で聞いてくる。

（どうせ、言ったところで現場の現場の緊張感なんて、千分の一も伝わらないだけどね～）

所詮はノホホンとした内側から、外側の風景を見ているしかできない人種にはなりたくない正義感から、このような事件があると率先して現地へ向かう変わり者として有名な私は思ってしまう。おっと、お仕事、お仕事。

「はい、信じられない光景が眼下に広がっています。年間数千万人以上が利用する羽田空港は現在、粉塵で覆い隠されています。雨の影響で大した火災は起きてはいないようですが、幾人かの“暴徒”がいるのか、各地で小規模な爆発が起きています。戦後間もないこの日本で復興した空港が現在、テロの脅威にさらされている現実があります」

現在、羽田空港とその周囲で凶悪なテロリストが事件を起こして

いる。
　との情報を受け、政府から周辺地域の避難勧告と各テレビ等の取材班の派遣の厳重禁止命令が出されたのは数刻前のこと。
（ハイ、そうですか。って訳になるはずないっしょ）
　この国の政府に対する評価は最悪だ。第三次世界大戦中の日本への攻撃は実は外交上のトラブルが原因であるという説や、首都を三分の一を切り離し、無法地帯にした事など、国の怠慢が戦後に多く取り上げられ信頼はガタ落ち。
（それ以来からよね？　急に無理な隠しごとが増えたのって）
　謎の現象や事件が起きると政府は情報を公開したが、すべてどこか辻褄（つじつま）が合わない回答ばかり。
　ことソドムに関しては自衛隊の情報公開すら禁止した。
　そんな政府に格段の信頼を置く者などいない、というのが現在の政府を取り巻く外周だった。それは戦争終結から十年たった今でもかわらない。
　隣で乗り出すようにカメラを向けていたカメラマンが下に広がる世界を写しだす。……そろそろかな？
「花園さん！　“今”政府から区域内および空域への侵入を禁止するとの情報が入ってきました。すぐさま現場から撤収してください」
　来た。命令がこちらに回ってきていなかったという嘘情報。信用のない政府の通達の遅れを装うことはここ数年間の定石になっている。多用はできないけどね。
　そもそも命令を出していたというのに、自衛隊が空を封鎖していないのが悪いと、心に言い訳する。
「了解しました。花園はこれから帰還します」
　スタジオへの中継を止め、ヘリの操縦士が旋回を始める。
　ふと、下に目を向ける。
（しっかし、戦後間もない、貧乏国家にテロね～。どこのバカ・・が！？）

「待って！　カメラさんっ、あそこ！　カメラ回して！）
そんな私の視界に不可思議が写り込む。そんな私の声に血相を変えて、その異様な光景にレンズを向けるカメラマン。
「嘘、だろ？」
そんなカメラマンすら目を疑う光景。
街に中央とも呼べる場所に、巨大な、脂肪のような塊が膨れ上がり始めていたからだ。
青筋が浮かぶ、遠くから見ても弾性な存在だと思わせる外観。それが徐々に膨れ上がり、周囲のビルや街を呑みこんでゆく。
どこの怪獣映画だ、これは。
「なによ、アレ」
脂肪の塊は徐徐に、形をとってゆく。ゆっくりとだが、確実に変化が起きている。それがある形に近付いてゆくと吐き気がこみ上げてきた。
体長４０メートルほどの人型。なのに頭は魚の頭部のような形、足と呼べる器官はなく、胴体から下半身が完全に地面と同化している。全身をさきほどまで軟性さは、すべて硬質な鎧のような皮膚に変わり全身を覆う。
人を模した。でも、人を馬鹿にした巨大な何かが、咆哮を上げ、握った拳を地面へと叩きつける。
その先に私は見た。確かに目撃した。
「・・・人？」

視点帰還

ぶくぶくと、ケーキ作りの際にできるメレンゲのように泡立ち、膨張する脂肪の塊は徐徐に周囲の建築物を呑みこみながら、形をとっていった。

それは人の形に似ていた。だが決定的に人ではない。大きさにしても、魚のような頭を乗せている。

硬質とわかる鉛色の鎧で全身を覆い隠した上半身だけの巨人が目の前に出来上がった。足はないが、地面と繋がり、ズルズルと周囲の物質を取り込む器官が付いている。

「おい、おい。負けそうになったら巨大化って、朝の戦隊モノの敵かよ。こちとら巨大ロボットなんて持ってないぞ」

めんどくさそうに巨大化したティーチャーを見上げる進。

「……貴方の剣、もしかしなくとも無効果（ディスペル）の魔剣でしたのね。あの魔剣の素材（魔族）たちを固めて繋ぐ術式を断ち切ったことで、あのような事になったのでしょうね」

「俺のせい、か？」

「結果オーライですわ。あれは繋ぎを失って暴走している。あれではまともな魔術は一つも使えないでしょう」

馬鹿にされたと感じたのか、

「グォォォッォォオォォォォッォォっ！！！」

人型の巨大な化物となったティーチャーはその巨大な掌を拳に変えて、咆哮と共に、それを進へと叩きつける。

ズォン、と地面が高鳴り、コンクリーが衝撃に耐えきれずに陥没する。

そんな上からの力を、進は黒い大剣“イザナミ”を平らに、剣の腹で受け止める。

「ガっ！　くっ、のぉぉぉおっ！！」

地面と拳の板挟みに合い、ミシミシと下に押しつぶそうとするティーチャーの力が増すたびに、膝と腰が徐々に曲がってゆき、履いていたブーツが地面に埋まっていく。

「死ォォッォォォ！！」

「死を、塩、ぅっるせぃっ！」

それを進は根性で押し返していく。・・・・アレ？　私、変なこと言ってませんか？

普通、体長４０メートル以上ある化物の重さを受けるモノを、それを上回る力で持ち上げようとしている。その異常な光景に脳の処理速度が落ちようとしていた。

後の二人もポカンとしている・・いや！

「ふ、二人とも！　進を助けてくださいっ！　補助！　補助！」

「「え？　あ、ウン」」

ハっと目覚める二人。そして、響く気合いの一声。

「いぃぃらんっ！！」

地面をさらに踏み砕き、驚異的な足のバネを使い、推測何百キロほどの拳を押し返した男から明らかな拒否が木霊する。

巨大怪獣と化したティーチャーはカエルのようにひっくり返った。もしかしたら、あの魔本と魔剣の合成兵器も自分の体の変化についていけていないのか？

「それはどういう意味ですのっ！！」

それよりも、今はこっちだ。

「あぁ？　怪我人は素っ込んでろって意味だ。テメェらは戦力外だ、とっとと撫子連れて逃げろよ」

「あれをお一人で倒すつもりですの！？　何を言っているのか判り兼ねますわ！　それにアレは私の獲物ですの！！」

「まぁまぁ、二人とも落ち着いテヨ」

「「片言騎士は引っ込んでろっ！！　需要があると思ってんのかっ！！」」

「ねぇ、君タチ・・・僕が怒らない人間だと勘違いしてないカ？」

……ギャア、ギャアと不協和音が広がるこの人たちを何とかしないと。

みんな、一緒に戦えばいいでしょうに・・・。はぁ、ヤレヤレ、これだから個性が強い人たちは。

「「「うるさい、ポンコツ！！！」」」

「ま、まだ何も言ってないですよっ！　いつも思うんですが、どうして・・」

「ゴォォォっ！」
「え？」
無視をするな、とでも言うようにいつの間にかに立ちあがっていたティーチャーが再び拳を振り上げ、叩き落としてきた。
「ひぃややああああっ！！」
ゾォン、ゾォン、ゾォン、と今度は一度だけでなく、執拗に何度も殴りつけてくる。その落石のような拳を、それぞれの動きで避ける三人。
アルバインは、大ぶりなその動きから攻撃ルートを予測し、体を捻じ込むように。
ローザは、拳をギリギリ演舞するよう避けてゆく。
進は、目視困難な速度で道を横断すると、私を抱きかかえ、そのまま生き残っていたビルの外壁を垂直に駆け昇った。
天地がひっくりかえったような感覚に吐き気が一瞬こみ上がったが、五秒と立たないうちに屋上へと到着した。
「・・・もう進の仰天行動には、慣れました」
「・・どうでもいいが、邪魔になるからココにいろよ」
屋上の縁を利用して飛び出し、速度をつけた一撃を与えようと剣を上段へと振り上げてティーチャーの腹部とでも言うべく部分へと壮絶な力が叩きこむ。
「早く終わらせて、帰らせろっ！」
はずだったのに。
「あ？」
「い？」
「ウ？」
金属が絡み合う音が鳴り響く。それは進、ローザ、アルバインのそれぞれの“武器同士”がぶつかり合う音であった。
三人の攻撃はティーチャーの体の寸前でそれは起こり、その体に届きもしていない。
緊迫が広がるはずの戦場に生まれる空間の間。

気持ちの悪い間に、ティーチャーの拳が三人にめがけて飛来し、三人まとめて吹っ飛ばされた。

「えぇぇぇぇぇっ！！」

六階建てのビルの屋上から私の声が木霊する。

人一人軽く砕く一撃を受けたにも関わらず、それぞれの受け身を取って五体満足でいるのが奇跡だ。

「オイ！」

「邪魔すんな！」

「貴方達こ・・・そ？」

言い合う三人の足もとに広がる影に全員言葉を無くして上を見上げる。

上から降ってくる拳を。

「ガァアアっ！！」

アスファルトを余裕で砕き、地下に広がる空間が見えるほどの大穴を開けるティーチャーの攻撃。それを危なげに避ける三人。

「いい加減にしなさい！」

ローザがハルバートの刃を振り落とされた腕へと振り向きざま切り砕く気で叩きつける。

だが、砕けたのはローザの武器の方。ティーチャーの体には傷跡すらつかない。

「なっ！？」

「どけっ！」

すかさず進がイザナミで縦に斬撃を繰り出す。腕に直撃し、硬質な肌に亀裂が走る。だが、そこまでだ。進の攻撃をまともに受けたのに壊れない驚異の硬さ。

「くっそ、硬いな」

かすかな傷口から少量のボロボロと零れ落ちる材質を手に取ったローザは材質を見抜く。

「これは、セメント？　周囲にあった建築物を取り込んで肌に、いえ、鎧にしたのですね」

「一層って訳じゃないな。それにきちんと硬質な層から衝撃吸収の層までいくつかの層を作ってる」

「グォオ！！」

「！！」

それがわかったからなんだ、と言うようにティーチャが街ごと進たちを消し飛ばすために巨大な腕で薙ぎ払おうと、腕を振りかぶる。

「「「させるかァ！！」」」

三人が一斉にそれを防ぐべく駆けだそうとする……が。

絶妙のタイミングで、まずローザが出遅れたためか、のばした手が進のズボンのベルトに引っかかり、バランスを崩した進がよろけアルバインにぶつかり、それを防ごうとしたアルバインがつんのめり。

仲良く転倒した。

すばやく同時に起き上がり、三人同時に叫ぶ。

「「「何やってんだ！！！」」」

（ダメだ、この人たち）

もう、呆れるしかない。

見事な足の引っ張り合い。それもそのはず、三人とも誰かに従うタイプではなく、一人で自律行動し責任と行動を背負うワンマンプレイヤーだからだ。

唯一、仲間に合わせることができるアルバインも先ほどから立ち向かうべきティーチャーでなく、共闘すべき進に意識を集中しているように見受けられ、そこで彼のチームワークに対する意識が薄れている。

そもそも彼の武器は剣身が半ばから破壊されている状態で使いモノになりそうにないほど破損していた。

そんな調和が取れているようで、全く取れていないパーティーのミスで。

一つの街の一角が消滅する。

「ブォォアアア！！」

咆哮とともにティーチャーの腕が払われる。
「ナデシコ！！」
腕が私のいるビルへと直撃し、地面が消失する感覚とともにアルバインの声が同時に届く。
抱きかかえられる感触がするのと同時に衝撃が体を襲い、私は意識を失った。

「ナ・・デ・」
声がする。誰かを呼ぶ声。暗闇が広がる世界を漂う私を呼ぶ声が聞こえ、瞼を開く。
「ナデシコっ、しっかりするんダ！」
「あ、アルバインさん？」
「良かっタ。・・・無事だね？　痛いところはあるかイ？」
声の主、アルバインがホッと安堵する。
「ここ・・は？」
「・・・さっきいたところからは大分離れているはずだヨ。アレの攻撃に・・クッ！」
「アルバインさん！」
憎憎しげに顔をしかめる彼の右足には無数のガラス片が深く突き刺さり、彼のズボンを赤く染めていた。
右股関節付近を上着をねじり作った即席の縄で縛り、かなり深く入り込んだガラス片を彼は一気に引き抜く。
血が吹き出しそれをハンカチで押さえ、自分の体に願うように目をきつく閉じる。
「・・・魔力を体に通して細胞に働きかけ自己治癒能力を上げ素早く傷を最低限塞ぐグ。まぁ、やり過ぎると寿命が縮むから、あまりやりたくないけどネ」
痛みの抑制は無理なのか、顔に脂汗を滲ませながら苦しそうに説明してくれるアルバインはそれに専念するために再び沈黙する。

その間に私は周囲に目を向ける。
舞い上がっていた粉塵が徐徐に失せていき見えなかった世界が徐々に露わになってゆく。
時代の先端を誇り、整えれていた清潔感ある街の景色は、瓦礫と粉塵立ち込める荒廃した風景に変わり果て、整備された道は粉々にめくれあがっている。
数日前、友人たちと訪れた街が今はもうない。
目の前の光景に、心がざわめいた。そして、ある一点を見つけると心が一瞬で冷えた。
「・・・犬」
「ナデシコ？」
それは犬、いや、もう息はない犬だ。
瓦礫と瓦礫の間に挟まれ、胴を半ばで断ち切られ絶命している。
ふらふらと立ち上がり、その犬の元へと歩き出す。そんな私に声が届くが、私はそれに振り向くことなく犬の元へと辿りつく。
「貴方！　私の邪魔をしないでくださらないっ！！」
「あぁ？　毛ほど傷つけられなかった奴が出しゃばるなよ」
「っ！　私にはまだ秘策がありますの！」
そんな口喧嘩も気にせず、犬をそっと抱き上げる。背中をえぐられており中から内臓が見えている。だが、体自体が挟みこまれてはなかったため、すぐに瓦礫から抜きだすことができた。
苦しみ抜いて死んだのか、痛みを感じぬまま逝ったのかは判別できない。だが、舌を出して、目を見開いる表情からひたすらに無念だけが伝わってくる。
粉塵の大半が風で流され、辺りがクリアに写される。
背後には空港がすぐそこにあり、周囲の建築物は飛行場が近くにある建物特有の背が低い建物に、別の建築物の大きな破片が突き刺さり崩れている。
その光景の中の犠牲者にこの犬は入ってしまった。
偶然の悲劇にこの犬は巻き込まれ死んだ。同じように死んだ者た

ちがこの周囲にいるのかもしれない。
偶然。
そんなくだらない理由で死んだ。
死なせてしまった。
私たちがアレを止められなかったばっかりに。
「ごめんね。あなたを埋めてあげられる場所もないし、ご主人様がくるまでこれで我慢してくださいね」
犬の見開かれた目をそっと閉じ、視るも無残な傷口を落ちていたハンカチで覆い隠す。
立ちあがった私は真っすぐ止めるべき存在を見る。
「なでしこ、ナデシコ、ナデシこぉぉ！！」
赤ん坊が母親を求めるかのように私の名を叫びながら、足が無いため両手で這いずるように真っすぐこちらに向ってくる人に死を与えたい教鬼の巨人を見る。
頭がクリアになった。
「ここが、正念場です」
私の一言が場に響き。言い争っていた二人も、ひとり果敢に怪我を直そうとしていたアルバインも私へ視線を向けてくる。
「はぁ？　何が正念場ですか、貴方は早く逃げなさい」
怒ったように、でも私の身を案じて逃走を勧めるローザ。
「ナデシコ？」
私の言葉に眉根を寄せるアルバイン。
「・・・」
唯一、値踏みをつけるような視線を向ける進だけが沈黙を続ける。
「ローザさん、あなたの秘策ってどんなものなんですか？」
「そ、そんなの貴方に話すことじゃありませんわ」
「必要です。私たちがティーチャーを止めるためには」
「だから、私一人で十分・・」
「くだらないプライドも事情もいりません。話してください」
歴戦の猛者であろうはずのローザにしてみれば、私の追及など軽

く弾き返せるだろう。だが、今の彼女は私に詰め寄られ、遂には進に助けを求めるような視線を向けた。なぜだろう？　いや、今は良いだろう。

「話せよ」

「カーネル！？」

「その状態の撫子に何言ったって無駄だ。協力してやる。だけど、撫子。俺は高いぞ」

「き、金銭（きんせん）を請求している場合ではないでしょう！？」

「構いません」

「ハァ！？」

私と進の会話の間で、信じられないという表情で私たちを見比べるローザ。だが、これが私たちの関係だ。いまさらどうにか出来るものではない。

「了解だ、契約者」

離れた場所にいるアルバインを連れてくるべく、背を向ける進。その振りむきざま、ほんの少しだけ笑みが見えた。……気のせいか？

視点変更１

「君たちは一体どういう関係なんだイ？」

未だに傷口が閉じない僕に肩を貸してくれようとする進・カーネルに思わず問うた。

「一文無し娘と、そんなポンコツに優しく部屋を貸す近所でも優しいと評判の大家だ」

思わず笑みがこぼれ、それを見てか彼は顔をしかめて乱暴に僕の腕を引っ張り上げる。怒ったようだ。アイタタタ！

「っ～。彼女はただの娘かイ？」

戦場では容易く感情を見せるただの女の子かと思いきや、あの冷

静になる感情の切り替えはプロでも難しいだろう。
そして、あのローザですらたじろぐほどの威圧を見せたときの彼女は、一体？
「普通の女だよ。ちょっとばかし異常な生活をしてたせいか、世間に疎い、ただの女子高校生さ」
「・・・ハハハッ、そうかイ」
僕は進・カーネルに疑問を持っている。だが、今は信じて共に戦っていいと理解した。
彼女のことを話している時の彼の表情。
俺もよくわからないと言いたげな、困ったような笑い顔は確かに、人間のものだったからだ。
ふっていた雨はいつの間にか止んでいたが、未だに空には暗雲が満ちている、そして目の前にも。
それを、僕ら“四人”で払わねばならない。

視点帰還2

「で、どうでしょうか？」
三人の状況、今ある手段の数、出来うる情報を簡単に、数十秒で理解して作戦を作り説明した。今できる準備も終えているだが、三人の顔は浮かない。
「問題が二つ残ってます。一つは・・・」
その一つを言い終える前に、ふと視線をティーチャーへと逸らす。
作戦会議と準備を一分で終わらせあとは開始するのみ。それが出来たというのもティーチャーの移動速度の遅さからだった。
彼の現在位置の把握のための視線だったが、目に飛び込んできたモノに目を剥く。
ティーチャー本体は二百メートル先にいる。

それよりも先に視界に飛び込んできたのは拳。
たしか、あれは男のロマン！？
「ロケットパンチかよっ！！」
進が前に飛び出て、受ける面積の大きい剣の側面で防ごうと構えをとったが、若干の不安定姿勢で直撃を受け止めることになってしまった。
「ぬっ、オオォォッォォォォッ！！」
「カーネル！？」
「進っ！」
押し飛ばす力と受け止める力の拮抗は一瞬であった。踏ん張りが利かない進は受け止めたまま、伸びてきた腕とともに遠く、後ろにある羽田空港の建物へと殴り飛ばされていった。
「ゴォッォォアア！」
先ほどとは比べ物にならない速度で迫ってくるティーチャー。やはり、速度を隠していたらしい。
山の礫（つぶて）の如き巨拳が空から振り落とされ、大きくバックステップで避ける二人と二人に首根っこを掴まれて避けることができた私に、声が降り注ぐ。
「問題は、どうやって私たちの本体を見つけるか、だろう？　撫子」
「やっぱり、知性までなくしていませんでしたね。ティーチャー」
一件、暴走し魔術も使えないと見えたティーチャー。だが、実際は形をとり、進の攻撃に耐えうる装甲を作り上げていた。
知性をなくした存在のすることではない。速度にしてもそうだ、やけに時間がかかっていた。アレは私たちの作戦を聞いていたのだろう。大した地獄耳だ。
「聞こえていたよ、問題の一つは僕の本体である剣の位置。巨大化した際に場所も変えさせてもらった。そして、もうひとつの問題は」
進を吹き飛ばした腕が戻ってきた。その腕は強引に半ばで断ち切

られていたが、すぐさま再生し、手の形をとった。その手の第二指、人差し指でローザを指さす。

「そこの錬金術師の“分解”の術式を打ちこむことができるのか、という問題か」

指さされたローザは顔を不快そうに顔を歪める。

分解。

錬金術は金属をさらに貴重な金属へ昇華させたり、不老不死になる怪しい薬などをつくる術であり、何かの職業に見られがちだが、実際はそれらは副産物で、錬金術師とはその変化を及ぼす過程や原理、そういった法則を調べる者たちだ。つまり学者であり、錬金術とは学問だ。

ローザの使う物質の形状変化による武器錬成はその副産物。素材を魔力で混合させ、空気中の素粒子と粉末状にした金属をベースに武器や薬品を作り出す術だ。つまり基本の構築である。

もうひとつの基本は、彼らに必要不可欠な物質と原理をきめ細かに理解するために対象を一パーツごとに分けて知る技術、分解だ。

「結合する対象物を元に戻すと言うのが適切な表現だろうね。結合しているモノや含まれる不純物同士を離れさせる。戦闘に扱えれば、まさに最強の技だ。扱えれば、だけどね」

教師のように説明するティーチャーだったが、それを本職が引き継ぐ。

「分解はそれほど便利な術ではありません。なにせ分解する物質と原理をあらかじめすべて知っていなければならないのですから。判らぬまま行えば、人体に似通った物質と反応し合って自分の体が分解されるのです・・・これほど使えない技、ありませんわ」

今のティーチャーの外装は付近にあったコンクリートや木など吸収して作られている、不純物の塊だ。なにが起こるかわからない。

「そもそも分解は刻印、魔法陣などをその物質に書き込むことで発動する術、貴方の体に書いてる暇はないでしょうね」

顔を下に傾け、自分の無力さになげくローザ。そんな彼女を馬鹿

にするように笑うティーチャー。
「やはりお前たち錬金術師は無力だな。いつまでも“できないこと”に労力を費やして、副産物の結果に満足するだけのペテン師どもめ」
「それはあなたのことではないですか？」
そんな二人の会話に私は割り込む。悔しげに歯を食いしばるローザも、魚のような長い頭の裂けた口を開いて笑っていたティーチャーも、本当にこの場でなにもできない私を凝視する。
「相手に力づくで死の痛みを教え込み、相手の気持ちすら無視して喜ぶ。あなたたちこそ副産物の結果に満足してはいませんか？」
大きな黒い瞳を怒りに細めて見下すティーチャーへ、小さいながらに見上げ話す。
「そんな人がいくら何かを教えても、あなたが望んでいることを、誰かが理解してくれることはありませんよ」
「黙れッッ！！」
巨大な腕が払われ、起こる強風が体を打ち、地面へ転がり落ちる。
攻撃はまだ続き、振るわれた腕が天高く持ち上げられ、私を潰そうと振り落とされた。
「ナデシコの言う通りダ！」
アルバインが落ちてきた腕の側面を左腕の盾で殴りつけ、攻撃を反らしてくれていなければ私は死んでいた。
攻撃の凄まじさから盾は一撃で砕け、彼の左腕はボロボロになってしまったが、声にこもった感情はひたすらに強い。
「一方的に決めつけ、他者を見ない君の言葉を、誰が心の底から迎えてくれるというんダ」
「自分のためなら他者の事など歯牙にもかけない貴様ら人間がほざくなっ！！」
苛烈な攻撃は続き、体格差と攻撃の手段である武器がないアルバインはひたすらに避けることしかできない。
しかもアルバインは先ほどの傷が癒えてなく、左足は折れている

状態で足にギブス代わりにパイプで作った添え木をしている。機動力は格段に落ちているのは誰の目から見ても明らかだ。

状況は一方的。だが、それでも彼は言葉を紡ぐ。硬い鋼殻に覆われた敵に届く唯一の攻撃は、言葉だけだと判っているから。

「痛みが判る君なら!!」

「アルバインッ!」

不意打ち気味に現れた死角から拳がアルバインを襲う。ティーチャーの背から生まれた第三の腕が生え、地面を通して、向ってくる。

それをいち早く見抜いた人がそれを投げつけてくる。

アルバインは投げつけられた、白が際立つ一振りの美しい装飾が施されたロングソードで切り飛ばした。

手渡された剣がローザの作りだした武器だと一目瞭然だった。

「ローザ?」

「お扱いなさい。武器も持たずに戦う気なのでしたら返品してください」

「イヤ、ありがたく使わせてもらうヨ」

昨日までいがみ合っていた二人が背中を預けながら構えをとる。

そんなお互い歩み寄り、共闘する彼らの姿にイラつくようにティーチャーが背中と言わず体中から腕を生やし、私たちを包囲する。

アルバインは足を負傷し、満足に動けない。

ローザは五体満足だが、やはりダメージがあるのか体の動きが鈍い。それに小瓶のストックが残り少ないのか、腰のベルトに差し込んでいる小瓶の残りの数を確認している。

状況は圧倒的に不利。

そんな絶望的な状況にも関わらず、私たちには余裕が生まれ、笑みすら浮かべていられる。これが仲間と共に戦うという感覚なのかもしれない。

「ナデシコ、君は逃げろ・・・と言いたいけド」

「どこに逃げろというのかしら? 空にでも逃がします?」

「ははは、それ・・いいです・・ね?」

冗談半分に空を見上げた私。空にはどこかの放送局のヘリらしきモノと……

（とっ！？）

それを目視した瞬間に目が飛び出そうなくらい凝視する。振って湧いてきたような黒い不安が、押し寄せる。いや、確実に嫌な予感は当たると直感と一ヶ月間の経験で確信。焦りながえらも頼みのつなの二人へ懇願

「二人とも、ティーチャーを早く突き放してくださいっ！！　ここから遠くへ吹き飛ばして！！」

「え？」

「貴女、いくらなんでも・・」

その巨大さからティーチャーの重さは計りしれない。だが、やられなければ、“アレ”に殺（ヤ）られる！

「お願いしますぅっ！！　後生ですから！　アレに頼んだ私が、ゴメンなさいぃぃ！！」

ニャアアアアアア！！

「わ、わかったから、落ち着いてくれ、ナデシコ。遠くへ、つき放せばいいんだネ？」

「急に・・やめっ！？　わ、わかりましたから！　ガクガク揺らすのを止め、止めなさい！！」

溢れだす涙と鼻水と後悔とその他もろもろが入り混じった顔で詰め寄り、何とか二人を説得？　する。

「行くゾ！」

アルバインは気合いを入れ、ティーチャーへと飛び出す。

迎えるは八本まで増えた腕と拳。

一つ目が彼にアッパーを打ちこもうと、すくい上げるような軌道を取って向ってくる。それをアルバインは剣を今だ機能が回復しない右足の代りのように扱い、左へと回るように回避する。

さらに剣を即席の杖代わりに、叩きつけようとする掌のプレスを右へ飛び込むように前転し逃れ、すぐに立ち上がり、駆け走る。

始めてやったとは思えないほど巧(たく)みに剣を足にするアルバインは真正面から来る左肩から生える三発目の拳を飛んで避け、腕へと着地、そのまま腕の付け根へと一気に疾走する。

「邪魔だっ！」

「セット！！」

腕についた蠅(ハエ)を払うように別の手で腕を叩きつけるティーチャー。それを避けるために不自然な形で宙へと飛んだアルバインが文言を叫ぶのはほぼ同時だった。

「ちょこまかとウザいんだよ！！　死ね！」

「セット、ｂｌａｚｅ(ブレイズ)！」

丁度ティーチャーの眼前に飛び出し、前に見た炎の剣を上回る炎の本流を生みだす。

剣先にその炎が瞬時に集まり、巨大な火球を形成、プラズマを帯びる小さな太陽が、暗雲立ち込める世界を明るく、熱く照らす。

その火球を生みだした男の表情は間逆の冷たさを秘め、体勢の崩れた姿勢になっているという動揺やそのまま落下し死ぬという恐怖すら押さえつける驚異の集中力をもって苛烈なる技の名を感情の熱ももたずに呟く。

「キャバルリー・アーツ、“メテオ”」

暗雲たる敵を退かせるための巨大な炎の圧縮物を投げつけるべく、一閃。

向う先は、敵の面。

「グォォォォォォッォォォ！！！」

巨大な質量と熱の塊をその顔に受け、徐徐に後ろへと強引に押し出されるティーチャー。

だが、足りない。

「ぐッ」

アルバインがやはり片足だけでは無理があったのか最低限の受け身を取って地面へと落ちる。

「クズがァァァァァ！！！」

今だ着地の衝撃にしびれ動けないアルバインへと、ティーチャーの腕の一本がアルバインの胴に穴を開けようと先端を槍のように尖らせ、飛び出す。

「アルバイン！」

そんな窮地にローザが割って入る。

「弾き流せ！！」

アルバインと槍との間に割り込む形で小瓶を投げ込む。投げられた小瓶から溢れたのは水。その水が爆発的に膨張し、滝の如く流れる水のカーテンを作り出す。

水の本流を扱い、敵の攻撃をいなす術。

だが、槍の貫通力が上回る。

「あっ」

最悪の軌道からは逸れたが、ローザのベルトに引っかかる形になり、ベルトを破壊し、ソケットにあった小瓶ごと貫いた。

「ローザっ！！　前！」

メテオの火炎から這い出るように逃れたティーチャーは、自分に痛みを与えた存在へ死を与えるべく腕の槍を増やし、再度突こうとタメを行い始める。

手札である小瓶もなく、アルバインは今だ動けそうにない。

「！　間に合え！」

ローザは地面に両手をつく。

「っ！　ローザ、君ハ！」

「構成物は今主流のセメント素材。なんとか“構築”してみせます！」

「危険ダ！　よく調べてもいない素材で、錬成陣も無しジャッ！」

「信じなさい！！」

槍は迫る。

「目の前にいる私を信じなさい、アルバイン！」

不敵に、苛烈に、そして美しい笑みを浮かべる錬金術師に私も一瞬見惚れた。

だが、槍は視界１８０度全てから飛んでくる。
ローザの魔力が地面へと流れ、地面が発光を始める。
眼前に迫る。
間に合わない！
？これでまにあうだろう―
「え？」
ズドッ、と地面から巨大な棒が急激にせり上がり、槍を全て破壊し、一気にティーチャーを突き飛ばした。
その威力たるや豪快の一言で、あの巨体が百メートル以上吹き飛んだ。
相当な力だ。
「すごいです。ロー・・ザさん？」
彼女は私の方を振り返り、凄い形相で驚いている。……え、なにかしました？
が、すぐに気がつく。
彼女が見ているのは私ではない。
空？　いや方角を見ている。たしかあっちの方には……。
丁度その時、豪風が轟いた。
「「「は？」」」
私以外の全ての生命が慄いた。
その豪風の正体は、普段ではありえない速度と高度をとりながら、目的地へと一直線へと突き進む。　否、到着地へと、ティーチャーへと衝突コースをとる。
耳を塞ぎたくなるような轟音が響き渡る前に言っておこう。
「進ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃんッッッ！！！！」
私の怒りの絶叫は、豪風に、旅客約５００人以上の超大型飛行機“ジャンボジェット機”の突貫の衝撃と破砕音にかき消された。

視点変更　1

時間は少し巻き戻る。
いつもは各国の旅行者が歩み、多くの喧騒を生む空港内のロービー。
今はその面影はなく、人も避難誘導され、静寂が残るだけのだだっ広い施設だけがあった。
そんな静寂が巨大な拳と、それに張り付く黒いコートの青年により打ち抜かれた。
弾ける外壁の音、けたたましく割れるガラス片に巻き込まれて俺は、進・カーネルは床に放りだされた。
受け身も満足に取れず、背中から床へと激突する。
「ガっ！　くぉなっクソ！！　背中がっ、背中が痛ぇ！！　野郎、絶対腰痛にしてやる！！」
そんな俺の怒りの声を聞く存在はこのだだっ広いエントランスロビーにはなく、ただ遠くの方まで反響するのみ。
幾つもの壁をぶち抜きココに至る。普通の奴なら壁と拳の圧力にぺしゃんこになっていただろうが、良くも悪くも頑丈な体に感謝しつつ、あたりを見回す。
人気はなく、完全に避難誘動がなされているようだ。
この国を問わず、第三次世界大戦を経て、人々には危機対処能力が上がった。特に交通機関などの警備体制は向上し、避難誘導マニュアルの円滑で現実的なものとなり、国民の協力姿勢もよく、無駄な混乱も少ないと聞く。
「荒事が人を成長させるか・・・。まぁ、そんなことせず利口になるのが一番良いんだが・・・。チィッ、来たか！」
伸びた腕は戻ることはなく、そのままロビーを横に、俺に向かって薙ぎ払い、迫ってくる。
迫る方から逆へ誰もいないロビーを駆ける。

荒荒しい音を立て、椅子やフロアにあった全てのものを破壊しながら迫る腕の太さはご丁寧に俺の身長とほぼ同じくらい。
俺も全速力でひた走るが、あちらの方が早い。
ならやるべきことは一つ。
「フッッ！」
イザナミをフロアの床へ突き立て、剣の柄頭へ左手を支点とするため沿え、助走をつけてから地面を蹴りつけ跳躍、両足を上げ、腕の力と反動を利用して体を逆さまに引き上げる。
つまり、逆上がりだ。
目論見通り、腕は剣の刃を通りぬけ、自滅気味に腕を輪切りにされる。
腕は胴を斬られた大蛇の如く暴れまわる、だが血の噴出はない。
着地した俺から逃げるように腕は引き上げてゆく。
呆れたね。
「ったく。おかたずけくらいして行けよ、先生様よ」
辺りはある意味清潔な、何一つない空間に戻ってはいるが、新品同様だった空間は廃墟を想わせる亀裂が彼方此方（あちらこちら）にはしっていた。
（さてと・・・）
切り裂かれた腕の先っぽは置き去りにされ動く気配はない。やはり撫子の言う通り、イザナミの能力が有効のようだ。
だが。
（さて、“本当の”問題解決のために、どうするかね～？）
撫子の作戦の大変な部分は俺が引き受けてしまったが、実際どうしようかと思う。
決定的ではないが、足りないモノがあるからだ。
「う～ん、どうする・・か？」
思案を巡らすために見た景色の中に答えはあった。
いける。
たぶん。
「ヘリも、飛行機もそんなに動かし方は変わらん・・・はず」

それに一度、動かしたことがあった。経験から言うのだ、出来るはず。二年前ぐらいだったかな？　。

まぁ、その時の結果はいつか語ることもあるかもな？

視点帰還

「進いいいいいいいいいいいいいいいいいんッッッ！！！！！」

一機のジャンボジェット機が着陸用のタイヤすら出さずに、周囲の建物を巻き込みながら、巨大な化物に低空弾道飛行で突っ込む。

「なんなんですのっ！　なんなんですの！！」

金属が擦れる音と破壊音に耳を塞ぎながら、うろたえるローザ。非日常を生きる錬金術師にもこの状況には混乱するらしく、悲鳴みたいな抗議の声を上げる。

「ナデシコっ！　これってまさ・・かあァァァ！！」

アルバインはこのティーチャより大惨事を引き起こした実行犯を早くも推理したが、それなりの速度で突っ込んできた巨大物質の起こす突風には片足での踏ん張りでは足らずに、風に押され、地面を転がってゆく。

そして、標的へと着弾。

巨大なモノ同士がぶつかり合う音が唸りを上げる。ティーチャーにとってもこの“攻撃”は予想外だったらしく、向ってくる飛行機を真正面から受け止めるしかない。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！！」

まともに受けたティーチャーは二人の攻撃の数倍の威力を受け、地面を深く削る音を立てながら後へと押し返される。

それでも懸命に手で受け止め、破壊しようと押し潰してゆく。

ひしゃげてゆく飛行機が、ティーチャーの巨体を数百メートル押したところで火を吹き出す。
燃えるその姿はまさに不死鳥（フェニックス）。だが、
「ォォォガガア！！！」
死の塊を砕くことかなわず、小規模の爆発を上げ停止した。
炎を纏い、鎮座するティーチャーは高らかに咆哮を上げる。
「アレでも、だめですの！？」
「・・・・・」
（いや、たぶん・・・）
見ている二人は状況に悔しげだが、私としてはこれで終わりと到底思えない。
だって、彼。
「いっちど！！！　やって、みたかったんだよ！！」
だって彼、自分でやり返す性格なんだもの……。
やはり遥か上空から、進・カーネルが高速の速度で落下してくる。
「オラァァッ！　落ちろォォ！！」
大人も子供も大好きな、仮面のバイク乗りが得意とするような渾身の蹴りがティーチャーに突き刺さる。

視点変更２

「なん・・なのよ・・アレ！？」
テレビでの面の皮すら忘れる衝撃に、美人リポーター花園　蜜柑（みかん）は自然と呟いてしまう。
（ひ、飛行機が化物に突っ込んだ！？　どこの映画撮影よ！？）
威力の高いクラスター爆弾や、高性能のミサイルなんかが打ち込まれるのならわかる（わかるか！！）。飛行機を特攻兵器に使うなんて自衛隊の考え方ではない。ましてや報復を目的とするテロリス

トが化物相手にこんなことするはずもない。
（なんなのよ！　これってテロなんかじゃない！　もっと別の・・・！）
ダンっと靴底が足場を踏む音と、揺れるヘリが私の思考を一旦止めるのと同時に私の首筋に黒い何かが突き付けられた。
「ヒィィっ！！」
反対側で下の光景を撮影していたカメラマンの大きなカメラが銃弾で破壊され、私の背後から腕が伸びパイロットの背後から白色の拳銃を突き付け、私の首筋に押しつけつつ、カメラマンの首にも突き付けられているのを見ても、それが大きな黒い剣だと理解するまで数秒を要した。
「動かず、振り向くな」
若い男性の声が真後ろから聞こえた。普段なら若さが残る声になど動じたりせず、声をかけることができるのだろう。でも、その声を聞いた瞬間理解する。
逆らったら本当に首を切られて殺される。そんな現実的な殺意が込められた声だった。
「パイロット。頼む、あの化物の真上まで行ってくれ」
「・・・あいよ」
我が社お抱えのベテランパイロット、副島（そえじま）　源次郎（げんじろう）、通称ゲンさんはなんの動揺もみせずに渋い声で応えると、言われた通りに化物がジェット機に押された場所まで飛行してゆく。
「ここでいいのか？」
「ああ、だけど悪い。財布を忘れた。ツケでいいか？」
「いや、サービスでいい」
「・・・恩にきる」
ガラっ、とドアをスライドする音が鳴るの聞き、振り返る。だが、そこには誰もいない。この高さを落ちていったの！？
「帰るぞ、譲ちゃんたち」
死の恐怖と驚きに今だヘタリ込む私たちをしり目に、ゲンさんは

普段どうりクールにヘリを旋回、局へと戻るコースをとりはじめる。
「ゲ、ゲンさん!!　なんで!?」
「なんでも何もねぇよ。カメラがぶっ壊されたなら、やることあるかい?」
「でも!」
「ありゃ、ソドムの人間だな」
「え?」
「あんなバカでかい剣に、デザートイーグル。そんでもって、あの気当て。あの常識外れの街の住人以外にあんなメルヘンなもん使う奴はいねぇよ。あんまり関わらねぇのが得策なのさ、だから譲ちゃん達も好奇心出さねぇことだな」
ヘリは徐徐に羽田空港から遠ざかる。その背後では何度も何度も爆音が響いてくる。達観したゲンさんはもちろん、カメラマンは怯えて振り返らない。
だけど、私だけは後を見つめ続ける。
(・・・ソドム)
不思議な感覚に囚われ、目を放すことができない自分がいた。

視点変更2

一目見たときから、“我々は”、こいつの事から目を離せなくなった。
「いっちど!!!　やって、みたかったんだよ!!」
未だ暗雲渦巻く空から奴が落下してくるのを視認した。
普通の人間ならば、その速度で地面に叩きつけられれば死ぬどころではすまない。だが、奴の顔には狂気に近い笑みしか浮かんでない。
そんな男の高速の落下助力を得た蹴りが僕らの腹部へと叩き込ま

れる。
「シン・カーネルぅ！！！」
「オラァァっ！　沈めェェェ！！」
私たちの外装を易々と陥没、破壊した圧力はとまらず、根を築いていた地面へと押し込んでゆく。地面の耐久力は限界を超え、破壊、地面に大きな穴を開けた。
もともとこの周囲の地面は何層もの地下空間になっており、普通の地盤より緩いものだったかもしれない。だが、耐久力を考えれば普通の何倍もの設計思想で作られていたはずだ。
その常識を、この我々以上の化け者は貫く。
ズドンッ、と一気に階層を突き抜け、地面の牢獄へと囚われる。
蹴りの直撃を受けた部分は衝撃に粉砕され、消滅した。だが、本体は無事だ。それさえ、無事ならどうとでも・・・
「フハッハハハハハッ、無様だなぁ。先生様よぉぉ！」
そんな安易な考えをぶち壊す男がまさに眼前で喜悦に笑い、黒い剣を私たちの体に叩きつける。
何層にも作り、衝撃を吸収する理論すら無視して、ごっそりと名前で言えば胸部をえぐりとった。
剣の表現にあるまじき砕くという斬撃を狂ったように振るい続ける姿はまさに悪鬼。
「ソラ、そら、ソラ、そらっ！！　腰痛になれ！　テメェにも足にしびれが走る苦しみを教えてやるよぉぉぉ！！」
ドン、ドン、ゾォン！　とでかい杭が叩き込まれているかのような衝撃が体を襲う。この瞬間、私に痛覚がないことをこれほどまでに喜んだことはない。だが、俺たちにある感情が走る。
恐怖だ。
こいつは何だ、何なんだという自問が我らを巡る。この爛爛と光る紅い目をした存在は、人間なのか！？
それから幾度も罵声を浴びせるてくるが、ほとんど耳に入ってこない。こいつから逃れたい、という万恐怖の感情に支配されている

からだ。
「ホォラ！　おまけで、こいつも喰らっとけ！！」
我らの外甲と同質の破片を、殴りつけるように体に突っ込むと、剣の攻撃を止め、殴りつけ始める。拳を血で染めながらなおも殴り続ける男は、笑う。
剣の攻撃にも匹敵する威力の拳を何度も何度も、愉快そうに笑いながら、高らかに狂喜しながら殴りつけてくる、こいつは何だ！！！
「離れろぉおおっ！！！　化物ぉお！！！」
我ら、万の上擦った叫びを上げ、目の前で攻撃してくる存在を腹部から生みだした腕で突き飛ばす。
地面を貫通し、外の世界に吹き飛ばされていった男。普通なら死んでいるはずだ。だが、死んではいないだろう、私を殺すまで奴は、私を、私たちを！！
一目みた時から、撫子に痛みを教えたかったと彼女に言った。それはどんな人間を見ても少なからずその感情は変わらない。だが、あれだけには。奴だけには関わることもイヤだった。
だから、奴を撫子か離れるように仕向け、奴の居ぬ間に撫子を殺したかった。
逃げたかった。アレから。
アレは何だ、何だ、何だ、ナンナンダ！！
奴から身を守るために、機動力を削いでまで硬牢な鎧を作った。
だが、奴にはまるで通じないではないかっ！！。
やらなければ、殺さなければ、我々が殺される。そんな感情だけが暴走する。
何層もの地下を貫通した縦穴から出るべく、手を上へと伸ばす。
地面から這い出ると、やはり数十メートル先に奴がいる。
紅い目をした存在が、魔王が不敵に立っていた。
「さぁ、出てこいよ。俺のモノに手を出したことを後悔させてやる」
一目見たときから、目が離せない。目を離した瞬間、殺される。

その恐怖が我々を目を縛る。
だからこそ、奴を始末しなければならない。
そうしなければ、恐怖で誰にも死を教えられない。

視点帰還３

「突然なのですけど、アレは本当に人間ですの？」
「アレは魔王がいたらあんな奴です」
ティーチャーの巨体が沈んだ地点へとゆっくりと近づく私たち。
近づくに連れ、聞こえてくるのは地面を揺らすほどの轟音と、
「これは俺が受けた痛みの分、ついでに俺の、俺の、俺のぉおぉっ！！」
という自己中心的な攻撃を繰り返す進の怒りの咆哮が大穴から聞こえてくる。
「・・・もういいですわ」
呆れ果てたように、冗談で流されたと思ったらしいローザは追及を止め、穴の方向を見る。
その瞬間、地面から何かが飛び出してきた。
「進っ！？」
飛びだしてきたのは、まぎれもなく進・カーネルだった。斜めに飛び出した進はそのまま直線上のビルに激突、ビルを瓦礫と粉塵に変え、そのまま落下。さらに共に落ちてきた瓦礫の下敷きとなった。
「・・・・」
皆、絶句。
「ぶぅらぁぁ！」
皆、驚愕。
普通の人間なら即死なのに、ケロっと瓦礫を蹴り飛ばし、立ちあがった進は驚愕と疑惑の視線をまるで気にせず、大穴を睨む。・・・

その際、進は何か言った気がしたが、唸る音のせいで聞こえなかった。

大穴から何かが出でる音と唸り声に緊張が走る。

しかし、姿を現したは見るも無残なモノだった。

圧倒的な存在感を誇っていた巨大な体は幾つもの亀裂と破壊痕、腕は全てえぐりとられ、胸部には殴られた後が痛々しく残る。

進の攻撃のむごさを物語っていたが、すべては無駄だ。

すぐに巻き戻しの映像のように元に戻っていく。

地面やコンクリートなどを吸収し、ティーチャーはその巨大な体を始めの形に元どうりにできる。この地にいる限り、彼らは無限に等しい体を得ているのだ。

「フハハハハっ!!　見たか、進・カーネルっ!!　キサマがどんなに俺たちの体を砕こうと関係ない。私たちの鎧は崩れない、いくら壊れようと、関係ぇねぇぇっぇぇっぇっんんだよぉぉぉぉ!!!!」

勝ち誇ったかのように、怖い者が怖くないとわめく子供のように威嚇(いかく)するティーチャーに、進はたしなめる様に笑って宣言する。

「なら、その鎧を剥がすまでだ」

進の宣言に応えるようにローザがティーチャへと掌をかざす。それを見た彼は笑いだした。

「何がおかしいのかしら?」

「当たり前だ。この後に及んで“分解”だと!?　お前は馬鹿なのか?　本当の馬鹿なのか!?」

たしかに分解はその構築物が何で出来ているのか知っていなければ満足に機能しない技だ。そして数多の物体を取り込んだティーチャーの鎧は個体ではなく複合体として存在する。どれか一つを分解したとしても他の物質が残るだけだ。それをまた分解している暇はローザにはないだろう。

だが、

「分解?　何を言ってますの?」

「何？」
「私は、貴方と同じ事をするだけですわ」
その瞬間、ティーチャーの鎧から一本の柱が貫くように生えた。
「なぁっ！！？」
次に、胴の半ばが溶け落ち、腕が爆発を上げて炭化した。
「貴方が私の武器を破壊した時、あれを見たときは分解だと思ってしまった。でも、違いますわね。あなたが行ったのは」
魚のように長い頭を立ち割るように氷が噴き出す。
「錬成」
背中からドロドロに溶けた鉄が流れ出し、周囲を溶かす。
「俺たちの、私たちの体がぁ、体がぁぁぁぁっ！！」
「あの分解だと思い込まされていた行為は錬成。私の武器に触った瞬間に、肉体の一部でも打ちこみ、それを触媒に不純物を錬成した。個体の許容量が少ない錬成物質の許容範囲を大幅に超えさせ、自己崩壊を疑似的に引き起こしていましたのね。錬金術の基本など言われた時に気がつくべきでしたわ」
ナゾナゾの回答を応えるローザの声に対し、先生は聞く耳を持てない。己を守る体を失う恐怖にか、はたまた自慢していた手品を生徒にばらされた羞恥故か。
「今、私は貴方の体の中に錬成をしているのですわ」
「触媒は！？　錬成陣は！？　触媒が無ければ、できないはずだ！！」
「触媒は入れましたわよ、カーネルが」
「！！？　あの時！」
どの時だったのかは私にはわからないが、たぶん進はある瓦礫をティーチャーの体に打ち込んだはずなのだ。
私はあらかじめティーチャーがこちらの作戦を見抜こうとしている事を考慮して、作戦内容を視覚に頼った。言葉にして話しながら、並行で持っていたボールペンとメモ帳に本当の作戦をみんなに伝えていたのだ。

もともと学校に行こうとしていたのだ、文房具くらい持ってきている。

問題は二つ。それは同じだ。しかし、内容が異なる。

一つは、ティーチャーの鎧を砕き、彼がすぐさま周囲の物質を取り込み、再生するほどの強大な攻撃力が必要と言うことだった。これは進に頼んだが、予想以上の大きな被害を出して、成功した。

これはティーチャーの中へとローザの触媒を紛れ込ませるためのものだった。最初は、分解の術式を刻んだ何かを入れてもらう予定だったが、提案した際にはティーチャーの手品の種を見抜いていたローザにより作戦が変更された。

落ちていた掌サイズの建物の破片に、ローザの小瓶の中身を大量に含ませ、彼の岩の鎧に似た物質に作り直し、バレないように岩の鎧と同化させる。

「作り手と作られたモノの関係を利用して、共鳴に似た共振起こす私には、術式の遠隔多起動など、造作もありませんわ。ま、お偉い先生なら出来るのでしょうけど～。オホホホホ！」

勝ち誇るように、せせら笑うローザ。本当はすごい事らしい。隣のアルバインのジト目が、イヤ無理だろ、と語っている。

徐々に崩れていくティーチャーの体にして、鎧。瓦解（がかい）するように崩れる中にきらりと光るモノが現れる。

それは、短剣（ナイフ）。心臓のように脈を打つ、分厚いナイフが巨大な体の内側にあった。腹部とも取れる中央、一番分厚い部分にそれは厳重に保管されていた。

もうひとつの問題が発生する。それは本体を見つけてから、すぐさま修復されてしまうことだ。

その問題のか解決案は彼に頼んだ。

「アルバインさん！」

「待ちくたびれタッ！」

アルバインが右手を左肩の先へと延ばされ、何もない虚空を握りしめ、“引き抜く”。

引き抜かれたのは、剣先がなく、丸みを帯びた違和感ある剣。
ローザが回収した魔本。その中に収められていた魔剣である。それをアルバインの魔術の一つである、空間魔術にあらかじめ収めておいたのだ。
アルバインは騎士の中でも世界各地へ赴き、行動する巡回騎士。さまざまな場所へ赴く彼らに必要なのが武器の携帯法だ。騎士がいることが普通だった中世ではあるまいし、武器を堂々と携帯していては誤解を生むことは間違いない。
そんな彼らが生みだした魔術、自分の周囲に歪ませた空間をつくり、そこを見えない収納場所にする空間魔術“ポシェット”である。大きさは個人差があり、アルバインは剣を一本しまうのが精いっぱいらしい。
そこにアルバインが追っていたと思っていた魔剣を、名も知らぬエクスキューショナーズ・ソードを納めさせてもらったのだ、切り札として。
干渉した物質の動きを止める能力。それは今だ瓦解し続けるティーチャーの体は無機物であり動きを止めることは可能だ。
そして、あの驚異的な外甲の修復を止めることだろう。
「それはっ!?」
「イケ！　影ヨッ！」
突き出す様に構えた剣から影が生まれ、ティーチャーの巨体へと奔る。
影がティーチャーを縛るのが先か、ティーチャーが影が付く前に自身の本体への道を塞ぐか。
早かったのは……
「舐めェるな!!　人間!」
ティーチャーだった。剣を中心に岩が集まり始める。
（間に合わない！）
「人間を舐めるなアァッ!!」
だが、人間は諦めない。

剣を握る柄を血が滲みでるほど握りしめ、意思と魔力を剣へと流し込む。

意思を受け取った影は未だ完全にふさがらない小さな隙間へと入り、こじ開けるようにティーチャー本体へと穴を開け、道を、影を織り重ねてトンネルを穿つ。

断頭には台が必要、ギロチンとしての役目も負っていた魔剣はまさに、剣の形をした処刑という行為そのもの。相手を固定するだけでなく、どこでも役目が果たせるように相手を好きなところへ運び、動かす能力があっても不思議ではない。

「っ！　ゲェハッ！」

アルバインが赤黒色の血反吐を吐く。やはり能力の範疇（はんちゅう）を超えていたのか、アルバインの全身の血管と内臓がダメージを負った。でも、汗の代りに血を滲ませる彼の眼は光を失ってはいない。

なにせトンネルの先に勝機（ひかり）が見えているのだから。

「ローザ！　シン！！」

「おうよ！」

進が跳ぶ。普通の人間でも跳べるほどの高さで。

ローザは手を再び地面へと着け、魔力を奔らせる。斜めに飛び出したのは素朴な円柱。

アルバインが苦痛に顔をゆがめながらも、影を一つ出し、柱の上に乗った進を固定する。

ティーチャーへ私たちとの距離は数十メートル。時間を争うのだ、最速最短コースはこれしかない。だが、穴の直径はさほど大きくない。速度が加わった状態で穴の周囲へとぶつかれば……

「もし失敗したら、怪我では済みませんわよ」

「信じてるさ」

力強い笑みと断言にローザは目を開く。

「ローザ」

「ッッッ～！！　とっとと、お行きなさい！」

顔を真っ赤にしながら、さらに多く魔力を流し、柱を斜めに“発

射”する。
大砲の一撃のような速度で伸びる柱の向う先は、ティーチャーの心臓部にして、本体である短剣。
そこまではイイ。そこからが問題だ。
アルバインが進を影で縛りブレが出ないようにしたが、アルバインが全身全霊をかけて開けたトンネルの大きさは人がギリギリ入れる大きさ程度しかない。ローザの狙いが外れれば入口付近で激突して自滅。もしくは穴の内部で潰されることも大いに考えうる。
緊張と慎重が入り混じる中で、進はローザを信じた。アルバインが穴を維持すると信じた。あのチームワークの欠片もない者たちが生みだす奇跡の道を進は剣を前に突き出し、
“穴”へと消える。
ズドォォッン！　と何かがティーチャーの背後から突き出るのはほぼ同時。
突き出た者は、地面を抉りながら着地する。
手に持つ大きな黒い剣を振り上げ、こびり付いていたモノを乱雑に払い、背に戻す。
なぜ、そんな光景が見えたかって？
それは、ティーチャーの腹部に穴が貫通し、向こう側が見えるためだ
そして、穴の中央には、砕け散ってゆくソレが、短剣があった。
「後悔しただろ、なぁ？　先生」
返す言葉なく、ガラガラと音を立てて崩れる巨体。
多くのモノを取り入れた存在が崩れ落ち、次第にちいさな小山を作ってゆく。
その最中の瓦礫同士がぶつかる悲鳴（おと）がなり響く。それは人間への怨嗟の声のようであった。
山のように積み上がったそれは。
それはまさに、古い日本の墓地（古墳）の様であった。

勝てた。
勝ったのだ。
だが、
（素直に、喜べないナ・・・）
僕は正直、にがい気持ちでいっぱいだった。
人の業により生まれた憎しみと復讐の兵器（塊）。それを討ったことは褒められたものであろうが、良い気持ちはしない。
ガリガリと音を立てながら、ティーチャーと自称した存在の亡骸を踏みしめてゆく。
そうして瓦礫の一番上を目指す。
何故？　それは……。
「よ・・・よく、来たたたななな、人間ｄも」
言語機能が壊れたためか、紡いだ言葉が崩れている。
声の主が、剣身の半ばを砕かれた短剣が迎えた。合成型調律魔導兵器、ティーチャーと自称した存在がいた。
「まだ、生きていたノカ」
呆れかえるほどの生命力に僕は疲れ気味につぶやく。
「なにしににににに北。とどめを刺しにきたか？　自己満足のｔめに憐れみにきたか、ぶざまな綿ｓｈをおおおおおおあざわらうんだろ」
ここにきての挑発。僕を含めた三人の顔が曇る。
「それでいいいい……。お前らニンゲンは、そうでなくては。自分の保身のためにいき、じぶんの意思に沿わなければ嫌い、なかまを欲し、ちからを合わせて、集団で弾圧する。それがどれだけみにくいかしらず、こたえらなければ、みずをえたようにげんきにあわれに泳ぐ。そんあ存在でいいのだ。みにくいな、みにくいな、みに

くいな、アフフヒャｙヒャヒャ。そんなみにくさを他人を傷つけて、あわれんで、おこって、じぶんをきれいにとりつくろうただの・・・。？　う、う、なんだこれ、雨？」

三人の顔を曇らせたのは、別にティーチャーの言葉を受けてではない。

「い、いややややや、違う。すこしのたんぱく質、食塩、リン酸塩・・・ｋれ、涙？」

跪き、ティーチャーの残骸を手にとり、目から大粒の涙を流す撫子を見たからだ。

それを憎しみの塊は理解でいない。僕も少なからず理解ができない。だってナデシコ、君は彼らに殺されかけたんだぞ？

「・・・なんで、ななんで泣く？　みにくい私たちを憐れんで？　かわそうな僕らを見て自己満足のために泣いたふりか？　かわいそうと感じて心を潤すためか？」

それでも無言で涙を流しつづける撫子。

言葉はない、少しの嗚咽だけが彼女の口からもれだす。そんな彼女のことが分からないティーチャーはうろたえたが、すぐに答えに行き着く。

「・・・撫子、ももしかして君は僕らのために泣いてくれているのか？　僕らが生みだされことも、こうして消えることも」

ティーチャーの短剣は徐々に消えてゆく、進の武器の能力が本当なら、あの一撃で万もの魔物を繋げていた因子が消えて大量の死体の塊に変わるはずだが、空気に溶けるように消えてゆく。

そういえば、何でティーチャーはナデシコを狙ったんだ？

「涙を流す。感情の高ぶり、脳内が生みだす反応に付随する現象。それだけだと・ｔｐとと思ってｔ」

「ごめんなざい」

「・・・君が・・あや・・まっても・・しょうがない」

別にナデシコは普通の人間だ。容姿は跳びぬけているとしても魔力も作れない存在だ。狙う価値はなかったはずだ。狙われていたの

は大半が魔力適性が少なからずあった者たちであった。なのになぜ、彼女をティーチャーは標的にしたのだろう?

消える速度は緩やかだが、遂に柄も消え、刃の欠片だけになる。

「不思議だ。何十人もの知識を得ても、学ぶものがあるとは・・・」

あの憎しみの塊の声が徐々に朗(ほが)らかになってゆく。

(そうか、ティーチャー・・・君ハ」

「・・・これが・・本当の謝罪の言葉と、いうものか・・・なるほど」

刃が遂にすべて虚空へと消える。最後の言葉は。

「・・・ありがとう、撫子」

(ティーチャー、君は変えてほしかったんだネ)

数多の憎しみに囚われ、死を教えることに縛られ、永劫に人を憎み死体を増やすことしかできない存在である自分を救ってほしかったのだ。

ナデシコは関わった人の内側を変えてくれる不思議な力があるのかもしれない。それを直感で感じ取り彼女に“救い”を求めたのではないだろうか? もしくはそんな自分たちを受け入れてほしかったのかもしれない。

現に、彼女の内側(こころ)からの涙を受けて、彼らは救われたように消えていった。

人を怨むこともなく、本当に彼らの境遇と最後を悲しみ、泣いてくれた彼女に感謝し消えていったのだ。

(ナデシコ、君は凄いナ。剣を振っても傷つけるばかりで、ほとんど救えない僕らよりも・・・)

光が差し込む。雲の隙間から覗く光の道は、天への架け橋のようではないか。

無意識に、胸で十字をきる。

願わくば、救われた亡霊たちに安息を、と。

光は、未だに涙を流す少女へと降り注ぐ。まさに天も彼女の偉業

を称えるように。

次話へ

6、内側からの涙（後書き）

未だ自分の文章に物足らなさを感じる今日この頃。二話は次でラストです。

こんな文章を見てくれた方々に感謝を。

7、一物孕んで、世界は回る

7、一物孕んで、世界は回る

「のっぉぉぉぉおっ！！　何ということだぁぁぁぁッッ！！？」

悲鳴のような男の絶叫が静けさが満ちる羽田に轟く。

ティーチャーがこの世から消え去り、五分しか経っていないため涙が止まらなかった私ですら、その心の底からの絶叫にビクっと驚き、涙を止めた。

私と進、アルバイン、ローザの三人はティーチャーの残骸の小山のてっぺんにおり、辺りを一望できるので、声のした方向を見ればすぐにその正体が確認できた。

逃げ遅れたのか、はたまた惨事の終わりを見計らって戻ってきたのかは定かではないが、空港に一番近い地下街の入口から数人の姿が見える。皆が皆、仕立ての良さそうなスーツを着た人たちだ。

その中の二人に、私は見憶えがあった。

「大臣、お気を確かに！」

「区長ぉぉ！！　これが落ち着いて居られると言うのかねぇぇ！！」

大臣と呼ばれた老人は、腰が折れ、杖をついた腕をプルプルさせながら、さらに怒りに震えている。

区長と呼ばれた初老の男性は、老人に落ち付けといいつつも顔を真っ赤にさせ歯を食いしばっている。

それもそのはず。この二人は三次世界大戦で破壊されたつくし放棄されかけた羽田空港復興に尽力した二人。

前者が現国土交通大臣、後者が大田区区長である。

この二人とは、まだ私が吸血鬼の元で上流階級の娘を演じていた時に幾度か出会い、軽い会話を交わしていた。

その際に、国が破壊し尽くされた空港の移転を計画している際に、区長から大臣へと話を通し、計画を中止させ、再建への長い道のりを、細かく聞かせてもらっていた。その時の彼らの表情は苦難とそれを乗り越え、辿りついた勝利への執念が入り混じった表情を今でも覚えている。

私が何を言いたいかって？　それは……

「“私たちの”羽田空港を目茶苦茶にされて、私が怒ってないわけないでしょう！！」

「そうだともおぉぉ！　首謀者にはきっちりと物理的な制裁が必要じゃァァァッ！！」

二人で怒りをクロっシングさせ、なぜか上半身の服を脱ぎ捨て、何処からともなく取り出したアサルトライフルを装備。

そんな彼らにとって羽田空港は息子同然。街を愛しているのだ。

そして、なにより彼らの趣味はサバイバルゲームである。

完全に封鎖されていたこの羽田空港にいるだけでただちに犯人扱いされる危険性が私たちには大いにある。特にさり気なく小山の影に隠れた私の背後にいるはずの三人は怪すぎるほどにボロボロかつ武器装備状態なのだ！

さらにいえば、ティーチャー以上に街をめちゃくちゃにしたのは何を隠そう、背後にいる魔王みたいなやつである。

「し、進！　見つかったら八つ裂きにされま・・すよ。・・・進？」

できるだけ声を抑え、議員たちがＳＰ達を率いて、探索部隊を編成し始めたのを見て戦慄し、背後の進へと声をかけたが、返事がない。

「進？」

不自然に感じ、背後を振り返れば、そこに彼らがいるはずなのに……

いない。
進だけではない。
三人とも、いない。
ナッシング。
（えっ！　なっ、ちょっと！！）
目を凝らせば、遠くの方にはあいつ等がいた。それぞれ別々の方向へ常人離れしたスピードで猛烈に逃亡しているではないか！！
血も涙も情も一切ない奴らに向かって、嘆きながら叫ばずにはいられなかった。
「ひどいっ！！？　一声かけてくれてもいいじゃないですかっ！！」
「おいぃぃ！　あっちの方から声がしたぞいぃぃ！」
見つかった。思わず声に出たことが裏目に出た。に、逃げなければ！
「なんか女の声だったぞい！」
「近頃、一文無しになって苦労していそうな不幸な匂いがぷんぷんしますね」
「おまけに、普通の生活になれなくて失敗ばっかりで、ポンコツとかいわれてそうじゃぃぃ！」
なんで、そんなこと判るんだ！　と心の中にツッコミを入れつつ、逃げ出す私。
とりあえず、言っておこうと思う。というか、この頃それしか言っていない気がする。
「進の馬鹿ァァァァァァァァァァァァッ！！！」

視点経過

「うっ、ううううう。もう嫌だ、もうヤダ。こんな生活・・・」

机を枕代わりに寝たふりをしながら嘆く私は、昨日の羽田空港からの脱出からやっとこさ無事帰還した。そして、今学校にいる。

つまり、学校に直接来たのだ。

なにせ、あの後はひどかった。

迫る追っ手からダンボールと、音のブラフを扱いながら時に隠れ、時に欺、ついに羽田空港圏から脱出することは出来た。だが、帰り道は判らず、電車は止まっており、かつ自衛隊の封鎖をかいくぐりながら、とぼとぼ歩いて家を目指したが迷って、疲れきって寝ていたら見知らぬ男性に襲われかけ、決死に逃げ出し、また迷い。やっと見つけた交番で帰り方を聞いたら、バスがすでになく、おまわりさんが送ってくれるという優しさに感謝したが、家があるのソドムだし、普通入れないし、逃げるように交番から飛びだしたら、さらに迷い。努力と根性とで粘ったら偶然、学校についたが時すでに朝の六時だった……。

「足が痛いよぉ。腕も疲れたよぉぉぉ。なにより心が折れそうだよぉぉ」

早番だった保健室の先生が、ボロボロの私に部活棟のシャワー室と洗濯機を使わせてくれたおかげで清潔感と女のプライドは死守されたが、体と心はボロボロだった。

「撫子、今日はやけに早い登校だな」

「撫子ちゃん。なんか白くなってる・・・」

そんな私を心配そうに声をかけてくれる友達がいることが幸せだった。

「大丈夫だよ。優子ちゃん、智子ちゃん」

ほろりと泣きかけたが心を保つ。だが、心やさしい友人の気遣いに心が潤い、元気が出た。

これ以上何が、衝撃的なことが起きない限り、私の心は折れたりしない。

ガラリ、と勢いよく教室のドアが開けられる、これはクラスの担任の先生が来たときの合図でもある。

いつもハキハキとしている体育教師なのだが、今日は少し困惑しているように見える。
「みんな揃ってるな。出席を確認する前に、緊急過ぎるんだが・・・転校生を紹介する。入ってくれ」
先生の言葉とともに、現れたのは白金色（プラチナ）の緩めのウェーブがかかった美しすぎる長い髪とその美しさに相応しい美貌を身に宿す女性が私と同じ制服を纏って、現れた。
「今日から皆さんと同じ学び舎に通うことになりました、ローザ・E（エン）・レーリスと申（もう）します。よろしくお願い致しますわ」
芸術にも等しい美少女に男子と女子はポカーンとなっていたが、すぐさま一気に喝采。
男子は、壮絶に喜び。
女子は、嫉妬するか、ときめきに目を輝かせた。
私は。
「先生？　あの子、座ったまま気絶していますわよ」
心が折れるどころか、砕けた。

「どういうつもりですか！！？」
「どうもこうも・・・私、学生ですけれど？」
転校そうそうに、注目の的となったローザは引っ張りだこ。昼休みになりようやく人気の少ない屋上にやっと連れ出すことができ、ようやく話しを聞く事ができた。
「事件も終わったじゃないですか？　どうして帰らないんですか？」
「そんなに帰ってほしんですの？　前はあんなに引き止めたくせに」
「えっ！　あ、いや。そうですけど・・・。目的を知りたいんです！」
「調べるためですわ」

それまで困惑顔で話を聞いてたローザの顔が急に芯を得た。ビルが荘厳と並び立つ東京を見渡せるこの高校の名物場所。見るべき場所はいろいろあるが、彼女が見たのは封鎖された地区の方。

「何を・・・ですか?」

恐る恐る聞きだそうとするが彼女は困った様に笑うだけで何も答えてくれず、チャイムが鳴る時間が迫ったため二人で無言で教室へ戻る。

そんな私たちをクラスメイトが迎えてくれたが、みんな何故かそわそわしていた。

「どうかしましたか? 皆さん」

「え~と、さ・・・撫子?」

「何ですか、智子ちゃん?」

「ローザさんって日本語、変だよね?」

・・・なんですと?

本人に聞こえないように、声を小さく私に尋ねてくる友人の問いに答えてあげたいが。

「・・・たしかに」

この時代に、ですわ、かしら~、などのお嬢様言葉を使う人はひどく珍しい。いや、いない気がする。

でも、どうする。あなたの日本語、変ですと言うのは変だ。いや、大変失礼だ。

クラス全員の眼差しが私に向けられる。人柱に選ばれたのは、私か・・・

でも、私も気になっていたのは事実だ。

「・・・ローザさん?」

「ローザ、でいいですわよ」

好奇心が勝った結果、直接聞くことにした。今聞かないと、夜寝れない気がしたからだ。

「・・・ローザは・・・自分の日本語を・・・どう、思いますか?」

直接尋ねるのは失礼かと思い、少し遠まわしに尋ねてみる。
すると、ローザの動きが
（（（とっ、止まったぁぁぁ））））
次の授業を受けるためのノートを取り出そうとしていたローザの動きがピタリと止まった。
訪れる沈黙、静寂に染まる教室、時の流れが、延長する感覚が我々に訪れる。
・・・・・
「ち・・・い・・したの」
・・・・・え？
「・・・違います・・・の？　私のような女性は、こういう喋り方が・・・日本では・・普通ではありませんの？」
声を途切れ、途切れに耳まで真っ赤になったローザが恐る恐る脂汗を垂らしながら、逆に我々に尋ね、カバンから、数冊の本を取り出す。
それは何年も前に流行った女子テニス漫画や、魔法を題材にしたライトノベル等々であった。いずれも高貴そうな金髪の女性（縦ロールの髪型）がでてくるモノばかりだった。
「そ、その・・・日本人の知人もいませんでしたし、情報も少なくて、現地に合った言語をレクチャーするにはこれが一番の友人に勧められて・・・。や、やぱり変ですの!?　そうですのね！　なに晴れやかな顔をしていますの!?　ねぇ、なにか言ってくださいまし！　ねぇ!!?」
午後の優しい風と、陽気に照らされる教室には、遠くを見るように朗らかな気持ちになったクラス一同とそんなクラスメイトたちの仲間入りを果たした少女の悲痛な叫びが聞こえてくる。
「あああっ!!　言葉使いを慣れてしまって、直せませんわぁぁぁ!?」
今日も、平和だ。

「もうっ！　散々な一日でしたわ！」
「・・・まあ、間違いがわかって、よかったじゃないですか？」
時はすでに夕暮れ時。もうすぐ夏の到来を予感させる淡い風が頬をなでる。
ローザの登校初日は成功と言えた。初めは彼女の外見等を気にしていたクラスメイトたちも彼女の天然気味なところ？　に親近感を感じたのかすぐに打ち解け合うことができていた。これならすぐに受け入れられるだろう・・・プチ村八分を受けていた私の時とは大違いだ。
「・・・自棄（やけ）ですわ、もうこのしゃべり方を貫き通します！」
「別にいいんじゃないでしょうか・・・」
拳をぎゅっと握りしめ、前を向いて後ろ向きな決断をするローザと苦笑いで彼女のお嬢様口調が以外と似合っている気がしていた私は共に帰路を歩いている。
同じ道を歩いているのは、彼女と帰るべき場所が一緒だからだ。
（まさか、進も了解しているとは・・・）
そう。彼女は日本に残ると決め、本拠地と決めたのは進の事務所。つまり私と同じ場所である。いきなりだが同居人が増えたことは、まぁ、嬉しいが・・・
「しかし、少し男性と同じ屋根の下で寝食を共にするような気がしていて不安でしたが、同姓の貴方がいて下さるなら、安心ですわね。・・・まぁ、カーネルなら別に、その、求められても・・・べ、べつに」
最後の方の言葉が小声で聞き取りずらく、何を言っていたのか聞こえなかったが、頬染めながら指を絡ませモジモジするローザに、急に不安を覚えた。
胸のところがもやもやするようなこの感覚はなんだろう？
「そういえば、アルバインさんはどうするんでしょう？」
「知りませんわよ。でも、彼はフリーの私とは違って、純粋な騎士団所属の騎士ですもの。そんな勝手は許されないでしょう？　そ

れに彼は巡礼騎士、それなりの地位なのですから」
「それなりの地位って・・・やっぱりアルバインさんってすごい人なんですか？」
彼は始めは任務で来たといっていた。
「凄いも何も、彼・・」
そうこうしている内に、事務所の前までたどり着いていた。ドアノブを引いて中へとはいる。
「あ、お帰りなさイ」
ふつうにアルバインがいた。
それもかなり馴染んでいて、白いシャツと黒色のズボンの上にエプロンなどして、はたきを手に持ち、部屋の掃除などしている。
とても慣れた手つきでパタパタと部屋の隅を叩（ハタ）く姿が様になり過ぎて私たちは玄関の前で立ちつくすしかなかった。
「どうしたんだイ？　ふたりとも」
「え？　あ、あの・・・お、お掃除は私の仕事です」
「違うでしょう」
混乱のあまりツッコミどころを間違える私に容赦のないローザの軽めの手刀（ツッコミ）が頭に落ちてきた。
「どうして、貴方はまだココにいるんですの？　でしょう？」
探るようなローザの視線にアルバインは肩をすくめて、困ったように返答する。
「今日から僕もここにお世話になることにしたんダ。よろしク」
「なぜですの？　まさか、貴方も・・・」
「そうだな、俺も聞きたい」
お互いの胸中を計り合う二人の空気に張り詰めていた空間に若さを残した低い声が突然割り込んできた。その声の主は、黒いコートを着こんだ男。
夏も近いというのにこの格好なのは、進・カーネルだった。
「聞きたいって・・・進が了解したんじゃないんですか？」
「俺は何も聞いてないぞ」

進は困り果てた、というよりめんどくさそうな顔になる。
「え？　アレ、おかしいな・・」
「ウフフフ、アルバイン。お隣の家と間違えたのではありませんか？」
ちなみに両脇の家はほとんど家の原型を留めていない、廃墟だ。
「ちなみに、元クライアント。お前もなんでいる？　聞いてないぞ」
「ふぇぇぇっ！？」

視点変更１

ここはオカシイ。
時は夕焼けが世界を朱にする刻。
その世界に佇む私と言う存在、ローザ・Ｅ・レーリスも染め上げている。
眼前に広がる景色はある意味すばらしい。邪魔な高い建物は一切なく、魔力で視力を強化すれば海の煌きまで見えそうほど、遠くを見渡せる見晴らしのよい世界がある。
私が佇むのは、今日から住むことになったボロ屋の屋上。ここが二階建ての建築物だということすら忘れてしまいそうな景色を見ながら、別の観点からこの街を見て、自然と名を呼ぶ。
「ソドム」
弾三次世界大戦の折に、手ひどく攻撃を受けた数ある都市の中の一つとして数えられる地。二十一世紀の教科書に名が載るほど知名度が高いこの場所であるが、記載される名前にソドムとは書いていない。別名だ。ソドムと蔑称でよばれているにすぎない。
かつて神により燃やされた地の名前がいつの間にかに定着していたそうだ。

多くの人々が心乱れた所とされた場所、神に見捨てられた者たちの巣窟などと汚名を付けられた。

人は言う、そこには死体が石ころのように転がっていると。

人は聞く、そこは一日中、銃声が鳴り響いていると。

人は語る、あそこは常識が呆れかえり、どこかに去ってしまった場所だと。

いつしか、人は隔離区“ソドム”と呼んだ。

世界の中でも生活基準が高い日本に生まれた一点の染みのような場所。戦争の傷跡が大きい地でも、地区を隔離したのはこの国だけだ。

減少した財源、被害者支援の復旧に対する義援金、化学兵器による汚染の情報など考えれば、たしかに隔離という手段も正当な道だ。

そして、残る疑問も生じさせた。

「そもそも、なぜこの国は狙われたのかしら?」

呟きに応える者はココにはいない。そして、どうせ応えられるものがいたとしても平凡な答えしか期待できない。私がほしい答えは口から紡(つむ)がれはしないはずだ。

「・・・あの時」

あの時、ティーチャーの攻撃を止めるべく出した錬成魔術。結果的にティーチャーの攻撃を止め、かつあの巨体を吹き飛ばすまでの力を見せた。

だが。

「・・・あれは、私の、力ではありません、でした」

呟くように、悔しさが滲む様に言葉にするしかできない。答えが出ないことも不甲斐ない。

あの時、あのままだったら私は死んでいた。純粋に速度が足りなかったのだ。

錬成には物質に私が錬り込んだ魔力を絡ませなければならない。ゆえに時間がかかるのだ。

莫大な魔力があればその工程を無視して、錬成も可能だ。だが、

それはもはや人間の技ではない。それほどの魔力は人間ひとりでは生みだすことができないからだ。

そんなあり得ない量の魔力が、どこからともなくやってきて私を助けた。

「おとぎ話じゃあるまいし・・・荒唐無稽すぎですわよ」

私はひとり呟く。はたから見れば、独り言をつぶやくさみしい女に見えるかもしれない。

それは間違いだ。私はきちんと“相手”に向かって話している。

「・・・ソドム。あなたは一体・・・この場所はなに？」

この場所に話している。馬鹿な女と思うか？　ですが、私は知っていますわよ。貴方はたしかに言葉を話して、私を助けた。

地脈をなぞり魔力が流れてきた地を調べる術は占星術から派生したといわれる錬金術を扱う私には簡単だ。だが、そこまでだった。その魔力が“出現”した場所の特定までに至らなかった。

助けた理由と、この街に隠された膨大な魔力が生みだす場所を知り、利用できればしたい。それは魔術師としては当然の欲望だ。

そして、ローザと言う人間としての目的も、もしかしたら。

「この街は、あまりに闇が濃い。もしかしたら、世界から多くの“アレ”も・・・」

私の目的とも一致する場所として、この場所は打ってつけだ。ロンドンもたしかに良い場所だったが、現代において明かされたオカルトの世界となってしまったあそこには日差しが照りつけてしまって、アレが見つかるとは思えないと感じていたところだ。

夕焼けが沈んでゆき、明るい夜空に変わろうとしている。ソドムを囲むように日本の街の光が生まれてゆくのに対し、ソドムには街灯はおろか家の灯りはほとんどつかないため、暗闇が侵食するように広がってゆく。

「見つけ出しますわ、私の目的のために。どんなに闇が濃かろうが、必ず」

睨むように、挑戦するような笑みで翻り、届いた荷物を解きに部

屋へと向う。
挑戦状を叩きつけられた世界は黒色に染まった。

視点変更2　ＸＸＸＸ

ジジ・・ジ・ジジッジ。
黒い色に染まった世界は、完全には塗り潰されてはいない。
ソドムではところどころで露天や営業をするところがわずかだがあるためだ。
その一つがココ、ソドムで唯一にして、携帯電話の普及と共に無くなりつつある公衆電話ボックスである。
外縁部のためか、かすかな電気が奇跡的に通り、壊れかけの電灯がついたり、消えたり。機能面にも故障がでていているために、まともに会話もできないことが有名である。
だから、ここを扱う者はいない。使うとしたら、新参者くらいだ。
ガチャ、と音がなり、錆ついた留め金が異音を放つも気にせず、ボタンをあどけないリズムで叩き、埃まみれの受話器をためらいなく側頭部へつける。
狭い電話ボックスに電話と空有の待ち時間がはいる。中は無音、そして、外も無音。それもそのはず、ここら一帯はほとんど人が寄り付かない。治安が悪いのではなく、地盤が悪く住めないからだそうだ。
そんな孤独な世界に男が一人。受話器を耳に押し当て、応答を待つ。
プルルルル
プルルル
プルルｒ・・・ガチャ。
「・・・・アルバイン巡回騎士」
出ていたのは野太く、威圧を与えるような渋い男性の声。しかし・

・・
「すいません、間違えましタ」
ガチャン！
ツー、ツー、ツー。
持ってきた番号の書かれたメモをもう一度確認し、再度プッシュ。
プルルル
pル、ガチャ
「アルバイ・」
ガンッ！！
アルバインはかなり力を込めて受話器を叩きつけるように戻した。
翻り、その場から立ち去ろうとすると。
リリリリリン。
今度は電話をかけたのではない。
かかってきたのだ。
アルバインは溜息をついて受話器を取る。
「ハイ・・・どちらさまでしょウ？」
「アルバイン・セイク巡回騎士。先ほどの反応はどういうことだ？」
「いえ、申し訳ありませン“副団長”閣下！　電話機の故障でありまス」
「・・・まぁ、いい。それで、どういうつもりだ？」
電話の主、副団長は静かに返答を待つ。野太い声で威圧的に。電話越しでも判る圧倒的な存在感。
騎士団の数多くの魔と戦ってきた歴戦の猛者たちを統括する男。
騎士団のナンバー2。
大抵の人間は、彼の威圧を受ければ怯むだろう。だが、アルバインはある理由から慣れていた。
「・・報告書に同封された申請内容に不備ガ？」
「そうではない。理由についてに関して、書面だけでは理解しがたい点がある」

「いずこニ？」

「この、進・カーネルに対して危険因子の有無の判断のための観察という届け出すべてだ」

アルバインがソドムに残った理由。それは進に対しての危険性を見い出したためだった。

彼が見せた圧倒的な力。破壊的な戦い方は危険因子と呼んで差し支えないものだった。

だから、報告を書面で送り届け、一緒に危険因子の観察任務の申請をした。その受領確認と、必要な雑貨類を同室で暮らすルームメイトにエアメールで送ってもらおうとしたのだが・・・。

「現場を見たお前が危険性が高いと判断すれば、その場で“処理”してもかまわない」

断定的な言い方に、アルバインは動じることなく応える。

「判断材料が少ないため、長期間の直接観察をするべきだと判断しましタ」

「他の巡回騎士にもそれは可能・・」

「対象の強さは計りしれません。私レベルが適任であると判断した結果でありまス」

二人とも自分の意見を譲ろうとしない。これがいつまで続くのかと、思っていたアルバインだったが。

「・・・“アル”。いい加減にしなさい」

副団長と呼ばれた男の声が急に変わる。それはどこか困ったような声色。いや、諦めに似た感情の溜息も出た。

アルバインはこの人物の事が苦手であり、同時にもっとも信頼する人物でもあった。なぜなら・・

「ハァ・・。養父（とう）さんこそ、いい加減にしてくれヨ」

溜息まじりを同じように返し、電話中の緊迫感を霧散させた。
「だが、な・・」
止めたいのに、どこか選択の自由を“義理の息子”に与えたいという複雑な心境が起伏の乏しい彼の言葉にはふんだんに含まれていた。
彼は身寄りがなかったアルバイン“達”の育ての親であった。そのため、彼の強さと圧倒的な存在感の裏にある優しさと誇り高い背中とムッツリした過保護な所を知っているのだ。
「通達が行っているはずだ、お前には昇級に伴い守護部隊の隊長への就任が適切と判断された」
「その話は・・・」
「断る理由があるのか？」
アルバインは黙る。騎士団の部隊は数十と多いが、その中でも守護部隊とはエリート中のエリートが選抜される実力派部隊で、階級的に見れば普通の部隊の一つ上に位置する。その部隊長ともなれば副団長の次に権威ある騎士たちであるのだ。実力が尊ばれる騎士団の中では強者の証。
選ばれたのなら誉(ほま)れ中の誉れだ。
だが・・・
「僕は、その器ではありませんヨ」
「その言葉は、お前が蹴ろうとしている地位に至るため努力する騎士団総勢1万人いる下のモノ達に侮辱と写るぞ。それにあの方がお前の昇格を心待ちにしている」
あの方はともかくとして、たしかにその通りだ。しかし、アルバインはソドムに来てあの娘の言葉を受け、改めて理解できたのだ。
「養父さん。僕は、ソドムで自分の未熟さを教えられたヨ。だから、ここで鍛えようと思うんダ。人の内面を見る目をネ。それが無ければ、僕は人の上に立つことなんて出来ないヨ」
「・・・・・」
再びの沈黙。ただの沈黙ではなく、思案の沈黙の時間が訪れる。

それはすぐに諦めとも取れる溜息で打ち破られる。
「了解した。騎士アルバインの次なる任務を認める。その間に関しては昇級の件は保留としておく。それとお前へ送る荷物の件は私から彼に伝えておく」
「ありがとうございまス」
父と子の会話とはいえないような会話。アルバインはそれでも自分の意思は伝えられたことを実感する。・・・もういいだろう。
「でハ」
「待て」
電話を切ろうとした時に呼び止められた。養父にしては珍しい事だ。
「言いにくいのだが・・・いや、言いにくかったが、やはり伝えておく」
「なんですカ?」
「お前は日本語が下手だ。練習しておけ」
「ほっておいてくださイ」
「それと・・・」
「まだ何か?」
これほどまでしつこいのは初めてだ。
「お前の妹(レナ)にも、たまには連絡してやれ・・・」
「・・・わかりましタ」
・・・本当に余計な御世話(おせわ)だ。
「これだけだ。・・・しかし、お前も“カーネルの者”に関わるとはな・・やはり、お前は私の息子だよ」
「え?」
「達者でな」
ブツ、と一方的に切られた受話器を少し眺めて、もう一度今の言葉の意味を問おうと思ったが、止めておく。どうせ、応えてはくれないのだろう。
受話器をそっと戻すと、彼はその電話ボックスから出てゆく。

その、姿を見ていた。
ＸＸＸＸＸらは。
ＸＸＸＸＸらは、見ていただけ。
それだけ。
今は。

視点変更　３

「え？　この家ってハジさんの家だったんですか！？」
「まぁ、名義はアッシで。旦那に貸してる状態ですかねぇ」
完全に空に星がばら撒かれた空に変わった夜の時間。呼び出されてもいないのに絶妙に間が悪く表れたソドムの情報屋ハジが怒れる進に首根っこを掴まれ真相を問い多出されていた。
「テメぇ、ここは自由に使ってイイって言ったじゃねぇか？」
「それはそうですけど、旦那がお金が無くなって困ってるらしいからぁ、お客さん入れて上げたのに」
「・・・家賃は、俺の名義で入るのか？」
「うぅん」
うん、と肯定しているのか。ううん、と否定しているのかよくわからない返事。
「どっちだ？」
ガチリ、とスライドを引いた銃をハジさんの顔面へと押し付け、逃げられないように頭を抑え込む進。
「あなた様でございやす」
「なら、いい」
上機嫌で去り、いつもの定位置である奥のデスクの椅子へと戻り新聞を読み始める。悪魔か、あなたは。だが、言葉にして言うことはできない。進の財源を確実に根こそぎ無くしたのは私だからだ。

「まったく・・ハジさん。大丈夫ですか？」
「うぅぅう！　おねぇちゃん、ぼくぅイジメられちゃったよぉぉ。なぐさめてくらさい。その大きな母性を感じる胸で」
「幼児退行ができるなら、元気ですね」
笑顔でセクハラをスルーして、キッチンへと向う。
キッチンは共同で、一階の奥に設置されている。そこにはエプロンを着た金髪の人が調理をしていた。
「あ、ナデシコ。もうできたのからテーブルに持って行っテ」
振り返ったのは笑顔の男性、アルバイン・セイクだった。
できたの、と示した料理は目を疑いたくなるほど綺麗に盛り付けられた、とてもおいしそうな洋風のディナーだった。
「お金に困っていると聞いたから、低コストでおいしくできるモノにしたけど、よかったかナ？　・・・あの、ナデシコ。何で泣いているんだイ？」
「うぅぅ。高コストでゴメンなさい・・」
食材を最大限生かすやり方に料理が輝いて見え、己の料理スキルの低さを思い知り、涙腺が緩んだ。
「ほら、高コスト。早く並べるぞ」
「・・・はい、高コスト・・・頑張ります」
やってきたイジワル進がなにを言っても動じないと心に決めて黙々と皿を運んで行くことにした。そういえば、もう一人の住人はどこに？
「・・・もう少し、お安くはなりませんの？」
「いや、ローザ嬢ぉ？　この物件で三万円台は安すぎとは思いませんかぁ？」
いた。しかもイスではなく部屋の隅の地べた座りこんでいた。あの姿に同じ女性としてどうかと思うが、胡坐（あぐら）までかいて、ハジを睨みつけながら、家賃を値切っていた。
一見いいところのお嬢様に見えるローザが値切る姿は凄い光景である。

「あの、ローザさん？」
「ローザで構いませんわ、撫子。要件があるなら後にしてくださる。今、今後の生活がかかった大勝負の最中ですの」
私と話しながらも目線はハジから外れない。その気合いを通り越して殺気になりかけている視線を受け、さすがのハジもめんどくさくなってきたようだ。
「・・・わかりやした。これで、どうすか？」
懐から取り出した電卓に数値を打ち込んでゆく。私はココの家賃は判らないが、すごく値引きされているのは確かのようだ。・・・あのハジさんがぐったりしている。
「でしたら、さらに半額！」
「むちゃをいわないでくださいぃ！！」
「ほら、ローザたち。用意ができたヨ」
号泣でもしそうな叫びをあげるハジに助け舟をだすように、夕食の用意ができたことを告げるアルバイン。
「チッ、いいところを！」
「君の値引きのやり方はいつ見ても、怖いヨ。もっと広く心をもって行ったらどうだい？」
「フン、“貴族さま”らしいお言葉ですこと！　貧乏人を馬鹿にしているとしか、思えませんわ！」
それぞれ愚痴を言いながら、部屋の中央にあるガラス製のテーブルに向かい合う形で席に座って行く。
「貴族様？」
私の疑問に、アルバインはすこし複雑な表情になり、ローザは値切りを邪魔された仕返しとばかりに意地悪な小悪魔の様な表情で私の疑問に答える。
「彼は、本物の爵位持ちですわよ。現在の英国女王の孫娘を虜（トリコ）にして得たようですわ、でしょう？　アルバイン・Ｆ（フォン）・セイク？」
「・・嫌な言い方、止めてくレ」
「でも、爵位って・・」

「第二次世界大戦後に廃止されたのでは、でしょう？　そんなの魔術世界に関係ありませんわ。名前だけの存在となっても、爵位という力ある名の存在は消えませんもの」

すごいな、魔術世界・・・

「あなたも同じようなものでしょうぉ？」

ハジがいつもの軽口でローザに向かって話しかける。それに対して、言葉の真偽はともかく今まで笑っていたローザが反転して、一気に冷たさを秘めた能面みたいな表情に変わる。

「・・・それ以上ほざくなら、口に溶けた銀を詰め込みますわ」

「おや、触れられたくない？　そりゃ失敬」

「早くしろよ。飯が食えねェだろう」

それぞれの思惑などどうでもいいから、飯が食べたい進は一人で箸を手に、小皿に料理を取っていく。それを見た他の者は熱を冷めされたように、同じように食事を始める。

それぞれに事情があるのだろうな、と私も思う。だが、まぁ、今はご飯が冷めないように食べようと思う。さぁ、手を合わせて

「いただきま・・」

「邪魔するぜ！」

私の目の前の食事は飛んできたドアにより、一掃された。

視点変更４

「邪魔するぜ！」

俺の目の前の料理は無事だったが、他の三人においてあった皿をすべて巻き込むようにドアが飛び込んできた。・・・また壊されたのか、家のドア。

「あわわわわっ！！」

なにより不憫なのは一口も食べることなく、料理がゴミに返還さ

れた撫子だ。
「進・カーネル！　テメぇがそうだな!?」
俺を指で名指しする上半身裸のマッチョが玄関辺りにいる。また、いつもの殴り込みだ。
「そうかもな」
俺は小麦色の綺麗なスープをスプーンを使って一口、すする。これが絶品で、かつ今回の仕事の報酬と二人分の家賃が入ったことに上機嫌であった。それがなければ、マッチョに八つ裂きにしていたところだ。
しかし、今日は機嫌が良いので許そう。俺の食事まで吹き飛ばしてたら、対応が違ったが。
「スカしてんじゃねぇぞぉ！　このソドムのルールを体に教えてぇぶぎゅわ!!」
ルールを述べようとしていたマッチョ君（命名、俺）が、顔面に非常に硬化に“変化された”皿がめり込んだため、後ろへ倒れた。
投げつけたのは誰か？　それは体中にサラダをくっつけた怒れる金髪美人（ローザ）しかいないだろう。
「貴方、筋肉を付け過ぎて脳まで筋肉が派生しましたのぉ？　ノックの仕方を教えて差し上げましょうか？」
手にはいつの間にかにハルバート。目は暗い怒りに燃え、口元は笑っているが、目は殺の一文字だけ浮かんでいるようにも見える。
「こぉんのアマ！　ゆるさねぇ！　テメェら、出てこいや!!」
掛け声とともに、わんさか部下がたくさん出てくる算段だったのだろうが、いつまでたっても出てこない。それもそのはず。
「ノックの仕方だけじゃダメさ、ローザ。テーブルマナーもいっしょに教えてあげよウ」
外から現れたのは、頭からタルタルソースをかぶったアルバイン。手にはナイフとフォークを持ち、真っ赤なソースがびったりとこびり付いている。まぁ、あれもソースだろ？
「あうぅぅぅ、ご飯がぁぁ、ご飯・・・」

撫子だけが、目の前の飯が無くなった絶望から、立ち上がれず、うな垂れながら何か呟いている。
いきなり孤立無援になったマッチョの悲鳴を聞きながら思う。
「いやぁ、にぎやかになりやしたね。旦那」
俺の感想を、いつの間にか現れていたハジが代弁していた。
「うるさい、の間違いじゃないか？」
「にひゃあひゃひゃ、確かに」
ほんの一か月前までは、ここは俺一人だけの空間だった。それが今はどうだ？　アイツと出会ってから、俺の周りはさらにうるさくなった。
あいつは・・・
「ところで旦那、また泣かしちゃったみたいですね」
「・・・それが、どうした？」
あいつは、すぐに泣く。初めてあった事件の時も、今回も誰かのために、いつも泣く。
俺にはそれが理解できない。他人のために泣くなどまっぴらゴメンだ。
「あんまり、泣かしてると、旦那は後悔しますよ？」
「俺が？　ハッ！　何でだよ？」
言葉の真偽など関係ない。俺が後悔することなど、もう、ない。あの時以上に後悔することなどありはしない。
「それに俺が泣かしてる訳じゃない」
ハジの心を見抜こうと、睨みつけるがやはりコイツの考えはわからない。
こいつだけじゃない。ローザとアルバインも何を目的にココに残ったのかは判らない。人には完全に相手の内側を計ることはできないものだ。
しかし、こいつらの目的が何だろう時間は止まらないし、世界は動き続ける。世界とは隠し事を孕みつつ動くものだ。
そして、何が起ころうと実害になるようなら、破壊するだけだ。

俺の手で。
「うぅ、海老フライ」
まだ、やってんのか・・・。撫子が床に散乱した海老フライを洗って食べるという選択を考えられずに、ただただ見つめていた。・・・ヤレヤレ。
「撫子、これが欲しいか？」
「え、海老フライ！」
そっと撫子に近付き、俺が先に取っておいた無事な海老フライを目の前でちらつかせてやる。
「くれるんですか！？」
「いやだ」
期待の目線を撫子がした瞬間、頭から尻尾まで口に入れ、全て俺の栄養価とした。
瞬間的に目が点になったが、すぐさま希望は一転、絶望に変わった撫子は涙目で俺をだんきゅうする。
「うぅぅぅ～！　悪魔！　意地悪！　この魔王！！」
「くっ、あははっはっ」
唯一、判っていることは、こいつをいじめると面白いってことだけだ。

二部　終

7、一物孕んで、世界は回る（後書き）

やっと終わった二話ですか、どうだったでしょうか？　よければ、これからもどうぞ、読んでいってください。

それにしても、テイルズ　オブ　エクシリアはおもしろい。

1、夏の誘い

con－tract　3　守ると吠える月の銀狼

1、夏の誘い

みーん、みんみんみん、みん。
「えー、であるからでして……」
睡眠薬にも相当する眠りの呪文が、頭一つ分高い場所にいる初老の男性から紡がれる。それをただただ聞くしかない我々。
「……だからと言って、我が校の生……」
追い打ちをかけるように灼熱の熱気が辺りを包みこんでいる。
ここに逃げ場はない。
なにせ全ての出入り口は締め切られている。
同じ境遇の人々が、密集形態で集まる過程で生まれる熱が、さらに意識を天へと導いていく。
おお、何故だ。
水を、水を。
風を、涼しい風を。
持っていかないでくれ。
なにを？
いや、何故だぁ～。
「何故なんですの、ぶる～た～す」
「……撫子、ローザが変なうわ言を言いだしてるぞ……」
「英国の西岸気候に慣れてるだけ、日本の夏は厳しいのでしょうね……」

冬暖かく、夏涼しいヨーロッパで過ごしていた者にとって、日本の東岸気候の夏は厳しすぎるのかもしれない。

かく言う私も、九重（ここのえ）　撫子（なでしこ）もまいっているのは確かだ。

暑さ厳しいこの時期に、体育館に集まり全校集会とは……

「明日から、夏休みということもあります。君たちにはそれ相応の」

体育館の壇上に立つ、不自然にもっさりしている髪の初老の男性は、この学校の校長先生である。

彼は今、全校生徒ならびに各教師一同から殺意の眼差しをうけている。それを感じぬほど彼のスピーチはされにエスカレートし、止まるところをしらない。

（かれこれ、３０分間。続いてますからね）

校長先生の話好きで有名だ。それゆえに、外部からの音を避けるために演説中は外壁をすべて閉め切るそうなのだ。それがこの暑さの正体。熱さを閉じ込めるような密閉空間と、学生たちの汗が生みだす湿気はさらにうだるような暑さを助長させる。

礼儀とはいえ、そんな時間を立ったまま聞かされているのも疲れる。せめて、座らせてほしい。

「もう、限界ですわ。アレの息の根を止めれば、この時間も終わりますでしょう？　うふ、ウフフフ」

我慢の限界にたどりつき、ヒステリックな笑みを浮かべている隣に立つ美女がいる。年齢的にいえば美少女なのだが、どうしても彼女の美しさがそれを許さない。

額に滲んだ汗を拭う際に、美しい白金色（プラチナ）の腰まである長く緩いウェーブのかかった金髪が揺れる。それだけで数人の男子生徒の視線を釘付けにし、彼らの体温を上昇させる。

私と同じタイプの制服からわかるモデルのように洗練された鋭角な体のラインに、豊満な膨らみを芸術的なバランスを持って統括している。

異性のみならず、同性の眼すら奪う美女は現在、体中から発した汗をダラダラとさせながら、エメラルド色の瞳を殺意に血走らせている。

正直、怖い。

「ローザちゃん、もう少しだよ……たぶん」

私の後ろから、力のない声でフォローの声が入る。

染められた茶色いソバージュヘアの美少女は、熱にやられれたのかフラフラしている。

星野（ほしの）　優子（ゆうこ）。私の親友であった。どこぞの令嬢にも見える彼女だが、本人はいたって普通のご家庭の女の子である。

「いや、ゼッーテー終わんない。あのハゲ、悦に入ってんじゃん」

ポニーテールの体育会系美少女が、校長の秘密をサラリと言ってしまう。

上地（かみじ）　智子（ともこ）。どの部も欲しがる運動万能型の彼女も私の親友である。彼女の言葉を聞いて周りの学生たちもヒソヒソと文句を言い始める。たまりにたまった不満が爆発する前兆である。

（・・・まずいです、ね）

眼だけで周囲を観察すれば、ところどころで同じような状態になっている。

高い位置にある教壇に立つ校長もそれを視覚に捉えたのか、表情が嫌悪になっていく。

もし、校長がこんな不満が充満した空間で静かにしろとでも言ったりしたら。

多人数の人という藪（やぶ）を得ている学生たちは隠れるようにして野次を飛ばすだろう。そうでもしたら説教と言うなのスピーチの時間が加算され、この苦しい時間が伸びるはめになる。……それは、イヤだ。

そうなれば、確実にローザや優子は熱さに耐えられないだろう。

（どうするべきか？）

目を配り、何かないかと模索する。

この反応は以前の私にはなかったものだ。以前の私なら他人に関わることを恐れ、無視を決め込んでいたことだろう。私にその微量の変化を起こすような事件が、この二ヶ月間の中で経験していた。

学生たちは幾つものパターンに分けられている。

級友の怒りに同調する者、自ら憤り(いきどお)をそれでも抑えている者、便乗して他愛のない会話を始める者、そして……

クスッ

（？）

動く者だ。

“彼”は自らの位置から離れると、司会進行をしていた女子生徒の傍へと移動し、背後からそっと声をかける。

そっと声を、助言を受けたであろう女子生徒はその内容に驚いたように“彼”へと振りかえる。彼は頷くと笑みを浮かべた。それに背を押されるようにマイクに顔を近づける。

「それと、関係各所に対しての・・」

だが、声は出さない。待っているのだ。

「その様な学生としての当たり前の態度を守ってもらいたい、つ」

次に、もしくは、つまりと校長が言葉をつなげようとした瞬間

ポンと、彼が女子生徒の肩を叩いた。

「こ、校長先生からの挨拶に対し、み、みなさん拍手」

え？　という声が学生たちと、教員、なにより話を中断された校長から困惑の声があがる。

それに普通なら朝の挨拶程度では頭を下げる礼のはずだ、なぜか拍手という賞賛の行為で閉めようとするのか？

そんな疑問が体育館全体の空間に、一人分の両手を打ち合わせる音が鳴り始める。

一人で拍手するのはやはり“彼”であった。

（そうか）

私も便乗するように拍手を始める。激しく、そして誰かに伝播するように。

すると、拍手が感染するように拡大してゆく。
その拍手にたじろぐ様に生徒たちを見渡す校長先生。まだまだ続くはずであった演説の場を押しのけるような拍手で閉じられたために顔に不満と書いてある。
礼と言う静かな行為では、もしかしたら何かにつけて話を継続したかもしれない。だが、拍手という閉めの行為ならば止めることは叶わない。それが大勢であれば、あるほどだ。賛美の行為を怒って止めるわけにもいかないからだ。
自分の独壇場を強制的に閉められた校長は事(こと)を起こした“彼”を睨みつけたのを私は見た。
同時に見た。彼が視線を受けたと同時に、視線を逸らして、校長の意識をある一点に流したところを。熱さと校長の長いスピーチに疲れ果てていた教員たちの姿を視界に入れさせたところも。
「続いて、今年の生徒会に選抜された生徒から、え？　あ、はい！　その代表からの“短い”挨拶をさせていただきます」
入れ替わるように、壇上の階段へと足をかける彼は、入れ替わるように壇上を後にする校長に何かを説明した。校長はばつの悪そうな表情から一点、晴れたように爽やかな表情になり教員用の座席に戻っていった。
その様に生徒たちにざわめきが蔓延(まんえん)した。
ゆっくりと歩みを進める彼は、壇上中央に進むまでにちらりと“私を”見る。それをすごいと思う。たぶん、この見られているという感覚は私ひとりだけではないのだろう。
それで、ざわめきの大半は無くなった。だが、無くなってはいない。
トン、トン、トン。何かを叩く音がスピーカーから体育館全体に木霊する。
それは大きくもなく、小さくもない微妙な音量。それが残りの喋る生徒たちの意識を一点に集中させた。
音の出どころ。つまり、彼の持つマイクに。

見られているという感覚をこの場の全員に与える手法と音という媒体を使っての意識集中法。簡単に思えるが、決して簡単なことではないことをさらりとやってのけて、彼は、彼に相応しい立ち位置に立つ。

壇上中央に立つ彼は、不快にならない程度の一拍間をおいて話す。

「今年、みんなから生徒会長の座をもらうことができた二年生、“科布（しなぬの）　永仕（えいじ）です」

永仕と名乗った青年は、１８０センチほどあろうかという身長で眼下にいる学生たちを真摯に優しく見つめながら話す。

スラリと高い身長と、長くも短くもない黒色の頭髪、どちらかと言えば男性寄りの調った顔立ち。人の良さそうな笑みで、彼の爽やかなテノールの低音をのせての一言。

「きちんとした挨拶は、正式に任命される二学期に。さぁ、クーラーのきいた教室に戻って、明日からの夏休みの話を友達としましょう」

彼の本当に短いあいさつで、退屈で熱すぎる体育館から生徒たちが、生徒会の誘導に従って、順序良く教室へと戻っていった。

「壇上で話していた男は、誰ですの？」

体育館は渡り廊下で教室がある校舎と繋がっている。そのガラス張りの、クーラーの恩恵で涼しい廊下中央でローザの質問に、私は軽く驚いた。

「気に……なるんですか？」

「ええ」

ローザが不意打ちのように入学してきたのが、一か月前。それから彼女は一気に学園のマドンナとしての地位を自動で手に入れていた。

彼女の美しさにのぼせてしまった男子生徒達から毎日のように手紙や告白を受けとっていた。とすぐさま断わるというあっさりさ。ついたあだ名が、高嶺のバラ。

そんな男性に興味もなさそうなローザが気になると言ったのだ、驚きもする。

「わったしが、説明しよう！」

湧き出るように現れたのは、先ほどまで熱さでバテていた優子である。噂や恋の話が大好きな彼女のセンサーに何かが引っかかったようだ。

「科布　永仕くん。同級生で我が、京清（けいせい）高校の次期生徒会長。品行方正、ほどよく真面目で、面倒見もイイ。人気も高くて、友人からの推薦で生徒会長に立候補し、見事に当選」

スラスラと、今まで倒れそうだった同一人物とは思えない饒舌（じょうぜつ）ぶり。水を得た魚のようだ。

「おまけにスポーツ全般が得意で、顔もよくて、将棋が上手い。っていう情報があったら嬉しいな」

そこに違った魚が紛れ込む。女子同士の会話に自然と入ってきたのは男性の、しかもさっきまで聞いていたような、声。

……

「やぁ」

「「「なっ！」」」

まるで見知った友人にでも話しかけるように、ノリのよい挨拶をするこの人。

背後を振り返ると、噂の本人がいるではないかっ！？

さきほど壇上で語っていた本人、科布　永仕がいつの間にかに話に加わっていた。

「せ、生徒会長！？」

「現、ではないからね。次期さ」

私が通う、京清高校（正式名称、京清学園高等学院）の生徒会長および生徒会の選出は、一学期の終わり間近に投票が行われ、一学期の最終日に生徒会長と生徒会メンバーが選出され発表されるという方法をとる。

新たな生徒会の構成員に、仕事等を指導する期間として夏休みが

適しているという理由らしい。
最終的な引き継ぎと確定は二学期の始まりに報告される。
ちなみにこの高校は、第三次世界大戦後に国からの援助等で新設された国立高校である。そのため学力偏差値は高く、設備等もしっかりしているため、良家の出の者たちや、突出した才能をもつ優秀な学生が多く在籍している進学校である。
そんな才能と権力あふれる学び舎の生徒会長は実質、最高の生徒の称号を得ていると言っても過言ではない。
そんな人が茶目っけ出して、いつの間にかに話に（しかも自分の噂話）に加わっている。
気まずい。非常に気まずい。
「あ、あのう？　どうして？」
「ああ、君に用があってね」
用があると目を向けられたのは、私!?
するとローザの目が険しくなる。
「九重さん。君さ、生徒会に入らない？」
「え？」
生徒会に？
「撫子が生徒会に、ですか？」
聞いたのは、智子だった。無理もない。いきなり過ぎるし、投票や指示もない。
「実は、書記の子がね。本当はやりたくないのに無理やり入れさせられただけだって、駄々こねられちゃってね。やる気のない子に無理やりはよくないからね」
生徒会は実務が大変で毎年、幾人か辞退者がでるらしい。そのための夏休みの期間があるのだという話は本当だったようだ。
「そこで九重さんの処理能力高かったから、声をかけたんだけど……どうかな？」
以前、一度だけ生徒会の仕事を手伝ったことがあった。春先にクラス委員の娘が休み、代役で委員会議に出た時に仕事を十日かかる

と言われていた仕事を一日で終わらせた。その時のことだろう。
引き受ければ、それなりに将来のためにもなるだろう。それに生徒会の特権で学食が安くなったりと特典もあると聞く。
いい話だ。引き受けてもいいじゃないか？
「すみません」
考える前に、口から断りの言葉が滑り出ていた。
（アレ？）
なぜだろう？　頭に一瞬浮かんだイメージがあったが、何だっただろう？
「……一応、理由とかあったら聞いていい？」
「え？　あの……アルバイトみたいな用事があって」
「……答えてくれて、ありがとう。急なお願いで悪かったね」
スっ、と振り返ると笑顔でそのまま立ち去る永仕。
すると、今まで沈黙を保ってきた二人が意味深に語りだす。
「あれは、きっと撫子を狙ってたね……さすが次期生徒会長、あざとい」
「そんな生徒会長を振った撫子ちゃんも、あざとい」
「あざとい、の意味をわかってますの？　二人とも」
あんまり深くもない会話を続ける三人。私だけが生徒会長の背を見つめながら思う。
幾度か、恋人になってほしいと告白されたこともある私。だからだろうか……。
「なにか……違う、気がします。それに……」
（とても、危うい気がするのは、なぜ？）
どうして、そう思ったのか。理由を理解しようとする前にローザの一言が妙に耳に残った。
「あの男、なにも感じない。なにも“感じなさ過ぎる”？」
この世界は西暦の年号において第三次世界大戦を起こしてしまっ

た世界。
戦争の傷跡からできた一つの隔離区や、人ならざるモノたちや、神秘の技を扱う者たちがある世界。
だが、私の目の前の世界は平和そのもの。
そんな常識と非常識の上に成り立つ平和がある世界を、あの魔王がいたらあんな奴はどう思い、生きているのだろう？

次話へ

1、夏の誘い（後書き）

友人が最近買っていた境界線上のホライゾンが気になり、買って読んでみたんですが・・・面白すぎる。というか・・分厚すぎるだろっ！！？　一巻の上下を読み終えるのに四時間かかりましたよ！

緻密な構成と個性が強い魅力あるキャラクターたちが生きるにふさわしい世界観。長過ぎて疲れ始めた時に現れるあのヒーロ性と生きているだけでギャグな主人公のおかげで、文章の続きに期待をもって最後まで読むことができる文章構成。読み手に物語を明確にイメージさせることができる絵師さんの絵。・・ｅｔｃ

俺も、こんな本が作れる存在になりたい・・・あれ、俺の作品のあとがきで何やってんだ？

2、吸血鬼の遺産

2、吸血鬼（ドレイク）の遺産

「それでさ、三人とも夏休みはどうするの？」

夏の日差しを受け、アスファルトが熱気をだす遊歩道。人がまばらに歩く道を、私たち四人はゆっくりと横並びに歩いている。

「夏休み、ですか……？」

一学期最後のホームルームを終え、帰宅を選択した者たちは早々に学校を去っていく。

私、九重（ここのえ）撫子（なでしこ）もその内の一人である。

運動部や文化部に所属する者は夏休みの予定や活動のために学校に残るが、私は特に所属していないので帰宅する類に入る。いわゆる、帰宅部だ。

同じく横に並んで一緒に帰っている優子や転校してきたばかりのローザは部活動は行っていない。もう一人の智子だけは陸上部に所属しているが、今日は明日からの夏合宿の用意のために休みになっているので、一緒に帰ることができている。

そんな中、優子が夏休みの予定を聞いてきた。

「ゆっくり、宿題でもやっていこうかと」

「「「……」」」

私の完結的な夏休みの予定に、他の三人がすごく渋い顔になる。

え？　私、変なこと言いました？

「え？　何か変ですか？」

「変、というかさ……」

「いや、いいんだろうけど……夏休みだよ？」

「貴方（アナタ）、ホントに現代人？」
特に最後のローザの一言が痛い。魔術（古きもの）を操る人間に言われれたくはなかった。
「でも、夏休みはいつも……」
夏休みにいい思い出などない。夏は“屋敷”に“養父（おとうさま）”の会社関係のお客様が来られて毎日のように駆けだされるし、お稽古事と勉強ばかりで、宿題をやる時間を得ることすら……と頭の中に予定が展開されている内に気がつく。
（そうだ。私はもう“養父”に囚われてるわけじゃ……）
普通の夏休みといえば。
「海、行こうよ！　海！」
「私もいいな、海。部活は山ごもりでさ～」
「日本の夏にある祭（まつり）には、昔から興味がありましたの」
「「それもいいね」」
“普通”、このようなモノだ。
忘れていた。学生にとって夏休みとは、一年の内でもっとも長い連休なのだ。将来のための勉強や、日常では出来ない実験や冒険などが出来る自由な時間。
そんな常識を、ある理由から忘れていた私は本当に歪な存在だったのだろうと今さらに認識する。今まで私にとって夏休みは気がめいる普通の日と変わらない長いだけの、ただの過ぎ去るだけの時間だった。
そうだ、今は違う。その時間を楽しんでも、いいのだ。
そう認識しながらも、おそるおそる尋ねる。
「私も、一緒に行ってもいいですか？」
「もちろんだよ！　撫子ちゃんはどこか遊びに行きたい場所ある？」
「待つんだ、優子。私は部活の合宿が登校日まであるから、それ以降がいい」
友人たちの笑顔に囲まれ、予定を決める。そんな当たり前の光景

を、今まで見たことも、その輪に入ることがなかった。
いや、そんな光景を無意識に見ようとしなかった自分がいたのだろう。辛くなるから、期待してしまうから、羨ましいと思ってしまうから、楽しそうな他人の日常を見ることを心が拒絶していたのだ。
緑が多くあった遊歩道を抜け、現代的なコンクリートの街並みに変わると、ふとビルとビルの間にある狭い路地に目がいく。
思い浮かぶのはそことは別の路地裏での出会い。
（全部、あの路地裏から……進と出会ってから……）
目を閉じれば、思い出すことができる。そんな昔ではないのだが、自然と遠い昔のように感じるのは、この二カ月ほどで体験した事件の密度が濃かったせいだろう。
「……撫子！」
そうそう、こんな感じで危険なので避けろ！　的なニュアンスで名前を呼ばれることが多かったな。
「そこ、どけぇ！」
うんうん、ドスを利かせた男の人の声で罵声を浴びせられたり。見ていた路地裏からアタッシュケースを抱えた、いかにも極道です、と言わんばかりのはだけたスーツ姿のお兄さんが出てきて……
ガチリ
「ああ、こうやって銃をこめかみに突き付けられたことは、無かった……た、な……？」
「何をボケてますのっ！」
「やかましいわ！　ボケぇえ！　黙っとけぇ！！」
命を何度もとられかけた思い出に浸り過ぎて、反応が遅れた（？）ので、されるがままに人質にとられた私。
「撫子！」
「撫子ちゃん！」
「じっとしとけよ！　騒がなければ、悪いようには……なんだ、ねえちゃん？　そのうんざりしたような面（ツラ）は？」
自分で言うのもなんだが、決して美少女がするようなヒロインめ

いた表情ではなく、どこか諦めたようなうんざりした顔になっているのだろう。

言ってしまえば、「またか」。そんな表情にもなる。

（進と出会ってからは普通の日常に戻りましたけど、なぜか事件に巻き込まれる率が多くなっている様な……）

この場合、泣きわめいたりするのが鉄則？　なのか、拳銃を突き付けるお兄さんの表情が変な奴を見る目になったが、それも一瞬。すぐさま、路地裏から飛び出してきた時のような余裕ない、何かを恐れているかのような表情で辺りを見回す。

「何処だ！　どこに居やがる……！　勘弁してくれよぉ！」

「？」

息があたるほど近くにいる私にしか聞こえないような小さな悲痛の声を上げるお兄さん。誰を指しているのか？　その答えは、目の前の闇が貯まる路地裏から聞こえてきた。

「ここにいるだろ。獲物（ボーイ）君」

闇から出てきたのは、黒いスーツにロングコートの男性。一瞬、身近な人物にも見えたが、声は野太く、身長も彼より大きい。別人だ。

未だ高く上る夏の太陽の日差しを受け、その姿をさらす。

整えれた顎髭と髪に、人が良さそうなやや垂れ目の白人の中年男性。頭には服（スーツ）には似合わない黒色のカウボーイ・ハット。

その私が知っている黒い人よりもさらに黒い男性は、ブラウンの瞳でお兄さんを見つめる。

「さぁ、そのアタッシュケースを渡してもらおうか？」

「ノーブルマン……ハンター」

ローザが目を細めて、出てきたおじさんを見る。ならば、今のが名前だろうか？　でも、貴族（ノーブルマン）の男？

流暢で柔らかな印象を持たせる日本語で、語りかけるハンター。

それだけで、お兄さんの体温が下がったのを感じ、頭に汗が、凄い量の汗が落ちてきた。

「く、くるな。たのむぅよぉぉ！　くんなよぉぉぉ！　こ、殺すぞ。この女を、そ、おっそそそそうだ、殺されたくなかったら近づくなぁぁぁぁぁ！！」

人質にとった私の価値が、あの人に通じるかどうかを考えぬまま、焦り、狂うように声を上げるお兄さん。

そんな彼の脅しに何の感情もないのかハンターは、肩をすくめて溜息をつく。

「それは困るな。美人は世界のかけがえのない財産だ。打つのなら、私にしたまえ」

そういって両手を上げたハンター。それを見たお兄さんが猟奇的に笑う。それは勝者の頬笑み。

「……そうか、じゃあ死ね！！」

そう言って、私のこめかみから銃を外すと、無抵抗の体勢であるハンターに銃を向け、引き金を躊躇(ためら)うことなく引いた。

すぐに響く一つ分の銃音。

騒然となる現場と野次馬たち。

そして、

「ほら、危ないだろう？　素人が銃を撃つと…」

いつの間にか、私の目の前にいたハンターとお兄さんの持つ銃が“バラバラ”に分解されたのはほぼ同時だった。

（え？）

私が視認した時にはすでに綺麗にパーツに分けられていた。ならば、解体した時間は刹那に等しいということになる。この尋常ならざる神業と、彼から漏れ出る怪しげな存在感、間違いない。

「ほら、こうだ」

ちゃりん、ちゃりんと拳銃の小さな部品がコンクリートに落ちる音にようやくお兄さんの時が動き出した。まず最初に動揺。その隙に私は彼の束縛から逃れる。

「は？」

「イイのかな？　ガラ空きだが？」

次に腹部にハンターの拳が深く潜り込んだ衝撃に、白目を剥きながら苦悶の表情。さらに次はなく、そのまま意識を失いながら地面へと倒れた。

一瞬すぎる出来事に、静まりかえっていた世界は事態の理解を始めた人々によって急速に沸き立つ。

騒ぎ立つ野次馬、響く歓声。

「撫子ちゃん！　大丈夫!?　怪我は！　ああっ！　髪に汗がいっぱい！」

「……また、助けられなくて……うっ、撫子。クサイ」

ひどい。だが、確かに臭う。

「……無事のようですわね」

事後確認のように淡々と確かめもせずに声をかけてくるローザ。彼女の目線は別に向けられている。

「で、どうして貴方が日本にいますの、ハンター?」

「おお、やはりレーリス嬢。その美しさ、見間違いはなかったようだ」

どうやら二人は知らぬ仲ではなかったようだ。でも、二人の間には安穏とした雰囲気は一切ない。あるのは疑惑と腹の探り合いでもしているような重たい空気。

「質問に答える気はないのかしら?」

「いいえ、そんな気はありません。しいて言うなら仕事でしょうか?」

「仕事?」

「ええ。私もレーリス嬢と同じく雇われ動く身ゆえ」

肯定しながら、お兄さんが持っていたアタッシュケースを拾い上げると、留め金をゆっくりと外してゆく。

「それは、なんですの?」

「言うなれば宝。または……」

アタッシュケースの中身を見せるようにこちらに向け、開く。そこには。

「遺品、“遺産”でしょうか」
金。金の延べ棒。金塊がぎっしりと詰まっていた。
それも、“あるマーク”が入った金の塊。
「わ！　嘘！」
「これは、凄いな……」
裕福な家庭とはいえ、一般人の二人のは衝撃が強すぎたのか、息をのんでその財宝から目を離すことができないようだ。
「貴方が金銭目当てなんて考えられませんけどね」
「ははっ、耳に痛い。あや？　そこのお嬢さんは大丈夫ですか？」
「？　撫子？」
意識と呼吸のすべてが一点に集中される。私が目で捉えているはずなのに、心がそのエンブレムに囚われ、これまで見てきた恐怖と絶望に、目を離すという選択肢を奪われる。
息がつまるような動悸と息切れをする私を、残りの二人が怪訝そうに見る。
親友二人同様、私も金塊から目が離せない。
ただ二人と違う点と言うなら、彼女たちは金塊全体から目が離せないのに対して、私は金塊に押されたマークの一点から目が離せないでいるところだ。
すると、ふいにアタッシュケースの蓋が勢いよく閉じられる。
「あッ」
「……少しお嬢さん達には刺激が強すぎたようだ」
「……」
我に帰る三人の内、顔から汗が滝のように流れ出る私をローザが探るように見つめてくる。それも数秒で、すぐさま対象を変えたローザが話を戻そうと、未だ意識を失っているお兄さんを抱え上げたハンターを問い詰める。
「それが、本当にお仕事？　さすが……」
「ローザ嬢はこれが何なのか、ご存じではない様子だ。なら、観光もこれまでにして早く英国に帰ることをオススメしましょう」

「なんですって？」
「ここはもうすぐ、ハイエナたちの戦場になるのですよ。……まぁ、そこのお嬢さんはこれが何なのか知っているようですがね」
スッと雑踏の中へと入って行くハンター。あれほど目立つ外見で、肩に男一人抱えているというのにスグに見えなくなっていく。人を隠すなら人の中、と言うが自分をあれだけ隠せる存在は見たことがない。
「……どうして、今さら」
私は雑踏に消えていった背中に問うように呟く。
彼の最後の言葉。
ローザにはわからなかった価値。
だが、私にはわかった、あの金塊の価値。
金塊そのモノではなく“彼の遺産”という意味で。
「撫子！　貴方なにか…」
「何やってんだ？　お前ら」
えっ、と後からの声に振りかえる。
問いつめようとしたローザも、優子も智子も目に入ったのは黒いコート、ではなく白いシャツ。
この暑さ厳しい夏に相応しくない青いジーンズと流石に熱いのか、白地のワイシャツの袖をまくり上げている。いつも上から二つほど開けた状態のボタンも、今日は盛大に四つ以上開けている。
黒い髪と、見下ろしてくる二つの、いつもより鋭さが半減した紅い瞳が印象的な青年は、凄く有名な安いアイスバーをかじりながら、めんどくさそうに聞いてくる。
「お前は、ほんと巻き込まれる天才だな」
「進……」
進・カーネルが黒いコートを肩にかけて、そこに居た。
「進？」

「あ、この前のヤクザっぽい人だ」
「……こんなに優しそうな、お兄さん指さしてヤクザっぽいは無いだろ。ご近所でも有名なんだぜ、進はまるで聖人君主がいたらこんな奴だな～、とか」
嘘つけ、間逆のくせに。
「誰が間逆だ」
「どうして！　いつも私の心があ、ああ！　止めてぇ、止めてください。髪をワシャワシャしないでくださいぃぃ！　臭いが！　臭いが着いちゃうぅ！」
ついでにアイスの汁もかけようとする進から、女三人が協力して私を救出してくれた。
「……はぁ、はぁ……ど、どうして進がココにいるんですか？」
「いちゃ、いけねぇのか？　暑かったからアイスを買いに来たんだよ」
ホラっ、と紙袋を持ち上げる進。中には複数のアイスがぎっしり。
「ついでにアルバインの奴に何がイイって聞いたらハーゲン●ッツだとよ。しかたねぇから日本の百円アイスの実力を見せてやろうと思ってな」
「はぁ……」
野次馬も去り、何事も無かったように戻る人と街。その雰囲気に聞く気をなくしたのか、ローザがムくれたように虚空を見つめていた。
すると、
「ねぇ？　撫子ちゃん。このカッコイイ人、だれ？」
「そうだな。紹介してよ、撫子」
彼を知らない二人が興味津々になっていた。
（たしかに二人にはきちんと紹介したこと無かったが……カッコイイのだろうか？　このイジワル魔王）
興味の対象となっているとは知らずに、アイス棒に当たりが出たことに驚いているこの人を紹介してもいいが、ついでに住所も聞か

れたらどうしよう？

それはつまり、私の住所ということに、なる……。

「彼は進・カーネル。私たちの住んでいる借り家の大家ですわ」

ローザ！？

さり気なく、薄紙（オブラート）に包んで話している気配もある。だが、外国生まれで、危険地帯に平気で入ってきて順応した魔術師であるローザのことだ、“あの”場所に関してなんら疑問も持っていいまい！

「え？　じゃあ、撫子も一緒ってこと？」

「そうなりますね」

「この近くなの？　行ってみたいよ！」

元お嬢様の家がどんなモノか知りたいと、眼をキラキラさせて喰いつく優子と智子。

まずいっ！

「ええ、この先にあるソ…」

ソ！？

「ソフトクリームがおいしいアイスクリーム屋の横を曲がって」

ほっ、と一息。少しは気にして……

「めんどくさいので、省略してソドぉ」

くれてる訳が無かった！！

各部筋肉を出しうる限りの出力で、駆動させる。再びアイスを舐めだした魔王みたいな奴と微妙に天然な金髪娘の首根っこを掴み、急速ターン。

「夏休みの予定は、登校日にでも話し合いましょう！！　ええ！そう！　ソレが良い！！　お、おほほほ！！　ご機嫌ようですぅぅ！　ほんとに、本当に……ごめんなさぁぁぁぁぁい！！」

緊急のためかいつもの三倍以上の力をもって二人のお荷物を引っ張って走り出す。さりぎわの友達への挨拶の最後の方はほとんど懺悔になったのは、嘘をついている私の後悔故か。

すごいスピードで駆けだした私をポカンとその場にとどまる、友達の姿が見えた。

友達に嘘をついていなければならないこと。それがとても心苦しかった。

第三次世界大戦を起こしてしまったこの世界では、技術水準などは上がっているが、別に空飛ぶ自動車が復旧していたり、家のすべてに猫型ロボットがいることは、ない。二十一世紀初頭とそこまで変わったことがないのが実際だ。

ただし、新たに生まれた場所はある。

戦争による死傷者は、過去の大規模戦争に比べれば少ない、と言われている。それは破壊兵器への防衛対策の技術力が向上していた点が大きいだろう。それほど無かった地下シェルターも今は当然のようにあちこちに設置され、普通のご家庭にもあるくらいだ。

しかし、戦争で外の建築物は躊躇いなく破壊され。高威力の兵器になす術もなく破壊され、傷跡を残している地も多い。

その中でも日本の首都、東京に出来た傷痕は大きく、２３区の台東区を中心とする西側のほとんどは復興の目処が立たないと判断され放棄・隔離された。

それは化学兵器の使用された痕跡や戦後の補償金等もある政府には復興に回すだけの財源が無かったのが大きな要因であった。

そうして、人々はそこから渋々出てゆくこととなり、隔離区は出来上がった。

だが、そんな隔離されていたはずの地に住みだす者たちが現れ始めた。

「ぜぇー、あああ。ココまで……くれば、大丈夫でしょう……」

「……撫子。お前、時折すごいよな」

住みだした者たち。彼らの大半は安住の地を持てない外国からの流れ者、戦災により土地を追われた戦争被害者、事情により日の下を堂々と歩けないようなならず者など。

「なんで逃げなければなりませんの？」

それだけならよかったが、彼らは“隣国”となった日本に被害を出し始めていった。日本の領域にありながら、国の法が適応されない無法の地から、易々と国境を飛び越えてくる者たちに日本の人々は被害を被っていった。

増える犯罪や暴行等に日本のみならず他国からも批判を受けた政府は隔離対策として対象地区の周囲にビル二階ほどの高さの壁を作った。それ以降、犯罪傾向は減ったとしている。

それからは、隔離区に対する日本人の見方は変わった。可哀想な者たちが居る地から、犯罪者が集う最悪の地と言う見方に。

そんな場所に、私はある理由から住んでいる。

「もし、ここに住んでるなんて知られたら……どんな目で見られるか、わかりません」

「そんなの気にしなければいいのですわ」

「一応、格式が高めな進学校ですよ、私たちの学校。バレたら、退学になるかも」

「……それは、まずいですわね」

隔離され壁に覆われた地のことを正確に確認することが出来なくなったために、自然と悪い噂ばかりが流れ、気がつけば、勝手にある時から皮肉めいた名前で呼ばれるようになっていたそうだ。

多くの人々が心乱れたため、かつて神により燃やされたと言われた場所、神に見捨てられた者たちの巣窟の名を。

人は言う、そこには死体が石ころのように転がっていると。

人は聞く、そこは一日中、銃声が鳴り響いていると。

人は語る、あそこは常識が呆れかえり、どこかに去ってしまった場所だと。

いつしか、人は隔離区を“ソドム”と呼んでいた。

そんな無法の地にある事務所のニ階に私は住んでいる。

つまり住所不定者なんです、私。

海外に本籍地を持っているローザが羨ましかったりする、高校二年の夏である。

……悲しくなんか、ない、ないもん！

「うわっ、本当ダ。進、このアイスおいしいネ。これが百円とは、すごいな日本」

ところ変わり、家主である進が事務所と呼ぶ場所。

その広めの空間の中央にソファは三つ、その奥に進のデスクがあり、四角いガラス製のテーブルを囲むように相対している。

その向って右側のソファで王子様がアイスを食べていた。

細い顔立ちに、サファイアを沸騰とさせる青玉（せいぎょく）の瞳と優しい色のストロベリーブロンドの綺麗に整えられた頭髪。

おとぎ話に出てきそうな王子様のようで、実は騎士にして貴族の称号を持つ“アルバイン・F・セイク”は白いポロシャツに黒い半ズボンというラフな格好で、この場所に馴染んでいる。

「そうだろ。ならこれ以降、高いアイスをねだるな」

「でも、アレも食べたいナ」

「それなら、そこのポンコツにでも頼めよ」

「なんで私、何なんですか！？　ローザに頼んでください」

「……私（わたくし）、よくお金持ちと間違われますけれど、全然、余裕がない労働者ですわよ。この百円アイスも高価に見えるのが悔しいくらい……」

そういうどこぞのお嬢様でも滅多にいない、美しい外見の美女である“ローザ・E・レーリス”は実は苦労人らしい。

本人に聞いたら、家と呼べる場所もなく、今も生活費などすべて自分で稼いでいるそうだ。彼女がいま着ている服も、ソドムで買った安いTシャツに体育用の半ズボンである。

それでも彼女が着ると高級ブランド品に見えるから不思議だ。

一応、冷房機がある事務所の一階で涼みながらアイスを頬張る四人。と……

「いやぁ～！　夏はアイスと扇風機に、クーラ～ですねぇ～。こ

れぞ、日本人のだいご味！」
「……体を肉抜きして、風穴空いたら、もっと涼しくなるから手伝ってやるよ」
ソファーに座っていた進が、素早くとりだした銃の引き金を、躊躇(ちゅうちょ)なく引く。
狙いは対面するように座っていた私、の斜め後ろ。に、いつの間にか居たハジさん。
「い、よっと」
それを華麗にバク宙でかわすハジさん。ソドムでも名のある情報屋にして安物雑貨屋の店主である彼はこうして進のちょっかいをかけては進に撃たれている。だが、これまで彼の銃で撃たれているが当たった試しがない。
当たらなかった銃弾は、そのまま標的を通り過ぎて、事務所のドアへと直撃。ドアの一部を抉るように貫通する。
「ああぁ！　ドアが！？」
「……撫子さん、アッシが撃たれた事を心配してくれないんですかぁ？　うぅぅ、早くも旦那に毒されて」
いつも、いつも誰が直してると思ってるんですか！！　うぅぅ、なんの怨みがあるんですか……。
「おいおい、家の労働力撫子を泣かすなよ……」
「誰が一番泣かしてると思ってるんですか！！　それに進(しん)！　今、私の人権を無視した意味を感じましたよ！」
「それは、置いといてぇ～」
「ハジさんまで！？」
もういいですよ、とドアを直すべく立ち上がる私。部屋の隅に作られた収納スペースから簡易大工道具を取り出し、穴を塞ぐベニヤ板を取り出す。あ、釘を打っても貫通しないように端材を……
「本題は何だよ。まさか、アイスのタダ食いだけじゃないんだろ？」
「……うぅん」

「よし、アルバイン。そいつの体を押さえろ、俺が首を断つ」
「待った！　旦那ぁ！　冗談でやんすよ、本気にしないで！！
え、アルバイン氏？　なんでアッシの腕を掴んでるの？　ローザ嬢
！？　やめてぇ！　暑い、熱いぃぃぃ！！？　溶けた銅は止めてぇ
！　いやぁぁ助けてぇ……あれ、撫子さん！？　どうして向こうに
行っちゃうの？」
「え？　ドアを直さなきゃいけませんし」
「づぇぇ！？　アッシの存在価値、ドア以下ぁ！？」
いつものやりとりを聞きながら、思う。アルバインもローザもこ
この順応してきているな、と。
息も絶え絶えになるほど抵抗したハジを三人は解放する（進だけ
がマジで大剣を抜いていたのは無視する）と、元の定位置に戻って
いく。私は手慣れた動作でドアの改修作業をしているため、彼ら三
人の会話を遠くから聞いている状態になる。
「で？　本題は？」
静まりかえる室内。その緊張感に何かが起きると、確信できる。
そんな部屋に満ちる空気を作りだしたハジは掌を進に差し出す様に…
「本“題”を“ちょうだい”とか……言うんじゃ、ないよな？」
あらゆる意味で、進の言葉に部屋の時間が止まる。
微妙な空気が室内に満ちる。一人を除いた全員の視線は、除かれ
た男、ハジへ向う。
ハジは。
「……テヘッ」
「殺せ」
進の合図に、私を含めた全員が武装を瞬時に展開。ちなみに私の
武器はカナズチ。
「タンマですっ！　悪かったですぅ！　だって！　アッシ、二章
で全然出番なかったしぃ！　目立ちたかったのにぃ！　何でやんス
かアレ。どっかの飲茶（ヤムチャ）じゃあるまいし……」
「本題は？」

進が目に本気の殺意を抱えだしたため、言葉なく土下座するハジ。すぐに無駄な挙動なく立ち上がり、座り直す。

「えーっと、旦那？　最近、ソドムがずいぶん騒がしいと思いやせんか？」

「騒がしいもなにも、毎日のように銃声が聞こえてんぞ」

「それは、いつもでしょう？　最近ですよ、さいきん」

ハジは、座るソファーの沈み込みに抗うように、前のめりになる。それは逆に進を伺う姿勢のようにも見える。問いかけるような、またはお前が渦中の存在だ、とでも言うように。

「最近、ね？　さてな、いろんなことがあり過ぎてな。一々（いちいち）、覚えてられねぇって」

「にゃ、ははははっは！　そういや、そうでしたねぇ～」

快活に笑って、ソファに倒れるように背を預ける。そして、首を上に向けて、話を始める。まるで全体へ降り注がすように、この場の全員に話かけるように。

「……最近、ある代物が出回り始めてるんっすよぉ。くだらないガラクタから、金銀財宝、または“使い道が判らない”ような不可思議な代物まで」

ハジの言葉にいち早く反応したのはローザ。ピクリ、と肩を震わせたのが一瞬見えた。

「それらは、一見して関連性の無いモノばかり何ですが……最近、出所が判りやしてね。わかったら、わかったで今度は争奪戦みたいなモノまで始る始末でしてぇ」

「争奪戦だっテ？　何処と、どこガ？」

アルバインも争奪戦、という物々しい言葉に反応を示す。正義の騎士である彼ならば、当然の反応なのだろう。

「いろいろですね。ヤクザな奴らから、政治家。一般人もいましたね。最後のはコレクターですがね」

「収集家（コレクター）？　そこまで価値が判る者たちが参加しているということは歴史的なものですの？」

「歴史がある、と言われればありやすね」
「もういい、遠回りなのはキライだ」
ハジの説明の遅さに業を煮やしたか、簡潔な説明を求める進。紅い瞳がハジを睨む。それに動じず、圧力的な進を真正面から見つめる。彼が帽子を深くかぶっているため、ハジの目と紅(進)の目が合うことはない。だが、はっきりと重たい間を挟んで、簡潔に答えを出した。

「ドレイクの遺産ですよ、旦那」

「っ！？」
私の心臓の鼓動を“完結”させかけ、絶叫しそうになるのを懸命に堪える。
皆から離れた場所にいたためか、私の変化に誰も気がつかないまま、単語の意味を計る三人。
「ドレイク？　あぁ、ドレイク・Ｖ・ノスフェラですわね。たしか、二か月ほど前に飛行機事故で亡くなったとか。けれど……」
ドレイク・Ｖ・ノスフェラ。
世界的な大企業ドレイクカンパニーを一代で作り上げた、やり手の大社長。高貴さに溢れた、だれもが模範とするべき存“だった”と人は言う。
それが突然、死去したという報告が世界を駆け巡った。彼の所有する飛行機事故に巻き込まれたという内容だった。
「あのドレイクが飛行機事故“程度”で死ぬとは思えないナイ、というのが我々(騎士団)の見解だったヨ」
「気が合いますわね。そうでしょう？　だって、彼は“吸血鬼”ですのよ」
そう、世界的に知られる大企業の“元”社長の正体は、吸血鬼。

それも強大な力を持つ、吸血鬼の長。
彼はその力と財力を持って人の世界を己の支配下に置いていた。
それが人の世界の経済一端を担う存在として君臨していることを幾人かは解っていた。だが、人に害なす存在であると正体がわかっていても、世界は彼を放置した。
彼がどのような非道を起こしていたとしても、人の世に繁栄をもたらす存在であるとして、人々は誰も彼を咎めずにいたのだ。
そうやって、世界は彼のエサ代として、多くの命と、一つの家族と、ひとりの少女を生贄にした。
「あの気持ちの悪い髭オヤジと一度だけ会ったことがありますけれど、視ただけで吐き気がするほど、血臭がしていましたわ」
「彼はどんなビンゴブックに載っていたとしても、国家が保護していたから、誰も彼に手が出せなかっタ。それに出せたとしても、彼は純血の吸血鬼ダ。敵う存在がいるとしても、騎士団の副長か騎士団長クラスでなければ太刀打ちできなイ」
純血の吸血鬼は、心臓を破壊されない限り死ぬことはない。始めから死そのものを内包した呪(のろい)の塊であるからだ。しかも、心臓を破壊しようとする武器を簡単に呪いで溶かし、どんな武器であると心臓を破壊することは出来ない。
斬ることに成功したとしても、切り裂いただけでは心臓はすぐに傷を塞ぎ、再生してしまう。それに加えて、人を小指で殺せるだけの豪力と吸血行為による奴隷のような巻族作り出す能力を併せ持つ。それにもう一つ彼にはある能力があった。
まさに無敵の存在。
それなのに、彼は殺された。
「私(わたくし)、思いますの。彼はまだ生きていて、地下に潜っているかもしれませんわ」
「僕もまだ生きていると思うナ。彼が簡単に死ぬなんて思えなイ」
彼らの意見ももっともだ。だけど、彼は確実に死んだ。なぜなら……

「ホントに死んでますよぉ、彼」

断言したのはハジさん。そんな彼を馬鹿にしたようにローザが理由を聞く。

「貴方、冗談が好きですわね。だったら、彼はどうやって死にましたの？　まさか、人に聞きましたでは済みませんわよ」

おもしろのを期待しますわ、と上から目線の彼女に淡々と説明を始める。

「彼は、作った配下のほとんどを切り裂かれ、吸血鬼としての能力も、彼自身の誇り、そして彼が育て上げた存在をもろとも奪われ、切り捨てられ、最後は自身の血が“拒絶”されてこの世から滅殺されました。めでたし、めでたし」

「そ、それは。い、いえ！　心臓をどうやって破壊しましたの！？　聖剣クラスの神話武装でやっと殺せるか、傷つけられるかどうかわらないと言われている呪いの塊を壊せるだけの武器が現世にありましたの？」

あまりにハジが見てきたかのような自信で話すので、動揺するローザ。神話武装というものが何なのかわからないが、たしかに“アレ”は心臓を切り裂いた。それは見ていた私が……アレ？　そういえばハジさんって、あの場にいました？

そんなお互いの意見の討論状態になり始めた場を、話題の吸血鬼を殺した張本人が元に戻す。

「どうでもいいだろ、そんなこと。今はその遺産がどうして問題になっているか、だろ？」

脱線をはじめる全員を止めたのは、あの時に渦中の中心人物であった進。彼は睨むように二人を威圧しながら、ハジに話を戻させる。

今はいない吸血鬼の、そのために“遺産”とよばれている事を考えれば、世間一般でも死亡したことが認知をされていると言える。あれから二か月、もう記憶の片隅で消えかかっていた悪しき記憶がよみがえる。

どうしてあの人は、死してなお、私を苦しめるのだろうか。

「彼の莫大な資金や、固有資産のほとんどは彼の会社や他方の恵まれない方々へと分配されやした。けど、後から世界に回しちゃならない物がいろいろ見つかったんですよ」

「たとえバ？」

「う～ん、歴史的な場所から奪われて、所在不明だった金銀財宝。魔道に関わる者なら誰もが欲しがるアイテムから聖遺物。各国の機密情報をまとめたレポートなんかですかね。それと、噂話ですかね」

「噂？　それがどうして回しちゃいけないカテゴリーに入ってますの？」

「その噂が今回、依頼したいモノなんすよ」

「どういうことだ？」

またロクでもないな、と言いたげな顔になる進。幾度となく、面倒事に巻き込まれた末の直感が彼の顔を歪ませる。

「遺産の大半はどこぞの組織等がかっぱらっていきましたが、その噂話のモノだけが見つかりません。だから、それを求めて、世界各国から組織の下請けやら、雇われ人がドレイクが最後に住んでいた日本に来てるんですよ。おかげで平和な日本は今はアウトローの巣窟。みんな欲望で目をギラギラさせたような連中が歩きまわってるんすよ」

「不確かな噂だけデ？　ハジ、それは何なんだイ？」

根拠もなく言いふらす話が、噂だ。それなのにハジが言った組織などが動くということは、それほど価値のあるモノか、それともハッキリさせねばならない危険な代物なのだろう。平和に貢献する騎士であるアルバインが気になるようだ。

「流れた噂話の内容は、十数年前にドレイク卿が記したとされる書記の一文です。それに簡潔に、だけれども歓喜したような走り書きで、こう書かれていたそうです。……ついに私は、“金狼”を手に入れた、と」

事務所が一瞬にして静寂になった。

“金狼”

それが、いかなる意味なのか私には判別が出来ない。だが、彼らの反応をみればいかにそれが凄いモノなのかわか…

「「何、それ？」」

……わかんないのか。

「……で、それをどうすればいいんだ？」

他の二人と同様に、価値が判らなさそうな進が依頼内容を確認する。ハジは頷き、詳細を話す。

「ドレイクの遺産といわれる、金狼。それを安全に確保し、旦那に保護してもらいたい。それが今回の依頼内容でやんす」

「保護？　どうして俺が？　テメぇに渡せばいいだけだろ？」

確かに、依頼人が損ばかりで得が無い。

「だってぇ、そんな訳わかんないもの持ってたら、どんな不幸が舞い込むかわからないですしぃ」

なるほど、と思ってしまう。そんなハジさんに銃を素早く向ける進。イライラメーターが頂点まで一瞬で満タンになったようで、額に青筋が浮いている。

「……どうして俺が不幸を率先して抱え込まなきゃならないんだ、あぁっ！？」

「やだな、似た様な“者（モノ）”を抱えてるじゃないっすか？」

そうだ。進はドレイクの遺産の最たるモノを抱え込んでいる。彼が死ぬ間際に渇望した“一完璧に成り切ることが出来なかった存在《九重　撫子》”を。

“モノ”と聞いて、アルバインとローザは進が持つ二つの武器に視線を向ける。それが彼の遺産とでも勘違いしているからだろう。

だから、次の進の言葉の意味が判らなかったようだ。

「撫子、お前はどうしたい？」

今まで蚊帳（かや）の外であった私に対する進の問いかけ。進が関われば、いつか私にも関わり合う機会が訪れるぞ、と彼は言っているの

だ。
進の胸中は計れない。彼の紅い目は、ただ挑む様な姿勢を見せるのみ。私がどうしたいのか、それだけを聞きたいことだけはわかった。
「私は……」
私以外の全ての視線が私に集まる。
どうしたい？　そんなの関わり合いたくないに決まってる。彼の遺物の一端にでも触れてしまえば、あの吐き気がこみ上げる毎日を思い出してしまいそうで嫌になる。
だとしても。
「進、依頼を受けていただけますか？」
「いいんだな？」
「私はもう完璧なお人形じゃありませんから」
そうだと。私は二か月前に彼と決別したのだ。ここで弱気になれば、救ってもらったことに対する侮辱だ。
私の心を探ろうとする目と笑顔の余裕を見せる私の目が交差する。
進の決断は一瞬。
「……そうかい。ハジ、その依頼を受ける。いいな？」
「そ～こなくっちゃ。一応、こちらで把握した情報はそちらに渡していきますんで」
「アルバイン、ローザ。お前らはどうする？」
「僕は協力するヨ。義務でもあるし、なにより個人的にも貢献したイ」
「私（わたくし）も参加させていただきます。ハジ、成功報酬はいただけますのよね。先に見積もりを……」
アルバインは誇らしげに参戦し、今月金銭的に厳しいローザはもともと受けるつもりであったようなので早くも契約内容に飛びついていく。
ドレイクの遺産、金狼。それを確保し、保管。危険とあれば破壊。
依頼を受けた三人は早くも作戦会議を始めていく。

私はその輪に入らずに、部屋にある小さな窓から空を見る。時間はすでに夕刻、一番星が姿を現し、月がその姿を強調させている。不完全ながらももうすぐ完全に円となるその形を見れば、明日には満月となることがわかる。

そんな月を見て思う。私は今、幸せなのだと。

あの吸血鬼に囚われ、完璧を強要されていた頃。あの牢獄に等しい、宛がわれた部屋から月を見ると自然と悲しくなって泣くことが多かった。

今は、月がほほ笑んでいるようにすら見える。そう思えるのは私が今、幸せで、不安がないからだと思う、いや、そうなのだろう、きっと。

ｏｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｎ

その時、遠吠え？　が聞こえたような気がした。どこか耳にかすかに届いただけの音。だが、意識の片隅になぜか残る音。

進たちの方を見てもこれと言った反応はなく、話し合いを続けている。

（気のせいでしょうか？　……そうですね。きっと、いつもの銃声でしょう）

耳に残る音が、どこか問いかけるような音であったこともすぐに心の片隅へと消え、私はドアの補修に戻ってゆく。

その際、もう一度だけ窓へと目を向ける。窓の外には壊れたお隣の家と、月があるのみ。

どうして気になったのだろうか？

その音に、まるで問いかけられているようで。

今、幸せですか？　そう言われている気がしたから……

そんなことはないか、と私は仕事と化したドア補修へと戻っていった。

そんな私を、今は、月だけが見ていた。

次話へ。

2、吸血鬼の遺産（後書き）

大学時代、友達に誘われてｐｉｘｉｂをやっていたことをなぜか思い出し、二年以上ほったらかしていました。

ここと同じ名前でやっているのですが、わたくしとても画力がありません。

ですが最近、メールの更新や、パスワードの変更の通知などに一週間ほど費やした身としては、何とかあちらもやっていきたい、と感じた、今さっき。

ｐｉｘｉｂの方で小説も上げられるらしい。とのことで、こちらで上げる予定であったｃｏｎ－ｔｒａｃｔの短編などをあちらにいつになるかわかりやせんが、載せていこうかなと思います。その時はどうか、機会があれば読んでくだされば幸いです。

あと、今まであえて直してこなかった過去の文の修正等を行っていこうかなと思います。あえて、自戒で直しませんでしたが、とても恥ずかしいので修正を。内容的には変わりませんが、間違いを直した文を見てくだされればこれも幸いです。

3、明色の出会い

3、明色の出会い

東からの強い日差しが部屋を燃やすように入り込み、部屋の中を明るく照らす。

ダイニングもキッチンもない、小さなリビングと備え付けのトイレだけの空間。部屋の家具もほとんどなく、小さなテーブルとパイプ椅子に、教科書類が積まれているのが唯一のインテリア。

いや、もう一つあった、等身大で投影することが可能な縦長の大きな鏡がある。そこに映るは布一つ巻かれぬ、生まれたままの姿で写る少女。

日本人には珍しい艶のある亜麻色の地毛が腰まで流れ、体つきは柔らなバランスの取れたライン。身長は高めなのだろうが、長身とは呼べない程度。顔は温厚そうな笑顔が似合うだろうと断言できる温和な顔立ち。

自己の評価ではこれくらいだ。自分で自分を褒めることに慣れていない人間なのだ、九重（私）撫子は。

簡素な白地の下着に足を通し、朝の日差しに眼を向けて眩しさに瞼を細める。同時に床に置かれているソドムの市場で安売り品ではあるが、初めて自分で買った清楚な（質素とは考えない）シャツと藍色のミディサイズのスカート（地味かな、とか考えてない）の方へ眼に入る。

一週間ほど前に買えたのだが、何やかんやで着るのは今日が初めて。それが堪らなく嬉しいと思い、自然と笑みがこぼれる。

なにせ、今までは宛がわれた服しか着ることが出来なかったのだ

から。
　ゆっくりと服に近付き、腰を折り、下ろし立ての衣服へと手を伸ばし
「おい、撫子。お前、今日どこか行くのか？」
　ノックも何もなく、一進がドアを唐突にあけやがりました。
「……」
　お尻を彼の方へ突き出すような形で数秒停止した。頬の方へと血が巡り抗議をしかけたが、声が出なかった。なんせ
「俺たちは今日の夜は仕事に行くから、適当に飯は食っておけよ」
　なんの謝罪もなく、表情から声色まで、女性の裸同然の姿を視界に入れているというのに無反応かつ、淡白に説明を始める進（この男）に絶句したのだ。
「それだけだ、じゃあな」
　バタンと、ドアを閉め、去って行った進。
　ある事実に愕然となり、私がヘナヘナと崩れ落ちたのすぐ後だった。急に部屋のドアを開けたデリカシーの無さや、言うだけ言って帰っていく神経の図太さはともかく。
（は、裸を見られてなんとも思われなかった……！）
　その事実が、女としてちょっとは持っていた自信を打ち砕いた。のに……
「あぁ、そうだ」
「っ！！？」
　戻ってきた！？　この野郎様は、戻ってきやがりました！？
　進は崩れている私の顔を見ると、呆れ果てたように嘆息後に言い放つ。
「ちょっとは、下着にも金かけろよ。安物ばかりじゃ、体が泣くゾ」
「大きなお世話ですっ！！　なら、お小使いを上げてっ！　その前に、謝れぇぇぇぇっっ！！！」
　怒りにまかせ、和風の布団をそのままドアへと投げつける。だが、

すぐさま閉められたドアに防がれて掠りもしない。
その後、無神経男が戻ってくることはなかった。
17の夏、この日、私は始めて女としての自身を初めてなくした。

「まったく、もう!!　あの魔王っ、あのハデ好きっ、意地悪男！　もう知りません!」
「朝から、騒がしいですわね」
先ほどのシャツとスカートも着て、二階の個室から下りると一階にはローザとアルバイン……しか、いなかった。
「裸でも見られました？　ずいぶん騒いでいたよう……図星ですの？」
苦々しいモノに変わった私の表情を見ると、なぜか私をジト目で睨めつけるローザ。しばらくして、自身の体を一瞥（いちべつ）し、「私（わたくし）でしたら、どうなのかしら？」などと頬赤らめさせながら小声で一人事。
……どういう意味だろう？
そんな彼女は、学園指定の体操服（下はブルマ）を着て、床にどっかり胡坐をかきながら難しそうな分厚い本と睨めっこしている。
椅子に座って紅茶を飲んでいそうな気品あふれる容姿の彼女のそんな姿に異様な違和感を覚えたのも始めの頃、今では普通の光景のようにも思える。
アルバインはポロシャツに白いジャージとラフな格好で、もくもくと腕立て伏せをしている。自室でやれ、と進とローザから散々言われていたが、本人としては誰かに見られながらの方が、意識を保てるらしく、事務所のフロアでやるのが常になっていた。
腕の上下運動を続けながら、顔をこちらに向け、苦笑しながらアルバインが語りかけてくる。
「アハハ、それはずいぶんとシンはおいしい思いをしたようだネ」
「進（あれ）はは、眉ひとつ動かしませんでした……」
「アハハ、ハ……そ、そウ」

怖い何かから目を逸らすように、私から視線を外すアルバイン。
「それはそうと、撫子？」
「なんですか？」
「貴女、どのような経緯でソドム（ココ）に来ましたの？」
「え？」
「進に聞けば、ここに来たのは最近なのでしょう？　それまで何処で何してましたの？」
「そ、それは」
真意を探るように、こちらを見ずに目を話しかけてくるローザ。
何かを自然に探るようなその仕草に、私は息をのんでしまう。
言うべきなのだろうか？　だが、ハジから口止めされている。なにより“ドレイク”という存在に関わり過ぎた私を、私自身が話たくないと感じてしまっている。
だから、嘘をつく。
やさしい嘘を、何よりも、だれよりも、彼よりも私自身に安易（やさし）い嘘を。
「早くに両親を亡くしてから、支援者の方にお世話になっていました。その人が二か月ほど前に亡くなって、それから流れるようにソドムに来たんです」
はにかむ様に、聞いた人が暗い気持ちにならないようにワザと明るく話した。大抵の人はそれを聞けば申し訳なさそうに興味を無くすのだが、やはり不幸の場数が違うのか、ローザは気にした様子もない。もしくは信じてもらえなかったのかもしれない。
「そうですか。変な事を聞いて申し訳ありませんでしたわね」
「い、いえ」
本当に何の感情もなく淡白に返事をするローザ。さすがに何の反応もされないと変な気分になるが、彼女が納得したならば良かったと思うようにし、そのまま玄関へと向う。
「そういえば、撫子」
やはり納得していなかったのか、再度質問を迫るローザ。

「今日は、どちらへ？」
ああ、なるほど。
にぎり拳を胸の前でつくり、奮起するように、何分はじめての事なので興奮を抑えきれない私は、感情を込めて返答する。
「アルバイトです！」

視点変更１

「アルバイト？　あの娘、なにかしてたかしら？」
私の問いで重苦しい雰囲気になったと思ったら、急に明るくなってドアから飛び出して行った変な同居人はなにか働いていただろうか？
「そうか、君はあの時はもう部屋に戻っていたから聞いていなかったネ」
今ではすっかり警戒をなくした騎士、アルバイン・セイクがいつもの基礎トレーニングを終えて自家製のスポーツドリンクを飲みながら話しかけてくる。
この男とは最近まで馬が合わなかったが、今では少しだけこの男のクセがわかるぐらいにまでなっている。
ちなみにむさ苦しくも自室ではなく事務所（ここ）でトレーニングをしていたのは、他人の目に触れながらやっているほうが、集中力が上がるタイプだから、らしい。
「昨日から？　日雇いのアルバイトですか……私も子供のころよくやりましたわ。熊の狩猟をする猟師のアルバイトで、襲われるエサ役をよく買って出たものです。あれは高収入でしたから」
「……君にはたまに絶句するヨ。日雇いというより、初めてのお使いかナ？」
「お使い？」

「昨日、ハジが彼女に頼んだんだヨ。撫子も夏に用事があるからお金がいるようだったから、じゃないかナ」

（そういえば、昨日学校帰りに優子と智子と遊びに行く約束をしていましたわね）

基本、ソドムにいる人間は国籍を持ってはいない。

とある方法で本籍地等を持つ者もいるが、どれも違法紛いの方法で手に入れている。撫子も正規の方法で持ってはいるらしい。それでもアルバイトなど“日本”で働く場合は戸籍情報の提示は必須だ。提示して働けたとしても、いつバレるかわからない。不信感を雇用主に与えた瞬間、すぐさま調べられてしまう。今の時代は特にソドムがあるせいでよく違法滞在者の検挙率が増えている。

それに違法滞在者の情報提供には現代では報奨金がでるため、人々は率先しておこなってくる。そんな世の中だから、撫子は普通のアルバイトに勤めるのは難しいようだ。

しかし、進（保護者）からのお小使いでは現役女子高校生の遊びには一日ともたないだろう。

「どこまで？　小学生レベルで野菜を持って帰ればいい、などではありませんわよね」

「そこまでは……ハジの知り合いの家に、荷物を届けるだけ、だけどネ」

きっと馬鹿にされていますわよ、撫子。

それにしても。

「それにしても嘘をつかれるのは、あまり気持ちのいいものではありませんわね」

「人の言いたくないことを無理やり聞いてはいけないヨ」

「わかっていますわ」

昨日、撫子の様子は明らかにおかしかった。急に金の延べ棒に描かれていたマークに動揺したり、ハジがアレの話をし始めてからは背後で凍りつくように震えていたのにも気付いていた。

理由は、ほとんどわかっている。彼女がひた隠しにしたい秘密も

調べればすぐわかる。
アルバインはともかく、私は彼女と同じ学園に通っているのでよく耳にすのだ。彼女が、あの吸血鬼の保護下にあったこと。それが何を示すのかも理解できる。
「彼女が自分から僕たちに話してくれるのを待つのが、いいじゃないカ？」
言うだけ言ってアルバインはトレーニング用具を担いで部屋へと戻っていった。
「……わかってますわよ」
拗ねたように呟いてしまう私。なんとなく、嫌なのだ。まるで貴女は信用ならないと言われているようで。
「友だち……だと、思われてないのかしら」
恥ずかしくも、暗い自分の思考を振り払うように頭をブンブンと振りまわし、目の前の本へと没頭してゆく。
この本はとても興味深く、面白いのですぐに集中ができた。それにしても、日本人の感性と、表現力、発想力は素晴らしい。
「両手を合わせた姿勢を錬成陣として力を引き出す、その発想はありませんでしたわ」
私は人体錬成で失った対価をとり戻す兄弟の物語に、すぐに熱中していった。

視点帰還1

とつぜんですが、ここは何処？
見たこともない、廃墟同然のマンションが大きめの道を挟み込むように並び立つ長い道。
今は何時？
太陽はもう西へと落ちかけ、建物の隙間から赤色の光が差し込み、

頬照らす。
私は誰？
九重　撫子。花も恥じらう女子高校生。１７歳。血液型ＡＢ。誰も通らぬ、人気がない道の真ん中で佇(たたず)み、目に涙が溢れかけている。
統合的に今の状況を言葉にしてみる。
認める事には若干の勇気がいる。そう、勇気を振り絞るのだ、撫子。よし！
端的につぶやこう。私は現在、
「誰か、助けてくださーーーいっっ！！」
迷子だ。
十七歳にして、迷子になった。
つぶやこうとしたが、勢い余って叫んだ、人生にも最近迷いかけているダメ人間が道の真ん中で嘆く。

時間は昨日の夜に戻る。
ドレイクの遺産の回収の仕事を引き受けた進たちは、現在所有している情報等をまとめた後にそれぞれの時間へと戻っていった。
そのため、今現在事務所には私、進、なんやかんやで夕食を一緒に摂ったハジさんの三人が残っている。

「進」
私は勇気を持って、交渉を決意。ソファに寝そべり新聞を読んでいる家主に声をかける。
進が私の方へと目を下げた。
彼が視線を下げたのは私が現在、地上に跪(ひざまず)いて深深と頭を下げての礼の姿勢、つまり土下座してるためだ。
私はその姿勢を崩さず、勇気を、声を出す。
「おこずかいを上げてください」
「……ぁあ？　なんだって？」

何を言っているのかわからない、そんな声のトーンに再度声を上げる。

「お小遣いを上げてください」

「……ローザやアルバインにまで、渡さなきゃならない理由がわからないな」

すっとボケたトーン。もっと明確に要求を述べなければならない。

「お小遣いの、値上げをお願いします」

「今耳が聞こえづらくてな……なんだって？　もう一度、大きな声で、しっかりと、勇気に見紛う無謀さがあるなら、覚悟があって、さらにほざける意思があるなら、俺の目を見ながら……言ってみろ」

「お、あ、いえ、そのぉ、うっ、うぅう～」

一言、一言に重圧がかかり始めて最後にはドスが入った声で、脅しにかかる我が契約者。

それでも！　私は学んだんです、あの空港で、どれだけ女子のお買いものにお金がかかる事実に。だからこそ言わねばなるまい！

さぁ、ありったけの勇気を持って顔をズバッと上げる。

満面の作り笑顔と、祈るように胸の前で手を組むことを忘れずに。

「お小遣いを、上げてください！」

待ちうけていたのは、満月にも負けないぐらい瞳を見開く、血走った紅の瞳。

「おい、ポンコツ」

「……あい」

「……そのまま、部屋に戻って寝ろ」

「……うぅ」

速攻で切り捨てられ、涙目で言う通りに部屋に戻ろう。やっぱり駄目だった……。

そんな完全敗北した私に、ハジが助け舟を出してくれる。

「あら、あら旦那ぁ。ひどいじゃないっすか、撫子さんが健気にも、一月前の大量出費の件を大きく棚に上げて、頼み込んでるっていうのに……旦那に人の情はないのぉ！？」

助けているようで、助けられていない！　この人敵なの、味方なのっ！？

「毎度毎度、仕事の事前情報に不備がある情報屋には人の情があるのか？　あるんなら、一度銃弾を一発くらってくれないか？　そろそろ、俺も不満が溜まってるんだ」

「旦那、小さな事は“見ずに”流す。これ社会の常識」

「テメェの仕事は、知らなかったら死にそうになるほど重要な情報がいつも抜け…」

「さぁ！　撫子さんにココで提案がありやす」

不自然極まりない会話の流し方に進は肩を落として、銃をハジに向けようとして、止めた。ついに疲れ果てたらしい。それにいつも使う銃弾の経費がもったいないと判断したのだろう。そのまま無視を決め込むように新聞に没頭を始めた。

「仕事をひとつ受けてくださいやせんか？」

「え、私がですか？」

驚きに表情を隠せない。なにせ、いつもハジが持ってくる仕事は無理難題に等しい内容（もの）ばかり。私が知る限り、進の驚異の戦闘能力で何とかなるレベルの仕事ばかりであった。

そんなものできるはずがない。

「撫子さん、なにか勘違いしてませんかぁ？　簡単なモノも仕事として流れても来ますし、旦那がよくやる仕事は大抵がアッシから、旦那に頼んでやってもらうモノばかりですから難しいんです。危険度も高い分、報酬は高額なんですがねぇ」

「それじゃ、私にも出来る仕事があるんですか！？」

パッと明るくなる私。

「いえ、大抵は危ないモノばかりなんで撫子さんじゃ無理ですね」

ガンッと暗くなる私。

だから、と前置きして、懐から電卓を取り出しカタカタと音を立てるハジ。目深く帽子をかぶっているために表情はあまりわからないが、商人じみた頬笑みを作って私に電卓の数値を見せてくる。

「私個人の依頼として、撫子さんにお願いしたいですよぉ。報酬はこれぐらいで」

表示されていた額は、ゼロが四つに、頭に5!?　それは私の一か月のお小遣いの十倍の額。

「待つんだ、ナデシコ。せめて仕事の内容ぐらいは聞いておこうヨ？」

すぐさま、受諾しかけた私を制するのは、今まで夕食の後かたずけをしていたアルバイン。部屋の奥にあるキッチンルームから出てきた彼は、スッとこの場の全員へお茶を手渡していき、そのままテーブルの椅子へと着席する。

「アルさん、ひどいな～。裏なんかありゃしませんよぉ、撫子さんには“配達”をしていただきたんですよ」

「配達？　物品は何だイ？　業者に頼んだ方がいいんじゃないかイ？」

とんでもないっ、と手を払う仕草をするハジ。

「ソドムに配達業者なんかありませんよぉ。あったとしてもいつ荷物を盗むかわからない連中に任せておけませんしねぇ。やるなら自分で届けた方が低価格で安全ですよ」

「なら自分でやればいいんじゃないのかイ？」

確かに。なんとなくきな臭くなってきた。

急に黙るハジに、この場の全員が不信感をあらわにし始める。進に至っては新聞の裏に隠している銃のロックを外したようだ、カチリと小さな音が鳴り、緊張感が増してきた。

「待ってください旦那たち！　別に悪いことはなにも！　ホントですよぉ。実はアッシは届け先にいる方に嫌われていましてねぇ、面と向って話すと攻撃されるくらいでして」

ハジさん、何をしたんだろう。

「それでいつもは知り合いの信頼できる人に頼むんですが、今回はゴタゴタが続いていたり、ドレイクの喪失の際に起こった株価の暴落の対策とかに奔走してて、無理だって言うんでね」

ドレイクを進が倒してから、世界経済になんら影響は見えなかったのはハジ一人の功績では無かったようだ。
なら、その方が受けられないこの仕事は私が受けるべきなのだろう。
「ハジさん、私がその仕事受けますね」
「いいんですかいぃ？」
「だって、その方の代りにやるのは私が適任かな、って思ったんです。ささやかな恩返しにもなりますし」
「……それは、とてもありがたい。その言葉はあの人にも伝えておきますよ、きっと彼は喜ぶ」
帽子のつばをつまみながら、目を伏せるように礼を言うハジ。
「その方にも会って、お礼を言った方がいいでしょうか？」
「いや、いいですよ。きっと、貴方達に会いに来ますからねぇ……それじゃあ、仕事の内容を説明させてくださいねぇ」
よっこら、と何処からともなく綺麗な朱色の装飾が施された包みを取り出す。
「こいつを、指定する場所に届けてほしいんです、明日の夕方ぐらいまでに」
「壊れモノですか？」
「いいえ、衣服ですよ。女物の着物ですね」
その言葉に、世界がひっくり返る……感じがした。
「じょ、女性への贈りものなんですかっ！？」
私は飛び跳ねるように驚く。アルバインと進も同じ気持ちだったのか、目を見開いてハジを凝視する。
「そ、そうなりますねぇ。あのどうしたんですか、お三方？」
「お前……いや、なんでもない」
「ハジも男だからネ」
「そ、それよりもそんな大事なモノを私が渡していいんですか！？　お、おもいを伝えるなら自分からの方がいいですよ？」
いや、イヤとハジが違うと言いたげに、手をヒラヒラと振る。

「撫子さん、勘違いしているようなので言っておきやす。別に恋愛感情とかはありません」

なんだ、と肩を落とす私を苦い笑顔で見てから、持っている包みを見る。

その視線は、私が見たことのないほど真剣な声で話し始める。

「これは……そうですね。“恩”を返す意味で送っているモノなんでよ。返しきれないほどの恩と勇気と感謝を彼女から貰ったので。毎年送らせてもらっているってだけです」

いつも飄々と冗談事ばかりしているハジの真摯な言葉に虚をつかれる。

恩。彼がいう恩とはなんだろう？　それは返さなければならないことだろうか？

そんな空気が許せないのか、手を叩いて、私をよび起こすと、いつもよりはにかんだ笑顔で仕事内容の説明に戻る。

「荷物の説明は十分でしょう。それで届ける場所が問題でしてね。場所は“１７地区”なんすよ」

つらい現実から目を背けたとしても、起こってしまったのなら常に己の前にあり続ける。

昨日の回想に浸っていたとしても、迷子である自分の現状が変わる訳ではない。

「ここはどこ……１７地区ですよね。１８地区じゃないですよね？」

ビクビクと虚空に問うが、やはり答えは無く。刻々と太陽は沈みつつある。

このまま行けば夜になるとマズイ。ソドムの共通点は中央市を除いて夜になると危ないだけの人のパラダイスになることだ。

「この道を……真っすぐいけばいいんですよね～。地図はあってるはずなのに、この道を三回ぐらい通った気がするのはぁ、なぜ～」

歌うように、自分を鼓舞するように歌うような独り言をいいながらも焦燥に駆られ歩き出す。このままではハジさんからの依頼を完遂できない。

それに、もうひとつ大きな不安があった。

このソドムは当時の東京二十三区のほぼ東側全域が隔離されて出来た場所だ。隔離が開始した当時の区の名は新設された新東京の方へと移ったので、区名がない状態である。

なのでソドムの人々は、左から人口や目立つ物がある地区ごとに数字で場所に区名をふった。ただし、範囲などが不明確なため判断が難しく、場所によっては集まる人の特色により番号が付けられた所もある。

現在、私がいるであろう17地区は“出戻り”たちが多い地区と言われている。

ここでの出戻りとは、隔離された自分の街や家に、周囲の者や国の反対を押し切って、戻ってきた日本人の事である。

どんな危険や異国人がいようとも、住みなれた地に戻りたいという人々がいた。それは当たり前のことだろう。皆、自分の住みなれた地に愛着があるものだ。

だが、当時の隔離され、日本と認められない地へ戻ろうとする人々を戦後間もなかった頃の人々は彼らを責めた。

似たような考えの、異国人を追い出して国をとり戻そうとする“急派”と呼ばれる人々は多くの人が賛同していたが、異国人を認めて、共に住まうという思想を持った出戻りの人々の思想は認められなかったのだ。

時が経って、出戻りたちの声は姿を消してゆき、急派の方も新法による土地権の獲得と譲歩や、新東京の完成により無くなっていった。そんな昔の話として学校では勉強していたものの、まさか本当に出戻りを実行した人々がいたのは知らなかった。

日本人という国籍、それまでの経緯なども犠牲にして、自分の住

んでいたところへ帰った人々。そんな彼らのほとんどで構成される17地区は比較的平和な地区と言われてる。

問題はお隣である。

対照的に18地区と呼ばれる場所はどうしようもない危険地帯と言われている。

ヤクザやマフィアの本部や事務所が集まり、武器密売や違法取引、人身売買などが普通に行われる魔窟。ソドムで聞こえる銃声の約60%がここで起きている（15%は進の事務所からである）。

しかも、この両地区の決定的な境はないも等しく、いつのまにか危険地帯へ迷い込み、そのまま帰らぬ人になることなどざらにあるらしい。

そんなこんなで、危険と安心の間をさまよう私の現状。

冷静はとっくに吹き飛び、情熱に近い混乱と懺悔の思考が頭の中で駆けめぐる。

（進は、やめとけば？　お前、ポンコツだし？　とか言って止めてくれましたけど、そこまでポンコツじゃありません。迷子になんてなりません！　なんて言いました、ごめんなさい！）

ソドムで道を歩くときはなるべく端を歩いてはならない。なぜなら引きずり込まれて暴行を受けることが多いから。その教訓にのっとり道の真ん中を歩く私は気がつく。

（ひ、人がいないし、平坦な道なのに車もあんまりないです……もしかして、危ない道とか？）

ガサッっ。

「ひぃ！？」

反射的に、壁の隙間からの物音に身構える。ね、ねこか何かデスカ？

ガサッ、ガサッ、ガサッ。

もがくような、まるで手招きしているかのような音が連続する。

その隙間はゴミのような塊が詰まっており中の様子は全く見えない。

お……に、ち……ん

「え？」

「おねぇちゃん、タス……けて」

弱ったような少女の声で、助けを求める声がする。

そう本来ならば助けるべきだ。でも、ここはソドム。どんな罠があっても不思議じゃない。助けに行った瞬間、手を捕まえれ、引きずり込まれて……など当たり前にあるのだ。

それでも何度も、何度も呼ぶ声がする。私の中に二つの葛藤が生まれる。

一つは、すぐさま助けに行くべきだという天使的な考え。

もうひとつは、聞かなかったことにして、逃げろよという悪魔的な考え。

常識的には、前者が当然。しかし……

そもそも、この時間でこんな人気がない場所に子供がいるのだろうか？　そうだ、これは罠に違いない。

何も見なかった、聞かなかったことにして歩き出す。

そうだ、これは

「お、ねぇ、ちゃん」

これは、そうだ、そうなのだ。

「う、うぅ」

声に鳴き声が加わった。

「……いま、助けますからね」

私は助けを求める子供の声に弱い、そんな人間なのだ、私は。それに過去助けを求める事さえできなかった私に、助けを求める気持ちを無視することはできない。見捨てられ、果てていくのはどんな孤独よりも辛いことを知っている。

手を使って強引にゴミをかきだしていく。腐乱死体とかあったら

どうしようとか、急に野太い男の声に変わったりとかしないだろうか、とか幾度となく不安に駆られながらも徐々になくっていくゴミ。そして、ようやく何かが見えた。うごく何かを。あれは口だ。

「おねぇ……ちゃん」

「も、もう少し。よし、もう大丈夫です……よ！？」

その少女はとても小さかった。小さすぎる、なにせ全長が二十センチ程度。かわいいフリフリがついた服にビーズのような目玉の……フランス人形がそこにいた。

その四角い口が唐突に開く。

「お、お、おねねねねねえんえねちゃちゃちゃちゃ！　キャキャキャキャキャキャキャキャキャキャキャ」

狂ったようなかすれ声が上がると同時に、ゴミの中から何かが私に飛び込んできた！

私の恐怖に対する許容量は一気に半壊。

「き、きゃあああああああああああ！！」

私の悲鳴が木霊する。

「み、みやあああああああああああ！！」

……？　だれかの悲鳴が木霊する？

合わさる視線。さきほどの人形ほどではないが、小さな体のそれを捉える。

「きゃあ？」

「み、みや？」

「ｋｙキャ！！」

未だゴミの中で笑い声を上げる人形。ならば飛び込んできたのは一体何？

私の胸のあたりにいるのは、私と同じように首を傾げる一人の小柄な少女。

それもとびきり可愛い、灰色の髪の女の子がそこにいた。

「サヤちゃんっていうんですか」

「うん、私、サヤ」

「キャキャキャキャ」

互いに、にっこり笑いあいながら道を歩く。

飛び込んできた少女、サヤ。

珍しいツヤのある灰色の髪に小柄な体格、くりくりと大きな目に調った顔だち。見るからに抱きしめたくなる衝動を引き起こす可愛らしい少女だ。

彼女が抱くようにして持っているのは、さきほどの壊れた喋る人形。あそこにいるのは可哀想だからと、彼女が持ってきたのだ。時折、非常に怖い壊れた笑い声を轟かせるので、正直怖い。

聞くに、彼女も道に迷っており、なぜかゴミ捨て場に迷い込んだ？　らしい。

「なでしこおねえちゃん、迷子仲間。帰り道、きっと皆が教えてくれる」

「は、ははは。ありがとう、サヤちゃん」

現在、私たちはサヤの家へと向っている。サヤは迷っていたが、それは何所かへ向かう行き先に迷っただけで、帰り道は忘れてはいないらしい。なので、家に帰り道を聞いてくれる彼という彼女の誘いをうけることにしたのだ。

小さい子に手を繋がれながら、優しく引っ張られる自分……とても情けない。

「う、うぅ。進が見てなくてよかった」

「シン？　おやごさん？」

「違いますよ、進は私の保護者みたいな人でね。それと魔王みたいで、意地悪かつ性格が百八十度曲がってて、破壊魔で目立ちたがり屋でね……」

彼を語れば語るほど吹き出る悪口の数々。そのためサヤの進と言う男のイメージが怖い人というものに変わっていった。

「怖い人？　どんな人？」

少し怯えたようなサヤがそれでも興味を持ったのか聞いてくる。そうですね……進は。

「怖い人じゃありませんよ。そりゃ皆から怖がられたり、嫌われていたりしてますけど」

進は、ソドムでは危険人物のレッテルがよく貼られている。だが、実際彼を嫌っている人は少ないように思える。

よく事務所に殴りこんでくる人たちも、怨みや怒りをもってやってくるが、彼にちょっかいをかけている程度にも思える。実際、彼らと戦う進も彼らに手加減を加えている節がある。それに私は本気の殺し合いに発展したところを一度も見たことはない。

最後は、お決まりの負け犬ゼリフを言って帰っていく彼らに、二度とくるなという進のお決まりと化したセリフという形で終わるのが常だ。

魔王がいたらあんな奴というあだ名も、ハジが考えた嫌がらせなのではないだろうか？　もしくは彼の、あの力ゆえについた通り名なのだとしたら……

「進は……イイ人ですよ」

「……、私も、会ってみたい、シンに」

「いつか、連れてきますね。きっと進もサヤちゃんに会いたがります」

「わたし、シンと、友達、なれる？」

「なれますよ、それと私の友達にもなってくれます？」

「！　うん！　なる、なる！　友達……え、えへへへへ！　なでしこおねえちゃん、友達！」

「うん、うん。友達だよ」

見る者にほんのりした温かな感情を抱かせる明るい満面の笑みに、私もつられて笑顔になる。

そんな温かな交流を交わしながら歩くこと五分程度で荒廃した雰囲気はなくなり、清潔感溢れる道に出ていた。

ソドムには珍しく平らなコンクリートに道。人気（ひとけ）は少ない昔からあるような塀（へい）が道に沿って続いている。江戸時代にタイムスリップでもしたような感動に包まれながら歩いていると、やっと人の姿を視認する。

「サヤちゃんのお家はどこなんですか？」

「あそこ！　すぐそこ！」

元気に指さす方向は、確認できた人がいる場所。その指さされた場所にいた人がこちらに気がつくと、なぜか猛ダッシュ抱え寄ってきた。

家の人かな？　と思いつつも迫る二つのシルエット。

そのシルエットは接近するほどに輪郭が露わになってくる。一人は頭をきれいさっぱり坊主にしている、ブルドッグの様な彫の深い顔立ちをしている中年男性。もう一人は黒いサングラスをかけた若い男性。ふたりの共通している点と言えば、ド派手なシャツと厳つい体、そして服の袖からチラホラ見える刺青。

見るからに、あの人種。

「「おいぃぃぃぃ！！」」

それが、猛烈な勢いで突貫してくる。

私はサヤを庇うように前に出る。

「サヤちゃん、下がって！　怖くありませんからね、お、お姉ちゃんが守ってあげますから！　く、くるなら来なさい、このロリコンさん達！！」

「おィ待てぇぇい！　ロリコン！？　嬢ちゃん、フツーまず先に、ヤクザ屋さんって言うだろ！？　なんでロリコンっ！？　なめてんのかい！？」

厳ついブルドッグ顔が、怒るように、困惑するように怒鳴る。

「お嬢さん、初対面の人に対してそれは失礼というものですよ。常識、知ってますか？」

サングラスの若い男は冷静に、言葉を続ける。
「ちなみに、私の恋愛守備範囲は下は6歳から14歳まで、ですので」
「「ロリコンっ!?」」
驚愕になぜかブルドッグ顔の人と一緒に、サヤを庇う。
「冗談です。とにかく……兄貴！　お嬢が居ました！　こちらです」
サングラスの男は、明後日(あさって)の方向に声を張り上げる。すると割と近いところから返答が返ってきた。
「本当なのかな？　おまけに、綺麗な女性と一緒で、これが運命の出会いだった、なんて物語りが始まりそうだったら嬉しいな」
私は最近、このフレーズを聞いたことがあるような気がする。
「兄貴、できそうですぜ」
「本当(マジ)なのかな!?　よし、そこの角だね？　……え、あれ？」
声が一段と近くなり、声の主が私の視線の先にある曲がり角から顔を出す。それは……
「……ああ……やぁ、九重さん」
私の同級生にして、次期生徒会長。科布(しなぬの)　永仕(えいじ)が引きつった笑顔でそこに居た。

視点変更2

あのポンコツ、なにやってんだ？
俺はソファに腰掛けながら、窓の外の夕焼けを眺める。
時すでに夕刻。茜色の光が事務所に入ってくるほどの時間だと言うのに、撫子が帰ってこない。
普段なら気にしないが、今日はあいつは仕事として荷物運びをしている。それにここから第十七地区はそう遠くない、歩いても一時

間とかからないぐらいの距離。
届け先でもてなされているなら、別だ。
だが、もしそこに至るまでに何かあったとしたら……
「あいつ、何やってんだ」
「おやぁ～ん、旦那。心配？　ねぇ、心配？　あれれ、もしかしてラヴ？　そんな純情旦那もイイ！」
「……あのポンコツ、家のカギを持たずに行きやがった。今日は夜から仕事で誰も居ないっていうのに」
事務所がある第６地区は比較的平和だ。だが、夜は通り魔や強盗も出ることがある。そんなところに体育座りでカギが空くのを待ってる馬鹿がいたらば、目標にされること必至だ。
だが、今さらどうこう言ったところで仕方がない。
「ハジ。今日の情報は信用できるものか？　罠の可能性は？」
「お、切り替えが早いことはいいですね～。それで情報の方ですが信用できる所から出ているんですが……ちょっと情報が流れすぎている面もあるんで」
入ってきた情報は、第十八地区にある半ば廃墟のビルに遺産が大量に運び込まれている、というものだった。
情報源はハジの関係者からしいが、こいつが言うには同じ情報を多くの情報機関やフリーの奴らに知れ渡っているらしい。
「一気に遺産を狙う連中を呼び出して、皆殺しにする罠か。もしくは、遺産をすべて牛耳るために集める罠か」
「どちらにしても罠ですのね」
背後から美しい声がした。振り返らなくともローザとわかるその声にハジが声を上げる。
「あらまぁ、ローザ嬢。あたらしい服ですか？」
俺も気になり背後を振り返ると、たしかに着ているところ見たことがない服を着たローザが立っていた。
学園の制服のワイシャツとミニスカート、という泣かせる服の上から着ているコートとも見て取れそうな黒い外套を着ている。なん

の装飾やフードすらない黒い外套の方になぜか目が奪われる。
その視線を感じたのか、ローザは珍しく子供っぽい笑顔を浮かべて、くるりと外套を誇るように見せる。
「どうですか？　このローブ」
よほど気に入っているのか、終始笑顔。こいつは大人びた微笑などをよくするが、こんな風に子供っぽくも笑い方は見たことがなかった。
「凄いですねぇ。着た者に最善の形にフィットする仕組みですかぁ。きっと名のある方が作られたんでしょうねぇ」
「えぇ。私がこの世でもっとも尊敬する人の作品ですわ」
一度、ローブを脱ぐとそれは不自然なほどの広がりをみせ、再びローザが羽織ると彼女の体に沿うように布が伸び縮みして、完全に着こなす。あれも魔具の一種か？
「待たせたネ。用意は出来たヨ」
階段を下りてくる音とともに現れた白人の青年、アルバインはとても何かをしに行くという格好ではなかった。いつもの白地のポロシャツに藍色のジーンズ、それだけだ。
こいつの場合、必要な装備などは次元統制保管という術式で見えない次元に裂け目を意図的に開けておき、そこに必要な武器やら装備を入れている。これは騎士団特有のモノではなく、魔術を扱う者にとってはポピュラーな術らしい。常に魔力を流さねばならないし、数や大きさが限られて、あまり扱う者もいないそうだが、アルバインは修行の一環で師匠から命じられてやっているらしい。
「それでどうしやすか？」
すべての目線がおれに向かってくる。そりゃそうだ、なにせ俺が受けた仕事なのだから。
「行くに決まってる」
「罠だとしてもかイ？」
「罠だろうが、何だろうが、行かなきゃなにも始まらねぇ」
それに、と続ける俺。

「仕事の邪魔をするんだってんなら、罠ごと潰して、ハメようとした馬鹿を後悔させてやるだけだ」
言うなり立ち上がり、玄関へと向う。いつもの黒いコートに腕を通し、ホルダーに銃と弾丸が収められているのを確認し、黒い大剣が収められた不可視のバッグを背負う。
後ろから全員がついてくる気配を背に受けながら、ドアを勢いよく叩く。
「さぁ、お仕事の時間だ」

視点変更3

「「「「「「「お帰りなさい、兄貴たち！　お嬢！」」」」」」」
「うん、ただいま」
総勢二十数名のかたぎじゃない強面の人たちによる気合いの入った出迎え。衝撃とも錯覚してしまいそうな声に、私は意識を飛ばしかけた。
「御苦労さま、皆。戻ってくれて構わない。本当に苦労をかけたね」
「「「「「「「へい、エイジ兄さん！！」」」」」」」
それでも彼らは道を作るように並んで、戻ろうとはしなかった。
そんな彼らを見て苦笑いを浮かべて、嘆息するブレザー・タイプの学生服の青年。
纏う雰囲気、人の良さそうな目の形は、凛と立つ青年はなんら学校で見た時と変わらない彼。
所属する組は違えど、同じ高校で学ぶ二年生同士の彼、そして、次期生徒会長、科布（しなぬの）　永仕（エイジ）。
ついこの間に初めて会話した程度で彼となんら関わりは無かった。だから、私は彼のことをほとんど知らない。

聞く話によれば、性格は温厚、学力は優秀の域、対人関係もしっかりしている、ぐらいだ。

「ふぅ、仕方ないね……九重さん、怖いだろうけど、恩人である君を少しばかり持て成したい。だから、家にあがってくれないかい？」

「は、はい！」

スッとんキョンに声を張り上げて、歩き出した彼の後について行くしかない。

怖いお兄さんの睨めつけるような視線を見ないように真っすぐに、学生服の背を見て歩く。その背中を見ながら思う。

（この人、何者なんだろう？）

考えながらも答えは出ない。そうしているうちに大きな平屋作りの屋敷へ導かれていく。

とても大きな屋敷を余裕を持って囲んでおける敷地を年季の入った白地の塀が四角く囲み。分厚く、威厳ある大門。

そこの掲げられる名は“音芽組（オトメ）”。

総合的に考えて、ここは俗に言う極道、ヤクザなものたちの巣窟。

歴史を感じる縁側の廊下を釣られるように歩く。

窓一つない廊下から見える広々とした庭は整えられている。力強く起立する松の枝、押しては返す海の波間を連想させる白い砂利の波紋。、置き石に至るまで手が行き届かせてあり、私はそれに芸術というセンスを確かに感じた。

息を飲む美的センスに浸りかける私に声がかかる。

「九重さん、君の持っているソレは？」

「え、あ！　そうです！　私、これを届けなきゃいけなくて」

永仕の突然の問いは、私に重要なことを思い出させた。手に持つそれは期限つきの届けもの。そして、今はこの状況からの脱出の理由になりうる可能性を秘めたもの。

「こ、これを届けになきゃいけなくて、ですね」
「お姉ちゃん、お姉ちゃん」
「なんですか、サヤちゃん？　いま大事な」
「それ、そー君の、匂いする」
私の服を引っ張りながら包装された包みんをクンクンするサヤ。
その小動物を思わせるサヤの言葉に
「アア？」
ドスが利いた声を上げたのは、先導して歩いていた永仕だった。
いつも人のよさそうな笑みを浮かべている彼が、こうも濃い怒りの感情を出したことに驚く。
その“そー君（たぶん、ハジ）”とは一体、彼に何をしたのだろうか？
「九重さん、それを寄こしなさい。早く捨てないと、体中に呪いが写るよ」
根拠もないのに断言した永仕は、サヤと私の返事も聞かず、私から包みをむしり取る。その速度は刹那の域。同じようなスピードで、かつ綺麗に包装紙を外していく。
包装紙の下にあったのは無地の木箱と一枚の紙切れ。今度は打って変わって身長に箱を開けると、そこには……
「わぁ！」
中身は、着物。それは事前に知らされていたが……
「ふんっ。相変わらず、センスは良いんだな……」
ここまで美しい代物だとは教えられていなかった。
鮮やかな赤い染物に、金色の刺繍（ししゅう）が施された一品。一見、自己主張が強い色合いに見えるが、絶妙な染加減に刺繍の文様が重なり、色どりを抑えつつも、美的な素養も強く出しつつも調和の取れた絶妙な具合を作り出している。業物のそれは、着るべき人間に合わせた大きさになっていた――
「これ……もしかして、サヤちゃん用？」
「そうだろうさ。……アイツめ」

忌々しいと全身で語る永仕から目線を外し、着物を見る。
着物の小さいのだ。子供用のサイズと差し支えない大きさに織られているソレをサヤが着る想像を安易に出来てしまう。
（オーダーメイド……ですよね、アレ）
お値段を考えるほど私はおろかではないが、きっと相当な額であろう着物を嬉しそうに取り出し羽織るサヤの表情は、笑顔。
「エイジ兄、私似合う？　どう、どう？　どう！　どおっ！？」
「凄く似合うよ、サヤ」
そう言いつつも顔に若干、苦みが残る永仕。苦笑の対になる笑顔の妹はそれに気がつかないようで持っている人形と一緒にくるくると喜びの舞を踊る。
（はは、は……ん？）
そんな兄妹の睦まじい姿と、もうひとつのモノに目が止まる。包装紙の下にあった紙だ。
それはヒラヒラと舞いながら床に落ちていった。
それを始めに拾ったのは永仕の手。
紙には何かが記載されているようだが、彼と向かい合う形にいる私にはうっすらと見える文字の陰影を確認することしかできない。
その文字を見た永仕はすぐさま背を向けると
――――すぐさま、紙を粉々になるまで破（やぶ）いた。
「……」
口は無言、顔が能面になる永仕。
（あ、ははは……ハジさん、何て書いたんだろ？）
みるみる無表情になっていっていく彼は怒っている……間違いなく、怒ってる。そんな彼が口を開く。飛び出た言葉は人の名。
「……巌（いわお）くん」
「なにかな？　永（エイ）くん」
廊下の先にある曲がり角から呼び出されるように出てきたのは、岩だった。
否、岩を想わせる巨漢がぬっと現れる。

頭を剃り、顎鬚を仙人のように伸ばした五十代半ばの男性。体は筋肉が彼の着る作業用のジンベイからでも主張している。深い彫の様な皺、貫禄ある佇まいに私は息を飲む。

こちらに気がついたようで目と目が合う。私の緊張を見抜いたように、表情を柔らかにする巌と呼ばれた男性は軽く頭を下げた。

「この音芽組の組長代理を務めさせてもらっています、“近衛巌(このえいわお)”と申します。よろしければ、お名前をお聞かしてもらっていいですかな?」

近衛の丁寧かつはっきりとした挨拶。ふかい知性と慈愛を感じる。そんな彼にギャップを感じてしまい、うろたえながら答えてしまう。

「え、あ、はい！　九重　撫子と申す者です。よ、よろしくお願いします」

「……九重、撫子……さん」

噛締めるように、深く気持ちを込めるように私の名を言う近衛。

「巌くん、彼女のもてなしを頼めるかな?」

「……構いませんよ。で、永くんはどちらに?」

「俺は“わすれもの”を取りに行く」

「無理なく、お気をつけて」

「ああ。すまないけれど九重さん、用事があるから俺は失礼するよ」

えぇっ!?　と反応する私に軽く手を上げて颯爽と背を向け歩き出す永仕。なかば放心状態で見送る私のスカートの裾が引っ張られ意識を戻す。

「お姉ちゃん、お部屋、行こう」

「え、そ、そうですね～。でも、私もそろそろお暇したほうが」

「そんなことありませんよ。遠慮はなしでどうぞこちらへ、九重さん」

二人の満面の笑みに逃げること叶わず、思わず頷き、また先導されるように歩き出す。

自分の決断力の無さから、目を背けるように中庭を見る。そこに

は沈みゆく夕陽を眺めながら、目の前の白いキャンバスに筆を走らせる人影があった。その男はこちらに振り返り軽く会釈すると話しかけてくる。中年くらいの、だが絵筆をとるような繊細さはなく、厳つい、顔に大きな切り傷を残す大男がだ。

「代理、お客さんですかい？　お茶の方持っていきますかい？」

「いや、ゲン。もう用意は済ましてある」

「そうですか。では、お嬢さん、ごゆっくり」

そう言って、また絵へと戻っていくゲン。遠目でも、その絵は未完成ながら感嘆を生みだす出来栄えであるとわかった。

「ははははっ、どうですかな。変なところでしょう？」

「……ええ。っ！　いえ、そんなことは無いですよっ！？」

「そう硬くならないで。どうぞ、こちらに」

客間についたのか、障子を開けて部屋へと上げられる。内装は純和風、中に備え付けられている物は緑がイメージされた心休まる雰囲気であった。

用意されている座布団にサヤが座り、それに倣うように私も腰を下ろす。近衛は用意されていた急須（きゅうす）からお茶を茶碗へと流していく。

「さぁ、二人とも、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

出された茶を緊張でカラカラになっていた喉へと流し込む。

「！　おいしい……」

「おお、良かった！　ご近所の夫婦の息子さんが運輸業をやってましてね。良い茶葉が手に入ったらしくて、ご丁寧にも分けてもらったモノだったんです。お口に合って良かった」

お茶はよく冷えており、すんなりと喉を潤した。一気に飲んでしまったことを後悔するぐらいおしいかった。それを感じたのか、近衛はすぐにお代りを何もいわずに注いでくれた。

「あの、近衛さん。つかぬことお聞きしたいんですが」

「なんでしょうか、九重さん？　それと厳で結構ですよ」

「い、厳さん。ここは、その極道さんですよね？」

我ながらアホなことを聞いてるのはわかっているのだが、どうもしっくりしない。ここの人はたしかに厳つく、強面の人ばかりだ。しかし、どこか彼らは人間味というのだろうか？　そう大らかな知性を感じるのだ。

そんな私の問いに困ったように、巌は長く伸ばした顎鬚をなでる。

「そうですね。たしかにここはヤクザ、組という形をとっています。社会からあぶれた奴らもいます。ですがね、もともとココ先代の組長が作った身寄りのない子供を預かる養護施設や、近所の子供たちに勉強を教える塾だったんですよ。それは今も形を残していますし、極道の看板を背負っている他の組の方々と失礼ですが比べてしまうと、あまり真っ当なヤクザ屋とは言えないでしょうな」

「そうだったんですか？」

「ええ。かく言う私も元々はここで育った孤児（ひとり）ですから。今はここに学びにくる子たちの先生を兼任しております」

遠くの方で元気な子供の挨拶が聞こえ、それに応えるような厳つい男の声がする。それは若干の恐れもなく自然体で行われるかけ合い。

「変でしょう？　音芽組という名前も、先代組長の奥方の名前と彼女のクラスという意味で掲げた名前だったんですが、組長の人柄に惚れた奴らが集まって結局、極道者の集まりになってしまったんですよ。まぁ、ほとんどの組の構成員は養護施設出身者がほとんどで、奥方の影響で学問や芸術なんかに興味が傾いてる奴らばかりですがね」

楽しそうに、そして、誇るように語る巌を見て、彼がどれだけ音芽（ここ）組が好きなのかがわかった。

「構成員にならなかった卒園者が、ここを維持するための出資者になってくれる奴らも多くてね。まったく親の気もしらないで……おっと、申し訳ない。お客人を差し置いて長話を」

「いえ、皆さんがここを好きなのがわかりましたから」

「はっはは、そうですか」

彼の話を聞いていたからか、始めの頃よりも居心地が良くなっていた。それは音芽組を大切にする人たちの気持ちがわかるからだろう。

二人で話してばかりだったために暇になったのか、クイクイと巌の服をひっぱり注意をひくサヤ。

「イワオ、イワオ。お人形、喋らなくなった」

「む？　おや、壊れてしまったかな。……いや、これなら私が直してこよう」

「ほんと！？」

「できるんですか？」

失礼を承知で思うが、機械仕掛けの喋る可愛いお人形を直せるような人には見えなかった。

「一応、機械系の大学に行って卒業もしていましてな。これぐらいなら一人でできますよ。それに故障の原因は各部品の老朽化でしょうから……部品を取り寄せる期間も考えて、一週間ぐらいでしょうかね」

人形の関節の動きや、構造を見る彼の仕草はプロそのもの。彼から逐一感じていた知性の理由がわかったような気がした。

「もともと教師になりたかったんですがね。先代組長が、旅に出る際に指名されてしまいましてな～。あの時は、まいった、まいった」

「え、でも、巌さんって」

「そうです、“代理”です。組長から指名されましたが、あの人以外にこの組をまとめあげられる男はいません。だから、代理です。それに実際、私の代で全盛期よりも廃れてしまった。それで永君（エイ）にも迷惑をかけっぱなしで」

「科布会長に？　そういえば、会長もここの出身なんですか？」

「うぅん、違うよ」

応えたのは巌ではなく、彼の膝の上でゴロゴロしていたサヤ。

「エイジ兄と、私は、もっと遠いところから来たって。私は憶え

てないけど、エイジ兄、いつも言ってる、私たちの故郷は、え〜と、綺麗なところだった、って」

「そう、なんだ」

てっきり永仕もここの孤児院の出身なのかと思っていたが、そうではないらしい。ならば、なぜ……

「九重さん、ひとつ妙な事を聞く事を許してください」

急に真剣みを帯びた声に背筋が伸びる。声の主である巌もまた、胡坐の姿勢から正座へと直し、私の目を真っすぐと見つめてくる。

どんな言葉で嘘をつこうとも、心に隠匿する事を許さないその視線にただ事ではないと感じる。何を聞かれるのか、想像もつかない。

私もまた緊張して言葉を待つ。

その内容は

「九重　撫子さん、あなたは今、幸せですか？」

言葉に詰まった。

けっして返す答えが応えられないわけではない。問いの意味が理解できないのでもない。

ただ、なぜこの人がそんなことを聞いてくるのかが、わからない。

「あの、どうして？」

「訳を話してしまえば、きっとあなたは私たちに優しい嘘をつく。それでは駄目なのです、今のあなたの答えを聞きたい」

どうしようもなく不安が募る言葉を重々承知するように言葉を吐く巌。

懇願、に近い問いかけに言葉を慎重に選ばねば、

と思っていた。

「幸せ、ですよ」

意識せずともスラリと答えは出た。

「ちょっと前まで、自分は不幸……みたいな状態でしたけど、今は幸せです。友達もたくさんできましたし、帰るところもできました」

あれから二か月。それ以前と比べようもないほど私の世界は輝いていた。血に満ちた過去を忘れさせてくれるほどに。

「夏休みなのに、遊びに誘ってもらえました。私のことをもっと知ろうとしてくれる友人や、皆のことを考えて料理してくれる人も、不思議な人だけど影ながら情報をくれる人も、それとガサツで、ハデ好きで、天の邪鬼で、意地悪、デリカシーのかけらもない覗き魔、魔王みたいで、拳銃をいつも撃って、私がいっつも、いっつもドアを直す原因だけど」

「最後の人だけ、ずいぶん恨み事ばかりだね……」

「私に生きる権利はあるって言ってくれました」

私は幸せだ。だからと言ってあの時のようにもう死んでもいい、と思うことはできない。もっと生きて、もっと彼らと生きていたい。その気持ちを持てたことが私にとっては一番の幸せなのかもしれない。

巌は私の言葉を吟味するように目を閉じる。だが、すぐに顔を上げて頷く。

「……そうですか。そうか、そうですか。なら、私はともかく永君は少し救われる」

「あの、理由を教えていただけますか？　それにどうして会長が」

「代理ぃぃっ！！」

今度は私が聞こうとするが、激しくあけられた障子の音にかき消される。

「五郎ぉ！　礼儀がなってねぇぞ！　四十過ぎて落ち着きがねぇ、それでも若頭を名乗るつもりか！？」

「申し訳ありません、ですが緊急の用でして！」

五郎、と呼ばれた男性は四十代とは思えぬ、筋肉隆々とした体を振るわせ、息を上げながらも簡潔に報告をする。

「討ち入りです！　鈴木と天塩の奴が負傷、報告によれば攻めてきたのは“咲那会（さきぐに）”の奴らです！」
「あ？　最近、出てきたジャリばかりの組じゃねえか。どうして家に？」
「わかりやせん。ですが攻めてきてるのは事実です。西と東にわかれて来てます、ワシは西へ指示に向かいます。代理には東の方をお願いします！」
言うだけ言って去っていく五郎。そして、続けて広い屋敷に響き始める戦闘らしき轟音。
「ふ～、まったく。九重さん、申し訳ありません。お嬢と一緒にここにいてください。かるく絞めてきますから」
体中からさきほどの温和さはなく、ただただ代理とはいえ、組長の肩書を背負うに相応しい鬼の形相でふすまを占めた。
取り残されたのは、けたたましく響く悲鳴と銃声が聞こえるのにも関わらずスヤスヤと眠るサヤと
（……ホント、帰っておけばよかった）
涙ぐみながら、本気でそう思う自分だった。

視点変更　4

「テメぇ、肩ぶつかっただろうがぁ、ああ？　新品のスーツなのにぃ、どうしてくれんブるぎゅアッ」
そうしてワザと肩をぶつけて言いがかりをつけてきたチンピラ風の男性が、半ば投げやりな進・カーネルの裏拳を受けて数メートル、宙を舞った。
「相変わらず、ここはバカ率が高いな」
ドシャ、と地面へと不時着した男の顔面は見事にクレーターを作り、血でカルデラを作る。ピクピクと痙攣してはいるが息はあるか

ら大丈夫？　だろう、たぶん。
僕、アルバイン・セイクは静かに溜息をつく。どうしてもっと穏便に済ませられないのだろうか、と。
僕の隣を歩く錬金術師ローザ・E・レーリスも同じような嘆息をついて辺りを見回し、進へと問いかける。
「それにしても、ココはこんな騒動が起きても我関せず、なのですのね」
確かに人一人が数メートルの自由落下をしたと言うのに、周りを歩く人々は振り向きもしない。
（ここは、僕が聞いていたソドムの様な場所だナ……）
僕らが現在いるのは歓楽街の大通り。挑発的な色をしたネオンが目に痛いほど入り込み、性的な快楽へと誘うような店の看板がやたらと多く、未だ青年を自称する僕の下半身を刺激する。
その活気と明るさの影にあるモノも同時によく目に映る。
店と店の隙間とよべる路地裏の影に潜む様に居るスーツの男たち、表には出せないような内容の店へと引き込む様に伸びてくる手、
そして、早くも虫につかれ始めている死体と、やけに近い場所で聞こえる銃声。
「おい、アルバイン。面倒事は…」
「……わかっているサ。後でやるヨ」
念を押す様に進が振り向くことなく静かに忠告してくる。最近はソドムのこともそれなりに気に入ってきていたが、こんな場所があるとまた嫌になりそうで、若干イラついていた。返す言葉にも嫌がこもる。
ココは第１８区。ソドムの中でも指折りの抗争と快楽と陰謀が渦巻く危険地帯。
「あら、進クン。今日は寄っていってくれないの？」
ふと目の前を歩く進を呼び止める声に、皆で振り返る。
そこに居たのは、色気を全開に広げたようなド派手なピンク色の服を着た熟女――のような、男性。

「オカミさん。悪いが、これから今日は仕事でね」
「あらぁ、そぉお？　この前はあの二人の刑事さんとお仕事中でも遊びにきてくれてたのに、残念ねぇ。あら、このきゃわいい子たち“が”？」
オカミさん、と呼ばれた男性は、いや。ここは空気を読んで女性か？　は濃い化粧をしていて確かな年齢の判断はできないが、４、５０代ほどの男性であった。
「最近、進の家にきたアルバイン・セイクと言いまス」
「……ローザ・Ｅ・レーリスですわ」
若干、奇妙なモノ言いに僕は眉をひそめながら頭を下げて挨拶し、ローザは若干、怖がりながらも名を打ち明ける。
そんな僕らに満足するように満面の笑みで正体を明かす。
「ここを中心にオカマバーを経営している上条（かみじょう）　輝弥（テルヤ）という者よ。みんなからは“オカミさん”って呼ばれてるわ。よろしくね。期待の爵位持ちの騎士様と、美少女錬金術師さん」
この人はただのオカマではないようだ。彼……オカミは濃く残る青髭をジョジョリしながら値踏みするように僕らを舐めまわすように見ると、一人納得したように頷いた。
「やっぱり気に入ったわ。あなたたちなら進クンにもついて行けるでしょう。良い情報、あげるわ」
「オカミさんは情報屋なんだよ。どっかのエセ情報屋とは大違いの真面目で良い仕事をするから安心しろ」
進の補足説明に若干、安堵する。ソドムの情報屋は彼のことしか知らないため、皆あんな感じなのだと不安だった。まぁ、変なことに変わりはないが。
「あらぁ、ダメよ進クン。ハジさんだって、最近は彼女のためのプレゼント選びで忙しかっただろうし、情報にも不備ぐらいでるわよぉ」
「アイツ、コンドアッタラメイニチニシテヤル」
進の怒りのメーターがマックスになるのを楽しそうに見ていたオ

カミが、今度はこっちに振りかえる。先ほどの表情と打って変っての真面目な顔で話す。

「アルくん、ジョゼット・ホーキンスがソドムに遺産回収の用心棒として来ているわ。後、ローザちゃんが探しているはずの“槍とフラスコの女神紋”が入った物品を彼の雇い主が所持しているらしいわ」

僕はジョゼットという男の名で驚き、ローザは何かを確信したように笑みを作った。

「なんだよ、その男となんとか紋って？」

「進クン。人の黙っていることに自分から突っ込んじゃダメよ。下半身の武器ならいくらでも突っ込んでイイんだけど」

駄目ダロ、とツッコミたいが突っ込んだら上げ足をとられるような気がして黙っていることにした。隣のローザはよくわからないらしく首を傾げる。

下ネタを言って満足したのか、背を向けたオカミは手をヒラヒラさせながら帰っていく。

「それだけ言いにきたのよ。お仕事がんばってね、３人とも」

「ちょっと待ってくれ、オカミさん」

帰ろうとする彼？　を呼び止めるのは進。確信めいた目線を彼女？　へと向けて。

「アンタなら、“金狼”のことを何か知っているんじゃないのか？」

金狼。今回の目標なのに関わらず、これについての情報は名前だけ。どんなものか、金色の毛並みの狼なのか、何かの隠語なのかもわからない。オカミがその情報を、もしかしたら居場所すら確認していると、進は考えているらしい。

オカミが頭だけこちらに向ける、先ほどの明るい人物とは思えぬほどの鋭く暗い目と微笑とも苦笑とも取れる表情で。

「知っているわ。金狼が何なのかも。在り処も」

「！」

「でも、教えない」
「……どういうことダ」
「きっと、ハジさんはあなた達に金狼を捕まえてほしいわけじゃないわ。大丈夫よ、そんなに警戒しなくても。今日の仕事に早く行きなさい、そこで全てわかるはず。それと、こんど撫子ちゃんを紹介してねぇ。彼女、いろんな意味で有名人だから」
言うだけ言って、オカミはひしめく雑踏の中へと消え、もう姿を視認することはできない。
「……どういう意味なのかしら？」
「わからないヨ」
「とにかく、行けってことだろう」
釈然としない疑問もあるが、今は時間がない。約束の時間はもうすぐだ。
立ち話をしていたネオン街を抜け、誰も目を剥けぬような暗闇の路地裏へと入る。そこは先ほどの喧騒が恋しくなるほど、闇と沈黙があるだけの路地が続いていた。
そのさらに奥へと歩みを進める。広い道に出たはいいが、周りのビル群は廃墟で、ところどころに凄い衝撃を受けたかのような痕跡が多々見られる。ここは第三次世界大戦の古戦場なのだろうと推測できた。
人の気配はほぼない。あるのは同族であるはずの人を殺し、金品をはぎ取ろうと画策する人間（ケダモノ）の静かな息遣いだけ。
「……ここか」
街灯一つない場所へと雲の隙間から小金色が降り注ぐ。
見開かれた眼のようなそれは、月。
（そうか、今日は満月だったカ）
角度や大気中の不純物の濃度などで色々な月光があるが、今日は黄金色。視覚的な調整でやけに大きく感じるのは知っているが、今夜の月はやけに不安な感情を受けるほどの目に入る。占星術では衛星の光は人の精神に影響を与えるというが、事実のようだ。

そんな月の光を受けたのは、大きな廃墟。
もともと大きなデパートだったのが外観から容易に想像できたが、今は中が丸見えのボロボロ。外装と破損部分を通り抜ける風が化物の呼び声のように聞こえてくる。
ここが今日の仕事場。今夜、ここで“遺産”の受け渡しが行われるらしい。
「時間はちょうどいいはずだヨ。中で待ち伏せするかイ？」
「ああ。物品は多いらしいからもう運びこまれているはずだ。回収のルートは空からだろうよ。だから屋上を目指せばいい」
「横取り、しますの？」
「い～や、このまま行ってもらってくる」
「それは世間一般的には横取りだよネ？　それじゃ、もう盗賊だヨ」
「いいだろ。そこに“落ちていた”ものを、親切心から拾ってやるんだから」
悪人面で無理やりすぎる善人論を語る進に二人で溜息をつく。彼に二ヶ月間つき合い続ける撫子は相当凄いのかもしれない。
「とにかく、入るぞ」
多少は警戒しながらも、堂々と元デパートの正面ゲートから入場する。
中は外以上に荒れさを呈していたが、ショーウィンドや小さな売り場の壁などもないために建物の大きさよりも広く見えた。
「ここまでくると、いっそ清々しいですわね」
人ごみ嫌いなローザも同じ感想を抱いたようで一人つぶやく。それと同時に
「……何人か、いますわね」
僕と同じ気配を感じた様ようだ。今いる一階フロアだけではないようで、進が吹き抜けのようになってしまった天井を睨みつけている。
罠を張られている可能性等々を考えれば、馬鹿正直に上にあがっ

て行くのは得策でないことは明らかだ。ここは一旦引くか？　それとも。

「このまま上にあがるぞ」

「本気かイ？」

何も考えていない、ということはこの男に限ってないはず。だが、やはり不安はぬぐえない。

「今の時間は運び出す予定時刻の十五分前。なのに関わらず、こんな所で油売ってるってことは、だ」

「誰もが手を出せない状況なほどに警備が厳重か、もしくは誰かが無事に運び出すのを待っている、と？」

「ああ。それにかなり胡散臭い内容だけに全員が遺産の有無がわかりきってないんだろ。だから、確認してくれる誰かを待ってるんだろうよ。だから、昇るだけには何ら問題はない」

「片道だけは、ダロ？」

「ああ、役得だろ？」

まったく、この男は異常なまでに肝が据わっている時がある。思わず、尊敬しそうになるほどに。

胸を張りつつも周囲に警戒をしながら、階段を上ること数分後、現在7階フロアにまで到達していた。

旧デパートは全8階。屋上も合わせれば、9階建。

街灯や内装の明かりもないために、明かりはほとんど外の月明かりを頼りに歩いている。破損と老朽化による隙間が多いために明かりには事欠かなかったが、急にそれが燦々と降り注いだ。

「老朽化か、もしくは戦争時に使われた兵器によるものカ……」

そこは7階の端、上へと昇るための階段があるはずの場所。なのだが、そこから上がない。まるでくり抜かれた様に円形に屋上まで天井が無くなっていた。

「屋上があるだけマシですわね」

階段と8階と屋上の一部がくり抜かれただけのようで、これで建物自体の耐久力には何ら問題はないだろう。

「どころか、屋上までの道を省いてくれたんだ。感謝するぐらいさ」

確かに、と同意しつつも不意に月を見る。今はデパートの同じ大きさぐらいのビルに半ば埋もれるようにある。そこから差し込む横からの月光に目を瞑りかける。

その“銀色”の光に。

待て、それほどまでに早く光の色が変わるものか？

鋭く月へと体を振り返り、目を見開く。

月は未だに小金色。銀色なのは、月を背に立つ影だ。

影は人の形を成している。二本足で力強く立ち、腕を二本肩からぶら下げ、頭が一つ。

だが、おかしい。人の足は女性のウエストほど太かったか？　全身が覆われるように毛に満ちていたか？　腰から垂れるように“尻尾”があるか？　頭の上に突起物のような耳が二つ付いているか？　顔はあれほどまで“狼”のような顔をしているのだろうか？

その巨体が、銀色の毛並みを持つ二本足で立つ狼が、力を溜めるように身を屈める。それと僕は同時に叫ぶ。

「皆、ふせロォォォォォォッッ！！！」

「ッオオオオオオオオォォォォォォォッッ！！」

デパートとビルの間はおよそ５０メートル。その間を稲妻のごとき銀の閃光が駆け抜け、衝撃となってこちらを襲う。

至近距離で爆弾でも使われたような衝撃が振りかかり、立っていた場所から数メートル弾き飛ばされた。

グッと息を一気に吐き出される感覚に襲われつつも、受け身を取

って転がり何とか床や壁に叩きつけられることを防ぎ、すぐさま立ち上がる。

応戦体勢を取りつつ、周囲を確認。

旧デパートはさらに廃墟になり、上の階が、無くなっていた。壁はまるで何かに引き裂かれたような傷跡を残していたが、すぐさま崩れ始める。

（これハ……まさか、このフロアごと上の階を吹き飛ば……いや、引き裂いたのカ!?）

あの銀色の狼の膂力（りりょく）に戦慄し、未だ粉塵渦巻く中に確認が出来ない二人を探す。

「ローザ！　進！　どこダ!!」

「ここで、す、わよぉ!!」

すぐ近くから苦しげな声がし、そこへと駆けていく。姿は見えないが、声がしたところは下へと大きな風穴が出来ていた。もしかしたら、上の階にあった荷物が下へと衝撃で落ちてできた穴かもしれない。

「ローザッ！　無事…かっバァァァッ!?」

そこ覗きこむ様に下を見たら、なぜか靴底が飛んできた。その相当な衝撃に仰け反るように後ろへ倒れる。

「見るなァァァ、変態ぃぃ！」

「グアァァァ!!　目ガっ！　目が痛いぃイ！　ノォアアアッッ！」

目にピンポイントで衝撃が叩き込まれ、その激痛にのたうち回る僕。

片目が特に痛い。このまま目が失明して、隻眼の騎士とかカッコイイかな、とか思ったが、やっぱり痛い。それに目を失った理由は？　とか聞かれて、逆さまになったパンツ丸見えの美少女錬金術師を助けようとしたら、目に靴がネ、なんて言ったら絶対引かれるし、馬鹿にされるからダメだ、そして、やっぱり痛い！

「いいから、とっとと助けなさい変態騎士！　目を瞑りながらで、

いいですわね。一ミリでも目を見開いた瞬間があるのなら、後で槍を千本、口に叩き込みますからね！」

横暴ダ、と言おうとしたが、素直に手さぐりで目を瞑りながら、感覚を頼りに彼女の足を引き上げる。

「も、もういいですわよ」

「ああ、悪かったネ」

「見てません、わよね？」

「ハイ、上司に誓っテ」

「……よろしい」

荒げた息を整えていくローザを見ながら、心の中で謝る。

スイマセン、見ました、綺麗な純白の下着を。脳内に足を大胆に広げた先にあった光景に下腹部が熱くなった……今回、僕こんなのばかりな気がしないカ？

「それで、進は？　あの衝撃はなんだったのわかります？」

「ああ、銀色の狼が……」

「そいつは……コイツのことかぁ？」

舞い上がっていた粉塵が徐々に晴れていく中で聞こえた何かに力みながらの進の声。

鮮明になっていく声の主は、

進が振り返ることなく、この破壊を起こした銀色の人狼の右腕を、いつの間にかに背負っていた黒い大剣で受け止めていた。

インビシブル・バックと呼ばれる不可視魔術が掛かったバックはあの攻撃を受けて木端微塵に弾けたようで、中に隠してあった進の身の丈ほどある重厚感溢れる黒い大剣が姿を現していた。

名は、イザナミ。日本の古い文献に記される、夫への怒りと悲しみから千の人間を呪い殺すと言った神の原柱と同じ名を持つ剣。

あの大剣を、撫子はよく大きなバスタード・ソードと表現している。だが、あの常識外の大きさと長さと厚みはグレート・ソードと言っても過言ではない。それを進は…

「なに驚いてやがる」

進は、剣を勢いをつけて引き抜き、振り返ると同時に、狼へと下から上へと振り上げる。

銀の人狼は素早く、後方へと飛びずさる。それは決して恐れ慄いてではなく、その攻撃を見抜いての動きだった。

「最近、よく背後から攻撃を受けるんでな。臭いな、と思ったら気を付けるようにしててね」

「グルルル」

大剣をおもちゃのように片手で弄びながら、軽口を叩きながら歩みを止めず、狼との距離を縮めてゆく進。人狼は威嚇するように、怒りに身を震わすように唸る。

剣を相手へと突き付ける進は、その赤い眼を戦意で光らせる。相当の重量がかかっているはずの進の片腕は微塵もブレず、人狼へと向けられる。

「で、アンタが“金狼”なのか？　まぁ、見た目は銀だけど」

見た目は銀色の毛並みを持つ人狼。金、という単語が当てはまる箇所はない。ただし、銀は常に金と共に色の双壁をなす存在でもある。関連性がないとは断言できない。

その言葉に、銀色の人狼の目がたしかに細められた。

「……だんまりか？　なら、良いさ。俺はテメぇを徹底的に調教するだけだからな」

ニヤリと笑うその顔はもはや主人公にあらず、ただのチンピラか悪役そのもの。

その悪役の宣戦布告とともに、人狼が小さく息を吸い込み

「スゥ…オォ…ガァァッ！！！」

一気に鋭く、咆哮。

全面を叩くような衝撃波がフロア全体を襲う。

崩れかけていた床は容易く、周囲の壁もろとも粉砕される。僕らもそれに巻き込まれ崩れる足場から安全と判断できる場所を探しつつ、崩壊の光景に彼の姿を探す。

その光景の中に彼はいない。

「上から失礼ィッ！！」

「ガァアッ！」

誰よりも早く攻撃と察知した進は、咆哮を受ける前に飛びあがり回避していた。

薄気味悪いほど大きく目に映る月の下。自由落下とともに振り下ろされる斬撃と、それに逆らう空の獲物を仕留める狼の大型のナイフのような三本の鈎爪が衝突する。

次話へ

3、明色の出会い（後書き）

非常に遅れたことを後悔しつつ、四万文字で今回を収められなかったのも後悔。どうにか、四万で収めるべく、ガンバりましたが…
…三話を二つにして分けました。
なので、四話はあと一週間ほどで掲載できると思います。
読んでいただけたら、幸いです。

4、銀の爪刃

4、銀の爪刃（そうじん）

「むっ！」

「？　どうかしたんですか、サヤちゃん？」

未だ耳には命を取り合う喧騒が聞こえてくる一室。

私、九重　撫子と彼女、灰色の髪の美少女サヤの女二人きりで、この騒ぎが収まるのを待っていた（サヤは普通に寝ていたが）。

そのサヤが突如、飛び起きるまでは。

「むむむっ！」

サヤが急に駆け出し、部屋から韋駄天の如き速度で飛び出していく。

「サヤちゃん！　危ないですよっ！」

声は聞こえているようだが、止まることなく、振り返ることなく走り去ろうとする彼女を放っておくことはできない。その後を追いかけるまでの逡巡と思考の時間は三秒間だけだったが……

小さいながらサヤの速度は目を見張るものがあった。それなりの運動能力を有する私でも、彼女の速さにはついて行くのがやっと。

そんな彼女が突如、走りを止める。

引っ張られるように行き着いた場所は先ほどとは間逆の位置にある大きな庭園。

先ほどの庭と同じ景観だったのだろうが、土がめくれあがり、白塗りの外壁は爆弾で破砕された後で、複数の弾痕、そして幾人かの血だまりを作り倒れる人たちで荒れ果て、今は見る影もない。

「お嬢さんたち、何でここにいるんですっ！？」

そんな中、部下数人と共に銃火器を持つ黒服の者たちと対峙し合う巌がいた。血相を変えて話しかけてくる彼に負けないほどの大きな声でサヤが叫ぶ。

「イワオ、逃げる！」

その声に乗せられるかのように、敵意むき出しで掴みかかる黒服の男たち。手にはナイフが握られていたのが見える。

巌たちはそれを避けるでもなく、いなすのでもなく、彼らの衣服を逆に掴むと向ってくる勢いを利用し、投げる。投げられた黒服たちは地面へと叩きつけられた衝撃で苦悶の悲鳴を上げ、何とか受け身をとった者もいたが、すぐさま振り下ろされた拳骨（げんこつ）を顔面や腹部、頚部に受け昏倒させられる。

その見事な手際は、訓練された軍隊を想わせる手慣れた動きであった。さすがは

「違う！」

「ぬぅ！？」

サヤの叫びに、今度は地面が突起した。そこから現れるは同じような四人の黒服の男たち。

今までそこに隠れていたのか？　否、彼らの衣服を見れば今まで土の中に隠れていたとは思えないほどの汚れがついていないことが見てとれる。

不可思議が目の前で起こる、この感覚をつい先日もしくは私の人生の中で常にあったそれだと、頭が理解する。

（あれは……魔術っ）

彼らは司令塔である巌を囲む様に、不意撃つ形で攻撃してきていた。

部下たちのいる位置から巌の元へと駆けつけられる者はなく、狙われる巌も投げつけた敵への追加攻撃からの姿勢から立ち直っていない。敵の刃が届く寸前、巌が起こしたアクションは…

「“飛び起きろ、地面！”」

声をあげた。言葉が紡がれた瞬間、巌の姿が霞んで消えた。

違う。彼の巨体が霞むほどの速度で旋回したと動いた後に気がついた。彼を捉えるはずだった刃は空を斬り、不意を打ったはずの四人がぶつかり合う形で顔を見合わせる。

「“殴り爆ぜろ、空気！」

そんな塊合う彼らに、逆に彼らの背後をとった巌の豪快な右の拳が叩き込まれる。その拳が彼らの一人を殴った瞬間、空間が爆発し、四人全員が数メートル吹っ飛ぶ。

「巌さん、それ……」

「驚かれないんですね、やはり。メルヘンが似合わない男だと自分でもわかっているんですがね」

「巌さんも魔術師なんですか？」

「いえ、私はかじった程度ですよ。それよりも、お嬢さんたちは部屋に戻ってください」

「違う、違う、違う！　逃げる！」

「サヤちゃん、だから、悪い人たちは」

「違う、来る。強いの、来る！　だから、逃げるっ」

「もう、遅ぇえっての」

「！？」

不意をうつかのような声の主は、屋敷を囲む塀の上にいつの間にか立っていた。

数は二人。一人は高級ブランドのスーツをだらしなく着崩したひょろりとした細身の若い男性。

もう一人は、フード付きのマントで全身を覆い尽くして特徴を見せない人物。

「テメェら、何もんだ！」

「家の塀に土足で入り込むたぁイイ度胸だな、コラぁ！」

音芽組の構成員たちが威嚇を開始する。そんな一般人なら裸足で逃げ出す怒気にさらされているのにも関わらず、侵入者二人は顔色ひとつ（一人は顔色すら見えないが）変えずに辺りを見回す。

「聞いてんのかぁ、あぁ！？」

「も〜、うっせえな、おっさん。聞こえてるてぇの。でさ、でさ、でさ？　聞きたいことあんだけどさぁ〜」
「？」

「例の物（ぶつ）。“金狼”ってどこにあんの？」

彼の言葉に世界が冷えた。
私の周りにいた厳を含めた音芽組の面々が熱く怒ることから、冷えた殺意を覚えるまでに感情を一気に“無くした”のだ。
「例の、物だと……テメぇらは生きて帰さねぇ。野郎ども魔術を使っても良い、消し炭一つ残すんじゃねぇぞぉ！！」
「「「合点だっ、代理ぃ！」」」
一同、同意の言の葉を唱えると、火を噴き出す者、持っていた武器が浮遊する者、銃器を地面から出す者などそれぞれ超常現象じみた現象を発生させて臨戦態勢をとる。この組の者達は皆、魔術に精通するものだったようだ。
魔術の形体はバラバラだったが、共通して目に熱いくらいの殺意を燃やしていた。
「うわっ、熱っ苦しぃな〜。も〜、メンドいよ〜」
そんな殺意に全く動じず、だらしない男が手をうちわ代わりに扇ぐ仕草などをしている。
「貴様、よそ見してていいのか？　攻撃、くるぞ」
フードの男はたしなめるような言葉を言い放ち、横に跳んだ。
「あぁ？」
「そこの男の言う通りだ、よそ見なんぞ…」
阿呆な声をあげるだらしない男の気持ちがよくわかってしまう。
なにせ距離にして二十メートルと、三メートル程度の外壁の間を、巌は五秒もかからず走破し、接近したのだから。

「っと！？」
「…してるんじゃ、ねぇ！！」
それを反射的に後へ飛んで回避しようとする男。
それを巌は“掴みもせずに”庭に“引きずり込み、叩きつけた”。
「ふぇ、ゲぇ！？」
空中で、しかも触れてもいないのに男は凄まじい勢いで地面に叩きつけられ、肺から空気を吐きだす。
「ゲホォっ」
「……なるほどな。貴様が組長代理と呼ばれる男か。敷地の主という立場を拡大解釈し、領地の支配者の所有権を行使することにより、“己が陣地とする場所の物を好きに操ることが出来る”拡散系陣地魔術の一種か。その速さは地に足が着く瞬間に地面を跳びあがらせ、敷地内の空気を操り摩擦を最低限まで減らしたため。そこの馬鹿を掴んだのは周囲の空気が押し流した、か」
「大当たりだよ、そこの人。で、いいのかい？　お仲間が殺されようとしているっていうのに、解説なんてしていて」
フードの男はなんの感情もなく、巌の魔術の解析につとめていた。地面に伏した仲間を助けようともせずに。
「私は今現在、この屋敷の所有者にして、使用者だ。さらにこの土地そのものという強引な解釈を利用することで、見立てた象徴の形象をこの身に写し表現、体現する魔術――偶像魔術を使い、お前さんの仲間に“この土地の総量を拳に乗せて”すり潰すこともできるのだぞ」
「貴様の好きにすればいい」
「そうか」
未だ地面に伏せたままの男へ、巌がまたがり勢いのままに作った拳を相手の顔面へと叩きつける。
「―よそ見をしているからだ」
辛辣な仲間の言葉を受けて、地面が爆ぜるほどの衝撃と轟音が広い屋敷に響き渡る。

視点変更　6

「オラァっ！」

進の強引な斬撃が、向かってきた銀色の人狼へと振り落とされる。

崩れていく旧デパートでの戦場は、破壊されて無くなった7階から、今や屋上となった6階へと移り闘いはそこで継続していた。

振り落とされた黒い大剣は、人狼の肉体を引き裂く事はなく、そのままフロアの床を引き裂き、剣は引き込まれたかのように動かなくなった。かみ合ってしまったようだ。

その隙を逃がさんと、銀の狼はすぐさま回避からの乱撃を叩きこもうとする。人狼の手から生える鎌のような鈎爪で引き裂かれれば、ただでは済まないことは確かだ。

進はその攻撃に対して銃を懐から引き抜くと、その銃口をすぐさま真っすぐ構える。

（当たるのカ？）

銀の人狼の反射速度と回避能力の高さは相当なモノのはずだ。現に人狼は速度を緩めもしない、つまり避ける自信があるということだ。

進にもそれがわかっているはずだ。だが、彼は引き金を引く。

銃口を自分の剣が潜り込んでいる床へと向けて。

「！！」

「なに驚いていやがるっ」

地面のひっかかりから解放された剣はすぐさま持ち主の動きに呼応して下からの強烈な速度で跳ね上がる。

人狼は今度は危険を察知したのか、飛びずさるように退いた。

そこを進は逃がさない。

「待てよ、もっと遊ぼう、ぜっ！」

追いすがり、未だ滞空中の人狼へと斜めの斬撃を叩き込む。
未だ空中にある人狼は体を咄嗟にねじり、迫る剣の側面に膝打ちを入れ軌道を逸らす。
逸らされた斬撃は行き先を脱線させられ、柄を持つ進もまたバランスを崩し、倒れかける。
が、こちらも体を強引に旋回させ不安定ながら、相手を一撃で葬り去るクラスの威力を秘めた一撃を強引に攻撃に転じさせた。
体勢が崩れると予想していた人狼は進の攻撃の圏内へと入ってしまい、逃れるすべはないと判断したのか、左の腕を前に突き出す。
黒の大剣とナイフのような光沢をみせる鈎爪が、強烈な笑みを浮かべる進の紅の瞳となんの表情もみてとれない銀の人狼の青色の瞳がぶつかり合う。
月の下で、互いの力をぶつけあう二つの影。そんな影を僕ら二人は見ていることしかできない。
「どうして私達(わたくし)は加勢にいけませんのっ！？」
僕の隣で、今にも駆けていきそうな月の美しさも霞む白金色(プラチナブロンド)の髪の美少女、ローザ・E・レーリスを捕まえるように宥(なだ)める。
「今、僕らが入っていったら確実に不利になル」
「なぜっ！？」
「……君は、もう一か月前のことを忘れたのかイ？」
「うっ」
約一か月前、今や世間では自然発生した竜巻による大量破壊と結論付けられ解決となった羽田空港での戦い。あの渦中の人であった僕らは確かに共に戦った。だが……
「あの時ほど、痴態にも等しい情けない共闘はなかったヨ」
結果は散々だった。互いに足を引っ張り合い、敵に攻撃を与えることすらできず、最終的には実際に足をひっかけ合い、転倒した。
「で、ですが、最後はきちんと共に戦えてましたわ」
「撫子のおかげでネ」
「む、むう」

ここにはいない彼女が僕らに喝を入れてくれていなかったら、あの巨大な負の塊のような敵には苦戦もしくは敗北していたに違いないだろう。それを少しばかり気にしていたローザは若干情けないと思っていたようだ。

そんなローザの横顔から、目の前の激戦を繰り広げる二人の戦いへと視線をもどす。

「今、僕らがあそこに乱入すればお互いを邪魔し合うことになル。アレから時間は経つけれど、息が合う保証はないからネ。今は入るべき時に備えているのがベスト、ダロ？」

「……わかりましたわ」

半ば理解はしたが、納得はしていない。といった表情で押し黙るローザ。

そう、今は耐える時。そして、

（彼の本質を見定める機会の一つになるはずサ）

進・カーネルという男の力は非常に危険な因子をはらんでいる。彼の気質は一歩間違えれば、この世に災いを起こす側の人間になりかねない。

僕、アルバイン・セイクは魔の驚異から何も知らぬ人々を守ることを使命とする騎士、であるはずのなのだが……

（一か月前の僕なら、即討伐すべきと判断したのかもしれないナ）

思い浮かぶのは、上辺だけを見て判断を下すアルバインという男を懸命に“叱る”彼女の言葉と表情。

「今は、観ル」

ローザに向かって言いつつも、なにより自分に言い聞かせるように言葉を紡いだ僕の目が戦況の変化を捉える。

均衡状態であった力比べの勝敗が出る。勝ったのは……

「っく！　らぁっ！！」

進だ。銀の人狼が拮抗に耐えかねたかの様に、後方へと飛びずさる。その大きく跳んだために出来た隙を引き連れて。

「終わりだっ！　ワンコぉ！」

その隙めがけて、俊足の勢いが乗った拒絶の斬光が横殴りに放たれ、人狼の体に確かに食い込む。

進の豪力を伝える剣を受けた人狼は体が一つであることを拒絶され、二つに分裂するかの如く、切り裂かれ、絶命する。

はずだった。

「テメェ……」

剣は確かに食い込んでいる、人狼の頭を守るように構えられた右腕で。

だが、その先へは決して進まない。

その剣はまるで“逆に食い付くように”狼の体から離れない。

「っ！？　クソ…」

武器から手を離す選択をするまでの時間、という隙を作り出してしまった進の胸部を横に掻き毟るように爪がはしる。

進は咄嗟に後方へと倒れるように飛んで寸前のところで回避して命だけは守った。

命だけは。

「く……ソ、がぁぁ」

「進っ！？」

胸から鮮血が吹き出す。進の顔に脂汗が出始め、顔色が一気に青ざめ、彼の着る白いシャツの間から血が湧水のように溢れてきている。

見るだけでわかる。重症だ。

人狼は自身の鮮血が滴る爪を不思議そうに眺める。目にある感情は疑問と落胆。まるでそのまま口を開いて、しゃべりだしてしまいそうなほど、その表情と目には賢人（さかびと）めいた色があっ

「……普通だな。それに君は、弱いな。本当に、あのドレイクを倒していた男なのか、君は？」

とても低音の男性の声で人狼が本当に喋った、ことよりもその内容の信じ難さに驚く。

かの強力な吸血鬼の長を倒したのが進であったことは彼とハジの会話から察することができていた。疑問が多少残るとしても、納得できる力を進は持っていたから百歩譲って納得もできる。だが……。

「進が弱い？　そんな馬鹿な」

ローザも似たような感想であった。一か月前、ティーチャーとの戦いにおいて壮絶なまでの“力をみせつけ”ていた彼が弱いとは思えないのだろう、ローザは。

でも、僕は……

ある思い当たる節が僕の顔を俯かせる。そんな僕に視線が注がれたのを感じる。その視線の主は、敵である銀色の人狼。

「そこの騎士君はわかっているようだぞ？　私は“君という存在が”ドレイクを倒した夜からずっと君を観察させてもらっていた」

ずっと！？　その言葉の意味に愕然とする。

二か月前から。つまり僕らが訪れてから今までも監視されていたということになる。そんな視線を僕は微塵も感じたことがない。

そんな、もしかしたら命を取られていたという恐怖が一気に噴出し、そして目の前にいるはずなのに“まるで気配を感じない、感じなさすぎる”銀色の人狼に畏怖を覚えた。

人の上に立つ者の風格を滲ませる人狼の前半の言葉に、ローザが体ごとこちらに振り向く。

「どういうことですの、アルバイン！？」

「……ローザ、君は錬金術師ダ。戦闘専門というより学問専門の君にはわかりにくいかもしれないネ」

「ここで馬鹿にしますのっ！？」

「違ウ！　そうじゃないんダ……」

進はたしかに力を持っている。数百もの死体で作られてた壁を平然と力だけで薙ぎ払い、人外の巨大な化物すら押し付けるほどの尋

常ならざる力を。そう“力”を。
「進はたしかに強い。彼が力を使って振るえばどんな物だって薙ぎ払えるだろうサ」
「だったら……」
「そう、力は十二分にあるさ」
僕の説明に割って入る銀色の人狼。まるで進側の人間である僕を庇うように言葉を引き継ぐ。
その言葉を、未だに隙あらば切りつけにいこうとしている進を真っすぐに見据えて言い放つ。
「君の剣には力が確かにある。だが、巧みに剣を操り出し、相手をいなし、さばき、倒す技法が剣技が、剣術がない。君は戦いの中、直線的で、単純な攻撃しかしてない」
狼はさらなる月の加護を背後から受けて輝きを増す。
神秘の光を纏う人外の存在は、悪魔の如き力を振るうだけの男に怒りの眼差しを向け、悲嘆の感情をぶつけるように吼えた。
「そう、“力”があっても“技”がまるでない。君の剣は弱く、軽い。そんな戦い方しかできない君に“彼女”を任せることも、まして守ることなど出来ないぞっ!!」

視点変更　7

「ぐ、ぬぅ!!?」
地面に轟音が響きわたり、人工の地鳴りに私は足元がふらつかせる。
領地を侵す不逞の輩に、巌の敷地内のすべての重量を注ぎ込んだ一撃が叩き込まれた。
その膂力を遥かに超えた拳の一撃は男の顔面へと突き刺さり、余りある力は突き抜け、脳髄を巻きこみながら地面へと到達するはず。

たしかに地面へと抜けた。敵対する不逞の輩、だらしなくスーツを着込んだ男の顔面を逸れて。

そして、なぜか逆に攻撃をしていたはずの巌が、苦しげに胸を掴んで地へ倒れていた。

「ふ～、あぶっねー！」

「ゲホっ、ぐ、て、めぇ」

「ゴホゴホ、うっせっな！！」

だらしない男は、追い打ちとばかりに巌の腹に蹴りを入れる。そのまま巌が動かなくなるまで蹴りを入れ続ける。ピクリとも動かなくなった巌をつまらなそうに眺め、こちらに振り向く。

「あ、イッタタ～。ちょー痛ぇ。まじムカついたから、ちっと苦しめよオッサンたち。軽く地獄めせてやんよ」

なにを？　と思い、気が付く。

巌があそこまでボロボロにやられているというのに、組の部下たちはなにをしているのか？

答えは目線を下に向ければあった。

倒れていた。一人ではない、十数名全員が同じように顔を青ざめさせ、のたうち回っている。

何をしたというのか？　だらしない男は巌には何かできたのかもしれないが、離れた場所にいた部下たちに、一体何ができたというのか。

もうひとりのマントの男かと思ったが、彼はあそこから一歩も動いていない。目に見えない敵の存在がもしかしたらいるのか？

そもそも、なぜ私とサヤちゃんには何もおきないのだろうか？

「君たちは可愛いから、いいや」

そんな理由らしい。

その理由を聞いてか、溜息をついた塀の上のマントの男はめんどくさそうに声を出す。

「八島（やしま）。どうでもいいから、とっとと金狼を探すぞ」

「へいへい、傭兵さんも真面目にやってくだ…お」

だらしのない男、八島は目を丸くして口元に笑みをつくる。あたかも探していた宝が目の前にあったかのように指をさしてくる。
「あるじゃん、金狼」
「え？　は、はい？」
その人差し指は私の方に向いていた。
私は背後を振り返る。
あるのは屋敷壁のみ。
周囲を確認するとサヤがいるだけ。そのサヤは「お姉ちゃん、金ピカなの？」と首を傾げている。
その指は間違いようもなく
「……私が、金狼？」
その指は間違いなく、九重　撫子に。私に向けられていた。
そして、咆哮。
「ぬぉ、おおおおおおおおおおおっ！！」
「げ！？　マジかよ！？」
「テメェらに彼女は渡せねぇんだよぉぉ！」
八島の背後を完全にとり、近衛　巌が咆哮と共に、傷だらけの体にむち打ち、拳を振り上げた。

視点変更　８

「……彼女？　誰のことだよ？」
自分の弱さを指摘されたと言うのに、平然と何事もなかったかのように左手で懐から銃を抜き取る。
片手で持つには不釣り合いな、ごつい形状の銃だ。
それは世界有数の大口径自動拳銃。
シルバーモデルのデザート・イーグル。西洋の龍であるドラゴンを模した刻印がついたグリップ、細部に規定外の形状が見られる進

の改造拳銃。
それを構える過程までに一秒とかからず、セーフティーの解除からスライドも引き終えている。僕から見ても驚異的な早さだ。
その構えも特徴的。デザートイーグルを一度でも試射したことがある人間なら誰もが驚く、片手撃ちの姿勢。
対する銀色の人狼は、右側をやや突き出す半身の体勢をとる。
「お前が彼女を守るに相応しいかどうか、確かめさせてもらう」
「勝手に確かめてろ」
躊躇いなく引かれたトリガーが中断していた戦いのスタートの合図となった。世界最強の弾丸と名高いマグナム弾は正確に人狼へと突き進むが、素早く身を屈めて避けられる。
次々と連射される弾丸の数は増え、比例するよう銀色の人狼は距離をジリジリと詰めてくる。
そして、八回目の射出音が一気に世界を加速させる。
進の銃がホールド・オープンしたのだ。
弾切れが視覚的に発覚したために、特攻してくる人狼。
残弾数がゼロになった銃は隙以外のなにものでもないため、左側から放たれた右腕の攻撃が進を襲う。
剣は今だ進の右手に握られ、動かない。防ぐすべが進にはない。
なのに攻撃の軌道を描いていた人狼の腕が反対側に押し戻された。
「ッ!?」
穴の空いた腕からは血が滴り、銀色の毛並みを赤でよごす。
「驚き過ぎだ」
響いたのは銃声。鳴らしたのは進の銃。弾切れから攻撃が来るまでの時間は一秒もなかったというのに装弾数が元に戻っている。
不思議な現象の解明をそのままに、人狼は素早く進の背後へと回るべく、脇を通る形で左側から体を捻じ込む。
進は、そのまま振り返りもせずに、肩に銃を乗せるように腕を屈曲させ、撃ち放つ。
普通なら耳の鼓膜が破れること必至であろう自殺行為じみた射撃

は、人狼の動きを一瞬止める。なにせ、後一歩踏み込んでいたら頭に直撃していたのだから。

その一瞬を、進は逃がさない。

「単純な剣で悪いな！」

振り返りざまの、進の剣撃が人狼へと届く。間に合わないと腕をクロスさせ防御する人狼だったが、衝撃をもろに受け、後へと吹き飛ばす。

空中でクルリと回転させ体勢を戻した人狼が最初に見たのは、強烈な怒りの笑みを張り付けた進と彼のもつ銃が至近距離から放たれた瞬間だっただろう。

「そらよっ！」

弾丸が放たれ、さらに宙を舞う人狼。

さすがに空中かつ至近距離からの衝撃に地面を転がる人狼に、警戒するように銃を構える進。

「……どうだ？」

「良い攻撃だった……」

「マジかよ」

平然と立ち上がる人狼に進は舌打つ。当たったはずの弾丸はポロリと銀色の毛が巻き付き、その場に落ちた。

「どんな高度な毛をお持ちなんだよ、テメぇ。毎日、どんなブラッシングしてんだぁ、おい？」

「生憎、俺はアレとドライヤーが嫌いだ。シャンプーとリンスは毎日欠かさないのが良い毛並みを保つ秘訣だ」

「……犬も最近、贅沢だな」

お互いの急所を狙い合いながらの軽口の叩き合い。

まるで級友と他愛のない会話をしているような声色はお互い変わりはしない。ただし、進の方はこめかみに一筋の汗が流し、奇妙な違和感に頬を引きつらせている。

「何を驚いている？　まるで、剣の威力が吸収されている、でも言いたげな顔をしているぞ」

「確信犯かよ。テメェ、何してる」
刃が立たない。“歯”がではなく“刃”が立たない。相手が強くて抵抗できないと言う意味ではなく。進の剣はあの銀の人狼を傷つける結果を生み出していない。
角度の問題で切れないならば、わかる。だが、進の豪力が載った攻撃を受けたのにも関わらず、衝撃に体がしびれたり、とにかく自然でいられることが不自然なのだ。
なんらかの術を施している、と僕と同じように進は考えているようだ。剣だけでなく、銃弾も利かないとなるとなおさらだ。
「自然にこうなっただけだ」
「あぁ？」
「君は“順応”という言葉がわかるか？　生物には基本的な本能にも近い、生体現象のことだ」
「馬鹿にしてんのか！？　テメェは剣の斬撃と銃弾の威力に“順応”したってのか？　いくらなんでも早すぎんだろうし、できんのかよ」
順応とは、生物に同一刺激が持続的に与えられた時、その環境や境遇に応じて、生理作用、特には感覚神経が適切に変化する現象のことだ。目の明暗順応はこれに該当する。
辛いトレーニングを続け、痛みや過酷な運動に慣れていくというのは聞いたことがあるが、斬撃や銃弾の貫通力などの攻撃に順応するなど聞いたことがない。
「そうだな……“高速順応”とでも言ってみようか。これは私の能力であって魔術ではないので討ち消すことはできないぞ」
進のもつ黒い大剣イザナミの能力は魔術などの現象を打ち消す。現象であれば斬れるが、生体の能力となれば、難しいはずだ。その体に呪いでも付着してい無い限り……
「……常識、って言葉を忘れかけるな」
「ふっ、君は常識外の怪物（ばけもの）に一般知識を説くつもりなのか？」
「言ってろ。親切丁寧が俺の座右の銘だ」

進は剣を大きく後に回して、攻撃のタメに入る。
もし人狼の話が本当ならば、長期戦に勝ち目はない。戦いを続かせれば、続かせるほどに相手は進の攻撃は無効果されていくのだ。
進に残されたすべは短期決戦。しかも今まで以上の威力を誇る攻撃で、かつ一撃で倒さなければならない。
もし、その攻撃にも耐えられてしまった時は……
（この攻撃で決めなければ、進は負けル）
「来い、進・カーネルっ！！　君の全力を見せろっ！！」
進のラストアタックが、始まった。

視点変更　9

「っぐぅお」
私の目の前で、八島の背後を巌がとり、悲鳴が上がった。
「何度言わせる？　よそ見をするな、と三度も言うはめになった」
「お、おう。きーつけるよ」
悲鳴は巌のものだった。八島の背後をとった巌の背後をさらにとりマントの男がとり、いつのまにか持っていた簡素なロング・ソードで、彼の背を斜めに斬った。
その瞬間、サヤちゃんが今度こそ地に倒れた巌の元へ駆けだす。
「イワオっ！」
「おっと、ダメだよ～。お嬢ちゃんはオジサンと一緒に…ってイぇ！？　噛んだ！？　噛みついてきたよ！　傭兵さんっ、俺噛まれた～！？」
「……うるさい。それにしても、どうしてそこまでする？」
捕まえたサヤに噛みつかれ騒ぐ八島から早々に目を離し、別の場所を見つめる。顔は見えないが声で感情がわかる。そこには疑問だった。

八島に体中を蹴りつけられ、マントの傭兵に背中を斬られ、すでに意識を失っていたとしても不思議ではない巌が二本の足でしっかりと立っていたのだ。

「ハァ……はぁ、テメェらが、奪うと言った、からだ…ハぁ」

「命を賭しても、か？　理解できんな。お前も魔術を扱う者のはずだ、触媒（モノ）の一つや二つでと己の命、天秤にかけるとはな」

「俺は、テメェらのような人の命すら触媒（モノ）としか見ない腐った魔術師の前に人間じゃねぇっ！　それに…ぐ、グボァ」

内臓にも傷が届いているのか、血を口から吐き出す巌。それでもマントの男に向ける目は死なず、確かな意思を込めて言い放つ。

「……俺は、お前らのような奴らに…ハァ、ハァ……その娘（こ）を、“また”腐った奴らに売る訳にはいけねぇんだよぉぉぉっ！！」

（……また？）

そこにどんな意味があったのか、それを聞く前に巌はマントの傭兵に突撃した。

策もなにもない、ただ真っすぐなだけの特攻。

「……お前の間違いを一つ訂正してやる」

真正面から拳を振り上げ駆ける巌にたいし、手にもつ剣を水平に構えるマントの傭兵。

そして、口を開き、言葉を紡ぐ。

「ｓｅｔ　ｆｉｒｅ」

構えた剣から巻き付くように火が灯る。剣の周りで蛇のようにのたうつ現象。

私は何度か見たことがある。

あれは、一か月前。いきなりゾンビの大群に襲われた時、颯爽と駆けつけたアルバインが見せた技と全く同じ……！

「俺は、魔術師ではない。騎士だ」
蛇炎を巻いた剣が円を描くように振り切られる。炎は沿うようにあたりに拡散し、閃光と共に爆発。
その衝撃波で巌のみならず、仲間であるはずの八島すら巻き込む。もちろん、私も。
「うっ！」
打ちどころが悪かったのか次第に意識がなくなり始める。
霞みゆく視界の中には、たった一人の男が映る。彼の周りは焼け野原、焼け焦げた粉塵と残り火のみ。
「そういえば元、が前につくのだったな」
その最後の言葉を聞くと、自然に目の前が真っ暗になった。

視点変更　１０

進のラストアタックが始まる。
攻撃の衝撃や威力に“順応”し、攻撃を減弱化もしくは無効果する驚異の能力を持つ銀色の人狼。持久戦を持ちかけていては確実に相手はさらなる防御力を手に入れることとなる。
ここで決め手を作らなければ、その攻撃にすら順応をされてしまい勝機がなくなっていく。
つまりこれ以上はなく、この一回の攻撃で勝負が決まる。
銀色の人狼はその攻撃を受けてたつようにどっしりと構える。
進は愚直なまでに真っすぐ駆ける。半端な威力では相手には届かない、という進の意思の表れだ。
「いくぞ、ワンコォォォっ！！」
「来い、進・カーネルっ！！」
進は大きく弧を描く形で、勢いを乗せた斬撃を放つ。体の動作も大きく、隙の塊のような攻撃だが、放たれた速度は音速。放たれた

斬撃を避けることは人狼でも不可能。
故に銀色の人狼は、その攻撃を受ける。臆することなく、真っすぐに剣を殴りつける。
一瞬の拮抗もなく、その決着はついた。
力のぶつかり合いに負けた者の手から武器が無くなり、腕が払われる。
ズンっ、と何かが地に落ち、突き立つ音が鳴り響く。
それは地面に刺る剣が奏でる敗北の音。
「まだだ！」
その音を振り払うように、進が剣を吹き飛ばされた姿勢から相手の懐に飛び込むようにダッキング。そのまま小さく折りたたんだ左腕でショートブローを脇腹に決める。
剣の威力すら無効果する常識外の人狼に、そんな威力の技が効果があるのか、ないのかと言えば無いだろう。ブローが目的ならばだが……
「っ！」
「金欠男の大サービスだっ！　嬉しすぎて涙腺ゆるませろォ！」
脇腹にぶつかけられたのは拳ではなく、銃の先端バレル。
計八回のマグナム弾によるゼロ距離射撃。
ドドドドドドドドォッっと一つの轟音が重なり合うように響く。
いかに銃の威力や貫通力に順応出来ているとはいえ、その攻撃力の高さからハンドキャノンといわれる銃弾の威力を連続八回、しかもほぼゼロ距離から撃たれ、さすがの人狼もよろける。
よろけた……だけ。
「そん……ナ」
思わず、僕は呻く。
着弾していた弾丸は全てあの鎧の如き銀の毛に巻きつかれた状態でポトポトと落ちていた。
そこには血の一滴の痕跡も見られない。
失敗したのだ。進の最後の攻撃は失敗に終わった。

今度は銀の人狼が前傾姿勢をとり、攻撃に移ろうとする。その狼の眼には、多少の安堵と深い後悔があった。

だが、その感情とは似合わない、殺意に満ちた攻撃を横殴りに進へと放つ。

首筋スレスレに伸びてきた爪を、進は上体を後へと反らすことで何とか避けた。

でも、何とか回避できただけだ。

未だ上体を反らし続ける進へと、流れるように突っ込むように懐に入り込み左腕を槍のように後ろへ回す狼が飛びかかる。

完全に死に体となった進にはさける術があるのだろうか？　なければこのまま一本の槍と化した爪が進の腹を突き破り、臓物とともに血だまりに沈むのみだ。

「――――すぅ」

「残念だ、進・カーネル！」

容赦皆無の鋭い突きが出される瞬間まで進は回避しようとしない。

諦めたか？

ギリギリまで待つつもりか？

それとも何か布石をうっているのか？

たぶん、否。

そして、僕は間違っていたことに気が付く。

「……どっ」

攻撃を出す瞬間、進と人狼の目と目がぶつかり合った。

これは比喩とかではなく、反らした体を元の位置へと戻す様に、引き切られた弓の弦が放たれた様に、進の上体が凄まじい速度で前へと倒れ、

「っ根性ぅおぉおぉぉッ！！」

「っ！？」

壮絶な“頭突き”が人狼の顔面にめり込む。

受けていた重力が一気に増したかのように、顔を先頭に床へとめり込ませる人狼。その一撃を受け、かろうじて無事だったこの階の

フローリングに崩壊の亀裂が増える。
そもそも、進という男に回避という言葉は似合わなかった。
返された一撃を避けるために上体を反らしたのではなく、頭突きをするための、溜め。あの連続射撃が進の攻撃の終わりではないなと、途中で気がつけた。
ともあれ、未だ床に倒れる人狼が立ち上がるのにはまだ時間がかかるはずだ。
進はすぐさま、とどめの一撃をいれるために素早く大剣を拾い上げ、振りかぶる。
「終わりだぁっ！」
その終わりの一撃が
僕にむかって、振られた。
「……って、ＮＯォォォォォッォォォォッッ！！？？」
自分の身体能力をふりしぼって、１７年間の人生を終わらせようとする拒絶の斬撃を奇跡的に避けた。
回避というには無様すぎる目茶苦茶な避け方ではあったが、しかたない。なにせ、命がもう少しで切り裂かれていたのだ。よく見れば僕の髪の毛が数本地面にヒラリと宙を舞っている。
「っちぃ！　よけやがったぁ！？　さすがだな、わんこ！！」
勘違いも甚だしい舌打ちをうつこの男に、さすがの僕もキレた。
「違うだロォォォ！！　よく見ロ！　僕だよ、ボク！　アルバインだヨぉ！？」
「うそつけ、このやろう！　そんないつでも女を性的な意味で食べようと企んでいる狼みたいな目と顔をしやがって！」
「オイィイ、シンッ！　キミ、後で説教だからナ！　騎士舐めるなヨ！　拷問だってきちんと出来るんだからナ！！」

頭突き、という意表を突くと同時に勝機を得た攻撃方法まではよかったが、進の頭にも相当なダメージだったらしいく、完全に目を回しているらしい。足はフラフラで、目の焦点もあってない。

「……今のは良い、攻撃だったよ」

そんな馬鹿をやっている間に、立ち上がっていた銀色の人狼。その獣の顔には人間味がある笑みがあった。

「ほら見ロ！　キミがアホやってる間に敵が立ち直ってしまったゾ！」

「……おい、どういうことだ。なんでワンコが二人に増えてるんだ……」

「とっとと目を覚ませ！！」

未だに頭をフラフラさせる進とは違い、銀色の人狼はきちんとした挙動で相手を指さす。

「攻撃した自分も脳震盪（のうしんとう）になると気づかったのかい？　そんなフラフラで戦えるのかな、進・カーネル！」

「え、あの？」

確かに意識をはっきりとさせながら、指をさしてる。

ローザに。

「どういうことだ？　君はそんなに女っぽい体つきだったか、進・カーネル？」

「どう見たって別人でしょう！　間違える要素がないでしょう！？」

「嘘をつくな！　たしかに、今ちょっと目がクラクラしているから判別がしずらいが、君から確かに進・カーネルの匂いがするぞ」

「！？　な、なにを……言っている…かしら？　そ、そ～んな訳な…」

「彼が不在の時を見計らって、部屋に侵入し、ニヤケながら布団に顔をうずめてたりしていた感じの匂いのつき加減だぞ！」

「見てましたのねっ！！？　見ていたんでしょう！？　あ、ち、違いますからね？　そうなことありませんからね！　う、ううう……

笑いたければ、笑いなさいぃ！　うわあぁぁぁァァァん！！」
自分の痴態を暴露され、顔をリンゴ驚く赤さに変色させたローザが地面に突っ伏し泣きだした。
どうやら狼のほうにもダメージがあったらしい。よくみれば、目の焦点もあってない。
挙句の果てには、二人で背中を合し始めた。
「おい、どうしてワンコが増えてる？」
「ああ、相手が増えたな。気を付けていこう」
などと、さも始めから仲間だって的な会話をしはじめる。
そもそも進はともかく、人狼の方は始めから単独（ひとり）で来てただろう！？
やっと混乱が冷めたのか、敵同士で背中を合わせていることに驚き、臨戦態勢をとりつつ離れる二人。
なかば、ヤル気をなくしてきた。もしからしたらこの二人は気が合うんじゃないか？
「良い攻撃だった。私の防御の薄いところを狙った、というところか」
「ああ。顔面の当たりは“毛”が薄かったからな」
毛は多くの哺乳類の皮膚に生える糸状角質毛成物である。有名な話で毛は肉体の弱点的部位によく生えるという説があるほど、生体保護の役割をもつ。
この人狼の毛は剣の衝撃を分散、銃弾の貫通力を巻き付く事で緩和させるなど一本ごとに命が通っているような動きをしていた。
だから、毛の薄い顔面などは弱点となりうる部位ではある。
「だけど、別に顔面が弱点ってわけじゃないよな？　それに別に毛があるなしに関係はほとんどねぇはずだ」
「どうして、そう思える？」
進は剣を大きな動作で担ぐ。
「アンタは、最高でも一つの攻撃性質にしか適応ができない。そうだろ？」

「どういうことダ？」

僕はさすがに何処でそう見抜けたのかわからず、声に出して進に聞く。

進は人狼から視線を外さず、声だけで応える。

「こいつは始め、俺の剣を右腕で完璧に止めて見せた。なのに何で、銃の攻撃は右腕を貫通したんだよ？」

「それは……マグナム弾のゼロ距離射撃だったカラ…」

「距離は関係ない。威力にしても、前の俺の剣の威力と変わらないはずだ」

ひどく傲慢な言い方ではあるが、進の攻撃となると信憑性が増す。彼は一か月前にそれほどまでに強烈な印象を残す攻撃の数々を放っていたところを僕は見ていたからだ

「ワンコはな、威力が強くて攻撃を受けたんじゃねぇ。来るはずのないと思っていた攻撃の種類だったから、ダメージをくらったんだ」

あの時たしかに、銃の弾数はゼロであったことを示すホールド・オープンの状態。そんな状態を刹那ほどの速度で回復させると、誰が考えられる。つまり……

「攻撃の種類、威力、性質、角度を捉えて、考察し、それに対する適応し無力化する術式…いや、“個”有能力と言ったところカ」

「無力化は言い過ぎだ。そうだな、減弱といったら正解だよ」

諦めたように話を始める人狼。だが、その目には絶望はなく、喜びがあった。

「いつから僕の話を疑い始めた？　それに、減弱化できる攻撃性質が一つだけだと、いつわかった？」

「高速順応……いや対応か？　それを適応できる範囲は毛だけだとはわかっていた。筋肉や関節、細胞すべてにそんな無茶させれば、硬化が利きすぎて動かなくなるか、柔軟になりすぎて動きが緩慢になる。全ての攻撃に対応してたら細胞だって変化に次ぐ変化で変化が起きて最悪、全身癌細胞化だ」

進は、銃を相手に突き出す。
「それに斬撃だろうが、銃撃だろうが、衝撃は衝撃だ。それ全部に順応できるなら始めから避ける必要もねぇだろうが。つまりテメェはあらかじめ攻撃に備えて情報を集めながら戦ってたってことだ。そもそも俺は疑ってたんじゃね、信じてなかったんだ」
「なるほど、口は災いのもとだな」
「おっと、口を閉じる前に答えてもらおうか？　どうして、俺を試した？　どうして、アイツのことを気にかける？」
銀色の人狼は、銃を撃たれてもいないのに苦痛を受けたように顔を歪める。
「テメェが守ればいいだろう？　なのに何で俺に守らせようとするんだ」
「俺には……私には、彼女を守る権利などない。“奪った側”の存在が奪われた存在を守ることが許されると、思えるか？」
「……そうかい」
進の指がトリガーにかかる。

タァン、タァン、タッアンと乾いた銃声が、終戦の合図のように鳴り響き、人狼の体に突き刺さった。

進が引き金を引いても“いない”のに。
「なっ！？」
「……どこから！？」
「ッ！　上ダ！」
満月が昇る夜空に現れたのは一つの物体。見る人が見ればヘリコプターと言ったかもしれないそれは異様な形をしていた。
羽がないのだ。ヘリの巨体を飛ばすあの羽がない。なのになぜかそれは空中で浮かび続けている。

たしか、ＸＢＨ１９０－Ａ。ハチャメチャなコードなのは、ソレが試作段階の代物であり、第三次世界大戦中に生まれた“あってはならない兵器”の一つとして付けられた名前だからだ。

駆動音ほぼ無しで従来のヘリの速度の二倍をだせる揚力機関を静かに唸らせるＸＢＨ１９０－Ａ。そのスライド式のドアから身を乗り出す様に狙撃銃を構えている男。

闇色の黒いスーツを身にまとい、頭には同系色のカウボーイハット。そこから覗く整えれた顎髭と髪に、人が良さそうな垂れ目の白人中年男性。

ジェイムズ・ハンター。別名、貴族（ノーブルマン）の男ハンター。

魔術世界で、忌み嫌われる暗殺者が見下すようにそこにいた。

「いや、いや皆さん、こんばんわ。レーリス嬢にいたってはお久ぶりです」

とつぜん、ヘリと僕らの中間の空に薄い膜が広がりハンターの顔がアップがそこに写る。任意の映像を写しだす魔術だろう。

「あら、ハンター。まだ日本にいましたの？　早々に帰郷したと思っていましたわ」

「レーリス嬢、それは私のセリフですぞ。忠告が無駄になってしまった」

「おい、生きてるか？」

ハンターとローザが寒々とした笑顔で軽い挨拶を交わしている間に、進と一緒に人狼へと駆け寄る。

息はあり、弾痕も急所と思われる部分から若干ズレている。もしかしたら、咄嗟に回避したのかもしれない。

だが、傷口から漏れ出る出血量からみても重症であるのは確かだ。

「なん、とかな」

口から出る言葉にはまだ生気があったが、止血しなければマズイ。

「そうか。で、あのお髭様は誰だよ」

「ジェイムズ・ハンター。貴族の男なんて綺麗な呼ばれ方をしてはいけど、やってることは低俗のひとことサ。血と魔力の優劣でし

か人を見れず、能力と家柄がない人間をゴミと呼んで、“狩り”と称して殺すクソ野郎だヨ」

「下賤の輩の、しかも騎士の分際で我々、魔術師のことを愚弄するか獲物（エモノ）。その汚い口を閉じろ、反吐が出る！」

さきほどの笑顔はどこにいったのか、僕に対してはやはり汚物でも見る目で見下してくるハンター。

「たしかに、反吐がでますわね」

まさかのローザがそう言うことを言うとは思わなかったので、若干、心に寒いものが通る。

「おお、ローザ嬢！」

「ハンター。貴方、今“我々”と言いましたわね。そこに私も入っているなら、反吐がでますわ。そんなクソのくくりに私を入れないでくださいな」

「ローザ……」

「あら、アルバイン？　どうかいたしまして？」

一本とられたらしい。そんなローザの言葉を聞き、貧血でも起こしたようにフラつくハンター。

「あぁ、何ということだ……。貴女のような優秀な魔術師が、そんな汚い言葉を吐くなどあってはなりませんぞ。ローザ嬢もいつか、貴女の御母上（おははうえ）のような純血の…」

「黙りなさい」

嘆くハンターの乗るヘリに、突然槍が撃ちこまれ、その衝撃に機体が揺れる。

投げたのは、ローザ。

いつもの数倍の速さで錬成し、豪快に投げつけた彼女の表情は今まで見たことのないような怒りの形相。もし、無垢な子供が見たら一生、恐怖で忘れられないであろう表情のまま、“宣告”するローザ。

「“殺すわ”、ハンター。奴と一緒にするなどと……貴様今すぐ、串刺しにしてやる」

狂気と怒りに歪んだ顔のまま、小瓶を地面に振りまき、無数の槍を地面から生やす。数ある魔術の中で最速の一つに数えられる錬金術が発動する。

その本気で殺しにかかるであろうローザの形相を確認し、まいったとでも言いたげなアクションをするハンター。

「……今日のところは用事を済まして帰ったほうがよさそうですな。銀狼！　君にお知らせがある！」

ハンターがローザの怒気から話を反らすように、自らが撃ち抜いた銀色の人狼にうれしそうに両手を上げて語りかける。

「我ら“メルル”の一族の宿願が今日、私の手で果たされたよ！！」

「っ！！　メルルだとっ！　貴様、まさか……」

「我が一族の悲願、黄金の大狼を！　“金狼”を君から奪えたこの喜び！　君に、我ら一族の追跡を、二百年という歳月に渡り阻み続けた憎むべき君に、いち早く伝えたかったのだ」

金狼という言葉に攻撃をしかけようとしていたローザ、相手の出方を見定めようとしていた進、もちろん僕も驚き動きを止める。

宙に写しだされた映像が点滅し、別の映像に移り変わる。

そこに写しだされたのは……

頭に見慣れた簡素だが綺麗な白いカチューシャを付けた女性が……九重　撫子が、ぐったりした状態で男に担がれていた。

「なっ！？」

作りだした槍が作り手の意識に反応してか崩れた。

「ナデシコが！？」

僕は混乱してさけぶ。

「……金狼？」

進は真偽を確かめるように、出来うる応急処置を終えた銀色の人狼を見る。

「キサマァァァァァァッ！！！　彼女に何をしたぁぁぁ！！」

応急処置を終えたとはいえ、暴れれば出血が酷くなるとわかりながらも人狼は映像の奥でほくそ笑むハンターに怒りの咆哮をあげる。

映像に映るナデシコを担ぐ高価そうなスーツをだらしなく着こんだ男が映像の中で手を振っている。

「おーい、ハンターのアニキ。金狼、ゲットだぜ～」

「お目当ての品、そして戦利品を一つ得た」

顔を覆い尽くすほどのフード付きのマントを着こんだ男が同じく意識を失っている綺麗な灰色の髪をした少女の襟首を両手に抱いていた。

そんな嬉しそうな声で（フードの男の方はわからないが）語る男。

そんな男を優しく叱るハンター。彼を見る奴の目に軽蔑の感情は一切ない。能力や家柄がないものを煙たがるハンターの気質を考えれば、一見だらしないように見える男は優秀な魔術師の血筋か、もしくは特異な能力を持っていることがわかる。

「こら、こら八島くん。それは金狼ではありませんよ」

「え、マジッすか！？　でも、“コレ”すごい触媒っすよ」

「ええ、たしかにイイ“モノ”ですね。でも、それじゃありませんよ」

コレ、やモノと、まるで人間を道具か何かのように呼ぶコイツらの会話に怒りを爆発させて飛びかかりたいが、今は撫子が人質になっているも同じ状況だ。迂闊に飛び込めない。

「傭兵」

ハンターの声色が変わった。フードの男のことのようだが……傭兵？

「キサマが持っているソレが、金狼だ。丁重にお連れしろ」

ソレと言われた灰色の少女。彼女が、金狼？

「何？」

「？　何をいってんすか？　コレ、全然“触媒”としちゃダメダメですよ」

たしかに、金狼とは何のかかわり合いもなさそうな少女に映像の二人も困惑の色をしめす。だが、はっきりとした確信があるかのようにハンターの表情は余裕に満ちている。

「そうですよね、銀狼？」

ギリ、と怒りで握る拳からあまりの握力で爪が割れたのか、血を滴らせる銀色の人狼。

そんな彼の表情を見るのが堪らなく嬉しいのか、歪んだ頬笑みのハンターの八島と呼ばれた男が質問を返す。

「それじゃ、こっちの女いらないんすか？　おっしゃ、皆で回して遊ぼーっと」

「……そういえば、銀狼？」

「！！」

動揺があった。目を瞑り怒りに震える人狼に確かに震えた。隠し通したい何かが暴かれるのを恐れる乙女のように。

「たしか、ドレイク侯は人間の女を一人、飼っていたそうですね。フッハハハッ。なるほど、彼の傲慢さには呆れかえる。金狼の“模倣品”を“作ろうと”していたとは。あの時に気がついていればよかったな」

「どういうことですの！！？」

今まで会話に参加しなかったローザが我慢の限界と、叫ぶ。

「先ほどからの言動、私の友への侮辱、人をモノ扱いするとは恥をしりなさい。それに、金狼とは何なんですの！？」

「わからない！？　レーリス嬢とあろう者が！？　本当にあの方

のご息女なのかと疑いますぞ？」
嘲るように驚き、ローザを侮辱するハンター。歯を食いしばり、怒りに目を細めるローザを見下す。
「レーリス嬢は、人を“触媒（モノ）”として見ることには慣れていないようだ。……ヒントをお教えしましょう、金狼の“金”とは錬金術では何を意味しますかな？　そして、その称号をもつものが“女性”であり、オオカミという名で冠しているのか……」
「金？　月、衛星？　錬金じゅっ……まさかっ！？」
「冥土の土産にはなりましたかな」
ハンターが狙撃銃を構える。狙いは…
「逃がすか！」
銀色の人狼が、最後の力を振り絞るように飛び上がる。捨て身の一直線、ただそのためか、二十メートルの間を、一瞬で埋めるかのような速度で追撃する。
「逃げるのではない、貴族は常に狩る側だ」
何かがその軌道を阻む。それは…
「なんだ、こりゃ？」
「……これハ、クラゲ？」
突如現れたのは、空を漂うクラゲ。のように見える浮遊物。正体は僕にはわからない。だが、ローザだけは知っていたようで、気が付くのが遅れた失態に顔を歪ませ叫ぶ。
「っ！　全員、この場から飛び降りなさい！　はや」
「野兎に価値ある死を」
傲慢極まりない言葉とともに放たれた弾丸が、銀の人狼の体を貫通した。
その瞬間だけを確かに捉えた。
その後のことは、憶えていない。
その一瞬の後。
足場であったビルが完全に倒壊、その崩落の衝撃になすすべもなく飲みこまれ。

僕は意識を失った。

視点変更　１１

「……ったか……よ…探せぇ…まだ……」

ひどく、遠くの方から声が聞こえる。

「……そ、こ…さ」

……アリスかな？　あの小うるさい妹は、いつも養父に叱られたりすると僕の布団に潜り込んできたものだ。

「…ょっ…あ、の……だ…て」

何か瓦礫を動かすような擦音が耳にうるさい。幼馴染の親友がよく妹と一緒に捨てられた動物をひろってきては養父に見つかり、僕の布団の中に隠していたりしたっけ。

「妹ヨ～。それはダメだっていってただろウ～」

意識がもうろうとしている。しかも僕を覆うこの布団とても重くて、息苦しい。早くどけてほしい。

「こ……ですぅ！　なんか、妹とか聞こえ…」

昔、よく親友と妹が僕を布団で簀巻(すまき)きにして、ヒーローごっことかしてたっけ。僕はいつも悪役で、二人のヒーローに布団叩きで何度も何度も……

「も、もう止めてくレ…痛いかラ、妹よ、それホントにいたいかラ、やばいかラ。ってか帰ったら絶対仕返ししてやル」

喧騒がさらに近くに聞こえた。今度は会話がハッキリ聞こえた。

「らしいな」

「ちょっと！　なんで拳骨作って振り上げてるんすか！？」

「ツルハシより数倍早いからだ」

へ？

聞こえた瞬間、僕の頭に天から拳骨が布団を破砕しながら伸びて

きた手が僕の頭を鷲掴み、無理やり布団から…瓦礫の山から引きぬいた。
急な明るさに目がやられるが、妹の甘い天使の如き囁き……ではなく。
「お目覚めか、シスコン野郎？」
「シ、シン」
僕を助けてくれたのは可愛い天使などではなく、悪魔の如き形相をした進だった。
「あ、ありがとう。たすかっ……た、タタタタ！！　痛いィ！　痛いよ、シン！！　アイアンフィンガーが頭に食い込ムゥゥゥン！！」
「テメぇ……人さまがただ働きで人命救助してる最中にぃぃ！　妹で股間を腫らしやがってぇぇ」
「ご、誤解ダ！　これはただの生理的現しょ」
「オイィィ！　だれか、きつめのメンソーレ持ってこい！　このシスコン野郎の股間と竿に直接塗り込んでやるぜぇぇぇ！！」
「ヤメテくれェェェ！！！」
決死の思いで暴れ、めんどくさくなったと言う進から解放された。
何とか助かった僕の目の前には瓦礫の山と複数の男たちによる瓦礫の撤去作業が行われていた。
「これハ……」
「あの髭野郎の仕業だよ。ローザがアイツの術を知っていたから助かったが……」
見れば、進は着ていたコートとワイシャツを脱ぎ、上半身には大量の包帯が巻いている。あの戦いの最中の傷、そして崩落の際に怪我をしたのだろう。
「彼らは一体なにものだイ？」
「音芽組の連中だってよ。今日、撫子が届けモノをしに行ってた所に住んでる奴らだよ」
「ヤクザ、ものカ……」

「ヤクザっていたって、自警団みたいなもんさ。ソドムでもそれなりに有名な義賊らしい」
「らしい、ってことは誰かにでも聞いたのかイ？」
「ええ、アタシによぉん」
「ついでに、アッシもぉん」
「ヒィヤァァァっ！！？」
突然、耳に生温かい吐息を噴きかけられ、ゾッと怖気と恐怖を感じて跳ねて逃げた。
そして、その吐息の主を見る。忘れようもない、なにせさっき会ったばかりのオカマ……お上さんがそこに居た。
ついでに、ハジもいた。
「お上さん、どうしてここニ！？」
「つれないわぁん。君たちがヤバいから応援を呼んだのはあたし達なんだからぁ」
「アッシは適当に見にきやした」
この街屈指の情報屋は共に、親指を立てグッとかやっている。それになんだかイラっとした。
「はぁ～。で、なんのようだよ」
「連れない！？　進ちゃん、連れない！　まぁいいわ。彼、起きそうよ」
「わかった。アルバイン、手伝え」
そう言われ、瓦礫の外れまで連れてこられた。そこには安い作りのテントが出来ており、数名のけが人と強面の人たちがたむろしていた。
その中にローザの姿を見つけ、駆け寄った。
「ローザ、無事だったかイ！？」
「ええ、まぁ」
彼女は体にはかすり傷だけで大した怪我はしていないようだ。しかし、服の上から配給された毛布をはおり、考え詰めるように体育座りで顔を俯かせた。

「……ローザ？」
「貴方たちが、進さんとアルバインさんですかい？」
呼ばれ振り返ると、がっちりとした体躯の中年男性が腰を折り曲げ、丁寧に挨拶してきた。
「私は立花　五郎と申します。音芽組で若頭に席につかせてもらっている者です。今回は、なんといっていいのか…申し訳ありません。わしらは、九重さんを……」
「別にいいさ。あれは不幸の星の化身みたいな女でね、こんなこと日常茶飯事なんだよ」
「は、はぁ」
進、それは言い過ぎだ。
「うぉおおおおおお、離せェェ、行かせてくれぇぇぇ！！」
同じテントの一角からけたたましい咆哮が破裂した。驚いて見れば、そこにはあの銀色の人狼がいた。
「ダメです！　兄貴」
「これ以上動けば、命にかかわります！」
「イケねぇ！　また血が……」
複数の組員に囲まれ、腕を掴まれても暴れもがく人狼。それにしても組員は彼の姿をみても驚かない。彼の仲間なのだろうか。
「行かせてくれ……私が、俺が行かねばならないんだ。俺はっ！」
「うるせぇ、寝てろ病人」
「グゥオオ！！？」
そんな暴れる人狼の腹部、たぶんハンターの銃弾を受けたであろうソコに靴底がめり込む。その魔王の如き所業をするのは進・カーネル。
「テメェ！　兄貴に何しやがる！？」
「こうでもしねぇと止まらねぇだろうが。ほ～ら、傷口が開いちゃうぞぉ。ぬっハハハ…ぐふぇぁ！？」
突然、痛めつける進が逆に吐血し、組員たちも驚き、さすがに心配そうに見つめる。

「だ、大丈夫か！？」
「く、そ。俺も怪我人だった……。それよか、俺はコイツからいろいろ聞かなきゃならないんだ。寝ながら話せ」
さすがに限界だったのか、横になる人狼の隣にどっかり胡坐で座り込む進。それを見た人狼が諦めたような嘆息の後に笑みを作る。ひどく人間味のある愛嬌ある頬笑み。
「わかった。話そう……だが、それは彼女たちを助けた後だ」
「助けるって、その体じゃ無理だヨ」
「時間がない！　今は急、グゥゥ！！」
無理に立ち上がろうとし、厚く巻いたはず包帯がすぐさま赤に染まる。
すぐに組員が替えの包帯やら、カーゼ、どこから持ってきたのか血液パックを取り出す。
「もういい、大丈夫だ。行かなければ、行かないと……ッ」
どうしてそこまでするのか、確実性に欠ける状態で勝てる相手ではないとわかっているのに、この人狼は助けに行こうともがく。
それは、まるで……
「いいえ、話すのが先ですわ」
そんな死を望むように戦地へ赴こうとする人狼の前に、ローザがゆっくりと近づき、真摯なまなざしで人狼の瞳を見つめる。
「私たちは知らなければならないのですわ。今回の遺産騒動、その始まりを。そして、この事態の中心にいる“金狼”というワード……すべて話してもらいますわよ。科布（しなぬの）　永仕（えいじ）さん？」
ローザの一言は、“気配を感じなさ過ぎる”銀色の人狼の瞳を、驚きで大きく見開かせた。

次話へ

4、銀の爪刃（後書き）

一週間ほど、とか余裕な感じで予告していましたが、実際ギリギリでした。

今年中に三章を終わらせたかったのですが……無理そうですね。

更新日を設けてみようかと思います。まぁ、その日に掲載できたらいいな程度なのであまり期待はさせられないのですが、１２月３０日ごろにあげられるようにガンバります。

やっぱり、ツイッターやったほうがいいのかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8124q/

con-tract

2011年12月10日01時03分発行